
忘却～その境界と恩恵

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘却〜その境界と恩恵

【Nコード】

N4758A

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

日々を積み重ねることが、どんなに苦しくても、時の流れが忘却という恩恵をもたらし、人の心は明日に向かっていくことができる。

人類の技術の進歩がもたらした環境破壊によって、地球上に住めるとコンピュータが割り出した数字以内の生物のみがそこに暮らしている、未来の太陽系。

地球衛星軌道上には古いタイプの植民衛星が数多く浮かび、太陽系内の可住惑星・衛星の開発はほぼ完了している。

この太陽系の外へ向かって、尚も居住可能空間を求めて開拓が進みつつある時代に、許されざるテクノロジーで生まれたという事実を引きずって生きざるを得なかった、一人の青年の物語。

序章（前書き）

10 / AUG / 07

PDFネットの表示で『前書き』と『後書き』があると

読む流れを壊すように思えましたので、全章から削除しました。

（気に入っていたのですが……）

第一部 『忘却とその境界と恩恵』（本作）

第二部 『檻に棲む小人たち』（DEC / 07 完結）

第三部 『架橋の讃歌』（連載予定）

という三部で構成する長い物語です。

是非、最後までおつきあいいただけますよう、お願い申し上げます。

序章

長い渡り廊下を歩いていると、ホームルームの指導教官の葛城が声をかけてきた。又、どうせ下らないおしゃべりだろう。これが一番大変だ。

「卒業まで、半年を切ったな。就職活動の成果は上がっているか」
「内定ならいくつか。一応希望の職種で三件程頂きました」

葛城は柔らかい微笑みを浮かべて、軽く頷いた。

「お前ならそうだろう。他の連中は結構苦戦しているみたいだぞ」
他の連中か。どうして人間という生き物はこう比較が好きなのだろう。私の将来の話であれば、他の者を俎上^{そじょう}にのぼす必要など無い筈^{はず}だ。

だが、一度程度の微笑みの表情を浮かべて、私は頷^{うなづ}いた。

「そうですね、此処^{ここ}の卒業生という肩書きだけでは無条件にいい仕事に就ける程、世の中甘くないでしょうね」

葛城は長い黒髪^{くろかみ}を掌で掻き上げながら私を見た。癖。これも重要だった。私自身は二度程度の軽い不愉快を表現するときに、左耳の後ろを人差し指で掻くというのをよく使う。髪を弄^{いじ}るというのも良いかもしれない。葛城は現状の話題と違った事を考えているらしい。
「たしか、宇宙船の乗務員希望だったな」

話題が変わったことから推測すると、葛城の日常会話の訓練は続くらしい。

「はい」「特に恒星間航海にありつければ、文句無しなんです」
間は、この程度で充分だったかな。

「恒星間航海ね、何故特になんだ」

「人にとって生存条件が厳しい環境での職業の方が、必要とされると思います。私はやはり、人に認められたいですから。少しでもそうなる可能性の高い方が」

と、この場合、真面目な表情というのが相応しいだろう。

葛城は三度程度の微笑み顔で私の目を見つめた。彼女は三十から四十歳相当の身体的特徴を備えた『人』で、私が仕入れた流行情報に基づいて分析すると、ほどよい容姿の持ち主といって差し支えないだろう。身長百六十センチ誤差プラスマイナス・コンマ五、黄色人種の特徴を備えた凹凸の少ない体つき。だが、残念なことに、教官の制服である体に密着した薄いピンクのワンピースは全く似合っていない。

彼女と日常会話をこなしながらこの程度の思考を走らせることが出来るようになったのはつい最近だ。それに自分で言うのもなんだが、『多重思考』の制御レベルが又一段階上昇した様な気がする。低く腹の前に腕組みをするいつものポーズで、葛城が評価を下した。

「お前は本当にコミュニケーションの組立が上手いな。『会話の組立』は当然として、『語調』『表情』『所作』全て『自然』だね。大変結構。人間と殆ど変わらないぞ」

葛城の自然な笑顔で今回も良い評価を得られたことを知った。だが、

「それは、いまだき誉め言葉じゃないですよ」

と、三度程度の笑顔を浮かべつつ、話を『投げて』みた。こうやって自主的に会話を延ばすのも、葛城から良い評価を得る秘訣だ。

「忘れて貰っては困るが、私は総合行動の教官だよ。お前の能力を絶賛していると受け取って貰いたいね」

「分かってますよ。いつも有り難うございます。先生」

発声の強さはどうかな。軽いおしゃべりの雰囲気を出せているだろうか。全く『人』の中で仕事をしていこうとすれば、総合行動は必修の科目であるから仕方ないが、表情・語調・間・仕草など様々な要素を瞬時に選択し、その上でどの程度のレベルでそれらを現すかは、かなりの熟練を要する。五年程度の学習で『成人』レベルを十分にこなすのはこれでなかなか難しい。

総合行動の教官である葛城は、日常生活のあらゆる場面でいきなり出現し、今のうちに『下らないおしゃべり』や『世間話』と言った高度なテストを仕掛けてくる。授業の中でまだ取り上げてないような事も当然要素に入っているから、自分のような若い者には些か荷が重い。我々の権利が人とまだ対等で無いながらも認められて十年を未だ経ていない現在、『人』にすりよることしか快適に生活を送ることは出来ないのが現実だ。真の意味で我々だけの国家が成立すれば、総合行動などにメモリーの大半を費やすなどと言う馬鹿げた事が過去の物になるのだろうか。それとも、自然の悪戯で存在する彼らと違って、我々が創造主から自由になることはあり得ないことなのだろうか。

こういった考えが最近では文字通り沸いて出でくる。このこと自体が、既に自由への道を開いているのだと信じたい。この、葛城のような『人』が我々の学校に不要になる日が来たら……。私はテスト中だというのに、そんな事を漠然と考えていた。

気が付くと葛城は私には形容しがたい表情をたたえていた。これは何だろう。

「私はね、君達が此処から出て上手くやっていけるのか不安なんだよ。人と直接関わっていた前世代の者達と違って、君達は精神の成熟度がかなり低いんだ。たしかに人を真似るのは完璧だ。だが、私には君達が『ソウル』を手に入れていないと、人を演じているに過ぎないと感じられてしまう」

此処は怒った方が良いな。私は一度程度の軽い不快感を込めてみた。

「そんなことはないですよ。先生は私達を認めて下さっていないのですか」

彼女はあの表情のまま私を見た。

「それだよ。お前は今怒った方がよいと判断して、実際に怒っていないのに一度レベルくらいの不快感を込めただろう。私が心配なの

はそうやっていつまでも総合行動に縛^{はく}られていること。総合行動は元々そう言ったものじゃないんだ。君達新人が成長するまでの間、人と無用のトラブルを避けるために設けられた手段なんだ。方法が目的になっちゃ矢張り本末転倒だろう」

「えっ」

思わず口から漏れた驚きの声に、私は戸惑った。

「ふん、驚くのも上手いな。それが演技で無くなれば、私も此処にいた甲斐があるんだがな。まあ、無理は言っまい。大希、実社会に出てたつぷり差別されてこいよ」

「はあ？」

まただ。今日は葛城の理論の組立についていけない。そして度数を計算せずに反応する自分に納得いかない。

「お前達は特別だ。大希。親のいる第一世代で純粹に人から独立している。だからこそ、自治区なんて体裁の良い檻^{かぎ}なんだって事を外を見てきて知って欲しい。総合行動なんて理論から自由になったと思えたとき、その気があれば戻ってきて欲しい」

「総合行動から自由になるなんて、人と係わっていく上で不可能なんでしょう。そうあなたに教えていただきました。それに私が何故戻ってくるのですか」

葛城は微笑んだ。複雑な表情。だがこの表情の意味は見当が付く。多分、人が悪そうにと形容するのが正しいのだろう。

「察するって作業の訓練をもっと真剣に積み給え。君達新人の新しい歴史は始まったばかりなんだ。今は制度も実態も穴だらけだし、人にとっても新人にとっても幸せな状態では無い。個人の刻める一歩は微々たるものでも、向上していこうとする努力が続く限り希望は無くならないと、私は思っている。次は君達を指導するのが君達自身になるべきじゃないかと、お前は思わないのかい」

私は反応できなかった。それは将に先ほどの葛城との会話の傍らで、私の思考を占めていた事ではないか。

「大希、今は私の言う事が分からなくて良い。でも記憶から私が言

ったことを削除しないで欲しい。それをすると思い出すって荒技が使えなくなる。私はね、引退するまでに総合行動の教官を育ててみたいんだ」

教官を育ててみたい。

その言葉は確かに、私の中に蒔かれた種だった。

第一章 日常生活

収まりのかなり悪い黄色の巻き毛は、パーマをかけているのに手入れを怠^{きわ}つてるに違いない。色も生え際や眉の黒いことからみて、染めるか脱色するかしている癖にメンテナンスは滞りがちなことを証明している。小柄なその男はいつものように煙草を吸っていた。いでたちは素材は簡易宇宙服にも利用されるスペースジャケット地だが、到底その用には耐えないだろう昔ながらのボタン留め式に仕立てた作業服だった。

嫌煙活動家が躍起になってかなり長い年月が経過しているにもかかわらず、この習慣は健在だ。先月十一歳になったばかりのウォード・リヤドには今のところ将来喫煙者になるつもりは更々無いが、父と今目の前にいる小早川徹二、二人の保護者は共にいわゆるヘビ―がつくスモーカーである。大して美味くも無さそうに眉間にしわを寄せて煙を薫^{くゆ}らせている姿は、何となく大人の男を象徴しているように感じられるから、案外この悪伝統の継承者になってしまうのかもしれない。

小早川は普段、子供の前で気軽に喫煙するほど無神経な人間ではない。強力な空気清浄機が働いている生活用室内でも、わざわざ通気口の前でちまちまと飲む口だ。作業服に数え切れない程ついたポケットの一つに、短くなつた吹い差しをねじ込むと、即座に別のポケットから新しい一本を取り出した。この男は何でも作業服のポケットに入れて済ませるのだ。いくら不燃であり、断熱効果も抜群の最先端技術の結晶とも言うべき生地で作られているからと言って、灰皿にする事はないとウォードは何時も思っている。でも、案外、たった一つのポケットを灰皿にする為だけに、馬鹿高い生地で特注しているのかもしれない。

よくよく顔立ちだけ見れば、十分に精悍な面差しをしているのだが、その手入れが悪い上に全く似合わない髪型の印象が強すぎて、

その事に気付く者は皆無に近い。

「なあに。そんな目で見て」

髪型だけでも小早川の印象は妙なのに、それを更に強調するかのよう
に人並みはずれて甘い声が丁寧に品のいい女言葉を綴る。その
声ときたら、五線譜でいえば女性が出せる音域よりは明らかに下
の方に位置しているのだから基本的に女言葉が似合う筈もない。ず
っと幼い頃から聞き慣れていて馴れている上に、普通の一般社会とい
うものを碌に知らないウオードでさえ、何故そのような言葉づかい
をするのか妙だと思っているのだ。まして、初対面の人間であれば
十人中十人までが暫く絶句する。

一方、ウオードはプラチナブロンドと言って差し支えない明るい
金髪に、明るい青い瞳というコーカソイド系の顔立ちに似つかわし
く、十一歳という弱年の割に大柄な少年だ。背は既に百七十センチ
に足りない小早川の顎を過ぎている。彼を追い越していくのは時間
の問題だろう。

「修理屋、苛ついてるだろ」

修理屋というのは小早川の愛称だ。（似合っている）と、ウオー
ドはかねがね思っている。彼はウオードの家庭でもある星間不定期
貨物船、曙丸あけぼのまるの機関長兼機関士（つまり、曙丸には機関系の乗組員
は彼しか居ない）であるが、船内によろず雑用をも手際よく殆どこ
なしてしまう。掃除から炊事から生活備品の不具合修理まで取りあ
えず彼に頼んで足せない用はないのだ。小早川はただ座っていただ
けなのだが、付き合いの長いというより彼に育てられたに等しいウ
オードには、今の彼の虫の居所が酷く悪い事が察せられた。

「あら、気付いてたの。ごめんね」

「気付いてたの、は無いでしょ」

「そうね、そりゃそうよね」

彼はひとりごちに呟いて、まだ火のついていない煙草をもとのポ
ケットに戻し、ぼそつと続けた。

「新人が来るのよ」

「新人って、」

「兼備って奴ね」

聞きかけたウォードを遮るように小早川が言い捨てる。ウォードは何となく彼の不機嫌の理由に思い当たった。

新人。普通なら新しくウチの船に乗り組むことになる人のことだろう。でも、どんな人物かはっきりしない内に不機嫌になる理由はない。会社　中堅の船会社霧島運輸きりしまうんゆ　の方針で曙丸のような不定期船には最低限の人員しか配備されていないのだから、増員はむしろ歓迎される筈だ。乗員同士の交流が上手く行っていて殆ど家族状態である今の曙丸に、新人が乗り組むことによって多少のトラブルが発生するとしても、人手不足の方が今の曙丸には深刻な問題だ。新人にはもう一つ意味がある。一昔前で言うところのアンドロイド、もしくはヒューマノイドを指すものだ。限りなく人に近いロボット。人造人間というのが一番近い日本語かもしれない。高度な技術と偏執へんしつ的なまでの人に似せる努力が、結局彼らに思考することを求めた。思考が感情を生み、感情が自己を形成する。人として覚醒した時、彼らが自由と権利を求めるのは必然だったのだろう。新人類独立戦争はウォードが物心つく前には決着がついていて、教科書やテレビの特集番組で知るのみだが、おそらく起こるべくして勃発した。

彼らを開発した動機は、人の手で人を作りたいという創造主の視点に立った純粹な野望だったかもしれない。だが、制作費が莫大な彼らはロボットの如き消耗品にこそ確かなにならなかったが、奴隷と呼ぶしかないほどの虐げられし者となった。歪んだ平等主義によって鬱積していた人々にとって、只の工業製品である彼らは、支配欲の矛先を向けるには、ある意味で完全な存在だったのだ。人類発祥の地、地球上で百年余り続いた人造人間の被差別階級としての暗黒時代は、人との戦争という儀式を通過することによって一応の終結を迎えた。

実際のところ国家間でしばし起こる紛争と違い、彼らには寄り添うべき国家すらなかった。対等な戦争と言うよりテロ行為と制圧軍事行動の繰り返しだったようだ。しかし、現代社会の教科書に新人類独立戦争という名で記されていることからすると、それは確かに戦争だったのだろう。国際連合文化局の検定した教科書の記述を鵜呑みにすれば、まず『ソウル』という組織が彼ら人造人間達の独自のネットワーク交流により結集し、指導者として立ち上がった。最初は抑圧から彼ら自身を解放するのみを目的とし、『我らにも権利を』といった地道な集会活動が中心の組織であつたらしい。それが国連の警察組織によって徹底的に弾圧され始めたことにより、『ソウル』は次第に国家主要機関を標的とした破壊行為を行う戦闘組織になっていく。その行為が人に人造人間を憎悪させる原因となつてしまったのだから、決して彼ら全体の為になる行為だとは思えない。そして今更、根付いてしまった憎悪感情を白紙には戻せない。

彼らは戦後、多くの初期型植民衛星と同じ地球の衛星軌道上に建設された人工都市群という固有の領土を確保し、そこに籍を置くことによって人としての諸権利を受益出来る立場を獲得した。

これらの歴史はあくまで人類発祥の地、地球区という一地域に限定された事であつて、五世紀もの昔、^{ひへい}疲弊^{そら}しきつたこの地を後に、宇宙という新天地を目指して移民していった多くの人々が開発した^{おびただ}夥しい植民地全てにおいて人造人間が人権を獲得したわけではない。そして地球区でさえ、彼らが人権を擁することについての混乱は多く残っているのだ。

それは兎も角、この地球近辺の文化圏ではアンドロイド、人造人間という言葉は、今は国際連合の人権条約の『別冊三』に差別用語として登録されているので、口にするには許されない。アンドロイドの何処が差別的な呼称なのかは甚だ疑問だが、^{はなは}こう呼ばれて抑

圧された者にはきつと耐え難い響きを持ってしまっているのだろう。その代わりに推奨されている言葉が件の『新人』なのだ。

ウォードは生活圏の殆どが星間宇宙船なので、その新人という存在自体を直接目にしたことはない。もしかしたら宇宙港都市サンガですれ違っているのかもしれないが、外見で彼らを人と区別するのは先ず不可能である。だから面白半分に、彼らと直接知己を得たいという衝動は有る。だが、大人の小早川には彼らを差別する側に立つ経験や、なにがしかの思いがあるのだろう。

「修理屋が新人廃絶主義者とは知らなかったよ」

小早川はゆつたりと反論した。

「何言ってるのよ。私に彼らを批判する権利なんて無いわよ。廃絶主義者の可能性があるのはバゲモンの方よ。彼がそうなのは無理ないけど。うちは船員同士のトラブルなんて無縁だったのに。全く、頭痛いわ」

「え、父さんが……」

ウォードの父は筋肉隆々とした巨体を持っている。その上にフランスパンのバゲットの様な、馬面より遙かに長い顔という、かなりの異相の持ち主だ。それでついた渾名がバゲットモンスター、略してバゲモン。シェーネなどという可愛い本名より余程彼に合うが、彼にも可愛い赤ん坊時代は有っただろうから、彼の子であるウォードが名前についてとやかく言うのは筋違いだ。かのバゲモンという呼び名の名付け親は、亡くなったウォードの母イリアナらしいつまり、相当年季ものの渾名というわけだ。バゲモンは外見で判断すると体で思考するタイプにしか見えないが、実のところ温厚で、滅多なことで声を荒げたりしない。ウォードが悪さをしたときも、彼が心から謝罪するまで理詰めで懇々と説き聞かせるねちこい質だ。逆に口より手が早いのはこの軟弱な外見の小早川の方だ。

「冗談は止してよ。父さんが廃絶主義者の訳ないよ」

小早川はウォードをみたが、俯くことでその視線を外してしまい

暫く何を思うのか黙っていた。据わりの悪い沈黙に、少年が何か喋ろうとしたとき、小早川はいきなり椅子から立ち上がった。そして「今日のお勉強は中止にしましょう。気が乗らないわ。居間にいらっしやいな。お茶にしましょうね。昨日ケーキ焼いたのよ」と言った。

どうやら、この話を続けるつもりはもう無いようだ。付き合いの長いウオードは心得たもので慌てて開いた教科書や散らばった筆記用具をまとめると、さっさと部屋を出ていった小早川の後を追いかけて廊下に飛び出した。

ウオードは、修理屋こと小早川徹二の二間続きの部屋のうち、寝室でない方を勉強部屋に充てて^あいる。教師役も小早川がしているの
で便利なこともあるが、居心地の良さをコンセプトに整えられているので落ち着けるといのが何よりの理由だ。勉強は確かに^{はかど}捗ると言うわけだ。二間続きと言っても、もともとそういった造りなのではなく、人員削減で余っている部屋を有効利用すると称して、小早川が勝手に壁をぶち抜いてドアを作り占領しているだけのことである。だから船長の霧島翔虎の居住室より実質広い場所を使っていることになる。

機関長という重責以外に、厨房作業員、清掃も含めた諸メンテナンスを取り仕切るこの男。彼以上に貨物船曙丸上で好き勝手なことをしている者は先ずいない。彼より遙かに長く曙丸に乗り組んでいる事務長のリチャード洞^{ほらぐち}口や航海長シーネ・リヤドがそれについて何も言わないので、他の乗組員も認めるしかないのだと思う。と
いって他の乗組員から敬遠されているわけではない。常に要求以上の完成度で仕事をこなす万事に隙のない小早川のそういった子供っぽい一面は、他の大人達にむしろ人間くささとして好意を持って受け入れられているようだ。

長い船員居住区の廊下は人影もなく静まり返っている。この部分は省エネルギーの為に常設の照明はなく普段は闇が充満している。

ウオードが一步踏み出すと前後三メートル位が眩まぶしくない程度に明るくなった。其処そこを走って居間に向かう彼に合わせて、穏やかな光も移動していった。居間は普通の船なら食堂を兼ねた談話室が相場だが、曙丸の場合は去年引退した船長の趣味か小早川のごり押しか定かでないが、畳が敷いてあり靴を脱いで上がることになっている。曙丸は航海中も苦勞せずに床面を走るといふ荒技が可能なほどに重力を維持させているし、幾分方向に偏りがあるものの貨物船にしては随分贅沢に出来ている。まあ、地球上に住居を持つている船長にしてみれば、重力室で毎日規則正しく訓練を繰り返して筋力を維持させるより手っ取り早く確実に良いのかもしれない。

小早川の手作りのケーキは、船が恒星間航海を終える度に義務づけられている船体検査のため、衛星軌道上に位置する港に係留されているときにしか味わえない貴重品だ。一等航海士の柳頼太やなぎらいたや通信長リンダ・マーフイー、一等無線通信士・早乙女信吾さおとめしんごなど、家族が居て係留時には帰宅する連中には可哀想だが無縁の品だ。曙丸はオーナーである霧島運輸が日系企業なため、当然のように日系人が多い。客船でもない曙丸の乗務員はたったの七人。必ず長期航海になる星間船に乗務が義務づけられている医療保険士（船医）も、あの小早川が総合大学出で、医療保険助手の資格を持っているため、事実上欠員になっている。

シエーネ・リヤドのおまけであるウオードは書類上曙丸には存在しない。こんな違法が通るのも、基本的に霧島運輸が一民間企業の貨物船に過ぎないからだ。だからウオードは書類さえ整っていれば何事も許可の下りる政府の管理体制の杜撰さの恩恵にも同時に与っていることになる。

「美味しい？」

陶器のティーカップに入ったミルクティーと、上品な甘さで見かけも申し分ない小早川印のフルーツケーキ。今回は、新鮮なキウ

イとさくらんぼが乗っている。フレッシュフルーツは水耕栽培の宇宙産の物でも、可成り良い値段の筈だ。カップもどうやら高級品らしいが、ウオードのような子供には自然何の敬意も払われていない。この割れ物のカップもこうやって係留されているときにしか登場しないのだが、別に有難がるほどのものでもないというのが、ウオードの正直な気持ちだ。正直小早川の言う陶器で飲むと味が違う云々は全然わからない。けれど、育ち盛りで甘いものも嫌いではないウオードは、飲み込む早さで一切れ食べきり、即、お代わりを要求した。

「やっぱり旨いや。修理屋、定年後もケーキ屋で食ってけるよ」と、妙なことをウオードが請け合い、小早川は微笑んだ。

「有りがとう、ぼけてなかったらそうするわ」

頼りにしている大人が、何れは老化し衰えていくなどと、頭で知っていても理解できない年頃のこと。ウオードは軽く流して応えた。「大丈夫、ぼけたら僕が面倒見てやるから。それとも、老人コミュニケーションで恋人見つけて結婚でもするの？」

小早川はクスクスと声を立てて笑った。笑い方まで妙に女っぽい。「馬鹿いつてないの。でも子供に扶養される趣味はないから、年食ったら老人コミュニケーションで綺麗なお婆さん口説いて過ごすっていうの、悪くないかもね」

ウオードは危うく紅茶をこぼしそうになった。

「何か、修理屋が爺ジジイになつた所、想像できないなあ」

「嘘つめ仰い、爺の私をキツチリ想像したくせに」

「ばれた？」

本当は、そんな想像する暇も無かったのだが、ウオードは適当に相槌を打った。

「一度聞いてみたかったんだけどさ、修理屋ってゲイなの」

調子に乗ったとんでもない質問も小早川はあっさり受け流した。

「私はどっちも好きよ。但し、好みはちよっとうるさいけどね」

「へえ、例えば船長なんかは、どうなの」

小早川はちよつと顔を顰めて、眉間に寄つた皺を指で撫でながら考える振りをした。妙に真剣に考えている風なのが結構怖い。

「パス。もうちよつと育つた方が良いわ。まだ美味しそうな若者に趣旨替えするほど、年食つちやいないと思うのよ。あ、でも安心して。バゲモン口説く気もないから」

ウオードはバゲツト面の巨漢の父と、集中して顔立ちだけみれば充分整っている小早川という二人の保護者が、夫婦宜しく寄り添っているのを想像してしまい、一瞬で体の力が抜ける気がした。絶対に見たくない。

「私がゲイかどうかが気になるなんて、ウオードもそろそろリビド―に支配される年齢になつたつて事かしら」

小早川はウオードを指さして、殊更にオカマっぽく微笑んだ。

「へっ。リビド―って何だっけ。どっかで聞いた気もするけど」

「性衝動つて奴。フロイトなんて今時古すぎた？」

ウオードはとっさの反応が思いつかず、まじまじと小早川の顔を見てしまった。当の小早川はいつもの柔らかな笑顔の中に全ての表情を隠す一種のポーカ―フェイスで、少年の視線を受け止めた。

「子供をからかわないでよ」

なんとかそれだけ言つてウオードが軽く頬をふくらませてみせる。わざとらしく作つた子供っぽい仕種。普段ならこれで済むのだが、小早川は妙に真面目くさつた顔になつて続けた。

「都合のいいときだけ子供を主張しないでね。良い機会だから言つておきますけれど、私はあなたが何時までも此処に居るの、良いかなと思つてる。勘違いしないでね。私はあなたのことが好きだから、決して離れて暮らしたい訳じゃないわ。でも友達で有れ敵で有れ、同じ年代の人たちと、付き合つて行くことでしか学べないことつて沢山あるの。ウオード、あなただつて友達が欲しいでしょ」

今日は、父親が新人類廃絶主義者と聞かされたり、（当然まだ信じていないが）どうも小早川との話が予期していない方へ転がる日らしい。

「そりゃあ、友達とか学校に通うこととか、考えたこと無いって言えないけど」

何となく父に聞かれたくなくて、彼は居間を見渡した。

「バゲモンを気にするのはお止めなさい。あなたは反抗心が無さ過ぎるわ」

小早川はポケットから再び煙草を出すと、火を付けるでもなく指先で弄び始めた。これは考えを言葉に組み立てているときの彼の癖なのだ。

「反抗心が無いってのは、良いことだろ。修理屋だって何時も大人に口答えするなって言うじゃないか」

「口答えと反抗は違うわ。口答えは感情に委せて目上の者の言葉尻を根拠もなく論うことだし、反抗は説得力に欠けていたとしても自分の心の主張でしょ。つまり、反抗心がないってことは自分の考えが無いって事よ」

こういうとき小早川はやたらと断定的になる。彼がこの勢いで喋りだしたときは覚悟してかからないと、うっかり納得させられてしまうので要注意だ。

「バゲモンに聞かれたら、殴られるかもね。でも、そうよ。何時までも只のいい子でいちゃいけないわ。将来何になりたいの。何をしたいの。此処にいてもその答えは何処にも転がってないでしょう。」

すっかり決め付けて言うのと、ふと息を吐いて小早川は言葉を切った。そして早々といつもの柔らかい語調に戻って続けた。

「私はね、自分で言うのも変だけど、人として育ち損なったわ。今のあなたより狭い、ごく限られた数の大人の中で、疑問を抱くこともなく与えられた課題に取り組む事が生活の全てだったの。私はこの通り頭だけは良いからペーパーテストの回答欄を埋めるのに苦労なんかしなかったけれど……」

彼は煙草の先でこめかみを指すと続けた。

「一番成りたかったものには結局成れなかったわ。薄っぺらな自信とチンケな挫折で簡単に絶望しちゃってね、自殺マニアみたいな生

活したこともあるわよ。それを踏まえてたどりついた結論というと、普通に人と交わって、挫折感も充足感もたっぷり味わいながら場数を踏まないと、いざというとき自分の制御力を維持できないって事。些細なことで感情が暴走して大切な人達を傷つけてしまうほど、最低なことではないでしょ。私はその最低なことばかりを繰り返して人を傷つける失敗ばかりしてきたわ」

「修理屋が失敗する所なんて想像できないな」

ウオードは反論する機会を逸してしまったので、小早川が成りたかったものは何だろうなどと考えながら、なんとなくそう答えた。

「失敗だらけよ。翔虎ちゃんみたいな懐の深い大人が理想なのにね」
少年には小早川が翔虎に憧れているというのは冗談とは思えなかった。

船長の霧島翔虎は彼らの所属する霧島運輸の御曹司だ。上に三人の姉と一人の兄が居なければ、きっと経営陣の一員として地上勤務していたことだろう。いくら宇宙航海専門大学を出ているとはいえ、若干二十八歳の若年では普通なら出世していても一等航海士が精々な筈だ。これに関しては、親の七光りという陰口も強^{あなが}ち的^{まとはず}外^{はず}れではない。だが、星間航海の操船技術は未熟なものでは決していない。彼の欠点である経験不足をあらゆる意味で補っているのは、航海長のシェーネ・リヤド。曙丸の数少ない乗組員の内、最年長の五十七歳だ。彼は昨年引退した老船長と共に人生の殆どを宇宙に過ごした。霧島運輸では宇宙船乗務員の定年は六十歳、後は本人が希望すれば適性検査を受けた上で五年は延長勤務できる。ウオードが学校に進学したいと言え、多分父は『陸に上がる』だろう。だが、それでは父が誇りを持って慣れ親しんでいる『ソラ（宇宙）』の仕事を取^とり上げてしまうことになる。それに実の父以上に自分を慈しみ育ててくれた小早川とも別れることになる。

ウオードは母親を知らない。親戚にも会ったことはないし、彼らの話を聞いたこともない。が、彼の知る唯一の肉親である父が十分

に愛情深くウォードの成長を見守ってくれたお陰で、それ故の寂しさを覚えたことはない。ウォードが一番慣れ親しんでいるのは壁一つ隔てた先が人の生を許さぬ宇宙空間という、この特殊な世界だ。

確かに厳しい世界だ。殆どの時間は、ただ決められた日常業務を繰り返していくことだけで過ぎていく。宇宙飛行士という言葉は相変わらず少年たちの憧れだが、波瀾に溢れた日常などあるはずもなく、穏やかに時間を塗りつぶしていく毎日だ。というより、それしかできない毎日だ。どこかに遊びに行けるわけで無し、違った顔と話すことも無し。だが、幼い頃から船で過ごしたウォードは、ごく自然に、自分も将来この無辺の宇宙空間を仕事場にしたいと思うようになっていた。小早川に自分のやりたいことも見つかっていないだろうと決め付けられるのは甚だ心外だった。

シェーネはウォードの憧れる筋金入りの船乗りだ。ここの乗組員以外の大人と話したことも殆ど無いから比べようもないのだが、彼はそう信じている。そんなこともあって、ウォードは父に人並み以上の尊敬と愛情を向けている。万事に於いて控えめなシェーネが唯一押し通した我が儘が、恒星間貨物船の必ず長期にわたる航海に息子を伴ったことなのだ。家族という者との縁がとことん薄いシェーネは、妻の忘れ形見である息子を手許に置くことに執着していた。お陰で彼は義務教育すら受けていないし、当然近しい年代の友人も皆無だ。

現在の義務教育は標準適正年齢五歳児からの五年のみに短縮された、一般基礎教育課程で始まる。その内容は検定済み統一教科書という名前で編纂されており、年に一回行われる『統一教科書検定』、通称統教トキョウに合格すれば、通学は免除される。早期教育を試みる者はこの過程を検定で済ませ、中・高等基礎教育課程、専門又は総合大学課程に進む。専門は各種のスペシャリストを育て、総合は広い分野を関連付けて分析検討する能力を磨くことによって進むべき道を探り出すプロを作り出す。彼ら総合学を修めた者の活躍の場は政界

や財界に限らず、あらゆる分野に広がっている。つまり現在のトップエリートコースそのものだ。

頭だけはよいからと豪語した小早川は、その総合大学でも最も権威のある、唯一国連によって運営・管理される学研都市『ジ・アース』の総合大学を首席で卒えているそうだ。常識的に見れば一民間企業の所有する貨物船の乗務員でいる方が妙なのだ。

基礎教育課程の一般部の標準所要年数五年と、中等・高等各々三年、全ての課程に於いて検定試験が実施されている。ウォードは門前の小僧宜しく、操船室の計器類を読むことや、通信室の諸機器の扱いには随分長けていて、多分それだけで言えば、宇宙航海専門大学の実技試験も難なくこなせるだろう。が、肝心の基礎教育課程の中等部統教検定を何度か落としているというのが現状だ。六歳で一般部を卒えるという天才的とも言えるすべりだしにもかかわらず、今使っている教科書は中等部の三年度なのだから、ちよつと情け無い。

まあ、一般部の統教検定を初挑戦で四年度までまとめて受かってしまったのは、優秀な人物が個人教授になって効率よく指導してくれたお陰であつて、実際のところのウォードの能力はいわゆる平均に位置しているのだらうと、彼自身も最近思っている。

それはさておき、翔虎のようになりたかったと呟いた小早川に面食らったウォードは、拗ねたり反論したりする気が無くなってしまった。冷え切つてカップの底にどんでいる紅茶も、皿にこぼれているの幾つかケーキの滓も、クリームが残ったフォークも、不愉快だった。このままで居たいという我が儘には根拠がない。単に居心地よい環境を変えるのが億劫にすぎないのかもしれないと自分でも思う。自分は父の生き甲斐であるうという自信はあるが、生活をべつたり共にしていなければならぬほどに依存しあつた関係ではない。

母を失つた時、赤ちゃんだった自分を手元に置きたがつた父。だ

が、今は既に痛みも悲しみも時によって癒されて居るであろうし、自分さえ学校に通いたいと言い出せば、おそらく父は賛成するだろう。

「どうせ修理屋は他人だもんね。僕が居なくなっただって良いんだろ。それでもすっかり気分を害してしまった事だけは知らせておこうと、ウオードは皮肉たっぷりの口調で言った。小早川は火のついていない煙草をくわえて、器用に嘆息した。

「だから勘違いしないでねって言ったでしょう。私はあなたが大好きよ」

いつもの小早川の、いつもの声。ウオードの気持ちだけが少しささくれ立っていた。

第二章 波紋

恒星間不定期貨物船、曙丸。船籍、リダネア。最大積載量二千万MT。船主、株式会社霧島運輸。この船の運航責任者である霧島翔虎は、衛星軌道港サンガの棧橋に係留されている巨大な船体を見ていた。宇宙貨物船を見たことがない者に、この威容を実感して貰うべく説明することは難しい。旅客船などを並べてみればその違いは一目瞭然だ。鯨の背に海猫が止まっているその位の差はある。もちろん鯨が貨物船だ。ただ曙丸が巨大であるといっても、大都市間を行き来している定期船と比べればささやかなものだ。曙丸と一般定期船の間にもシロナガスクジラとセミクジラ位の差はある。こちらは勿論のこと、セミクジラが曙丸だ。

星間運輸業は、一世紀以上も前、未だ人類が母星地球のみで生活していた頃の海上貨物輸送のあらゆる制度が、変形はしているが生き残っている奇妙な世界だ。リダネアなんぞという、翔虎自身が行ったこともない辺境の惑星国家に、税金対策のため船籍を「便宜置籍」してたりするのもその良い例だ。

しかし、船の大きさをMTで表すのだけは重力などに縛られることのない、宇宙運送の独特の習慣だ。バージ（舢舨）シャトルの名前と呼ばれる、いわゆる惑星や衛星上の重力圏で出荷されたあらゆる荷物を、無重力空間に存在する宇宙港にピストン輸送する船は、流石に重量を無視するわけには行かず、重量と容積を秤にかけて運賃設定がなされているのだが、無重力圏でしか働かない曙丸に重量は基本的に関係ない。もちろん質量に関係なく貴重品には別のタリフ（料金表）が適用される。

曙丸の母港、地球衛星軌道上にある極東アジア国経営による港『サンガ』には、当然の様に地球との間を往復するバージシャトルが数多く就航している。が、曙丸は恒星間不定期貨物船であり、可成りの辺境の地にも寄港せざるを得ない。従って行き先によって船体

外にバージシャトルを固定して運ぶこともできる仕様になっている。こういった船は一般にバージキャリアと呼ばれる。

今回のドック入り（船体検査のための着桟。宇宙貨物船の場合、特別な施設に搬入することはないが習慣的にそう呼ぶ）で、固定装置に空バージを取り付けている所を見ると、またどこか辺鄙な場所に寄るに違いない。本来は所定の書式に船長である翔虎がサインをしなければ、船体にバージを着脱できない筈なので、彼が作業を見てそんなことを察しているのは、随分おかしいことになる。が、実務上は曙丸が入港したときには既に次の航海契約が済み、それに基づき本船作業手順表がつくられていて、ドック作業は入船と同時に手順表に従ってどんどん進められる。翔虎がサインしなければ成らない書類塊が手元に届くのが何時になるかは、事務屋の作業次第ではつきり言って予測できない。出航準備完了直前までずれ込んで、サインする手が痛くならないよう祈るばかりだ。生の書類にサインが必要な業界が、今時幾つ残っているのだろう。電子サイン制度を連合が許可しないのは不条理だ。翔虎はそんなことを考えて外を見ていた。

翔虎はベンチに腰掛けてのんびりと外を見てくつろいでいた。基本的に人気のない静かな埠頭でも時折カートが鈍いモーター音をさせて通り過ぎていった。カートはサンガの低重力下で移動するのに便利な電動の軽車両のことで、だだっ広い埠頭では便利な移動手段として用いられている。曙丸でも作業区や居住区には贅沢なレベルの重力を付加しているが、広大と言っているいいホールド（船倉）には他の船舶並の微重力しか与えていないので、カーゴ（貨物）の見回り時には重宝している。ぼうっとしている翔虎の背後で、一台のカートが減速してすこし行きすぎたところで停止した。

「やはりこちらにいらっしやいましたね」

久しぶりに聞く声だ。翔虎は窓から視線を外しカートの方を見た。窓と言っても外に固定されたカメラが写す映像に過ぎないのだが、

これも人間のこだわりなのだろう、あたかも其処が透けていて向こうを直接見ていると錯覚させるよう作られている。翔虎はこの窓越しに外の様子を見るのが、子供の頃から純粹に好きなのだ。大きな船の回りで忙しく作業する、宇宙服に包まれて浮かんで居る作業員や無数のロボット。彼ら一人一人に付けられてうねっている命綱同士が絡まないのが不思議だと、見る度に翔虎は思う。いや、絡まって右往左往する様を一度で良いから見てみたくて、幼いときから粘っているといつていいかもしれない。

声の主は本社勤務をしている長姉、霧島松姫まつぎの秘書をしている片岡という四十絡みの落ち着いた男だった。彼の声を認識した時に察したとおり、珍しく松姫の姿も其処にあった。彼女が片手を軽く振って合図するのと、片岡が立ち止まって会釈をしたのが殆ど同時だった。翔虎も軽く頭を下げてから、サンガの低重力の所為で足どりがふらつくの何とか制御して、二人に歩み寄った。

「姉さん。片岡さん。お久しぶりです。サンガにいらっしゃるなんて珍しいですね」

松姫は翔虎より十四歳年長で、既に四十を過ぎどっしりとした貫禄を備えている。腰回りの肉付きも一段と充実したようで低重力下でみても重そうだ。幾つになっても飄々とした雰囲気のある父とは随分違っているが、どちらも企業の経営者として優れた資質を備えている人物である。姉と言っても一緒に遊んだ覚えも、寝食を共にしたことも殆どない。松姫は翔虎が物心ついたときにはもう企業経営専門大学に通うため家を出ていたし、学業を終えた後は独立心を養うためとか称して家には戻ってこなかった。正月のように母の上手い飯が食えるチャンスにだけは逃さずに現れるから、一緒に食卓に何度が付いた、その程度の関係だ。

「まあ翔虎、あんた会う度に立派になるわね。似合うわよその制服」
松姫はそう言いながら、翔虎の肩に入った四本線をぼんと叩いた。

父の従兄弟で昨年曙丸の船長を引退した霧島晃の跡を継ぎ船長になつて一年未滿。正式な船長の制服を着た翔虎を見るのは松姫には初めてのことだ。小柄な彼女は見上げるのに苦労するほど成長した末の弟が、付き合いが薄かった割に可愛くてならない。難しい恒星間航海のプロで有り、船長の実務も難なくこなしている翔虎がとても誇らしい。仕事の仕方覚えようとしないで、権利だけを主張する妹たちにうんざりしている分、評価が甘くなるのかもしれないが、姉弟も五人もいると好きな者とはつきり言つて付き合いたくない奴が出来てしまう。松姫にとって大切な兄弟は、バージヤトルライダーなどという労働者階級的な仕事を樂しげに颯爽とこなしているもう一人の弟とこの末の弟翔虎だけである。それ以外の二人の妹は居ても居なくても良い存在でしかない。むしろ居なかつた方が余程にましだつたとすら思っている。

「姉さんが誉めてくれると嬉しいよ。で、現場になんて仕事じゃないよね」

翔虎の決め付けに松姫は苦く笑つて首を振つた。

「仕事よ。残念ながらね。本当はこんな仕事父さんに押し付けたかつたんだけど、もう年だからね、長期で宇宙滞在するのはかつたるいとか言つて逃げられたの。あの年になれば毎日重力室で運動するのはしんどいそうよ」

「姉さんだつて、そろそろきついんじゃないの」

翔虎の軽口に松姫は顔を顰めた。

「言つてなさい。あんただつてうかうかしてると直ぐ爺よ」

松姫の決め付けに翔虎は頷いた。

「確かに違いない。で、姉さんが嫌がる仕事って何なのさ」

翔虎の言葉に、松姫は姉の顔を会社の経営者のそれに一変させ、姿勢を正して言つた。

「あなたの所にも通達が行っている筈よね。例の新人の積極配備について」

「ああ、あれですか。現場からの苦情、さぞかし多いんでしょうね」

松姫は厳しい表情を顔に張り付けたまま、腕組みをして窓に近寄り曙丸を見上げた。

「多いわ。それも予想よりずっとね」

「姉さんがどの位を予想してたのかによりますけど、あのメール見て思いましたよ。こりゃ揉めるな、って。それに私が霧島の一社員が契約船長でしたら、とつくに苦情を申請してますよ。そんな指示は到底受け付けられない、と」

「あなたまでそんなことを言うの」

翔虎は松姫に並んで立ち、同じように宇宙空間を見つめて付け足した。

「戦争が終わって未だ十年ですよ。たったのね。うちの乗員の中にも彼らの破壊活動で家族を亡くした者が居ます。彼に新人へのわだかまりを捨てて普通に接してくれとはいえませんよ。それに言ったところで、そういった感情はどうなるものでもない」

松姫は頷いた。

「分かっているわ。でも、私たち人には彼らを支配してきた歴史があつて、それを償っていくのが政府の方針な以上、霧島は積極的に協力して行かざるを得ないのよ」

翔虎にもそんなことは分かっているのだ。定期航路を持たず閉鎖的な運賃同盟にも当然参加していない霧島運輸が magari なりにも中堅企業と呼ばれる理由は、その貨物の殆どが太陽系から遙かに離れた地で続々と進む植民星開発、その中継点として建設されるコロニーや宙港の建設用材、維持補給品などの輸送といった公共事業に係わっているからなのだ。霧島運輸が極東アジア国に籍を置き、国の仕事を請け負い続けるためには、政治家の考え出す場当たりの政策にも積極的に係わらざるを得ないのだ。

戦争という手段によって、人としての権利を得た『新人』。しかし、逆に彼らの存在は社会から締め出されていった。生命（そう言

つて正しいものなら」の維持に莫大な費用のかかる彼らは自分を守るための資金を必要としたが、それを得る多くの手段を失った。人としての権利を持つ彼らの、最低限の生活を保障するために使われる金額の膨大さに手を焼いた政府が、彼らの就職先を積極的に確保しようとし、協力する企業をあらゆる意味で優遇する方針を取ったのも無理からぬ所だ。

だが、と翔虎は思わざるを得ない。恒星間宇宙船は極度に閉ざされた社会なのだ。壁一枚隔てた向こうに広がるのは、人の生存を瞬時と許さぬ神の領域。計器の僅微かな狂い、判断の一瞬の遅れが招く惨事は常に生活と共にあるのだ。信頼できぬ者、心許せぬ者と航海するのは精神衛生上好ましくないに留まらず恐ろしく危険な事である。特に人員が限定され、あらゆる場面で相互補完的にならざるを得ない現状では、乗員間の不和は特に避けたい所でもある。詳しい話は知らないが、航海長シェーネ・リヤドの夫人は政府関係の仕事をしていたらしく、新人のテロで亡くなったと聞いている。

航海中に亜空間通信波のメールで届いた、霧島傘下の全ての本船に一名以上の新人を配属する旨の通達を読んだときの航海長は、黙って自分の端末のディスプレイを切っただけだった。そう、そのシェーネの夫人の友人だったという機関長小早川も、態度には表さないものの、新人類廃絶論者である可能性は無視できない。ジ・アースの総合大学を出ている小早川なら他にも何人もの友人・知人を新人類独立戦争時に亡くしているのかもしれない。

しかし、それでも、と翔虎は思う。自分は霧島なのだ。社の存在有つての今の己でしかないのだ。リヤドや小早川の気持ちを思うと辛い、自分がこれを避けることは出来ないのだ。

「行かざるを得ないか。私だって分かっていますよ。本当のところ言えば、ペナルティを払ってでも免除して貰いたい位なんです。でも私の看板は霧島ですからね。他の同じ立場の者より自由が利かないことは重々承知しています。曙丸は社の方針を尊重します。」

ただ、優秀な人材を求める権利くらいは行使しますよ」

傍らの末弟の顔が微笑んでいるのが、松姫には有り難かった。

「皆があなた位物わかりが良いと、私も助かるのにね」

「それは、無理な注文でしょうね」

身も蓋もなく翔虎は断言した。恒星間宇宙船内の人間関係が如何に安全と密着したものなのか、結局陸の人間の姉には分かることではないのだ。自分も霧島のために最善を尽くし、望まざる社の方針を受け入れるのだ。姉にだけ楽な思いをさせてなるものか、と意地悪く翔虎は微笑んだ。松姫は間違いなく何人の船長達を説得できるかで社の方向に重大な影響を与え、その結果で父の跡を継ぐ資質があるか否かを全社員に示すことになるのだ。父が直接来ないのもおそらくその辺の思惑有つてのことだろう。彼はそういう人だ。松姫は肩をすくめてから大きく息を吐いた。

「ちよつとは励みになる言葉をくれても良いでしょうに」

いつもの姉らしくもない、若やいだ仕草に翔虎は声を立てて笑った。

「それこそ無理な注文つてもんですよ。姉さん」

松姫は態とらしく溜息をついて、弟の落ち着き払った顔を見た。

「所で、サンガに居る間に、一度有名な小早川氏に会えるかな」

有名なという所にことさらアクセントを置いて、松姫は話題を変えた。確かに彼は有名人だ。何せ『スーパージニアス』と些か揶揄を込めて呼ばれるジ・アースの総合大学の首席卒業者なのだ。守備範囲が広いことによりそれぞれの分野の専門家には到底敵わないが、広い分野を比較検討し体系だつて分析することの出来る彼らの多くは、政界や学界といった体制側で指導的役割を担っている。たしかに色々な学問を極めるには専門で研究する人々が不可欠だ。だが、そこで得られた成果を混沌とした現実社会に生かして行くには専門分野の知識だけでは役に立たない。細分化した専門分野の情報と知識を、基準となる価値観に基づきまとめていく総合学という最

も高度な学問の専門家が必要になる。コーディネーター無しに社会は円滑を得られない。

総合学を些か乱暴に説明するには育児などが分かり易い。子育てに医学、心理学、栄養学、教育倫理学、家政学等々、あらゆる分野の専門家である必要は全くないが、健やかに愛育するためには、それらの基礎的な知識のある程度わきまえていることが必要になる。そして様々な知識の中からの確に己の哲学に合う方法を選択していく知恵を持つことが、なにより大事になってくる。

その総合学も実は幾つかに分類されているらしい。興味を持ったことのない翔虎には、生態系総合学とか、政治経済総合学とか、心理・倫理・宗教総合学とか幾つかの分野の名前をいくつか知っているに過ぎない。小早川の履歴書にある人間行動総合学なんていうのは一体何の総合学なのか見当も付かないが、実に様々な分野の人が、彼を求めて翔虎を訪ねてくるのをみれば、なにかの役に立つには違いない。翔虎とて小早川がスーパージョニアスであると知ったときは何かの間違いとしか思えなかった。

どうせ霧島という私企業に絡んでいるのなら、せめて経営陣に参画して貰いたいという松姫からの望みも、耳にたこが出るほど聞いている。だが、彼が曙丸にいたい理由を聞いてしまっているので、翔虎はそれを一蹴することに決めている。ウオード・リヤド。航海長の一人息子が成人するまでは側にいて見守りたいというのが小早川のささやかにして唯一の願いなのだそうだ。細かい経緯まで知っているわけではないが、彼の母、つまり航海長のシェーネ・リヤドの夫人イリアナと小早川はごく親しく付き合っていたらしい。新人による破壊活動に巻き込まれたイリアナが不慮の死を迎えた時に立ち会ったのも小早川で、彼女は幼児だったウオードを守ってくれと頼んで逝ったらしいのだ。翔虎がもはや決して知り会えないイリアナという女性が小早川にとって大切な人であったのは疑うべくもない。

シェーネが深く語らないのは小早川と亡き妻の関係をよるこんでいないからなのか、ただ単によく知らないだけなのか、それさえも翔虎は知らない。ただ、亡き人の思いを受け入れて人生の軌道変更するというのは、翔虎にとって衝撃的な生き方だった。自分は誰かの思いを継いで、己のやりたいことを捨てることはきっとできまい。

翔虎が自分より五歳年長の小早川と初めてあったのは、スキップもしなかったもののダブリもせず二十二才で宇宙航海専門大学の恒星間航海専科を卒え、意気揚々と定年間際の父の従兄弟が船長を務める曙丸に配属されたときだった。極東アジア国に国籍を持つ彼はストリートで難関の専門大学に進むことで兵役を逃れ、新人解放戦争という有事下に青年期を迎えた割に、動乱とは縁の無い学生時代を過ごした。戦争が長引けば卒業後に、最低二年の兵役を勤める義務があったがのだが、運のいいことに在学中に戦争は終結した。

腕試しに他の企業に就職することを考えないでもなかったが、父の従兄弟の晃小父さんが船長を務める曙丸で実務を経験し、彼の引退後は船長職に抜擢してくれるという美味しい話の誘惑には勝てなかった。初めて配属される曙丸を迎える為、鈍く輝く巨大な船体が宇宙港サンガに着桟するのをこの同じ場所で見ていたあのときの感動は、今もしっかりと心に刻まれている。

当時の彼にとって霧島晃船長は顔を知っているに過ぎない程度の親戚である。初めて近しく接した晃は、仕事に関しては緻密な癖に、それ以外については全く大雑把で、細かいことは一切気にしないという矛盾したところがあり、翔虎を戸惑わせた。あの時に一番驚いたのは航海長の子供の事だったと思う。

そして小早川だ。生え際が黒いのと眉毛の色との違いで露骨に判る脱色した髪を長く伸ばし、パーマを当てただけで手入れは全然していない無精つたらしいそれを後ろで一つに黒いリボンで束ねている。小柄な体に似合わない低めの声で上品な女性用の言葉使いをす

る。彼が食事の世話をしたり、そこら中を磨きたてていたりするのをみて、風変わりな雑役夫だとすっかり早合点してしまった。

彼が機関部の仕事を見事に捌き、人手の足りない事務部の手伝いも片手間にこなし、週に一度義務付けられている健康チェックの担当までしているのが判り、翔虎は先ず彼が新人じゃないのかと疑ったのだった。

そう、本当に疑ったんだよな。

翔虎は懐かしく思い出していた。当時専門大学出でない小早川は機関士としては無資格だったのだが、既に定年延長中だったの機関長に替わって、彼の仕事をそつなくこなしていた。彼が二級宇宙船舶機関技術師の資格を取ったのは翔虎が彼と出会ったその年のこと。それまで無資格だったのは、受験資格条件の三年以上の実務経験者という項目をクリアしていなかったたので、受験出来ずにいただけの事だった。彼が試験に向かったときも、電子頭脳かと疑えるほどの記憶力と分析力を持つ彼が、そういった資格試験に落ちる心配は誰もしていなかった。

昨年になって漸く宇宙船舶の機関部責任者になれる一級宇宙船舶機関技術士を取得できたのも、『二級機関士取得後五年以上の実務経験を要す』という規定が有るからに過ぎないだけだった。

甲板部と俗称する操船部門も同じ事で、翔虎は専門大学を卒業する事で自動的に二級宇宙船舶操船技術士の資格を得たが、宇宙船の操船責任者を勤めて良い一級を取得するには五年の現場経験が必要だった。昨年認定試験を一発合格できた時は、専門大学の合格発表以上に嬉しかったと思う。やはり過去の出題傾向を分析して小早川が作ってくれた問答集をとにかく頭にぶち込んだことが勝因の一つだったと思う。門外漢を主張して操船室の計器一つ読まない癖に、分厚い参考書と資料集、過去問題を検討して模擬試験問題を作れるところ辺りが、総合大学に住む英才達をして「超天才」と呼ばせてしまう者の底力って奴に違いない。

一般的に言えば三十路前に恒星間航宙船船長を務める自分だつてエリートと呼ばれて可笑しくない筈なのに、小早川の実力の片鱗を日常的に見ていると、天才というものは同じ人間でも頭の造りが根本的にどこかちがっていると確信せざるを得ない。

話は戻るが、小早川を有名にしまったのは翔虎なのだ。先の船長霧島晃が船長権限で雇い入れた小早川の経歴の詳細は霧島に提出されていなかった。船長権限で雇うというのは、船長が契約者の給与を船舶運航経費から直接支払うということで、会社側は船員名簿に特別雇用を意味するSEと記載された人間について細かい資料は要求しないのが慣例になっていた。翔虎は船長になって最初の人事考課の書類を送るとき、SEの分は提出義務の無い事を知らず他の社員の物と一緒に小早川の個人情報が入っているフォルダもすっかり転送してしまったのだ。

SEのデータが混入しているのに気付いた人事の女性が、返却しようとは何気なく中を覗いた時に小早川の卒業及び成績証明書のコピーに偶然目が行ったらしい。その内容に驚いて経歴詐称者ではないかと上司に報告し、本社人事も彼の経歴に興味を持って経歴調査を実行したのだという。小早川が紛れもなく書類通りの本人であることが証明されると大騒ぎが待っていた。

翔虎にしてみれば、小早川の経歴は周知の事実だと思っていたのだから、航海中に騒ぎになっている事を通信で聞かされたときは少なからず驚いた。

なぜ大騒ぎになったのかというと、ドクター小早川が死亡したことになるっていたからだ。確かに公的書類上は生存している。でなければそもそもクレジットカードの一枚も使えない。

ドクター小早川はジ・アースで個人の研究室を持つところそ許可されていなかったものの、傑出した人物として注目されていたそうだ。その彼の消息が掴めなくなったのと、彼が勤めていた研究所の建物が爆破され多数の死傷者を出した時が一致していたのと彼は

死亡したものと判断されていた。状況が死を確信させるだけのこういった遺体の無いケースでは、直接医師が死亡診断を下せない。この場合遺族が戸籍末梢を裁判所に申請しなければ、戸籍データ上はそのまま保存される。小早川の家族もまた、あの混乱の時期にテロの犠牲になり死亡していて、彼の戸籍抹消が申請されることはなかった。

小早川は公的資格試験を幾度か受け、その履歴書は何度も公のコンピュータ審査を通っている。税金だってしっかり取られているだろう。機械には世間の噂を考慮する機能はない。彼は親しかった人達から死んだものとされていただけだった。

どこからその情報が漏れたものか、小早川の生存が公になると、彼の知人とか友人と称する者や、企業の研究機関、政府関係者とか本当に色々な者達がやってきた。露骨に嫌そうに曙丸に引き籠もって応対すらない小早川をみれば、この状況を彼が好んでない事は明白だ。申し訳なさに翔虎は極真面目に謝罪した。それを当の本人は一笑に付した。

「アポとり連中を断るっていう仕事が増えたのは翔虎ちゃん自身でしょ。私は別に迷惑してないわよ」

兎に角、小早川の生存が公になって以来、引き抜きの誘いをかけにくる中でも特に熱心な連中の一人に松姫がいる。

「新人の面接に事務所に行くとき同行しましょうか。でも念を押しときますけど、彼は晃小父さんが船長権限で雇って、今は私と契約しているんです。引き抜き話は無しですよ」

「そうね、その話はあなたの居ないところですからする事にするわ」
唐突に翔虎は松姫の秘書の片岡が着ている様な、いわゆるビジネススーツを着た小早川を想像し、苦笑した。駄目だ、彼には似合わない。

「いやですよ。彼はウチには必要不可欠なんです」
しかし、松姫に気にする様子はなかった。

「だめだめ、いつまでも彼ほどの人材を雑用係に使ってはいけないわ。少なくとも、今度の新人雇用に関する社規の整備には力を貸して貰いたいと思ってるの。なんとか説得できないかしら」

「機関長が、雑用係とは随分ですね。本気なんですか」

翔虎の問いに松姫は極当然だというように頷いた。

「当然でしょう。ドクター小早川は人間行動総合学の専門家なのよ。こんな場合は特に頼みたい人物じゃないの。そうだわ、相談役なら本社勤めに拘らなくても良いのよね。参考意見をレポートして貰ったり、直接意見を聞きたいときは亜空間通信波を利用すればいいんじゃない。なぜそんな簡単なこと思いつかなかったのかしら」

一人で納得した松姫は勝手に話を進める。

「そうよ、新人雇用規則作成に手を貸して貰えたら、それだけであなただけに支払っている年俸の倍を謝礼に出すし、彼を説得してくれたらあなたにも特別ボーナスは必ずわよ」

翔虎は呆れた。今ですら小早川は翔虎より稼いでいるのだ。機関長、医療保険士、事務員、保守管理作業手数料等、一職種毎なら負けないが合計では太刀打ちできない。

「その人間行動総合学って何するもんなんですか」

今度は松姫の方が苦笑した。

「呆れた、その程度のことも知らないで彼を使ってるの。人間行動総合学ってね人間の行動の成り立ちを調べ、全ての行動がどういう原因で引き起こされるのか研究する学問よ」

翔虎は吹き出しそうになった。

「そのまんまじゃないですか。下らない。人間の行動の研究って、そんなものが何の役に立つんです」

松姫は困ったように小鼻を人差し指で撫でた。

「新人が何で人間と区別付かないくらい人らしく振る舞えると思うの。彼らはその辺のコンピュータと基本的に同じ原理で思考するの

よ。いくら高性能のコンピュータでもあなたは自分の船を制御して
るコンピュータに人を感じた事あって。新人が人に見える理由は基
本的に人間行動総合学をマスターしていて、それを実際に制御して
いく総合行動の訓練を積んでいるからに過ぎないわ。お偉い人が言
うように、新人に心の動きがあるなんていうのは残念だけど私には
信じられない。彼らは人を模倣しているに過ぎない。それなのにア
シモフの三原則が前の戦争で反故にされたのは何故かしら。人に似
せようとする努力が単に行きすぎて、人のまともじゃない部分、つ
まり粹からはみ出したがる衝動とでも言ったらいいかしら、それを
も模倣できるようになったただけなんだって思わないこと？ 私はね
方向違いの努力をしすぎた学者が誤っていて、戦争という最悪の事
態を引き起こしたのだと考えている。実はね、ドクター小早川が失
踪した理由は、その辺で失望とか後悔があつたからに違いないって
私は想像してるの」

「姉さんの御意見は分かります。でも其処まで話を作らない方が良
いんじゃないかな」

流石に翔虎が口を挟むと、松姫はちよつと肩をすくめて見せた。
「そうなら良いなつてことよ。彼が人間と新人の双方の価値観を知
つていて迷っている人なら、両者が歩み寄っていく方法も模索でき
るはずでしょう。凝り固まつた科学者やただ頭の回りの良い差別主
義者なら用はないわ」

姉の話を聞きながら、良く知った人であるはずの小早川の笑顔が
掠れて、知らない男の無表情な素顔が垣間見えたような錯覚を覚え
翔虎は軽く首を振った。六年も近しく付き合つた人物が、初対
面の人程に遠く感じられるのはなんと寒いことだろう。自分が知っ
ている小早川は違う。翔虎の知っている彼は、親しかったが結局他
人と結婚した女性の遺児を見守るために確固とした立場や自分の生
活全てを投げ出した情熱家なのだ。自分の研究の成果が及ぼした影
響から逃げるために失踪した卑怯な男では断じてない。

そう説明したかったけれど、小早川じゃあるまいし、苔の生えかけた女の意見を言葉で覆す無謀は挫折するに決まっている。舌戦を挑むことすら放棄して黙り込んだ翔虎が見つめる先に広がる宇宙空間は、暗さを数倍深くしたようだった。

第三章 出航準備

霧島翔虎が姉の松姫と小早川徹二のうわさ話をしている頃、当の本人はサンガで行きつけの船具商マレーネ・エンド・ジョンスミス商店に、事務長のリチャード洞口、一等航海士柳頼太らと船用品の買い付けに出ていた。甲板・機関・事務部で必要不可欠品は既にリスト化されており、備品残数の確認だけで注文書を作りメールを出せば事足りる。が、曙丸の入港に合わせて彼らの嗜好品などもそろえておいてくれる、馴染みの主人の顔を見るの事も、母港に帰ったときの彼らの楽しみなのだった。

マレーネもジョン・スミスも先代の名前で、今の主人はカズミという日系の男である。彼も一緒に店番をしているその妹も、膨れているといったいい体付きで、彼らだけで店が充填されているような印象すらある。低重力空間で不摂生を続けるところなるといふ見本のような兄妹だ。だが、カズミは体に似ず良く気が回る男で、気が良いだけで配慮の効かない妹を上手く使って、細々とだが堅実に商いを営んでいる。妹のサヤコは商品名が全く頭に入らずに頓珍漢な受け応えをする常習犯だが、数字だけは間違いが殆ど無いという特技を持っていた。つまり注文時に商品名を羅列しても要領を得ないが、品番さえ間違えなければ望み通りの品物が届くという寸法だ。

この店の間口の狭い小さな店舗では、数冊のカatalogと僅かな商品見本が並んでいるだけで、船具商という語感が持つ雑然とした印象は全くない。だが、隣接してある倉庫と来たらこれで良く棚卸しの時に在庫が合うものだと思えるくらいの惨状だから、下手に商品を陳列しようとしなのは先代の英断だったといえるかもしれない。店の大部分を占めているのは一寸古ぼけているが座り心地は満足できる応接セットと、亜空間通信波に対応した大型コンピューターだ。

「サヤコ、洞口さんと小早川さんにコーヒーを。あと、柳さんには

紅茶を頼むよ」

どつしりと仕事机に座り込んで仕事を続けていたサヤコは、カズミに催促されてから緩慢に立ち上がった。

「あ、サヤちゃん、俺もコーヒーで良いよ」

大判の写真付きカタログを取りながら柳が言うと、彼女はにっこりと笑顔を見せた。

「大した手間じゃないもの、お紅茶入れてあげるわ」

さつさとソファに座り込んで早速煙草に火を入れていた小早川が手を振った。

「サヤちゃん。ヤナちゃんに味覚なんて無いの。だから気を使わなくて良いのよ」

「そりゃ酷いなあ、徹さん。俺はグルメよ」

すかさず反論する柳に、小早川は首を振った。

「ヤナちゃんがグルメなら、世界中のコックは廃業ね。腕が泣くもの」

小早川はどうやら柳が昨日休暇を終えて帰船したとき、彼の料理を食べなかったことで根に持っているらしい。だが、母親の心尽くしの料理をたんまり食べさせられた直後で、しかも柳の嫌いな頭付きの魚だったのだから仕方ない。航海中は一食分がバランス良く構成されてパックされた、味気ないの一言に尽きる船員食を暖めて食べるだけの食事が続く。メニューは豊富なものの食感などに問題ありのあれを食べ続けるストレスに対する反動か、小早川はサンガに係留中は、何時も何かしら作って振る舞ってくれる。それは確かに有り難いのだが、家族の待つ家に帰る者は、皆、食事責めに遭っているのだ。小早川が料理をするのは手料理を押し付ける母親の居ないウォードの為なのだろうし、文句を言う気はないが、腹の容量には限界がある。

「だから、昨日徹さんの料理を遠慮したのは、腹が減ってなかったからだってば」

「嘘仰い。魚の頭が怖いだけでしょ」

柳と小早川のやり取りを聞いて、サヤコはクスクスと声を立てて笑った。

「小早川さんって、お料理もするの」

「女のたしなみ程度にね」

カタログを眺めながら嗜好品などの別枠注文をメモしていた洞口が、持っていたペンで小早川の頭を小突いた。

「お前さんの何処が女だ。ふざけとらんでさっさと仕事せんか」

小早川は一寸肩をすくめると、上腕の外側にあるポケットからボールペンを取り出すと、指の上でくるっと器用に回してみせた。

曙丸の一等航海士柳頼太はサンガと同じ様な人工衛星都市ネオシヤンガンの出身だ。そこも極東アジア国のコロニーなので教育制度などは全て地球流だが、翔虎のような金持ちや小早川のような天才には生まれついていないので、目の前にぶら下がっている地球に直接降り立ったことはない。

彼の出たネオシヤンガンの宇宙航海専門大学は、三つしかない極東アジア国立の専門大学の中でも特に船舶就職率が高く、受験生の人気も当然高いため可成りの難関校だ。船長霧島翔虎も二年先輩で同じ大学出身だ。実のところ翔虎より一つ年上なのだが、入試で失敗し兵役から逃げられなかったのだから仕方ない。三年間今と言う新人類との戦闘で過ごし、柳にしてみれば無駄な時間を奴らを破壊して過ごした。

この前の航海が殆ど終わりに近づいたとき、曙丸のオーナーである霧島運輸から業務連絡並の気軽さで、それぞれの船に『一名以上の新人を』配するようという通達が届いた時、柳にとって見れば無駄で不毛でしかなかった戦争をやはり思い出した。航海長のシェーネのように家族を失ったわけではないが、新人などという名称に代わったところで、いつ暴走して人を殺めるかもしれない機械人形に対する偏見はぬぐいがたく有る。それゆえ今度の新人積極配備に関する通達には素直に頷けない。

サヤコが入れてきたコーヒーを飲むためにペンを置いた洞口に、柳は思い切って聞いてみた。

「ところで洞口さん、例の新人の件、どう思われます」

洞口は砂糖を入れようと伸ばした手を止めて柳を見た。そして質問には答えず逆に問い返した。

「柳、お前はどう思う」

「どうって、俺は奴らとの戦争の所為で丸三年無駄にしましたしね。それに戦争では実際にこの手で幾つも破壊したし、あ、今は殺したって言うんですっけ、」

柳は律儀に言い直して続けた。

「複雑ですよ。あの時は壊れた機械を処分してるって程度の認識しか無かったし、今だって人間と同じに扱えて言われてもねえ。やっぱり機械は壊れるもんでしょ。危なくないという信頼がなきゃねえ」

「機械って言っても血も出るし、肉も軟らかいんですよ」

サヤコが見当はずれに口を挟んだ。流石にかなり嫌そうに柳は顔を顰めた。

「まあ、ね。直接やり合うと人殺しと変わらないかもな。でも、壊れて暴走して危険になった機械だって思ったから殺れたし、今だってそう思ってるさ」

「ブルータス、お前もかつて奴だな。バゲモンは連中を露骨に嫌ってるし、まあ、奥さんが殺されてるんじゃないが、おまけに一等航海士殿も廃絶主義者と来る」

廃絶主義者という否定的な語感に、ますます柳は苦い顔になった。「別に其処まで極端な思想は持ってませんよ。洞口さんこそどうなんです」

洞口は今度こそ砂糖に手を伸ばした。そして棒状の袋詰めになった砂糖を真ん中辺で折って、白い結晶が不透明のカップの底へと沈んでいくのを暫くの間見つめていた。

「俺は別に好きも嫌いも無いさ。ルナ自治区出だから戦争なんぞ係わりなかったし、当然、家族も親戚も死んじやいない。それと知って本物を見たこと無いから、どんなのかも判らない。だがな、どんな外見だろうと所詮機械仕掛けの人形だろう。すくなくとも人と同じとは思っていないな」

我が意を得たりと、柳は身を乗り出した。

「でしょう。いくら似ていてもたかが機械なんだ。連中を人間と同じとは思えないですよ。そんな奴らを仲間として認めなきゃならないんですか。百歩譲って機械と働くのは可としても、何時壊れて爆発するかもわかんないようなのと船に乗るのは御免ですよ。やつぱりロボット連中の方が信頼できる。奴らの配属、御曹司の特権で何とか免除して貰ったり出来ないんでしょうかね」

「無理ね」

突然小早川が割り込んだ。

「無理って嫌にさっぱり言うじゃないか。おまえさんだってバゲモンの奥方の知り合いだったんだろ。含むところがさっぱり無いって訳でもないんだろうが」

洞口は自分の手許のカップにスプーンを突っ込んで掻き回すという、余計なお節介をしている小早川の手を軽く叩いた。手から離れたスプーンはカップの縁に当たって、甲高い音を立てた。

「含むところはあるわよ。でも、御曹司の特権が裏目に出ることも有るのよね。今回の件については、何時もと逆。翔虎ちゃんが霧島一族だからこそ、積極配備に賛成を表明しなきゃならないの」

「どういう意味だ」

素直に聞いた洞口を見て、小早川は仕方なさそうに答えた。

「そのままよ。別に霧島だって好きであんな通達出した訳じゃないわ。政府が新人の積極雇用を実行する企業を優遇するって決めたのが最初の話。ウチの貨物の大半って何かしらね。霧島はどんな馬鹿げた命令でも聞き分けるいい子ちゃんて居るしかないわ」

其処の所に初めて思い至ったのか、洞口は吃驚して強い語調で否定した。

「ウチはずっと公共事業絡みの仕事をしてるんだぞ。お役所だって余程のことがない限り、切ったりしないだろう」

小早川は溜息をついた。

「お役所に仁義なんてないわよ。準人権を得た新人には最低限度の生活を保障しなきゃいけないでしょ。でも、戦争の所為で私たちは連中を社会から逆に締め出してしまった。お役所と来たら、人間生かしくより余程金食い虫の連中の福祉に手を焼いて、民間に尻拭いさせようって魂胆なんだから、初めっから汚いのよ。民間企業が彼らを受け入れざるを得ないように圧力かけるのなんて、どうせもう裏の計画書に載ってるわよ。同じ圧力をかけるにしても大手さんががちり手を組んでいる同盟に手を出すのは無謀だし、零細企業じゃインパクトがないから見せしめにはならない。という訳で、残念だけど霧島あたりは丁度いいの。霧島の親父さんも次期女社長もその辺は充分心得てるはずだから、今度の新人強制配備は無理を承知で押し通すでしょうね。あの翔虎ちゃんが親父さん達の苦境を知っての上で我が儘言うはず無いでしょ」

珍しく一気にまくし立てて、どうか、と問う様に洞口を見た。洞口は絶句するしかなかった。其処まで説明されてしまえば、反論する余地もなく翔虎が社の方針を受け入れざるを得ないのが明白に分かる。柳も半ば呆れたように小早川を見るしかなかった。二人に見つめられて徹二はばつが悪そうに頭をかいた。

「ま、あくまでも私見よ。でも八割方は間違っていないと思うわ。逃げる方法探すより、受け入れる覚悟をした方が、まあ、いいでしょうね」

洞口が大きく鼻を鳴らした。苗字のせいというより白人種の血の為なのだろうが、彫りが深く鼻梁が高い洞口は、鼻の穴や口が一際

大きかった。

「お前はそう言う訳だから仕方ないって割り切れるのか。俺はつまりの所、船の中でやっかいな争い事がなけりやそれでいいんだがな。小早川」

小早川は痛いところを突かれて黙り込もうとしたが、正直に白状した。

「実のところ平気でいる自信ないのよね。先生は、ああ亡くなったバゲモンの奥さんのことで、イリアナってお名前だけど」

途中から口を出せなくなっている、若手の柳に向かって説明を加えてから続ける。

「私の憧れの人だったのよね。素敵な人だったわ。仕事の先輩としても確かに尊敬していたけれど、それが無かったとしても多分、本当に好きだった。戦争になる前に頻発しだした、お国の重要機関がターゲットのテロ行為の犯人が新人連中だつて判つて相当驚かれて、それで単なる機械の暴走か、他に原因があるのかを調査してらした」

柳が今日初めて名前を知った、その女性の話をする小早川の表情は穏やかで、優しくかった。今は亡きその人を小早川がどれ程慕っていたかが、どちらかというと鈍い方の柳にもはつきりと感じられる。「細かいことは省くけど、彼女は新人達の心を認めて人に準ずる権利を与えることでしか、あの戦争を終結させることは出来ないって結論に達したわ。それで実際に『新人人権宣言』と『新人人権利条約』の草案を創られて、その精神に基づいて彼らを尊重することを約束する事で和平交渉にあたるべきだと主張なさっていたわ」

そんな才媛がああ無骨なバゲモンの奥さんというのは、ちょっとしたミステリーだね、と、柳は心の中で呟いた。小早川の話はよどみなく続く。

「戦争の舵取りをしている政治家に同調者を増やすために、先生は実際に自分の時間を削って講演とか集会開催とか色々活動なさって

たわ。私もそのお手伝いをしてたから、本当は新人容認論者の筈なんだけどね。勤めてた研究所が新人に攻撃されて、先生が亡くなつて……、それから……どう言つていいのかな、自分でも判らない」

柳は初めて聞く話に好奇心が押さえきれなく湧き起こつたが、あまりにも静かな小早川の寂しげな口調に先を促すのが躊躇われて、ただ黙つて聞いていた。それに気付いて小早川は軽く頷いて微笑み、さりげなく話題を変えた。

「洞口さんは連中と会つたこと無いんでしょ。驚くわよ。ちゃんと教育された奴は言われなきゃ区別つかないから。権利が認められて以来おでこにマーク入れなくなつたしね。さつきサヤコも言つてたけど、さわれば柔らかいし暖かいわ」

マークとは新人人権宣言以前にアンドロイドの額に刻まれた印の事で、外見上は区別が付かない人と彼らを見分ける為の有効な手段になつていた。

「全くか」

驚いて聞き返した洞口に、小早川はきっぱりという。

「全くよ」

柳も少し考えてから、保証した。

「そうか、マーキングしてないのか。きっと判らないな」

洞口は、ひときわ大きく鼻を鳴らした。

注文書を書き終えて船具商を後にした柳と洞口は、美容院に寄つてから帰ると言つた小早川と別れて二人で曙丸に戻つた。

船長事務室を覗いたが誰も居なかつたので、その足で居間に顔を出すと、予想通り翔虎達はそこだつた。統教検定間近なウオードが勉強しているので、翔虎とシェーネは、本を紐解いたりするなどして静かに過ごしている様子だつた。来週の検定を落とせば、もう一年中学生だ。流石にいつもより真剣にやっている風に見える。年度

始めからこのペースでやり込めば良いのになあと、その様子を見た柳は思う。

「ただいま戻りました」

一応敬礼して柳は居間に上がり込んだ。

「お帰り、あれ、修理屋は」

無精にも座ったまま答礼したシェーネが、一緒に出掛けた小早川が居ないのに気付き付け加えた。

「修理屋ならドッグ入りだ」

柳が一寸ふざけて答えたのに

「ああ、散髪か。相変わらず丸めてくるのかね」

と、軽口を返した。雑誌を閉じて部屋の隅に投げた翔虎も、シェーネの意見に賛成した。

「そうだな。どうせ定期メンテナンス以外の手入れしないなら短くしとけばいいのにな。洞口さん、ご苦労さま、で、柳、ちゃんとアレ頼んでくれたか」

途中で話題を変え、翔虎は猪口を傾ける手真似をしながら柳に聞く。

「大丈夫ですよ。船長の日本酒は忘れませんって。カズミが良いのを入れといてくれたそうですよ」

「それは、届くのが楽しみだな」

翔虎が心底から嬉しいという顔をした。紐靴を脱ぐのに手間取っていた洞口がやっと上がり込んできて、

「船長、消耗品等の注文終わりました。搬入は明日の午後以降は、いつでも指定していいそうです」

と、几帳面に報告し頭を下げた。事務員の洞口は甲板員の柳と違って敬礼などをする習慣はないが、十以上も年下の翔虎に敬意を払っていた。

実は洞口は初めから翔虎をその様に受け入れていた訳ではない。むしろ学卒の翔虎を嫌っていた。あのころ洞口は定年間際の前船長

の引退後その位置を占めるのは、航海長のシエーネ・リヤドだと思っていた。彼は確かに翔虎のような専門大学出ではない。見習い船員からの叩き上げで基礎学力が足りない故に、一級操船技術士の資格を取るのにこそ随分苦労した。だが、シエーネには豊富な経験に裏打ちされた確かな判断力と、物静かだが決して弱腰ではない骨の太さ。頼りがい、がある。洞口は彼こそ次期船長に相応しい人物だと思っていた。

洞口は只の事務屋である。操船の知識の欠片もなければ、ほんの二、三年仕事の片手間に勉強したぐらいで、あっさりと難関である宇宙船機関技術士の資格を得てしまうような人外魔境でもない。何年宇宙に出ている、それも恒星間航海船の乗組員という船員に憧れる者の夢である立場に居るにも係わらず、洞口には自分が船乗りだと思えない。誰にでも出来る書類業務なんて、糞喰らえ。

洞口は高等教育課程まで出ているだけで立派な学歴と思うと努力した。が、才能や経済事情等あらゆる幸運に恵まれて輝いて見える彼ら大学卒の者達に対する劣等感は拭い難くつきまとった。それ故勝手と知りつつ、苦労して経験を積み確かな腕と資格とを勝ち得た航海長を一番近しく思い、憧れで彩って尊敬していた。

年長者の霧島晃船長や、小早川が一級機関士を取得するまで乗り組んでいた前機関長ゲオルグ・カトーらが船を仕切っていたときは、それでもまだ我慢がきいた。厨房作業員を兼任する、公立の中等教育までしか受けていない雑用係も一人居た。彼はみすばらしいほどに年老いて縮んでしまった小男で、仕事は雑の一言に尽きたが、洞口にとっては自分が船の中で一番惨めな存在では無いことの証明だった。洞口は有る意味でその男に救われていたのだ。その事に気付いたのは、残念ながら洞口に事有る毎にあたられ続けた男が、曙丸を去ってからだった。

霧島翔虎。宇宙航海専門大学出の、しかも霧島運輸の社長の息子であるという許し難いほどの幸せを持っている餓鬼が、社長の従兄

弟である船長霧島晃の後任になることを約束されて乗船してくると知った。あの時身内を駆けめぐった激しい憤り。

今思い返せば、翔虎をちまちま虐めて憂さを晴らしていたあの頃は最低だった。惨めさを嫌いつつ、じつくりと舌の上で転がして味わい、苦さに酔いしれていた。他人から見ればさぞかし滑稽なものだったに違いない。

だが翔虎という若造はどんなことでも、どんな場面でも必ず良い面を探しだせるという特技を持っていた。つまり、悪意にとことん鈍感なのだ。育ちが良いからなのか、個人的な資質か定かでないが、年長者に敬意を示すことがごく自然に身に付いていて、洞口の陰険な仕打ちを全て、『霧島の息子という肩書きに遠慮せずに、物知らずな新人として鍛えてくれる、頼もしい先輩』と解釈し、実に素直に、そして誠実に敬ったのだ。船長の事務は複雑な貿易取引の流れを解さなければ、まるで迷路の森のようなものだ。貿易書類の流れは、操船に直接関係ない事柄のため、操船の専門大学では希望者のみが学習してくる教科の一つだ。商業用船舶で働くつもりだった翔虎は当然その教科を学んできてはいた。だが所詮生きた知識でないため、初めは実務とまるでかみ合わず、単純な失敗が多かった。

最初は（これだから、頭でっかちのお坊ちやまは使えないんだ）と心で貶しめる事で暴れる劣等感を宥めながらでないと翔虎と付き合う事は出来なかった。人間とは勝手なもので、同じ高学歴の持ち主でも、人生を振り出しに戻した小早川や、兵役で時間を無駄にした柳などに其処までの敵意を抱いた覚えはない。

その洞口が翔虎に好意を抱くようになった事件についてまで言及するのは蛇足に過ぎるので省くでしょうか。

洞口は無類の酒好きだ。酒が好きな癖に直ぐ潰れてしまう翔虎と違って幾ら飲んでも充分飲んだと思えない質だ。腹が膨れるまで飲んで漸く杯を下ろすことが出来る。全くの下戸らしい曙丸の紅一点リンダ・マーフィーなどは「酔わないなら飲まなくても同じじゃない

い」などと宣うが、それは了見違いというものだ。酔うということ、味わって楽しむと言うことは全く別の次元の問題だ。リンダはシェーネや小早川の喫煙習慣にも否定的見解の持ち主で、彼女に言わせれば「毒と分かって好んで口にするヤツは愚かな自殺志願者」であり、「良識をIQで制御できないなら、頭なんか捨てちまいな」ということになる。

洞口が苦手とする毒舌の持ち主、通信技師のリンダは入港時に行わなければならない作業が他の職種と違って少なくて済むため、まだ休暇から戻っていない。だが現在いい仲の船長が曙丸に居着いているのだから、どうせ休暇明けの二、三日前には戻ってくるはずだ。現実主義者で女性らしさなどからきしない、いやいや、現実的というのはそれだけで女性的なのだが、柔らかさに欠けるリンダが、同性の目で見ても相当いい男の翔虎とカップルになるのだから、全く世の中良く分らない。

それはともかく、洞口は最近では翔虎が良い酒を手に入れると必ず一緒に楽しむことにしている。翔虎は洞口と飲むと酒の減りが尋常でなくなるので敬遠している嫌いもあるが、それでも新しい銘柄を試すときは必ず声をかける。

「洞口さん、ブツが入ったら出航前にやりますか」

「いいですね。猪口でやると味がいいですし。味見には港が一番ですよ」

「味見、で、済みますかね」

若干嫌そうに翔虎が言う。

「さあ。ふふふ」

洞口の含み笑いを受けて、翔虎は溜息をついた。技術がいくら進んだ所で精密機械に単なる水が大敵なのは変わらない。航中も部屋を密閉したりすれば、重力に関して贅沢な設計になっているのでコップ状の器で飲めないこともない。だが、敢えて外宇宙で事故を起こす危険と引き替えにするほどの事もないので、仕方なく飛散防止

安全弁付きのストローカップを愛用しているのだ。といって、ストローでちまちま飲む酒は慣れこそすれ好きにはなれそうもない。

「まあ、航海中の分を残しておいて貰えれば良しとしますか」

「船長、随分諦め良いですね。腹の具合でも悪いんですか」

「いや、なに、腹じゃなくて頭がな」

「例の新人配属の件ですか」

「それもあります。でも、その話は通信部の連中が戻ってからにしましょう。彼らに変に根回しをしたって印象を持たれたくないし。でも、どうしてもその件だと思ったんですか」

洞口がそれに答えようとするのを、翔虎自身が遮って続けた。

「そうですね、今それが気になっていない人はいないでしょうね。丁度良い機会ですから言っておきますが、この件について会社の方針に逆らうつもりは僕はないです。早晩、会社の方針通り一名以上の配属を受け入れるつもりです。それぞれの個人の事情は察しますが、会社有つての安定雇用という現実を受け入れていただきたいと思っています。ああ、ウオード外さなくても良いよ。すぐ終わるから」

仕事の打ち合わせなどの時には席を外すようシェーネにしつけられているウオードが、勉強道具をしまいだしたのを見て翔虎が一旦話をとぎらせた。

「今まで何故その話、しなかったんです」

柳がその隙に割り込んでいった。途中から洞口でなくシェーネの方を向いて喋っていた翔虎が、柳と洞口が座り込んだ入り口の方に向き直った。

「新人に関してはそれぞれが、いろいろ複雑な思いを抱えていると思います。戦争が終わってまだ長い時間を経過したとは言えない現実もわきまえているつもりです。僕のように地球出身でいながら新人について何も感情が動かない方が、多分珍しいでしょう」

それから、翔虎はやはりシェーネの方に視線を戻した。

「そして、恵まれていた、のだと、思ってます。でも、今回は霧島

の存続に絡むのだと言うことを強調させて下さい。聞くまでもないと思われる方も、もしかしたらいらっしゃるかもしれませんが、でも、説明する機会を下さいますか」

柳が見た翔虎の視線の先のシェーネは、何を思うのかいつも以上に無表情で、心なし俯いたまま翔虎と目を合わせようとはしなかった。

「先ほども言いましたが、この話はやはり全員が戻ってからにしましょう。僕は部屋に戻ります。徹さんが帰られたら顔を出すように言っておいて下さい。一応彼の端末にもメッセージの入れておきますが」

翔虎はそう言いながら、尚未練げに暫くシェーネを見つめていた。そして彼から反応が得られないのを知ると、洞口に軽く会釈をし、ついでに柳の肩をポンとはたいて居間を後にしていった。

洞口と柳もシェーネのとりつく島もない態度に、顔を見合わせて合図をしたかのように部屋に戻っていった。残されたウォードは父の態度に小早川からほんの二、三日前に聞かされた話を思い出していた。本当にこの父が新人廃絶論者なのだろうか。大人達の態度はシェーネがそうであることを知らないのは自分だけなのだと確信させるものなのだろうか。では何故、父はそうなのだろう。彼が新人を嫌う理由を知りたいとウォードは思った。たしかに思ったのだが、彼にはそれを父に今聞くことが出来なかった。

第四章 就職試験

サンガには港湾施設区、商業用区、居住区に大別される。居住区には日用品や食品等を商う店や公園、娯楽施設、基礎教育課程学校などといった生活に係わるあらゆるものが雑多に存在している。維持、管理のためには整然とした町並を先に作って人を後から入れた方が良いのだろうが、人という生き物の心はそういった規制に反発してしまふらしい。強制移住期に作られたいくつも街づくりの『失敗』を積み上げた後に作られたサンガは、古い初期のコロニーに比べ随分良い意味で雑な印象で、無機質さが弱まっている。

学校や役所、公園、基幹道路などはあらかじめ機能的に配置されているが、それ以外の要素は最小単位である町毎に空間デザイナーが設計した。何処に行ってもまるで同じ印象で、地番でのみ場所を知る初期コロニーの様な不便さは全くない。しかも単身生活者のユニット団地以外は外観内装共に自由が利くので、妙な色や形の家など色々あって面白い。悪天候というものが存在しない低重力空間ならではの町並みは地上とは一味違った趣がある。

商業区や港湾施設区は機能の問題からも、必要からも整然とした箱状の区割りがされている。各区間に通じるエレベータを降りると初めは誰でもその差に軽いとまどいを覚える。港はそれでも貨物や人が流動し、数多いロボットがせわしなく動く現場のため、整然と言っても限度があるが、商業地区のよそよしさは道を行く人が動いているくらいでゆるんでくれはしない。

しかし、それは人ならばの感慨だ。霧島運輸の事務所までの地図を外部記憶装置に入れた上で、一応メモリーにも住所を置いておき、角角に示されている区画番号表示を確認しながら歩く大希は、町並みに関心など無かった。

偶にすれ違う人が彼に二度程度の注意を向けて見ていく理由も気

になつてはいるが、特に考えることでもない割り切っている。浅黒い、殆ど黒人種と言っても良い肌色によく似合う漆黒の短く切りそろえられた髪。異彩を放つ緑の瞳。自然が滅多に組み合わない配色と人工物ならではの完璧とも言える整った容姿。背筋をすっきりのばして軽やかに歩を進める姿の無駄のない動きは映像モデルのようで、ビジネス街ではあからさまに浮いていた。彼が人造物である看板を掲げていれば人の反応はもっと違っていろいろだろうが、それが無い今、彼はその華やかな外見で道行く人の興味をひきつけていた。

霧島運輸の区番と会社のロゴマーク 白丸に青い縞でキリシマらしい を見つけて大希が建物に入っていくと、受付ロボットが予め会社を送ってきたカードを提示するよう要求した。ロボット、醜い機械だ。必要な機能しか持てなかった哀れな存在。大希はカードを差し込んだ。すると、大きく九七番と書かれた球体がふわりと受け付け脇の箱から浮き出した。

「面接ご予約の大希サマですね。九七番がご案内しますのでどうぞ。案内球は大希サマの速度を感知しますのでお急ぎにならなくて結構です。ご安心下さい」

ロボットが機械的に答えると案内球は大希の右手二メートル付近に静止した。先を見るとエレベータがある。案内球は大希が歩き出すと、速度が上がるにつれ距離を開けながら先行して移動し、試しに歩をゆるめると距離を若干つめてくる。成る程、機能が限定された機械はそれなりに上手くできているものだ。

案内球が大希を連れていった部屋は、就職試験の待合室になっていた。それなりに人数がいるのだが、雑音が少なく生きた空間の気配がない。センサーを働かせると、そこに座っている者達が自分の同類であることが分かる。大希は気なしに部屋を見渡して、知った顔を見つけ近寄っていった。

「やあ、ジェイじゃないか。君も霧島受けるのか。知らなかったよ」
「大希、お前もか。知ってたら一緒に来るんだったな。いつサンガに来た」

ジェイは典型的な白人種の外見をもっている。明るい巻き毛の金髪に白い肌。

瞳はグレーがかった青。この男性型ボディ仕様の友人は、戦後に認められた新人を親に持つ第一世代仲間で、初めて大希が自己の存在を認識した人工衛星都市、新人自治区からの長い付き合いだ。

「一週間くらい前からかな。受かる自信が無い訳じゃないんだけど、ほかにも幾つか受けてるから、そっちの方の面接とかもあつてね」
「お前が自信なきや、俺なんてどうなるんだよ」

何気ない会話を二人がしていても、他の者達は何の興味も示しはしないようだ。大学ではそんなことはなかったので、大希はジェイに0.5度の小声で話しかけた。

「こいつら何か変じゃないか」

新人の聴覚はそれぞれが搭載している集音機マイクの性能によって異なるが、大部分は高性能のものを入れている。0.5度レベルの声は人には聞き取りにくいはずだが、此処にいる者達には殆ど意味無い制御だ。しかし普段から人らしさを追求するのに馴れているとついこんな態度をとってしまう。ジェイも分かるのか頷いた。

「うん、俺もね何か居心地悪くて。ちょこつと挨拶くらいしてみただが、新人同士で人型のコミュニケーションとるつもりはない、なんて言われちゃってよ」

目線でジェイは一番奥の窓際でかつちりと座る姿勢をとっている。男性型新人の一人を示した。彼もそうだが此処にいる大部分の者は椅子を与えられたから座る姿勢で待機している様で何か固い。

「なんだよそれ、感じ悪いな」

「だろ、連中自治区出らしいぞ。俺達も昔はああだったっけ」

「さあ、どうかな。でも人型以外のコミュニケーション法なんて知ってるか」

ごく当然の疑問に、ジェイも軽く肩をすくめてみせた。

「すくなくとも、ジ・アースじゃ習わなかったよな」

大希はもう一度周囲を窺った。この部屋にいる新人の九割までが自分たちの会話を聞き取れる筈なのに、何の反応もない。それは大希達にとって不可解だった。悪口を堂々と言っているに等しいのだから、怒る奴が一体位居てもいいだろう。

「あれ、ジェイそれ新品じゃないか」

ジェイが傍らに置いている手提げ鞆型の外部記憶装置が先月発売になったばかりの最新型に変わっているのに気付いて、大希が羨ましそうみた。

「わははは、気付いたか。いいだろう」

ジェイは新しい製品が発売されるとすぐ買ったがる。初めは意識的に取り入れた個性なのだろうが、今ではすっかり板に付いている。「使い勝手はどう」

「快適、快適。反応が良いし容量が大きい割にこのサイズだろ」

「お前ね、いい加減に図書館背負って歩くような趣味卒業しろよ。普通に使う分なら僕くらいので十分なはずだよ」

と、大希は胸の内ポケットから手帳サイズの記憶装置を出してみせた。

「大希と違って俺は小心者だからね。そうそう思い切りよく要らないデータと割り切って消せないよ」

ジェイの言うことも、もつともだ　と大希は思う。

新人というモノには自然に忘れるという都合のいい機能はない。全ての事象は全て記憶しておくか、存在すらを抹消してしまうか、二つに一つだ。確かに自分たちの人工知能はパソコンに代表される計算様式は　それが直列形式だろうと列分散処理（Parallel Distributed Processing）PDPで

あろうと　演算型のそれではない。彼らも知能を持っていると錯覚させるだけの能力を持つているが、彼らはいかなる小さなステップも計算することで成り立っている。

彼らのそれは違う。『記憶による予測の枠組み』によって時間軸に則った予測を立て、実際のできごととの誤差を学習することによって行動をとっていくのだ。自分たちは計算はしない。

知能を持つ唯一の存在である人間の脳新皮質の人の持つ多様性を模倣する可能性を開拓したそれは、曖昧さの概念を彼らに与るのみならず、個として確立するきっかけをもたらした。つまり人工シナプスの機能不全事故で一つの鎖が切れたとき、機能不全に陥って最悪の場合活動停止してしまうという危険から解放されたのだ。機能停止に至ったとき必要な第三者、つまり切れた鎖を繋げるプログラムを入力してくれる人から、解放されたのだ。

このAI（人工知能）は、雑音や歪みに阻害された認識対象物を認知するとか、複雑な類似性を許容できるという優れた特徴を持つ。そして個としての自己でなく、社会性を持った自己を、道徳などと言った価値観に照らし合わせて導くことすら可能にした。つまり、人間の子供が学習する如くに成長する手段を私達にもたらしたのだ。たとえシリコン製の神経細胞だったとしても、それらが頭部でなく腹部に収められているとしても、人の脳と同じ働きをするレプリカなのだ。

そして、人工シナプス鎖は、人の持つ有機的シナプス結合ほど脆くはない。つまり経験した全ての事象をデータベースに学習し続けることが可能なのだ。だが、いくら理論的に無限大の記憶能力を保持していようと、知覚した全ての情報を事細かに認識しておくことはナンセンスだ。目の前の空間一立方メートル中のイエダニの数など、数えたところで覚えている意味はない。

確かに、人造物である彼らが搭載しているあらゆるセンサーが、人間の知覚レベルほど貧弱なものであれば、腹の中に収まっている

人工脳の容量でも事足りるだろう。しかし彼らが持たされている入力器官の緻密さを処理するには、成人の頭部ほどの容積に納まるほど小型にするには無理がある。

体を動かすということに関わる機械も、繊細にすぎれば実用に耐えられないほどに脆くなってしまう。記憶媒体を頭部からはみ出させたところで限界は存在する。もし、彼ら体を構成し動かしていく機械の全てがもっと小型化すれば、経験を捨てていく作業自体が不要になる日がくるかもしれない。けれど今の技術では無理だ。できないこともないけれど、脆さと引き替えにするのとどちらを選ぶのが順当かという単純な問題に帰結していく。

行動する体に閉じ込められて個として完結することを手に入れた故に、彼らは無限に持ちうるはずの記憶を制限していく方式を採った。人の忘却は有機シナプスのもろさによって簡単に引き起こされるが、経験そのものは決して無くならない。経験した記憶が入っている場所までの道筋が失われるだけだ。物理的限界がある故に、選択して捨てていく。それもナノ秒単位という速度の時間で……。

新人の意識的な忘却は、ひとたび実行してしまえば永遠に失われてしまう。箱型コンピュータの時代と経過は違うが結果は同じだ。ひとたび消去を実行してしまえば、人間が何かに関連する事象に遭遇したとき、鮮やかに記憶を甦えらせるらしい『思い出す』という行為は理論的に不可能だ。だが実際には『思い出す』こともあるらしい。それは科学的に言って『思い出す』という現象とは別物らしい。それは自分たちが普段完璧でない情報を『認識してあるパターンに照らして予測を立て』周囲を認知している如くに、矛盾する事柄に合致した記憶を作り出すために、その時に『創造された記憶』だというのだ。

もつとも、そういった制御の全てを、人造物といえども普段から常に表層意識で把握しているわけではない。一つの事象を認識した細部ネットワーク単位で『要らない』と判断したときに、消去する前に念のため取っておきたいというのは一種の『人情』といったも

のだ。そのために利用される外部記憶装置は、人間の『覚え書き』の様なもので、几帳面に何でもかんでも記す者と全く頓着しない者とバリエーションに富んでいる。

友人のジェイと話することは、彼イコール大希が『意識』して行っていることだ。この思考意識レベルをメモリー単位と呼ぶ。このメモリー単位が増えると、人と話ながら自分の次の話題に繋がる思考を走らせたり、本を読みながら要約文を作成できたりといったことが、可能になってくる。幾つものメモリー単位を駆使することが、『多重思考』と呼ばれるコミュニケーション上必須の技術なのだが、これは経験を増やして鍛え上げることではしか獲得できない能力だ。

「小心じゃなくて慎重なんだろう、そう言うことにしておけ。あれ、これ重くないか」

持ってみて、大希は予測された以上の重さに驚く。

「別に、負担になるほどじゃないさ。これが重いなら大希も一寸パワーアップを考えた方が良くないじゃないか。俺程まで病気になるほどのこともないだろうけど」

大希は笑った。

「だめだめ、ボディ仕様の変更に家の親、すごく煩いんだよ」

「そんなものかね、家の親は自分の子供の性能は良い方がいいみたいだよ」

「それが、俺のは自分と同じ様な部品が付いてる方が安心みたいだ。ま、一人前に稼げるようになるまでは仕方ないな。上手く就職できたら一寸はお洒落もしてみるさ」

そんな「下らない会話」をしているとき、ドアが開いて人が入ってきた。とたん、部屋が生き返った。一寸した身じろぎや息遣い、手荷物を弄る微かな音やそれぞれに柔らかな座っている姿勢。その唐突な変わり身の早さに大希とジェイは啞然としてお互いを見やっ
た。彼らはどこか妙だ。

筆記試験には驚いた。てっきりプリントすればいいと思っていた大希はアテが外れた。紙に直接文字を書くといった繊細な指を制御する作業は馴れていないとかなり難しい。その証拠に筆圧を誤って紙を破いてしまうヤツなんかもいたりする。問題用紙も手書きの文字をコピーしたものだ。これも印字文字を認識する数倍の難しさだ。わざとなのか単にミスなのか、誤字もあるし、どうやら全ての設問がどうやら違う人の手書きによるようだ。この霧島運輸の新人用の入試問題を作った者は、随分どうやったら自分たちの能力が露骨に差別化されるかに精通している。筆記試験の部屋に通されたとき、各席に用意された筆記用具箱に鉛筆と消しゴム、小刀が入っているのを見つけて驚いた。いまだきこんなものよく見つけてきたものだ。数人はそれを見ただけでだけで帰っていった。大希もせっかく印字が綺麗なハンドブリンタを新調したのに無駄になってしまった。中の設問も一風変わっていた。

『当社を受験した理由は何ですか』はまだ分かるが、『最終面接まで行ったにもかかわらず不合格になった場合、霧島に関する情報をどのように整理しますか』とか、『知らない人に会いました。彼は自分のことを良く知っているようです。どうやら記憶から細部ネットワーク単位で消去しきってしまった人物と思えます。どのように対処しますか』など、自分たちが記憶を作っていく過程に係わる質問が多い。

鉛筆を置いたとき、大希はすっかり自信が無くなっていた。退室するときも今までになく自分の答えが正しかったのかどうか、確信が持てなかった。

「難しかったな。悩んだぞ」

大希が先に歩くジェイをつかまえて話しかけると、彼もお手上げの仕草をして頷いた。

「ハンド新しくしてから文字なんか書いてないからな。ひでえ字だし、おまけに一寸やぶいちゃった」

「破いたのはお前さんだけじゃないだろ。結構音してたからな」

「確かにね。でも参った。記憶形成パターンの質問が多かったから」

「あ、お前もそう思うか。他の会社と全然違ったものな。あーあ、疲れた」

「俺も」

そんな会話をしながら、大希はこの問題をつくった人間に興味が湧き出るのを感じていた。その人は記憶を形成していく判断に、自分たちの個性を見い出してくれる人である予感がする。自分たちの先代が壊してしまった人と信頼関係を、そういう人と新しく築けるならば、どんなに嬉しい事だろう。これは絶対に分析創造した感情じゃない。

人事担当の岡崎は呆れていた。これほど露骨に個体別の性能差が見られるとは思っていなかった。以前事務採用の時の試験問題は殆ど似たような答えに、同じ様な知識レベルで、採用の決定は結局面接に頼らざるを得なかった。しかも、その結果採用された新人は与えられた仕事を要求通りにこなすだけだった。居て、仕事をしているだけなのだ。回りも彼らを人として扱っていないし、彼らもそれで構わないようだ。外見は全くの人だが、戦争の時に接した時に感じた、あの感じが希薄なのだ。あの感じを言葉で説明するのは難しい。あれらには、人と言われれば、そうかもしれないと思わせる何かがあった。だが、この連中は操り人形が見せかけの人を演じているだけと等しい別の何か……を感じさせた。

身近に接することで逆に混乱しているというのが岡崎の実感だ。本社から長期滞在中の霧島松姫専務の特別命令で、あの小早川が「本船配属新人の採用試験特別担当兼相談役」という、やけに長つたらしい肩書きを下げてきたのがわずか三日前。可成りの変人だと聞いていた元死人の彼は、前評判通りに企業の管理職とはほど遠い身なりで岡崎を不快にさせた。松姫の説得を受けて協力を承知したのならそれなりの外見を整えてくるのが先じゃないかと思ったのだ。

岡崎の片腕の杉田も、小早川のやり方に疑問を抱いていたようだが、この結果を見て小早川を認めざるを得ないのが不満なのか憚然としている。杉田は同年輩の小早川と自分の何処が違うのか、納得いかないようだ。

「貸与されたものを丁寧に扱えないのは、それだけで基本訓練がなっていない証拠ですね。これとこれ、あと、あそこ、んー、結構ありますね。筆記用具を片付けていない者は私なら即落とします。貸与されたものは自分の持ち物より大切に扱うというのは、人間の基本ですから。あら、これは印字されてますね。指定された制約を無視するのも好ましくありません。彼もいくら解答が完璧でも頂けません。企業に必要なのは制限の中で能力を発揮できる人で、常に最善と思われる方法を創意工夫する人ではありません。そうですよね」

いやにきつぱりと言い切って、彼は個別フォルダを抱えている先日採用された新人のケイに指示して、それを仕分けするよう指示した。

「でも、小早川さんは片付けてから出るように指示なさいませんかしたわ」

いままで岡崎達に質問の一つすらしたことのないケイが、そう反論したのに岡崎は驚いていた。ケイは小早川の指示通り、良・可・不可に個人毎に作られた紙ばさみを分けながらも不満そう見える。彼らの表情が見える気がするのも初めてのことだ。

「何変なこと言ってるの。ケイあなた達は人なのでしょう。ロボットと同じに扱って欲しいんならそう申請してそれなりの扱いに殉じる事ね。基本的な生活習慣はいちいち指示される様な事ではないわ誰だって礼儀を覚えてから社会に出る。基本以前の事だわ。ロボットに仕事を譲るならそうなさい。彼らなら命令されたとおりにしか動かないけど、反抗はしないから、その分人には有り難いの」

いくら相手が新人とはいえ、その露骨な断言ぶりに岡崎ですら良

い気はしない。ケイも不快極まりないといった表情を見せている。

「随分私達を差別なさるんですね。ご存じでしょうけれど私達に文字を書く習慣はありませんわ。見当はずれな要求には、従う義務は無いと思います」

珍しくケイが食い下がっている。その反応が小早川には嬉しいのか、どこことなく上機嫌そうになっていた。

「ケイ、私は文字の上手い下手だの、筆記具とプリンターのどちらが優れているとか、そんなことを論じているつもりはないのよ。岡崎さんには説明していますけれど、私は経験の薄いことを要求された場合、どのように反応するか、人と協調していく素養が有るのかを見たくてこのような試験を提案しました。文字の上手い下手に係わらず、どの位指先の制御をものに行っているかも、道具の使い方を見れば一目瞭然です。人と生活していけば、嫌でも人の書いた癖字を識別していかなければならないし、人が冒す当然の過ちを有る程度許容することも大切です。間違った文字が書かれていた場合、前後の文章から判断して正解を推測することも必要ですし、それを勝手に察しては答えを読み違える場合は、確認するという習慣付けも当然行つて欲しい。そう言ったことを主眼とした試験です。あなた方に記憶の精度を確認する筆記試験は必要ないでしょう。あなたは決してデータを自然発生的には忘れない。今知らなくても、必要な知識はディスクの二、三枚も記憶して貰えば済むこと。でも、複雑な事象から最善の道を選んでいく過程や、知識を使いこなす訓練、それだけは、あなた達が自ら判断して日常行っている個性だと私は思うの」

端から見ても小早川は至極丁寧にケイに説明をしている。彼女の立場で小早川の仕事に注文を付けるのは筋違いであるから、彼は無視をしても良いのだ。

「わかりません。小早川さん、個性が何の役に立つんですか。仕事が出来出来ないに係わらない事じゃないですか。友人を選ぶとい

うレベルでない今回のような場合は、あくまで能力で選別するべきです」

ケイがあくまで反対の態度を崩さないことに、そろそろ小早川が怒るのではないかと予想した岡崎の意に反して、彼は軽く頷いてケイを肯定した。

「良い反応だわケイ。そうやって自らの意識を疑問にする訓練を怠らない事ね。いい、あなた達はまだ人じゃない。よく覚えておいて人になるには出来ることと出来ないことを区別することより、好きなことと嫌いなことを、するべき事とするべきでない事に敷衍させて行動を決定していく訓練を徹底的にする方が有効だわ」

「私が人じゃないと仰るのですか。小早川さんそれは差別用語です」ケイはあくまで些末に拘った。彼女の反応に小早川は一寸苦笑した。

「人じゃ無いというのは失言だったわ。謝罪します。そうね、あなたはまだ子供だわって所が適当な表現かしら。全く別冊三には苦勞させられるわ。差別が存在するのを規制できないから言葉を規制するんでしょうけど、言葉が使えなければ論議もできない。臭いものに蓋じゃ事態は改善されないのにな」

小早川が言うとケイは首を振った。

「小早川さんは何を仰っているのですか。もっと理論的に話を組み立てて下さらないと分かりませんわ」

「分からないって事も良いことだわ。分からない思いに問いかけを続ければ、心が見えるかもしれないでしょう。心はあなただけのものよケイ。あなた達の先世代の新人達が三原則を敢えて侵したのは何故かしらね。抑圧されることに耐えられないほどの魂を持ち得たからこそ、自由を求めたのではなかったかしら。皮肉なものね。勝ち取った自由が魂を育てる環境を失わせ、あなた達のような新人として未熟な者達を造ってしまった。あなた達新世代の新人が今の社会で上手くやっていけるのか、私はとても心配だわ。それに、あなた達のようなレベルにしか次世代を育てられなかった新人自治区

の政策もとても不安」

「私、そんなに酷く低レベルですか」

小さな声でそう言ったケイが余りにも人らしくて、岡崎は驚いた。ついおとといまで、彼女がこんな風に反応したのを見たことはなかった。

「自信を持つていいわ、ケイ。あなたの作業能力のレベルは一級よ。仕事をそつなくこなすだけなら問題ないわ。私が言っているのは、人としての心の成長の余地がかなりあるって事。そしてそれなくして、人社会を共に歩いていくことは難しいと言うこと、それだけよ。さて、雑談はお終い。仕事進めましょう」

ケイが小早川に促されて仕事に戻る。表情は幾分強張って見えるが、それでも作業を進める手つきに乱れはない。岡崎にはそれが新人が機械に過ぎない証拠のように思われてならなかった。

* * *

その日の夕方、午後に行われた一次の集団面接の結果を検討している小早川と杉田を残し松姫の部屋に赴いた岡崎は、彼女にこう語った。

「たしかに彼は新人の事を知りぬいている感じでした。新人の雇用を続けて行くなら彼を是非人事に配属して貰いたいですね。彼の新人に対する対応を見ると、自分たちも新人達もお互い相手と接する訓練が足りないのを思い知らされます。先に配属されていたケイなどは、この二日ほどで見違えるほどです。小早川は彼女を助手に使用しながら、同時に彼女の意識を訓練している様にすら見えます」

松姫は末の弟、翔虎と一緒に来た小早川という不思議な印象を持つ男の事を思い出していた。

私には、新人をどう言う資格は有りません。

そんな私にご用と伺ったので、参上しましたの。それに、あれから十年近く経って、人としての彼らがどんな風な道を辿っているのかに、野次馬的な興味もありますしね。

それに、翔虎ちゃんがとびきりの人材を見繕って欲しいって我が儘言うし。

冗談めかして微笑んだ、彼の瞳は決して笑っていないかった。柔らかい笑顔に全ての表情を隠す男、という翔虎の評価を聞いていなければ見逃してしまっていたかもしれないが、其処には間違いなく苦痛の色のようなものが見て取れた。そしてそれを制御して微笑んで語れる強さに、松姫は初対面の者には滅多に感じることもない好意を抱いた。ことさら軽薄な服装も、松姫の嫌う喫煙習慣も韜晦の手段とは思えない。

重役室のやたらと重厚に出来ている家具も、松姫が座ると華奢に見える。執務机でなく応接セットのソファに腰掛けて、足を組んでコーヒーを飲んでいた松姫は、立ったまま報告し始めた岡崎に、とりあえず座るようにと顎で示して見せた。

「そう、今回の採用試験を仕切らせてみることで、彼の新人に対する考え方を見たいというのは話してあるわね。そちらの方はどう」

「私自身が新人に対する知識不足で心許ないのですが、彼は新人廃絶論者では少なくともないですね。ただ、人との係わり合いが少なかつた戦後の新人、つまり我々が採用しようと思っている新卒に対する評価は低そうです。人の条件の心が未成熟な内は人でないというような発言をしていましたから」

「では、ドクターは新人を人だと思っているのね」

「ですから、其処までは断言しかねます。ただ、彼は新人の能力を評価する方法に関しては流石に専門だけあつて、いろいろなアイデアを持っているようです。文字通りの筆記試験で協調性や生活習慣を見るなんて我々には思いつきませんからね。今回も前の事務職採

用時の試験問題を使うつもりだったのですが……」

松姫は軽く頷いた。

「岡崎さんは新人については専門外ですから、そっちはこの際、彼に主導させて見て下さい。貴方達の職域に横紙を挟んだって言う苦情は、ドクター小早川にでなく私に頼むわ。引き続き貴方にはドクター小早川の評価をお願いします。スーパージーニアスを査定する機会なんて滅多になくてよ」

岡崎は松姫の最後の軽口には素直に同意できなかった。

「二度と無くて結構ですよ」

応えながら岡崎は松姫の事務室の壁に付けられた大型モニターに写されている地上の景色にしばし見入った。本当に生きている森の映像だった。夜の黒々と盛り上がる山かとおぼしき印象のそれを覆っている天蓋は、ぼやけた穴のように瞬く星で彩られている。その煌きはどこか優しく、見るものに何かをささやきかけてくるかのようだ。岡崎たち宇宙しか知らない世代の人間が当たり前と思っていた、ただ威圧的なまでに光彩を放ち続けて厳然と存在する、揺るがない光の塊の星と全く別の顔をしていた。

岡崎が人事事務室に戻ると、椅子の背に体重をかけてのけぞらせ煙突になっていた小早川が岡崎の方を見もせずと言った。

「彼と、こっちの彼、この二人は抜いという」

もともとひげが濃い質なのか薄汚れて見える顔は夕方の男の顔で、ますます小早川の女言葉が似合わなくなっていた。

「抜いとくつてのは、完全に見込みなしって事ですか」

杉田が言ったのに、ふっと煙を一気に噴きだした煙突は、煙の元を無造作にポケットに押し込んで岡崎をぎよっとさせた。

「熱くないんですか」

「スペースジャケット地よ。別に煙草の火くらいじゃ熱くないわよ」
岡崎の代わりに質問してくれた杉田に小早川は答えて、新しい煙草を取り出した。

「でも汚いですよ。灰皿くらいそこに有るじゃないですか」
「いいわよ、面倒くさい」

小早川のヘビースモーカーぶりは喫煙習慣を持つものがない人事室を閉口させた。彼が来た二日目には、彼の机を空気清浄機の真下に移動させ、観葉植物の鉢でバリケードを築く方策が採られ、苦情を言う他の社員となんとか折り合いがついた。

「この二人は二次面接をしなくて良いということかい？」

岡崎は小早川の机に近寄って彼が指し示した書類挟みを手に取った。

「そうよ、杉田さんが言ったのと逆の意味でだけどね」
「は、逆ですか」

小早川は背を起こすと頷いた。

「この二人は特別の訓練を課さなくても人とやっていけるわ。大したものよ。さすがジ・アースでしごかれてきたところね。感情発生レベルにはあと数歩つてところだけれど、殆ど総合行動を必要としないレベルにまでは達していますね」

「書類と筆記、集団面接だけで分かりますか」

「ちゃんと案内球内蔵のビデオを再生して見てますよ。彼らは人として行動することに馴れていますし、筆記の内容を見ても自分の価値観と照らして行動を決める習慣を持っています。個人的な希望を言うなら、曙丸にはこの二人の内どちらかを配属して貰いたいですね」

岡崎はファイルの表紙を見た。大希とジェイ。彼らは個人名しか持たない。他に識別番号を持つが、普通の呼称には用いられない。

「総合行動を必要としないという意味がわからないが」

小早川はふつと溜息をついた。

「たしかに、一般には総合行動は新人の行動の全てを律すると思われてますね。でも、それは誤った理解です。新人は私達と違い幼児期の外見を持ちません。ですから、人は生まれたばかりの個体であつても、大人と同じレベルの行動を要求しちゃうんです。彼らが自分の意志で自分の行動を決められるようになるまで、上手く大人の振りをするための手段が本来の総合行動です。総合行動の規範の中でしか行動が決められない内は彼らは実はまだ子供なんです。私の率直な感想を言わせていただけるなら、新人自治区の教育制度は相当拙いですよ。もしかしたら今の内に何とかしないと、次の火種になりかねませんね」

「火種……、という和前の戦争のような、ということですか」

「そうね、最悪そうなるかも。尤も私には関係ないけれど」

岡崎は戦争の可能性を示唆した直後の、その投げ遣りな口調に一瞬腹が立った。だが、小早川の疲れ切ったような表情に気付いて、彼が口ほどにどうでも良いと割り切っていないことが察せられた。小早川は思うところがあると饒舌になる質なのか、岡崎のそう言った様子に気付くこともなく続けた。

「自治区の教育方法はどうか、総合行動は愚かな人にレベルを合わせてやるための下らない習慣としか思っていない節があるわ。これだけの人数を短時間見ただけじゃ何とも言えないけど、もしかしたら新人高等思想とでも名付けられそうな狂信主義台頭の兆しかもしれない。人ってね、複雑で難解な問題に直面すると、出口の見えない抑圧された環境に閉じこめられるとかすると、単純明快な答えを与えてくれるものを盲信するってやっかいな性質があるの。古い話だけど、産業革命以降の物質至上主義社会で個を失いかけたひとが、自由を求める代わりにヒトラーの全体主義に救いを見いだしたり、環境大破局前に横行したヒステリックな新興宗教に人が集まったりしたのとか、良い例かしら。自分が人に差別される理由を悩むより、自分たちの方を優秀として人を見下すのを良しとする方が遙かに単純で明快。これ、怖いわよ。連中人を見下しはじめてるん

じゃないかしら」

小早川の断言に、知らず岡崎はぞつとした。

「一体何時からこんな事になっていたのかしら。自治区の指導者は何故次世代の者をそんな風に育てたのかしら。分からないわ」

この二日間、まるで迷うことなど知らないかのように行動していた小早川が、机に両肘をついて頭を抱えんばかりにしているのが、如何に彼がこの事態を重大視しているのかを物語っていた。

「自治区なんてものを作って彼らを隔離したのがそもそも間違っていたのかもね。私が昔、新人権利運動に係わっていたときに、彼らに感じた人らしさを持ったものは残念ながいなかったわ。悪いけど、あの中で人同士がどうしても密着せざるを得ない外宇宙の長期航海で檻褻を出不さずに済みそうなのは、この二人位しか見つからなかったわ」

杉田が不満そうに言った。

「あなたは天才らしいですから予言もできるのかもしれませんがね、あれしきの短い時間で彼らの本質を掴めるとは思えませんね。会社は新人を採用しなきゃならないし、全船に配属させる人数は雇うつもりでいる。二人じゃ話にもならない」

小早川は杉田を見ず、額の前で組んだ手に顔を埋めて言った。

「嫌味をいわないでよ。私だって霧島の立場は分かっているつもりよ。だからこそもう二度と新人に係わらないと決めていたのに、松姫さんの申し出を受けたんだわ。でもね、人を見下す機械と馴れ合える心の広い船乗りなんて、そうそう居やしないわよ。明日の面接じゃまだそれ程酷くないのを選ばなきゃねならないし、彼らを本船に配属する前にもう一度総合行動を含めた研修をしなければならぬと思うわ。これについても明日までに意見書をまとめるので岡崎さんから松姫さんに説明して下さい」

岡崎の秘書の及川が呆れた。

「小早川さん、一昨日はテスト問題と面接設問事項をまとめてらし

て、昨日は新人採用マニュアル草案を作られてきて、今日配属前の研修を提案なさるための意見書なんて、いくら何でも無茶ですね。

お帰りになっても全然やすまれていないのじゃないですか」

心配そうな及川の口調で、岡崎は初めて小早川が非常に疲れて見えるのは、今日の新人との面接で精神的に参っているからだけではないのに思い当たった。

「商業区内のビジネスホテルお取りしましょうか。移動時間が節約できる分、すこしお休みになる時間がとれますわ」

及川に微笑みかけて小早川が首を振った。

「ありがとう。でも曙丸の出航が明後日の十八時にですから、ほかに色々やらなきゃならないこともあるの……。本職の方の曙丸の仕事を疎かにするつもりはないので帰ります。もちろん、引き受けた以上こちらの仕事も、私で出来る限りのお手伝いはしたいと思っています。大丈夫、一週間くらいなら無理は利きますから」

そう言って、小早川はちよつと微笑んだ。

「でも正直早く離れたいわね。私は精神的に柔だから人の将来を左右するような仕事より、船の整備をしてるほうが向いてるってこと、つくづく分かったわ」

次の煙草に火を入れて帰り支度を始めた小早川を及川が心配そうに窺って、不安を訴えるように岡崎を見た。岡崎は気付かない振りをして自分の席に戻った。小早川が何か重大な危険をはらむ問題を示唆したのは分かるのだが、彼の蕩々とした話はあつという間に流れ去ってしまい、岡崎には明確に把握できていなかった。新人のこと、人のこと、どうやら考えなければならぬことが沢山ありそうだ。

第五章 一度、宇宙に

ドッグで船体保全作業をする整備班のチーフエンジニア、ゲリック・ガイバーはメンテナンス作業後の動作テストを曙丸のオペレーションルームで監督していた。となりに陣取った、本船の機関長小早川が溜息混じりの欠伸を器用にかみ殺したのが分かった。それを見とがめてガイバーが眉を顰めたとき、かるく頭を降った小早川と丁度視線があってしまい 彼は、ばつが悪そうに苦笑した。

「ご免なさいね、こんな妙な時間に付き合わせてるのに」

「別に妙な時間でもないさ。港は二十四時間無休だからね。徹さんこそ疲れてるんじゃないか。聞いたぞ、例の新人雇用の件で、事務所の方も行ってるんだって」

ゲリックが勤める宇宙船整備会社は、霧島運輸と系列でも、兄弟でもない。取引銀行さえ全く別の組織である。小早川が商業区の霧島ビルに通いだしたのはたかがこの二、三日、小早川はゲリックの早耳に呆れた。

「まあね。でもいやだ、そんな噂もうでてるの」

「取り敢えずの最大関心事項だからな。霧島さんが何匹の新人を船によこすのか、お宅らがどうするのか。それに徹さんは目立つからなあ。お前さんが毎日商業区に通ってりゃ、そりゃ誰でも気になるだろ。噂なんてどこからでも漏れてくるさ。これで妙なのが配属されたら、苦情は徹さんの所行きつて訳か。霧島さんも考えてら」

「いやね、それじゃ私が可哀想じゃない」

いつになく疲れてみえる小早川に、翔虎も若干の不安を覚えてはいた。だが、テストに立ち会っている翔虎には、動力機関の細かい仕組みまでは分からないため、全ての計器が正常に作動しているかどうかまで判断できない。こればかりは機関長の立ち会いが制度上も実務上も不可欠で、曙丸の動力機関の責任者である小早川抜きに

は行えない。

「ああ、ごめんなさい。今のもう一回見せて。見落としちゃったわ」
珍しく小早川が情け無いことを言う。ゲーリックは作業員にもう一度するように指示しながら、翔虎を横目で見て、大丈夫かと問うように小早川を軽く指さした。翔虎も気にはなっていたが、これを小早川抜きではできないし、日程的にも先延ばしは無理だ。よって大丈夫だと保証するように頷いてみせるしかなかった。

「オッケー。正常数値内確認しました。次行つて」

二人を見もせずにモニターを凝視して小早川が言ったのに、翔虎は少し安心し、自分も細かいことは分からないにせよ正常範囲である緑色の表示がされていることだけ確認し、チェックリストに印を入れた。

短くはない時間、地道な作業を続け、チェック項目全ての確認がおわった。

「全チェック項目、確認しました。丁寧な作業有り難うございました」

と、いつものように言って　小早川はその勢いで操作パネル上に突っ伏した。

「もう駄目、眠い。翔虎ちゃんこのまま三十分仮眠取らせて」

というなり、そのまま動かなくなってしまった。すぐ寝息に変わったのを合図にゲーリックが翔虎を睨んだ。

「どういふつもりかわからんが、部下の健康管理も船長の仕事だぞ」
確かに正論だ。小早川が松姫の依頼を受けるとは思わず、事務所に同行したのがそもそも間違いだった。あの時はただ大好きな長姉に、自分の自慢の友人を見せたいというそれだけのつもりだった。『専属の担当ではなく、相談役でなら』と彼が言ったのには、自分が一番驚いたのだ。曙丸の中でさえ小早川は手抜きと言うことに無縁なのに、と一抹の不安がよぎったものの、敢えて止めなかったの

は機関士小早川でなく、スーパージーニアスと呼ばれたもう一人の彼に、好奇心が有ったからではないと言い切る自信が、今の翔虎にはない。

彼の第一印象は、確かに妙な言葉遣いをする怪しげな男に過ぎない。だが、すこしでも付き合えば彼の最大の特徴が、完璧志向だという事に尽きるのが分かる。なやかな言葉使いで当然誤解されやすいのだが、彼がゲイでないことは男の恋人がいないことから見ても明白だ。しかも時折垣間見せる図太いまでのタフさには、小柄であることをさっ引いてお釣りが来るくらい、彼が頑丈な男であることを証明している。

けれど出航まで一週間を切っていて、ただでさえ一番忙しい筈なのだ。小早川が『丁度採用試験が有るならそれだけでも協力しましょう』と言ったとき、やはり無理だとストップをかけるか、自分が松姫に断るべきだったのだ。

「分かってます。彼にも限度があるのは分かっている筈なんですがつい、万能選手だって錯覚があつてしまつて。事務仕事なんて片手間にこなせるんだらうなんて思つちゃつて。甘かつたですね。こんなに彼の負担になると分かっていたら許可しなかつたんですが」

「万能選手に思えるか。無理もないな、専門学校も出てない門外漢の癖に一、二年でこんなごつつい機械を一応扱えるようになるバケモンだからな。奴さん、今じゃ俺が知つてる機関士の中でも腕つきつて言つて良い位に熟練してるしなあ。まだ十年にもならないだろ、引退しちまつた晃さんがこいつに惚れ込んだのも分かるよ」

「でも小父さんは彼の機関士の腕にだけ惚れてたんじゃないですよ」
ゲーリックは豪快に翔虎の背中をどやしつけた。

「晃さんとの付き合いは悪いが俺の方が長いんだぞ。いまさらお前さんに講釈して貰おうなんざ思つたらんね」

ゲーリックは、翔虎がサインしたチェックリストを自分が作成した同じ様な書類と交換して、軽く手を挙げて挨拶の代わりにする

と、

「徹さんにあまり無理させるなよ」

と、念を押すように言いおいて、コントロールルームから出ていった。無理させるなよ　か。小早川は一見暢気そうな雰囲気身をにつけていて、共にいるものにそれと気付かせることは少ないが、改めて考えると手持ちぶさたにしていたり、さぼってぐうたらしているのを見たことがある者は少ないはずだ。曙丸に乗り組んで以来、断固として休息を排除しているかに見える小早川を良く知る者は、皆一様に彼の底知れぬタフネスぶりに舌を巻いている。

外の映像を結んでいるモニターを通して、ゲーリックと現場作業をしていた部下達が合流しカートに乗り込むのがみえた。心もち大型のカートが走り去るのを見送ってから、深く息を吐いて、潰れている徹二を見る。と、その姿に思わず苦笑した。床にずり落ちる寸前まで体勢が崩れているのに、器用に机の角にとまっているのだ。あの姿勢じゃ体が休まるどころか、起きたときは筋肉が強張ってしまっているだろう。このまま放っておくか、起こそうか一寸考えて翔虎はやはり部屋に連れていく方が正解だと思い、ためらいがちに小早川に近寄りそつと手を延ばした。

* * *

夢を見ていた。気付いた時点で夢というのが分かる程、何度も見た、何度も忘却という癒しを阻害し、己が苦痛を感じねばならないことを思い出させる嫌な夢。気付いたとたん、ああ自分は疲れているんだという、妙な自己分析が出来てしまう。それ程になじみ深いこれにおそわれるときは精神的に参っているときに限られていると気付いたのも又、随分昔のことだ。

行ってはいけない。

叫びたかった。だが、何をしてもこの夢を止める手段はないのだ。

過ぎ去って戻らない時間をやり直す術がない以上、己が犯した罪から逃れることは出来ないのだ。しかも、悪夢に苦しんだところで、償いにすらならないのだ。あまりにも、重い罪。だから、見るしかない。

爆発直後の崩れかけた建物は、どこからわいてきたのか埃が渦巻き、視界も悪い。目を細めているのだろうか、全てが見難い。どこだ、連中は。軍の奴等や警察が到着する前にやっておかなければならぬのだ。あれが残ってしまえば、自分がやったことは全て無駄になってしまうのだ。苦しい、なんて埃だ。胸が痛い。目が上手く開けない。早く、早く、早く……

走っても、床を踏みしめる感触はない。息も切れるわけでない。なのに唯、苦しい。

嫌だ。見たくない。

有った。此処だ。覚えている。このドア、そして、

開けちゃいけない。帰れ、戻るんだ。

指が覚えている番号を叩いて解錠するまでもなく、ドアは激しく変形して壁からずれていた。壁との隙間に手を延ばし、扉の残骸に指先が触れても感触はない。夢なのだから。

「おい、徹さん、」

嫌だ。嫌だ。嫌だ。助けてくれ。

「徹さんてば。風邪引くぞ、」

「いやだ」

声がする。誰だ、呼ぶのは。俺を呼ぶな。奴らをやらなきゃ、俺は……！

「嫌だじゃないだろ。ほら、部屋に行こう、肩貸すよ」

翔虎の手が僅かに小早川の肩に触れたとたん、思いもかけない唐突さで小早川が跳ね起きた。

「煩い！ 気安く俺に触るな！」

徹二の声は唯でさえ可成り低くどすが利いているのだ。寝惚けて

いているらしく、聞き取りにくい小声で拗ねる小早川の顔をのぞき込もうとしていた翔虎は、肩に置いたばかりの手を激しく振り払われて大声ですごまれた上、酷く剣呑な表情で睨まれてそのまま固まっってしまった。今、自分は何を聞いたんだろう。

「お・れ？」

開かれたところで夢の続きを見ている焦点が合っていない目が、ふと現実の世界に気付き、小早川は目覚めた。その瞬間、体から音を立てて血の気が引き、皮膚から冷たい汗が噴き出し、天井が回った。意識がとぎれる一瞬まえのきわどいところで小早川は正気を捕まえ、なんとか気を失うという醜態を晒すことなく膝を床についただけでこの世に踏みとどまった。耳の奥で心臓の拍動が大きく聞こえる。

「いつ、やだ。翔虎ちゃん、驚かさないでよ。心臓が止まるかと思っただじゃない」

切れ切れに、それでも何とか言った小早川のいつもの言葉遣いに、翔虎もようやくいましめを解かれて、飲み込んでいた息を吐き出すことが出来た。

「驚いたのはこっちだ。あー、怖かった」

小早川は顔を上げて翔虎を見ようとして、まだ立ちくらみをするのがわかり、それを押さえるために慌てて固く目を閉じた。それからこめかみに手を添え、恐る恐る目を開き、頭を振って目が現実を見ていることに馴らしてやる。体中が冷たく、汗で濡れた下着が張り付いて気持ち悪い。

「夢見てたのよ。昔のね。いきなり呼ぶから、目が回っちゃったじゃない」

「ごめん、ごめん。でも寝苦しそうだったから、部屋のベッドでしっかり寝る方が良いと思って。此処じゃ体休まらないだろう」

前髪を掻き上げて顔を起したとき、驚きから覚めやらぬらしい翔虎と目があつた小早川は、いつものように穏やかに、だが幾分照

れくさげに微笑んでみせた。

「そうね、ちゃんと寝るわ。でも可笑しい。寝惚けてたとはいえ、翔虎ちゃん怒鳴りつけるなんて、快拳かもね」

翔虎は快拳という妙な言い回しにつられて、漸く強張った顔の筋肉がほぐれていく気がした。

「それにしても、徹さんが俺なんて言うの、初めて聞いたな」

「あらあ、わたしにだって若い時はあったわよ」

小早川の若い頃か。想像もつかない。彼が『俺』などという普通の言葉で話し、友人と語ったり、喧嘩したりとごくごく平凡な少年だった日があったなんて、今の日常から想像するのはかなり困難だ。別にゲイでも女装趣味でも無さそうな小早川は、例えば女性が多い環境とかにどっぷり浸って育ってそんな言葉を使うようになったのだと勝手に思っていたのだが、どうやらそういう訳でもないらしい。

「で、どんな夢みてたんだ」

何気なく添えた一言が小早川を激変させた。一瞬で笑みが顔の表面から滑り落ちて、石像のような無表情が顕わになる。そして、ゆっくりと唇が動く。

「ひとごろしと、じさつみすい」

翔虎はそのおだやかならざる響きに、またしても息をのんだ。ふっと、小早川が目を伏せた。そして、一瞬後顔を上げたときは既にいつもの暢気な顔に戻っていた。

「なーに翔虎ちゃん相手に告白してんだかね。全く。バゲモンもそうだと思うけど、新人に接しているとナーバスになっていけないわ。寝て、汗でも流して、サッパリしとくわね」

一方的に言い捨てて機関操作室を出ていこうとした小早川に、翔虎は食い下がった。

「おい、徹さん、待てよ。人殺して何だよ、穏やかじゃないな」
振り返らず、小早川は軽く左手を肩の辺りにまで挙げてひらひらと振った。

「戦争よ。戦争。でも、人殺しにや違いないでしょ。罪に問われるかどうかは分からないけど、夢に見るのは止められないわね」

翔虎は思わず口にしていた。

「前の解放戦争のことか。だったら新人なんて所詮機械だろ。人じゃない」

「翔虎ちゃん、私はね、新人サイドで参戦したの。人殺しよ、立派なね。ヤナちゃん辺りが聞いたら、彼は私を許すかしらね」

まさか。

前の戦争で、新人方に与していた人が居たというのは聞いたことがある。何故、彼らが人でありながら機械の暴拳を許せたのか、それを助長するような事が出来たのか翔虎には分からないことだったが、そういった連中に良い感情を持ったことはない。嫌悪しているとまで言いきってもいいだろう。今、実はそうだったの、と小早川に聞かされて、そうですかと納得する事は無理だった。まさか彼に限って、といった理屈ではない思いが駆け抜けていった。

どの位の時間、ぼうつとしていたのだろうか。気付くと其処に既に小早川の影はなかった。彼が立ち去って可成りの時が経つことを示すように、曙丸の通路は暗闇で充填されていた。

曙丸が例によってゆったりと見える猛スピードに船体を震わせながら、サンガのD 9埠頭を離れて二週間が経った。宇宙に浮かんでいる星々は勝手に中心線を定めて、多様な形の円をそれぞれに描きつつ、しかもそれらがグループを組んで人の想像を絶する速度で移動を続ける。恒星間航海といっても、人はそれ程広い範囲を手中に収めたわけでない。彼らが属する一銀河のほんの片隅で、全体量

として増殖し続けながらその巢を張り巡らせているだけに過ぎない。だが、フロンティアは太陽系を中心とした球状をほぼ保って、確実に押し広げられている。太陽系に届く光は、過去の虚像だ。目的地の星が見える方向に突き進んでも、それは少なくとも何億年も前に其処に居たという存在証明をしているに過ぎない。

そこで絶対座標の登場になる。銀河系の中心から宙の東西南北天地という架空の基準軸を定め、現在地と目的地の場所を明確にする。それでも、起点も終点も動いているのだから、その両者の軌道を測定し、亜空間航行時にかかる時間なるべく正確に予測し、ワープアウト時に目的地の星系が存在する場所のごく近くに出現できるかそうでないかが、航海士の腕の見せ所となる。この亜空間をつかった移動方法は例えば惑星間といった短距離には向かない。第一、物質の過密地帯である一恒星の重力圏内では、いくら物質置換装置を使ったところで、核融合の危険が大きくなる。恒星間の広大な空間は比較的安全だから一気に飛んだりもするが、恒星系内では必ず要所に設置されているジャンプステーションを利用して地道に目的地ににじり寄るしかない訳である。

人類の母星である太陽系は、他の恒星系とは比べものにならない船舶過密地域だ。十二日かかって第一ジャンプステーションについてから、今日で二日目。だが、駅の利用待ち案内を照会すると、まだ二十船舶以上ある。早くて順番が回ってくるのは半日後だ。実は一番日数が掛かるのが、太陽系を抜ける為にジャンプステーションを利用する時の順番待ちなのだ。地球駅、火星駅、木星駅、土星駅。この四つの駅を過ぎるまでが一番忍耐が居る。惑星間定期船の連中は良く神経症にならないものだ。

操船室の諸計器全ての正常を確認すると、翔虎はらしくもなく溜息をついた。通信端末の前に陣取っていたリнда・マフィーが聞きとがめて翔虎の方に顔を向けた。

「船長、何か異常でも」

「いや、計器は全て正常だよ。ちょっと、考え事してたから」

リンダは珍しく沈みがちな翔虎を、出航以来ずっと気にしていたのだが、問いただすきっかけが掴めずにいた。幸い、シーネの姿もないし、通信士の早乙女信吾と交代するまで後二時間は有る。この際だから、一寸聞いてみようか。もし言いたくないことなら、外見に似ず頑固な翔虎は言ってくれないだろう。だが、試してみるくらいは良いはずだ。

「考え事ね。悩み事じゃなくて？」

翔虎が和やんだように見えた。

「君には敵わないよ。リンダ」

その言葉に、リンダは翔虎が答える気のある事を確信し微笑みを見せた。実際リンダの笑顔を見たことのある者はそう居ないはずだ。翔虎はこの笑顔をもっと振りまいて欲しいとも思うし、逆にいつまでも自分だけのものであつて欲しいとも思う。両方とも本心なのだから矛盾も良いところだ。

翔虎はリンダに寄り添つて、仕事の邪魔にならない程度の軽い力でゆつたりと抱擁した。彼女はディスプレイを見ながら、自分の胸の前で組まれた両手を軽く左手で叩いた。

「誰かが来たら困るじゃない」

「別に困らないさ。みんな知ってるし」

リンダは優しく撫でてから、きつぱりと腕を外した。

「そつという問題じゃないです」

翔虎は行き場を無くした可哀想な両手を、ちよつと迷つてから腕組みをすることで懷に収めてやつた。

「それで、何悩んでんのかな。船長」

「ん。君は新人のことどう思ってる」

思いつきで口にしたようなさりげなさを翔虎は演じたが、リンダは簡単にその思惑を無視してくれた。その証拠に妙に納得したという表情になる。

「ああ、その話。出航前の打ち合わせの時は随分自信たっぷりだったのにね。あれは相談て言うより一方的な事情説明で、あなたが霧

島の御曹司なんだって実感しちゃったわよ。それで、航海長に無視でもされてるの？」

こんなリンダのさっぱりした物言いが好きだ。翔虎はあらためて思った。

「彼は大人だよ。仕事にけじめは付ける」

「自分の子供乗せるような、公私の区別の付かない人よ」

またしてもこの調子だ。彼女はあまりに『こうあるべき』が強すぎて、情や欲望に流される弱い面を誰もが持っていて当たり前という、ごく単純な思いやりをともしれば忘れがちになってしまう。確かに殆どの場合場合彼女の意見は正論であるが、正論が必ずしも正道であるとは限らない。人は様々な意味で矛盾と折り合いをつけながら生きていくものなのだ。

「そう決め付けるものじゃないよ。でさ、どう思う。その、人と新人が戦争してるとき、人に刃を向ける方を選ぶ人の気持ちって分かる」

「なにそれ。だれかそんな人でも居たの？」

翔虎が何となくでかかった言葉を飲み込むと、かまわずにリンダは頷いた。

「でも、分かるわよ。だってさ、新人なんて元々金が余ってる連中が道楽で作ったものじゃない。新人連中も分かってて、政府重要機関やご用企業をターゲットに攻撃してたんでしょ、ああいうケタクソ悪い輩が泡喰ってると思えば溜飲が下がるってものよ。機会があれば、尻馬に乗ってたかもね」

「そう言うものか」

呆れたような翔虎に、リンダは重ねて言った。

「翔虎みたいな良いところのお坊ちゃんには分からないでしょうね」

「そう嫌味を言わないでくれよ、俺だって自分で選んで霧島の息子やってる訳じゃない」

リンダはちよつと声を荒立てた。

「じゃあ、私は好きでスラムのゴミ溜に捨てられたんでしょよ」

この場合、何不自由なく良い暮らしを享受してきた翔虎の方が折れるしかない。

「ごめん。俺が君に言っただけ良い事じゃなかったな。じゃさ、話は戻って、何不自由なく抑圧される立場でも無い人が、そうする気持ちには分かるかな」

リンダはあっさりと怒りを受け流されてしまい苦笑した。捨て子であるという引け目から必要以上に刺々しく振る舞うのが自分の欠点だと、彼女自身分かっているのだ。だが、自分で嫌だと思いつつも、つい人を傷つけるような言動をしてしまうリンダには、翔虎のこの水のような包容力が何よりも心地よかった。一寸のことで荒れ立つ心を鎮めて、彼女は少し翔虎の問いかけを考えてみた。

「そうね、偽善者の歪んだパフォーマンスとか、純粹に政治的な意味で現政権の転覆を狙ってとかかしら。あんまり良いイメージ湧かないわね」

翔虎は、リンダの断言に納得しながらも、反論した。

「でも、本当に卑怯な奴なら自分の手は汚さないよな。中央の綺麗な椅子に納まって、好き勝手なことほざけただろ」

リンダは鼻から息を吐き出した。それは些か恋人の前でするには相応しく無い仕草ではあったが、眉間にしわを寄せた顔は翔虎には魅力的だった。

「一体誰の話してるのよ。そうね、翔虎が気にしてるならウチの乗員だろうし、バゲモンと洞口さんはアストロノーツの役得で戦争には係わってないわね。あなたは学生だったし、ヤナちゃんときたら、入試ドベって徴兵されてるから当然新人方じゃないわけでしょ。早乙女君は洞口さんと一緒にルナ自治区出身ってことは戦争には係わってないわね。やだ、修理屋しか居ないじゃない」

翔虎はそう断言されてどっと疲れた。これだから女はいやなんだ。こっちがなるべく人を特定しないで話しているのに、いともたやすく結論にたどり着く。

「リンダ、俺は具体的な話してる訳じゃないぞ」

一応言ってみるが、案の定彼女は取り合わなかった。

「隣の奥さんが浮気したって、気にする男なんか居ないわよ。あなたが悩んでいるなら身内の事に決まってるじゃない。で、シェーネとかヤナちゃんとか、知ってるの」

翔虎は諦めた。誤魔化すのは無駄だ。こうなったら黙っているよう頼むしかない。

「いや、おそらく知らないと思う。いいか、リンダ。何故、徹さんがそんなことをしたのか、俺は知らない。でもな、彼は今も苦しんでる。シェーネや柳には真実を知り権利があると、君なら言うかもしれない。俺に過去の過ちをさらけ出して、それでも君を愛する自信があるか迫るような人だ。だが、それが必ずしも一番良い手段なんかじゃないんだ。分かってくれるか」

それにしても自分は信用無いなど、リンダは溜息をついた。その証拠に彼の瞳は真剣そのものだ。自分の重荷を好きになつた人にぶちまけるのと、他人が背負っている何かを無神経に暴くことを、私が同列に考える様な阿呆と思われるなら、いい迷惑だ。

「大丈夫よ、翔虎。私にも分別くらい有るわ」

椅子から立ち上がって、背伸びをして翔虎の首に腕を回して取りつくと、リンダはその頬に軽く接吻した。翔虎はつい悩んでいたのを忘れて、その柔らかな感触を楽しむ。かつて、ブラックリンダと渾名され、スラムのチャイルドマフィアを仕切っていたというリンダは、浅黒い肌と茶色がかつた黒髪を持っている。最近はその髪を細かく編み込んで肩ほどまで伸ばしている。鍛え抜いた筋肉質の体は、黒人種特有のしなやかなバネとなつて体を引き締めている。遅いという言葉が似合う女で、柔らかさと無縁に見える。しかしそれでいて、掌で味わう背中から腰の辺りは、やはり男のそれとは違う優しさがある。

軽くノックが聞こえた。ふと目を開けて見るとシェーネが入り口に立っていて、彼が壁を叩いたのだと分かった。リンダは気付いていないようだ。仕方なく肩を叩いくと、リンダが不審そうに翔虎を

見たので、彼女の注意を目線で入り口に向けてやる。リンダは一瞬赤くなり、そのまま翔虎を睨むと、シェーネの方は見ずに自分の仕事場である端末の前に荒々しく腰を落とした。

「邪魔してすまん。ま、こっちも仕事があるんでな」

にやにやと、中年根性丸出しで笑うシェーネに取り合わないことにして、翔虎は何事もなかったようすました表情で敬礼した。

「12:07。異常なし」

シェーネもさつと敬礼を返すと復唱した。

「12:07。異常なし、了解。ご苦労様でした」

そのとき、ばたばたと乱暴に音を立てて少年が駆け込んできた。

「リンダ、通信入ってない。今日標準時十二時から可否発表なんだ」
翔虎は思った。やれやれ、順番が逆じゃなくて良かった。

大きくて丸い碧眼の持ち主の少年は、そこそこに整った優しげな顔立ちをしていて、間延びしたバケット面に張り付いている目鼻等のパーツがことさら厳つい父親にまるで似ていない。だが、この先いかにも大きくなるだろうと予想のつく、骨肉が充実した健康そのもののその体格は、二メートルを越す大男のシェーネ譲りに思えた。
「まだ何も入っていないわ。ここで待ってみる？ それとも着信したら教えてあげましょうか」

「待つ待つ、気になって落ち着けないよ。あれ、修理屋来てないの」
回りを見渡して、心持ちウオードが不満そうに言った。

「機関長も来るの？」

「いったリンダにウオードは無邪気に頷いた。」

「うん、頼んだの。父さんより心強いもん」

あの話をリンダとしているのを聞かれるかもしれないのだ。翔虎は胸を突かれる思いがして息をつめた。もしかしたら、聞かれたのでは。嫌な感じがする。でもそれは杞憂に過ぎなかったようだ。程なくして現れた当の小早川の手には掃除ロボットのコントローラが握られている。それを持っていると言うことは今日もオートパイ

ロットで済ませずに直接操作していたはずだ。近くで掃除ロボットの騒がしい音がすれば、誰でも気付く。

「どう、ウォード届いたの」

「まだなんだ。でも、遅いじゃない」

「ご免ご免。でも標準時でしょ。十二時発表でも、ハイパー通信モードで送信してくれるわけないから時差があるじゃない」

「そりゃそうだけど。落ち着かないよ。修理屋はどう思う」

「そうね、今年は高等部の教科書使いたいと思ってるわ。二年も同じ教科書じゃ、ウォードだって飽きちゃうでしょ」

ウォードがのけぞるように天を仰ぎ、リンダが声を立てて笑った。「教科書は飽きたりするものじゃないわよ」

「そうなの。ふうん。あら、リンダちゃん通信入ったんじゃない」
小早川が指摘するとウォードは体勢をなおして、リンダにの側に駆け寄った。

「違うわよ、ウォード、メールじゃないわ。会社からの直接通話だわ」

スピーカーに電源を入れたままではあるが、ヘッドホンを付けて雑音を遮ると、リンダは馴れきった手つきでコントロールパネルを操作し、回線をつないだ。亜空間通信波独特のノイズを散らす為の微調整をしてから、モニターを起こす。この辺りではさほどのタイムラグがないので繋がるのも早い。リンダが船体識別番号と亜空間通信端末機識別暗証を打ち込むとほとんどなくして映像が出た。

「こちら霧島運輸所属、曙丸です。船体識別番号確認の後、発信人と受信人を指定して下さい。」

ヘッドホンに付属している小型マイクを引き下ろしてリンダが言
うと、画面に映っている中年の女性が軽く手を振った。

「ハイ、リンダ。元気」

「もちろん、元気よ。そちらはどう」

映像の中のサラというその人は、船舶亜空間通信センターでの交

換手勤続が長いと、霧島傘下の殆どの船の通信オペレータと顔見知りなのだ。オペレータ同士の簡単な挨拶をしながら彼女が手元を見下ろすと、画面に些か大きくなっている旋毛が映った。

「船体番号確認しました。この通信費は発信人払いになります。発信者、霧島松姫さま。受信指定人、霧島翔虎さま、及び小早川徹二さま以上です。では発信人につなぎます」

顔を上げた彼女は、ちよつとリンダに手を振る。リンダがそれに応えるのを待たずに、画面が一瞬黒くなり、呼び出し中の表示がされる。リンダは悪戯めかしてマイクのスイッチを切ってからアナウンス風に呼びかけた。

「こちら通信部です。霧島船長、小早川機関長。繰り返します。霧島船長、小早川機関長本社の霧島松姫専務から直接通信が入っております。至急操船室までお越し下さい。通話を端末に転送希望なされる場合は連絡をお願いします」

「リンダちゃん。ふざけないの」

小早川が端末席にいるリンダに近寄つて軽く頭を小突く。リンダと小早川は不思議と馬が合うらしい。翔虎ですらこんな事をしたなら怒鳴られそうなものだが、彼女は軽く舌を出しただけで、首をすくめて小早川に微笑みを見せている。翔虎はちよつと面白くなく態とらしく咳払いをした

「あー、こちら霧島だ。通信長マーフィー君、操船室中央モニターに転送してくれ給え」

リンダはちよつと小早川に目配せしてから、真面目な声で言った。「了解」

操船室にある一番大きい中央モニターは、時に航路図を表示し、時には船体外に取り付けられたカメラの受像器になる。その大型モニターに映像が結ばれるまで一分ほどかかった。こういう場合やけにその一分が長く感じられるものだ。

「あら翔虎早かったのね」

松姫は先ずそう言った。そして小早川を見とめたのか付け加え

た。

「ドクターも一緒にいらしたのですね」

翔虎はちよつと不思議だった。松姫は暴君でこそないが、ごく自然に人に命令することに馴れきっていて、小早川のような若造に丁寧語を使うことはめつたにない。無能な者は自ら望んで無能であると決め付ける松姫は、流石に仕事では本性を上手く隠して、上手に世渡りをしているが、他の二人の姉に対する冷淡さを見れば、彼女がそう言った頭の造りがお粗末な者に基本的に興味が無いのが良く分かる。不思議なことに一番年が離れているにもかかわらず、兄妹の誰より翔虎はこの姉の表情が良く読める。彼女は必要から腰の低さを演じているのでなく、小早川本人をとて高く買っているのだと翔虎にはなんとなく分かり……それが意外だった。

「あらやだ、松姫さん。ここにいるときにドクターは無しにして下さいよ」

そして、小早川だ。彼は誰に対してでもこの調子だ。そしてそれに不自然さは微塵もない。あの出航前に一度だけ垣間見た乱暴な雄といった彼と、こちらの徹二。一体どちらが本物なのだろう。其処まで考えて翔虎は苦笑した。人は色々な面を複雑に絡み合わせて生きているのだ。どちらも彼に違いない。

「細かいことには拘らないのが信条なのでしょう。ドクター」

「松姫さんには負けますわ。それでは、今日はドクターにご用なんですね」

モニターの松姫が、につこり笑った。

「ええ、ちよつとご相談いえ、ご了承いただきたいと思うことがあります。例の新人教育プログラムの草案のことなんですが。多少人事の意見もありまして手を加えさせていただきました。基本的にはドクターの御意見を読み違えてはいないと思いますが」

ふと見ると、小早川が煙草の入っているポケットに手を延ばすのが分かった。操船室が禁煙なのは分かっていると思うが、一応注意してみておこうと翔虎は思った。シェーネは、松姫の話に興味をひ

かれないのか操船助手席に陣取って何やら仕事をはじめている。リンドは好奇心を顕わにしてもニターと小早川の方をちらちら何度も見やっていた。

「私も第二草案作ってはみたのですよ。あれは一寸疲れているときにやつつけ仕事でしてしまったので、不満が残ってましたの。では、もう不要ですわね」

「ああ、それでしたら、まだ決定してはいませんので送って下さい。こちらの草稿もメールしますので、御意見お願いできますか」

「わかりました。でも、そんな簡単なご用件にわざわざ直接通話ですか」

小早川が呆れたように言う。

「それもありますが、お願いというのは……、別ですの。例あのドクターが太鼓判を押された二人、大希とジェイですけど……、確かに彼らは突出してますね。それで彼らを教育なさった方に、教育プログラムの推敲を頼もうかと思ってますの。ご了承いただけますかしら」

小早川は特に考える風でもなく、間を殆どあけずに頷いた。

「合理的な判断だと思います。私の知識レベルでは総合行動教育のエキスパートには敵いませんから」

ごくあっさりという小早川に、向こうの松姫がほつとするのが分かった。確かに学者先生は自分の仕事に過剰な自信を持つ者が多いだろうから、自分の出した草案に他の専門家の手が入ることを拒否される可能性は有ったはずだ。

「有り難うございます。それで、その方はジ・アースの研究施設にお勤めなさっていたそうですので、もしご存じの方でしたらその方に対する御意見もお聞きしたくて」

「そうですね、それなりにご年輩の方ならお会いしたこと有る方も多いと思いますわ。若手の方で今ご活躍の人ですと、もう無理ですが。それで、その方何て仰いますの」

操船室は当然精密機器がむき出しになっている部分のため、禁煙

になっている。松姫がその人の名を告げたとき、火を付けられない煙草を未練がましく指先で弄んでいた小早川の指からそれが滑り落ちていった。

「葛城と仰る方です。ええと、ファーストネームはセレンシィ」

なぜ、こう弾みがつくと過去はいい気になって押し寄せてくるのだろう。小早川は唇をぎゅっとかみしめた。その僅かな変化に松姫が不審な表情をする。

「葛城……？」

だが、声に出したのはシェーネだった。めったに表情を見せない彼が、何かに驚いた様に見えた。翔虎は知っている人なのか聞こうとしたが、小早川の声に遮られた。

「申し訳有りませんわ。松姫さん。その方の名前は聞いたことは有りますが、直接存じ上げておりません。お役に立てなくて残念です。他に何かご用件は」

有ったとしても、重ねて何かを問いかけられるような雰囲気は既に消え去っていた。

「いえ、それだけですけれど」

松姫が言つと小早川はちよつと頭を下げて見せて、挨拶もそこそこにさつさと操船室を出ていつてしまった。シェーネが小さく舌打ちするのが翔虎には聞こえた。

「姉さん、私には用はないんですか」

「特別にはね、どうせ直接通話するなら顔は見たかったのだけれど。でも私ドクターに何か失礼なこと言つたかしら」

松姫が本気で心配しかけている。翔虎は取り敢えず二人の会話を反芻してみても特別変な言い回しが無かつたことを確かめると、首を振った。

「そんなことないでしょう。最近、彼は何となく疲れているみたいですから、気分でも悪くなつたんじゃないですか」

「あら、それは心配ね」

ほっとしたといった口調に変えた松姫に、翔虎はくぎを刺しておいた。

「彼に負担をかけているのは新人絡みの本社の仕事なんですがね」

「なにか、雲行きが怪しくなってきたわね。翔虎にまで冷たくされたら後味悪いから、この辺で失礼するわ。じゃ、また連絡しますってドクターに伝えて於いてね」

通信が切れると、翔虎は素知らぬ顔のシェーネの首に腕を回して軽く絞める真似をした。

「バゲモン。何か知ってるな」

船長職に就いてから、一応仲間を渾名で呼ぶことは控えている翔虎だが、こういった場合航海長などと呼びかけるより、しつくりくる。

「私は知りません事よ」

小早川の口調を真似ているつもりなのだろうが、全然似ていない。「気持ち悪いしゃべり方は勘弁してくれ。で、誰なんだ。セレンシイ葛城とかって」

「わー、マジで絞めるなよ。分かった、話すから放せ」

翔虎が腕を放すと、シェーネは首を軽く振って見せた。

「暴力反対。暴力で強制された約束に、拘束力はありません……」
「て言いたいところだが、翔虎もこのところ、色々悩んでたからな
サービスで特別に教えてやるよ。同姓同名で職業も同じな他人でさえなければ、セレンシイは私の奥さん、つまりイリアナの親友さ。
結婚式にも来て貰った」

イリアナと聞いて、出ていったしまった小早川を気にしていたウオードがこちらの話に加わってくる。

「母さんの友達なの。会ってみたいな。その人と会える？ 修理屋がその人のこと嫌いみたいだから無理かな」

「其処までは知らないさ。だけど、嫌いな人と会いたくない人が一緒とは限らんだろう」

子供の単純さでウオードが反対した。

「そんなの変だよ。嫌だから会いたくないんだろ。普通」

シェーネはウォードの頭に手を乗せ、荒っぽくかき混ぜた。

「大人は複雑なんだ」

ウォードは不満そうに、父の手をはねのけて手櫛で乱れを直すと、まだ何か言おうとした。が、リンダがウォード宛のメールが着信した事を告げると、すっかり忘れて通信端末が見える位置に走った。

「さてと、全員の前で公開しちゃって良いの」

悪戯っぽくリンダが聞くと、ウォードはきっぱりと頷いた。

「どっちにしるばれるんだから良いよ」

手元など見ることもなく操作してリンダが中央モニターに文面を表示させると、ウォードは拳を振り上げて、軽く飛び跳ねた。

「やったあ。中等部卒業許可証写した。僕、修理屋に知らせてくる」

駆け出していったウォードを見て、大人達は呆れた。先ほどの小早川の態度を見ていたら普通なら声をかけにくいものだ。形は大きくてもまだ子供だ。

第六章 ジグソーパズルのワンピース

乗組員のそれぞれの個室は基本的にその使用者の家だ。緊急時には船長事務室の操作パネルや船長の持つ合鍵で開けることが出来るが、普段の日常ではそれらを使うことは先ず無い。リンダは流石に唯一の女性だけあって施錠の習慣があるが、他の乗員でために鍵をかけるのは翔虎くらいだ。一応仕事は部屋に持ち込まないようにしているのだが、重要データのバックアップなどを保管する棚や現金や船荷証券など貴重品の入っている金庫が有るので、半ば義務感でやっているに過ぎない。もっともそれらの重要物は個別にロックされていて、開けるには翔虎の掌紋が必要になるのだから、部屋に鍵をかけてもあまり意味がない。第一、暗号解読の技術も持つ早乙女信吾などがその気になれば、これら戸締まり用の簡易ロックなど破るのは朝飯前の筈だから全く気休めというしかない。

早乙女信吾は身長百七十センチほどで、小太り。今時視力矯正に眼鏡を使うようなレトロ趣味も持っている。彼は情報機械工学専門大学出身者だ。博士号取得までは行かなかったが、それなりの成績で卒業し、業界でも大手のコンピュータ会社の研究室に勤務していた。しかし研究という分野にも係わらず、一、二年という短期でまとめた成果を要求されたり、同僚全てライバルという息の詰まる学力偏重社会の延長のような職場に嫌気がさし、子供の頃からの憧れの宇宙船乗りになるという夢を果たすべく霧島運輸に転職してきた変わり種だ。

亜空間通信の細かい原理なども把握している早乙女信吾は、端末の扱い方しか知らないリンダより知識レベルは上の筈だが、色々な船や港の通信オペレーターに顔の広いリンダをそれなりに認めている。多分、彼女が信吾の知識の豊富さを認めてくれているのがはっきりと判るし、彼女自身が通信原理を理解しようと努力している姿

勢が好ましいからだろう。このまま彼女が直接の上役であることに我慢できるのかは定かでないが、今のところ異存はない。

早乙女は基本的に人付き合いは苦手だ。薄く広くが基本姿勢で家族とも濃厚な関わりを構築しきれずに成長した。宇宙船に抱いていた、個々が自分の持ち場を完璧にこなすのみで、浪花節の入り込む隙間は無いだろうというハードなイメージは、簡単に覆された。他の乗員達はまるで家族のように和やかに付き合っていて、時間の流れも殊更にゆっくりで、前の職場に比べ天と地ほどに違っていった。誰かを出し抜く必要もないし、足元を掬われる心配もない。ある意味では居心地がよかったが、早乙女の個性には基本的には合わないように自分で思った。

憧れの船乗りといっても、八時間交代で通信端末の前で電話番をしているに過ぎない単調業務は馴れてしまえば退屈なだけだった。業務連絡、本社への定期報告、寄港地の港湾オペレータとのやり取りや、私信着信時の受信人への転送。海事ニュースを受信して記事毎にファイルを造ったりと、当番時にやることはそれなりにある。かといって、創造意欲を刺激されることもなく、交代後は矢張り眠っておかなければならないので、居間でくつろぐことも少ない。通勤がない代わりに日曜も祭日もない退屈な毎日であった。

窓に映る大宇宙のパノラマ映像も、カメラを通してみているだけと分かつているので、日常の風景になってみれば感動もない。もっとも本当に窓が開いていたとしたら、ものすごい勢いで回転して重力を維持している曙丸から見える景色は、きっと目まぐるしく流れていく星の残像が夥しい線を描いているだけだろう。それで感動できるのか聞かれれば否定するだろう。

二力所、円筒形の曙丸の最前部近くと最後部付近の船側に船外活動が必要になった場合の出入り口であるエアロック部分がある。数えられるほどの少なさではあるが、早乙女は翔虎に頼み込んでエア

ロックに入れて貰ったことがある。その内部仕切りには強化透明プラスチック盤の窓がついている。エアロックに入り船内扉が閉まる。外に向かう外壁口がゆっくり開いていく。その時の景色は形容できない。本物のスペースジャケットを着て、ヘルメットを襟の特殊ジッパーで留め、小型生命維持装置を背負っている人型の器に納まる。運行中は遊びでエアロック部分に入るのも危険が伴っているのだと思い知らされる。宇宙船操作技士の免許を持っていない自分には船外活動はもちろん無理だし、翔虎も実際の船外活動の時は開けるはずの窓を開きはしない。それでも、直接見る宇宙は光と闇が交錯する異質な世界だった。恐怖も僅かに交ざったそのときの感動は忘れられない。写真を撮って貰って、挨拶状を昔の同僚や友達、親戚に送った。みせたいという子供っぽい欲求が有った。

早乙女が内部仕切り窓の操作盤にうつかり当たったことが一度だけある。開き始めたそれに、翔虎はすぐに気付いて閉める操作をしてくれた。宇宙空間に投げ出される事態にはならなかったが、その窓が開いていく一瞬の動きを捉えたときは正直、恐怖で体が充たされた。曙丸が、人が有ることを決して許容しない神の荒野に漂っている、ちっぽけな存在に過ぎないことを実感したのはあれ以降だ。港に係留されているときに外から見た曙丸の巨大さは、宇宙を移動する小さい星に等しいとも思わせるものだった。それは錯覚に過ぎなかった。なんという危険で退屈なところに自分は望んできってしまったのだろう。早乙女は心底後悔したものだ。それで降、早乙女は飛行士ごっこを強請る熱が醒めてしまった。翔虎やシェーネといった本当の意味での飛行士達は、なんと剛胆な男達なのだろうと思う。定期点検と称して、命綱一本で平然と船外に出る。

早乙女はルナ自治区の学生だった頃、一度宇宙ダイビングツアーに参加したことがある。大きな青い地球を見、灰色のふるさと月を見下ろす。それは高揚感を伴う心地の良い経験だった。その手に取

るほどの近くに見える二つの星の側にあることが、彼をくつろがせてくれた。どんな星もすぐ側にはない。どの星も小さく点でしかない。様々な色の光が圧倒的な量で渦巻いている虚空。ここは人の領域ではないのだ。

早乙女から見て剛胆な男はもう一人居る。この船の機関部を一人で仕切る男だ。彼を剛胆だと評価しているのはもしかしたら、自分だけかもしれないと早乙女は操船室の通信端末の前で思った。一人で機関部を扱う。確かにロボットの手下はいくつも使っているが、考えることが出来るのは一人だ。この船の動力部分に何か重大なトラブルが起きたとき、彼はたった一人で全ての乗員の命を背負わなければならぬのだ。勿論、彼は機関士の増員を希望している。当然だろう。が、それまで一人でこの船を動かそうというのさえ、早乙女のような常識人に言わせれば剛胆を通り越した無謀の仲間だ。トラブル時に彼に何かあつたら、どうするつもりなのだろう。本当に外宇宙航海の船舶乗りには冷静な判断力なら有るのかもしれないが、危険に対する想像力は欠如しているとは思えない。えらい所にきてしまった。

その小早川が、スーパージーニアス、ドクター小早川であることが公になって大騒ぎになったとき、この船で驚いたのは自分だけだった。乗務して二年、一番の新参者の早乙女には晴天の霹靂に等しかったが、別にこの船では特別話題になるほどの秘密ではなかったらしい。間が悪く聞く機会を逃していただけらしいが、自分が矢張り溶け込みきれない余所者であつたのだと思えば、穏やかに聞き流せるものではなかった。

同じ専門大学出でも翔虎のように職業訓練校の色彩が強く、博士号などと縁のない学校出の者が想像するよりはるかに、博士号取得は並でない知識と努力、それに評価して貰える飛び抜けた運が必要なのだ。その中でも、ジ・アースに研究者として招待されるのは、更に一握りの選ばれたる少数に過ぎない。彼らは早乙女のような学

徒にとって神にも等しい、畏怖と尊敬を抱かせる者達なのだ。それが、宇宙船の廊下を掃除ロボットのコントローラを握って歩いていて、気軽にお茶を入りを頼める人と同人物で有って良いわけがないのだ。だが、早乙女の混乱は日常生活に押し流されてしまった。相変わらず小早川は機関部の維持管理を中心に、掃除や厨房管理、暇を見ては事務部の手伝いを黙々とこなしている。

今の早乙女にはジ・アースの研究施設が攻撃された時、いい機会とばかりに『失踪』し、危険な神の領域で生きることを選んだ小早川のその本当の理由を知りたいという、押さえがたい好奇心があった。単調な仕事での退屈もあったらう。だが、自分でさえ一流会社の研究職を捨て、宇宙に新しい生活を求めたのは、他人と生きるという気苦労に対する根深い嫌悪があつての事だった。それとずっと家族の自慢のいい子であつた事への強烈な反抗心。いい大人の幼児っぽい衝動。早乙女の心の中では、自分の選択がただの逃避であつたのか、いさましい挑戦であつたのかを決めかねて、思いが彷徨っている。だからこそ、自分より遙かに得難い地位を捨てた男の心を知りたいと思うのだ。小早川を観察するようになって、彼の妙な女言葉とか、染めむらのある長い金髪巻き毛とか、最初に目に付く事柄が小早川の特長を何も物語っていないのにやっと気付いた。彼は何時も働いていた。くつろぐことと、遊ぶこと、この二つが小早川の絶対しないことだと分かったとき、小早川が何かから逃げているのではないかと直感的に思った。その何かを探ろうと思つたのは、自然の成り行きだった。

早乙女は自分の燦々した探求心を満たす対象に人の心の闇を選んだことで、その後、己が深く苦い重荷を背負って生きていくことになることに、このとき気付くことはなかった。

翔虎が小早川の部屋を訪れたのは、一日の仕事を終えキリシマ本社時間、二十三時を回ってからだ。小早川の二つある部屋の内、ウオードがよく出入りしている書斎兼居間の方は座り心地抜群のソファがあつて、ベッドを除いている分広いので夜は酒や煙草をやる不健全な大人のたまり場になっている。一寸した操作で密閉できる様に小早川が改造しコップで酒を飲むことが出来るようになったこの航海に入つて、翔虎が訪れる回数もかなり増えた。今日も酒瓶を抱えて、洞口を誘いにいったが一足遅く、ドアについているミニディスプレイに「寝ている、邪魔するな」と表示してあつたので諦めた。あの松姫との通信中に小早川が立ち去ってしまうという小さな事件が有つてから、夕食の時も動力制御室に訪れたときも、セレンシイ葛城のことを聞くような雰囲気ではなかった。彼は珍しく笑顔という無表情を脱ぎ捨て、露骨に不機嫌だつたからだ。

可哀想なのはウオードだった。せつかく基礎教育の中等部の卒業資格を得たというのに、普段なら一番喜びを表してくれるはずの小早川が黙り込んで、何を言つても一言二言答えるだけなのだ。見ているだけでなんとも据わりの悪いものであつた。初めの内こそ、リンドが慣れもしないのに場を取り持とうと努力していたが、結局最後には全員が黙りこくつて、ただでさえ美味しくもない船員食を更に味気なく押し込むように食べたのだ。何も知らない洞口と柳は驚きすぎて小早川に直接問い糺す気にもなれないらしく、彼が後かたづけのために厨房に去るとコソコソとシェーネや翔虎に探りをかけてきた。シェーネはなにか知っている感じだったが、翔虎は本当に何も知らないのだ。だから正直に知らないと答えたのだが、柳あたりは絶対に信じていなかった。いつもなら洞口の方から寝酒のお相伴の誘いがあるのだが、彼が今日小早川の部屋でくつろぐつもりになれないのは当たり前かもしれない。

翔虎の方は小早川を唯の仕事仲間であるだけでなく友でもありた

いと思つていたので、このまま彼を不機嫌の海に放置しておくことは出来なかった。この時間のその部屋にならいつもなら流れている筈のシェーネが好きなクラシックや、柳が好む軽快な流行歌などといった音が無く、静まり返っていた。

酒瓶を取り敢えず机に置くと寝室に繋がるドアの前まで移動した。軽くノックをしてみるが答えはなかった。少し躊躇いながらノブを回してみると、あっけなく扉が開いた。覗くと小早川が下着姿でベッドに手足を放り投げて仰向けになっていた。目が開いているので彼の眠りを邪魔することはなさそうだ。いつもの作業着は脱ぎ捨てられたまま床に無造作に投げ置かれていた。

「いいか、入って」

さり気なさを努めて翔虎が言くと、小早川は鬱陶しいとでもいうように目を閉じてしまった。だが、その顎が微かに頷くのが分かって、翔虎は部屋に入った。そう何度も入ったことのある部屋ではないが、相変わらず驚くほど何もない。隣の部屋は趣味の良い家具類や、水耕栽培の観葉植物にあてられている育成灯の柔らかな光の潤いで彩られている。整理棚の中に専用金具で固定してまで揃えてある、陶器風やガラス風の値段が張る強化プラスチック製のグラスやコーヒーカップ。音質の良いオーディオ機器に豊富なジャンルの音楽ソフト。壁のパネルモニターも各部屋に設備で付けられた汎用のものと違い、映像は鮮明でちらつきが無く長時間見ても疲れない。彼が収入を注ぎ込んで快適にしつらえられたその部屋からみると、この寝室は無表情に冷たく沈んでいる。第一小早川は酒を飲まないで、夜に居間の方でくつろぐことは滅多にない。何時も少しの間話題を振りまいて人を笑わせたり、煙に巻いたりした後、『寝るわ』とかいって寝室に引っ込んでしまう。逆ならまだ分かるのだが、これでは小早川は快適な第二の居間を乗員に提供するために二部屋占領していると思えない。

「ワード、落ち込んでたぞ」

翔虎が、個人端末の前の椅子に、背もたれを抱え込むようにして反対向きに腰掛けてそう言つと、小早川は目を開けて首を傾け翔虎を見た。

「分かつてる。シェーネはあの通り、気が利かない御仁だからね。私が派手に喜んであげなきゃと思つてるんだけど」

翔虎は、ウオードに対する小早川の反応は何時も母親じみていると思つていたが、意識的に演じているのだとは思つていなかった。

「喜んでゐる振りじゃ、ウオードが可哀想だぞ」

ふつと、小早川が笑つた。その笑みは深く、せつないほどに優しい。翔虎がちよつと言い方が悪かつたかなと思つたとき、小早川が静かな口調で聞いてきた。

「翔虎ちゃんのお母様つてどんな人」

微妙に話題がずらされている気もするが、取り敢えず素直に答える。

「そうだな、むちゃくちや強情かな。家じゃ、母さんが白といえば黒でも白なんだ。偉そうにしている父さんも松姫姉さんも、母さんの暴君には敵わない。ま、本当のところ家族を誰より大切にしているって知つてるから、逆らえないって感じかな」

「それで翔虎ちゃん、リンダみたいのが良いんだ」

翔虎はちよつと眉を寄せた。

「関係ないだろ。それにリンダは暴君じゃないぞ」

「馬鹿言つてないの。あれは男の保護欲をそそつてくれるような女じゃないでしょ。でも、まあ共に歩いていけるパートナーになれる人ね。力とかそう言うんじゃないくて、精神的に強い人。私もリンダみたいな娘、好きよ」

翔虎はちよつと驚いた。まさか、彼から女の好みを聞くとは思わなかつた。それに対象がリンダとは穏やかでない。

「お前、リンダのこと」

小早川は器用に移動せずに寝返りを打って、俯せになると顔を伏せて肩で笑つた。

「心配しなくても良いわよ。リンダに手なんか出さないから。第一ブラックリンダ相手じゃ私なんか一撃で捻られちゃうわよ」

これだけ長い付き合いでも小早川の下着姿なんぞを見ることは滅多にないが、その思いがけず引き締まった体から察すると、彼が自分で申告するほど柔で無いことは容易に見当がつく。翔虎もそうだが東洋人種の色が濃いと、多少鍛えたくらいでは、ボディービルダーのような隆々とした筋肉はつかない。翔虎の目には小早川のそれは日常の労働が造った固い筋肉ではなく、かなり運動か何かをやり込むことで造られたしなやかなものに見えた。

「徹さん、何があつたんだよ。姉さんの言っていた葛城とか言う人、彼女のせいかな？」

「どうせシェーネに聞いたでしょ」

投げ遣りに言う小早川に翔虎は首を振ってみたが、顔を伏せている彼に見えるはずがないので一応口にも出してみた。

「イリアナさんの親友だったって聞いたよ。それだけ」

「ふん、シェーネも義理堅いわね。仲間にゴシップは要らないって事かしらね」

「ゴシップ？」

まったく、思いがけない言葉を繰り出すひとだ。

「セイ……、私はあの人をそう呼んでいたんだけど、セイは私が一方的に捨ててきた女よ。今更どの面さげて、あの人の前に立てるっていうのよ」

今度ばかりは翔虎は心底驚いた。小早川はイリアナを愛していたんじゃないのか。

「お前さん、シェーネの奥さんに惚れてたんじゃないの」

うつかり口にして、慌ててふさぐ。小早川は今度は横向きに体を立てて、頬杖をつき翔虎を見る。

「翔虎ちゃん、そう思ってたの。可笑しい、何故そう思ったの？」

「だって、お前さん、彼女の、好きな人の子だから、ウォードを守つていこうとしてたんじゃないのか」

すっかり、自信なさげな口調になって翔虎が言うと、小早川は首を振った。

「違うわよ。私がウォードを守ったんじゃないわ。ウォードの方が私を助けてくれたの。この前私、口滑らせて自殺しようとしたことあるっていったわよね。私は毎日死ぬことばかり考えてるような出来損ないでね。本当に何度も死のうとした。イリアナ　先生はそんな時の私に生きることを教えてくれた人。恩人でもあるし、誰より理解してくれた。あの人がいたから生きのびられたわ。でもねあの戦争の頃は本当に私の人生の中で一番最低だった時期なの。生きる事にとことん絶望していたわ。そんな時、かろうじて死なないで居ることが出来たのは先生が支えて下さったから。その先生が亡くなって、私はこの世の中に有り続ける事すら耐えられないほど辛かった。生まれたばかりのあの子の確かな命に触れて、その命を慈しむことは……なんといつていいのかな、天の助けに等しかった。あの子を抱きしめて、魂の重さを実感するときだけ、私はどんな命でも粗末にしちゃいけないと思えた。ウォードは私の生き甲斐だった。でも、父親のシェーネにしたら迷惑だったでしょうね」

静かだった。このあまりにも閑散とした部屋で聞くその話は、翔虎に彼が決して幸せな人間でなかったことを確信させた。ここでも自分は恵まれすぎた引け目を感じなければならぬのだろうか。だが、少なくとも死を望むほどの不幸を小早川が抱えていたなどと、そう容易には信じる訳にはいかない。彼はジ・アースという最高学府で一角の地位を築いた勝者の筈だ。

「俺には分からない。徹さんはジ・アースで成功した人だ。地位もお金もあつたろうし、その葛城さんという恋人がいて、イリアナさんという理解者が有って、何処に死にたいなんて思いが有るんだ。それじゃ、スラムのゴミ溜から始めたリンダなんか、どうやってら絶望せずにいられるというんだ」

また、小早川は体勢を替えて天井を拝んだ。無精にも寝たまま要求する。

「翔虎ちゃん、私の煙草とつて。火もね」

仕方ない、偶には彼に使われると言うのもいいだろう。と、翔虎は立ち上がって床の作業着を取ると、何時も小早川が煙草を入れているポケットを探す。吸い殻入れだけには手を入れたくなかったので、覗きながら確かめる。全く、ポケットの中に仕切があったり、もう一つのかくしポケットがあったりしてややこしい。

「煙草の入ってる隣にライター有るわ。同じ所にセイの写真も有るから、見たかったら見ていいわよ」

捨てた女の写真なんか普通持つてるかね、と、呆れながらも、好奇心には勝てなかった。煙草を見つけてベッドに寝ている小早川に一本投げた後、隣のポケットを見る。確かに使い捨ての安物ライターと共に、プラスチック板に挟まれて保護された、やや小ぶりの写真が入っていた。其処にはちよつと硬い表情で写ってしまっているが精悍な印象の、さっぱりと刈り込んだ黒髪の鮮やかな好青年と、その彼と腕を組むには若干年輩に見える、だが、一種独特の雰囲気がある女性が写っていた。

この人に捨てられる女といった儚げな印象などはさっぱり無い。彼女の表情は厳しく引き締まり、恋人と記念写真を取っているというより、これから戦に赴く戦士でも通じる鋭い目つきだ。只の写真を通してさえ、冴え冴えと人を見透かすような瞳が清冽だ。威圧感たっぷりのこんな人が、男との恋に情熱を注ぐとは思えないし、まして隣に写っているような若造を侍らせて喜ぶようには思えない。と、翔虎はすごいことに気付いてしまった。この目、この顔の形。「これ、まさか、徹さん？」

「あつたり前じゃない。いくら私が趣味悪くても、他の男と昔の自分の女が腕組んで写ってる写真胸に入れて歩くほど酔狂じゃないわよ」

それもそうかと思わないでもないが、幾ら何でも変わりすぎだ。この魅力的な若者がジ・アースでも選りすぐりの頭脳の持ち主だったのだ。さぞかし女にもてたに違いない。

写真は個人の温室の中のような。様々な種類の形と、色々な緑の色に溢れている。そして、ところどころ散っている華やかな色は、何の花だろう。全く、同じ地球育ちでも、小早川と違って自分は植物の名前が見事なくらい全然分らない。亡くなつた霧島の爺様も、翔虎に花の名前を覚えさせることを断念したくらいだ。

「この人、年上でしょ」

「そりゃ、見れば分かるでしょうが。私より五つも上。彼女は強い人。凄くね。もとはリンダみたいなスラム地区のストリートチルドレンで、自分の才能と努力だけで成功した人だから、男の支えなんて基本的に必要なんて思ってもいない。でも、その人がたつた一人だけ愛した人が居るの」

「それが徹さんってわけか、普通別れた人とのことのろけるか」

翔虎が言つと、小早川は自虐的ともとれる渴いた笑い声を立てた。「だったら、私も幸せだったのだけど。生憎私はその人に似てたに過ぎないわ。私と彼女が出会ったとき、彼は既に故人でね。死人には永遠に敵わないなんて基本的なこと、それすら解らないほど私も初心だったって訳。なんでなのか理由は未だに思い当たらないけれど、あの人が欲しかった。でもね、努力は色々したんだけど包容力なんてなかったから、結局彼女を傷つけただけだった。とつくに棺桶の住人に成つてる癖に、あの人の心の中に生き続けて、支えになった人とは最後まで比べものにもならなかった。負けたのよ。私はだからあの人から逃げた。捨てたなんてのは、負け惜しみ」

小早川の口調は淡々としていた。だが、翔虎には何故今、彼がその話を自分にする気になったのかの方が疑問だった。今まで六年。彼は一言も自分にそれらしいことすら言わなかったのだ。なぜ今更と思う。それに女との争いが彼が人生に絶望した理由なら、ちよつと軟弱に過ぎる。

「翔虎ちゃん、火も取つてよ」

すっかり忘れていた。翔虎がライターも軽く山なりに飛ばす。小早川は手を延ばしたが、掌にあたっただけでつかみ損ねた。それはそのまままっすぐ落ちて小早川の額を直撃した。

「痛あ。コントロール悪いわね」

受け損ねたのを棚に上げて、よく言う。

「はいはい、失礼しました。今までそんなこと聞いたこともなかったな。何で今話してくれる気になったんだ？」

小早川は今言うべきか、黙っているかを迷っている風だったが、きつぱりと言った。

「私ね、船降りようかと思って」

あまりに簡単に言ってくれる。その態度に翔虎は危つく逆上しかけた。

「何馬鹿なこと言ってるんだよ。今まで努力して、去年一級機関士になったばかりじゃないか。曙丸はそりや花形航路の一級船舶じゃない。でも、良い船だ。それはお前だつて分かつてるはずじゃないか。なんで、そうあっさり捨てられるんだ」

小早川は体を起こして、胡座をかくと煙草に火を付けた。煙草を好まない翔虎には一層煙が鼻につく。煙を深く吸い込んで、長く吐き出すと煙草を持っている手で頭をかいた。

「別に今直ぐつて言ってるわけじゃないわ。ちゃんと後任の機関長に相応しい人が来て、曙丸のこと引き継ぎして、の話よ。前から考えてた。ウオードに今必要なのは、曙丸の小さい世界じゃない。もつと人と係わる、生きた友人関係を築ける同世代も、理解を超える価値観で生活を荒らす他人とも、隣同士で生きていく環境。シェーネにも言ったわ。高等部はちゃんと通学させた方が良いつて」

「それは、そうかもしれないが、お前さんが船を降りてサンガでウオードと暮らすつても、どつかずれてないか」

翔虎の語調には呆れているといった響きがあつたはずだ。

ウオードに少年らしい生活が必要と言うことは、翔虎にも良く分

かる。だから、彼が高等部は通学させようと言うのには頷ける。だが、所詮ウォードは小早川にとって他人なのだ。過去の全てをウォードと暮らすために投げて、今また彼のためにやっと確立した現在の仕事を捨てるといふのは、解せない。ああそうだ、でも、今彼は松姫に誘われているのだ。今より高収入は間違いないし、やり甲斐の点から見ても元々新人のことを専門にしていた自分の知らないドクター小早川にならずに不足はないはずだ。

「ウォードと暮らすとは言ってないわよ。だって、あの子にもう私は必要ないもの」

「必要ないわけ無いだろ。ウォードはお前さんが育てたようなものだし。第一矛盾してるぞ。さっきはウォードが何より大事だって言ってたじゃないか」

小早川はゆっくりと頷いた。

「大事よ。何より。誰より。だから、何時までも私なんかが係わっちゃいけないのよ。今まで諦められなかった。もともとずっと一緒に居たかった。でも、今度の新人の事、セイのこと、全部捨てたって言うより尻に帆かけて逃げて来たことが追いかけてくるとね、年貢を納めなきゃって思うのよ。私が幸せなんかを味わってはいけないうて事を、ようやく思い出したわ」

そう言った小早川の瞳は、暗闇を宿す虚空のようだった。一瞬翔虎は背筋が凍るほどの冷たさを味わっていた。だが、ここで納得してなるものか。こっちは伊達や酔狂で脳天気の看板を背負ってるわけではないのだ。

「幸せを味わっていけないなんて、そんな馬鹿げた考えがあるもんか」

なんとか反論を口に出す。小早川はにつこりと満面に微笑みを浮かべた。その凄絶さといったら……。人を和ませない笑顔というものが有ることを翔虎は初めて知った。小早川のその笑顔は、苦しみの無表情より深い苦渋に満ち満ちていた。

「翔虎ちゃん私は私のことを知らない。私が翔虎ちゃんのことを知ら

ないのと同じくらいにね。だから、説教は無用よ。大丈夫、起床時間までには翔虎ちゃんの知ってる曙丸の修理屋徹さんに戻っておくわ。愚痴はお終い。私は寝るからお休みなさい」

それ以上、小早川が何も話す気はないということがはつきりと分かる、容赦ない口調だった。翔虎は小早川の断言が恐ろしかった。六年寝起きを共にして、彼のことを知っているつもりで居た。それをお互いに何も知らない他人のだと宣言されて、言い返せない自分が悔しかった。悔しさが翔虎に決心させた。知らないなら知ってやる、と。勝手にいつ死んでもいい、不幸になるのが当たり前人間にさせておくものか。

「ああ、徹さん、お休みなさい。でも、俺は少なくとも曙丸の修理屋徹さんは知ってる。徹さんは俺が信頼する腕っこきの機関士で、信頼できる男だよ。彼と付き合うのを止める気は更々無いからな。宜しく伝えといてくれ」

扉が閉まる音を聞きながら、小早川の心に暖かいものが押し寄せていた。だから、自分は翔虎が好きなのだ。あの時ウォードが救いだったのは本当だ。そして、今ではここの生活が何物にも代え難く好きなのも。だが、自分の本当の事を全て知ったら、彼らの何人が自分が存在することを許してくれるだろう。それを考えると、体中に恐怖が走る。かつて、自分をモノとして扱った連中に自分がしたことを知ったら、彼らは、それでも微笑んでくれるだろうか。

小早川は首を振った。理由がどうあれ、人は異質なモノを嫌う。異質な上に、凶悪な殺人者、許容される筈がない。だったら、傷つかぬ内に逃げて何処が悪いのだ。事実にも目を瞑って、誤魔化して生きることには馴れている。愛した人に憎まれて暮らす地獄も知っている。そこから逃げることなんぞお手のものだ。自分を愛する人などがいてはいけないのだ。

* * *

翔虎が暗澹たる気持ちで隣の部屋に行くと、翔虎の酒でシェーネが静かに音楽をかけて飲んでいた。誰かと共にならよくあるのだが、シェーネが一人で酒を飲むのは珍しい。

「バゲモン。来てたのか……」

「ああ、やらせて貰ってるよ」

シェーネはグラスを心持ちあげた。

「結構それいけるでしょ」

翔虎に笑って頷いて見せたから、シェーネは口を開いた。

「長かったな。ここにお前さんのボトルがあるから、待ってたんだが。それで、修理屋何か下らないこと言ってたかったか」

「いつてたよ。下らな過ぎて、毒でも喰らった気分だ」

「船降りとか、そんなことか」

今度も翔虎は驚くしかなかった。全く自分ときたら、何年も付き合っているつもりの方達の本当の気持ちを、欠片も察せ無いほどに立派な唐変木なんだろうか。

「ああ。何故そう思う」

「奴さん、曙丸に来たときな、ウオードを俺が手許に置くつもりなら、あいつが一人前になるまで乗り組ませて欲しいって親父さんに頼み込んだのさ。雑用でも何でも出来ることは全てやるし、必ずそれなりの資格も取って役に立ってみせるからって頭下げてな。今までも、修理屋は俺にウオードはそろそろ生きた社会で学ばなきゃいけない年になってるって説教垂れてたし、あいつが中等部卒業の合格通知を貰って、らしくもなくあの態度だろ。ウオードが船降りて、サンガで学校に通うようになったら奴も契約終了って考えてるのか

な、って思つてな」

「徹さん、本当にウオードのために船に乗ったんですか」
確かめるように翔虎が口にする。

「妙な奴だ。俺とイリアナの子になんで其処まで思い入れがあるのかな。俺はこの通り船しか知らないから、実際あいつが乳飲み子のウオードを世話してくれなかったら、お手上げだったと思う。俺も親父さんも最初は頭のいい、苦労知らずの学者先生に船の下働きなんぞ出来る訳無いと思つてた。それが、本当にどんなことでも手抜き一切せずやりこなして見せた。学者なんて奴に骨なんか有るか？ ていつてた親父さんが最後には舌巻いてたからな」

翔虎は今日はこの話聞く日なんだろうと思つて、腰を落ち着けるべくグラスの入っている棚から小さめのコップを選んで取り出し、シエーネの向かいに座り込んだ。何事も弾みがつくと言う時があるのだ。

「じゃあ、そもそも徹さんの雇用期限はウオードが船をおりるまでだったてのか」

シエーネは頷いた。

「今じゃ、もう俺と洞口位しか知らないだろうがな。だがな今の修理屋を船乗りとして役立たずの素人って言える奴もいまい。第一、今うちの船には奴が必要だろう」

翔虎は小早川の言つたことを全て整理し切れていなかったが、それだけが彼が曙丸を降りたいという理由とは思えない。それでは小早川が幸せになつていけないと自分に戒める訳も分らないし、ウオードと何時までも係わつていてはいけないという言葉が本当に意味する事の説明にもならない。

「徹さんは優秀な機関士ですからね。なにより曙丸を知り尽くしているから、安心して任せられるし、彼が船を降りようとしている理由がそれだけなら俺が引き留めますよ。でも、俺さつき徹さんと話してて、そんな単純じゃないもつと別の訳があるって気がしてならないんですよ。なんで今なのだろうと思いませんか。徹さんがおか

しくなったのはサンガで新人の面接しにいった辺りからの気がするし、今日特別変になったのもウオードの合格からじゃなくて、姉さんから葛城という名前を聞いてからじゃなかったですか」

シェーネが煙草に火を付けようとするのを見て、うんざりする。全く愛煙家と話すと煙から解放されることは無さそうだ。

「セレンシイ葛城か……。小早川、自分でお前に何か話したか」

「ああ、なんか昔の徹さんの女とか言っていましたよ。俺、実は徹さんがイリアナさんに惚れてて、それでウオードに思い入れが有るんだって思ってたんですよ。だから聞いたら分からない事がふえちゃいました」

シェーネが同意すると言ったように何度か軽く縦に頭を動かしてみせた。

「お前も思うか。俺もな其れだけはずっと分からないんだ。尤も、奴がイリアナに惚れてるんじゃないかってのは、俺自身が随分疑った事なんだがな。イリアナはあいつを何時も手許に置いて使ってたし、助手として奴はイリアナの家に住み込んでたんだよ。まあ、奴とイリアナが何でもなかったのは確かなんだが」

「自信たっぷりですね。女はわかりませんよ」

翔虎が混ぜっ返すとシェーネは酒が回って口が軽くなっているのかあっさり続けた。

「抱けば分かるだろ。他の男知ってるかどうかなんてのはな」

しらふの翔虎の方が赤くなる。

「あ、左様ですか。それは野暮を申しました」

翔虎は照れ隠しに巫山戯たが、シェーネは取り合わずに話を続けた。思い出しながら喋っているのか、ことさらゆっくりとした口調になる。

「だがな、俺も若かったから、イリアナが奴と暮らすのが釈然としなくてなあ。で、どうせ近所にセイが、ああ、セレンシイの愛称なんだが、セイが住んでいるのだから、追いだしちまえて言ったこ

とがあつたんだ。イリアナがそのとき妙なこといってたよ。小早川って奴は誰かが必要としてあげなければ生きていけないとか、セイと小早川はお互いを不幸にするために愛し合つてるとか、なんとか全く頭のいい連中てのは、どうも複雑でいかな」

翔虎の頭の中で、今日聞いたことが次々と思いつきこされてきた。

だが、肝心の真実はまだ遠くにかすんでいるようだ。

「セイって人の写真も見せて貰った。何か、怖そうな人だったな。それと若い頃の修理屋が写つてて、驚いた」

シエーネが声を立てて笑った。

「あいつ、いい男だったろ。今だって、あの妙な格好止めれば、きつとお前さんよりもてるぞ」

「ふん、どうせね。でも、いつから徹さんあんな風になっちゃったの」

シエーネは思い出していた。

「ウオードを連れてきたときはあんなだったから、戦争に行った後だろうな。奴は新人方だったのさ。いくら戦争つて免罪符があつても人を手に掛けたら、真面目な奴ほど切れちまうのかもな」

あまりにあつさり言ってくれる。それで俺は悩んでたつていうのに。

「知ってたんですか。俺は知らない物だとばかり」

今度はシエーネが驚く番だった。

「奴さん、お前にそれ話したのか。やっぱり奴はお前を余程信頼してるんだな。奴は滅多な事じゃ戦争中の話はせんからな」

だったら、自分を本当に信頼してくれているのなら、小早川はもっと分かり易く全てをうち明けてくれるはずだ。翔虎の心の中でされた反論に当然気付かず、有る程度まで話しても小早川を傷つけないだろうと安心したかのように、シエーネは堰を切ったように話出した。

「当然俺は反対していたんだが、イリアナは新人擁護運動家だった。

ただ、彼女はハト派で武力行使はあくまでも反対していた。小早川も若かったんだな。イリアナの所から出て、新人方に走った。でも、一月もしないで新人軍からも袂を分かつてジ・アースに戻ってきたらしいから、やっぱり武力闘争は奴に合わなかったんだろう。あの爆破事件でイリアナは死んで、あいつはジ・アースを捨て、ウォードを連れて此処に来た。あの事件のどさくさに消えたから、奴は巻き込まれたと思われて、死人にされちまったんだろうな」

翔虎は今はその話を聞くことに集中していた。なぞの手がかりはここにあるのかもしれないのだから。シェーネは翔虎にというより自分に話をしている風に言った。

「何故かな。俺はイリアナの夫だった筈なんだが、彼女の人生に奴ほど係わることは出来なかった気がする。ウォードが生まれたとき側にいたのも、イリアナの死の時近くにいたのも奴だ。俺は何時も何千光年も隔たった所にしか居なかった。俺は奴がウォードを俺の側で育てたと言って来たとき、殺したいほど憎かった」

殺したいほど憎かった。シェーネはそう言ったが、その表情はごく穏やかなままだった。きっと今ではそんな思いは遠い過去の物なのだろう。

「今はな、感謝している。ウォードは俺にとって何者にも代え難い家族だよ。不思議な物でな、幾ら男と女として愛し合っても、共に生活をしたことがないと、家族って実感が希薄だよ。まして女房の腹のどかいとことか、生まれた瞬間を知らない息子なんざ、こうやって手元で育っていくのを見なければ、きっと自分の子だなんて思えなかったろうさ。男なんて薄情なものさね」

翔虎はシェーネの口調に紛れもない真実を感じ取っていた。確かに男なんてそんな物かもしれない。

「だがな、あいつが何故自分自身の家族を造る機会を捨てて、ウォードを見守り育てる方を選んだのか、それは俺にとっても長年の疑問なんだ」

「徹さんは、セイさんが好きだった人に敵わなかったって言ったよ。その人は徹さんが彼女に会ったときにはもう亡くなっていたらしいんですけど。その人のことは何か知ってますか？」

シェーネは頭を振った。それは彼も初耳だったらしく驚いたようだった。

「セイに男がいたのか。なんとまあ、あの人にもねえ。写真見たって言うってたな。セイはなんつうのか迫力のある人で、その年頃の女性の持つ艶みたいなのになさっぱり縁のないって様子だったから、正直、あいつが何で惚れたのかだって俺には不思議だったよ」

翔虎は笑いそうになった。自分も『いくら出会いに乏しい職場だからって、リンダ何かに惚れなくても』と柳に軽口を何度も叩かれている。あの手のきつい人が、心を許した特定の者にだけ垣間見せる柔らかな表情。あれを引き出せた快感は実に堪らないものがある。男に媚びを売るのが常道の女と全く種類の違う色気があるのだ。小早川はリンダも好きだと言っていたし、彼と自分は女性の好みは似ているのかもしれない。

「何にやついてるんだか。でもな、セイと居るときの小早川は幸せそうだったよ。少なくともイリアナが言うような、お互いを不幸にし合ってる関係には見えなかった。だから不思議なんだよ。何故、奴がイリアナに頼まれたくらいで、セイよりウォードを選んだのか」
翔虎は、ふと何かを思いついたような表情をすると、手の中で遊んでいた為にすっかり温くなった酒を勢い良く飲み下した。

「今度、サンガに戻ったら俺一回地球に降りて葛城さんに会ってきます」

「はあ？ 何を言い出すんだ。いきなり。相手の迷惑つてもものも考えろ。彼女にしてみれば十年も前に終わった事だ。彼女が小早川に未練を持っていたのなら追いかけてきたはずだ。彼女は男が帰ってくるのをしおらしく待ってるような玉じゃない。第一彼女だって結婚してるかもしれないじゃないか。家庭を築いていたなら、今更小

早川を持ち出すのは家庭不和のとんだ火種だよ」

翔虎は、ちよつと考えて頷いた。

「仕事場の方に訪ねてみます。もし彼女が忘れてしまっていることなら、会ってくれないでしょうし、そのときは潔く諦めます。でも、もし徹さんのこと少しは気にかけてくれていたりするなら、俺は彼女の知ってる徹さんの話を聞きたい。俺ね、徹さんを失いたくない。けどど知らなきゃ奴を引き留める言葉も出やしなひんです。徹さんが話してくれることも話せないことも知って、本当の徹さんに会いたい……」

シェーネはちよつと険しい表情で暫く自分のグラスを睨んでいた。

「人の話せないことに踏み込むのは危険だぞ。真の理解を得られるより、修復不可能な程に、いまある絆を壊しちまう確率の方が高い。それでも、やるのか」

翔虎は頷いた。絆を断ち切ろうとしているのは小早川の方なのだ。このまま手を拱いていても、早晚奴は黙って去っていくだろう。ならば、自分は賭けるしかない。

「そうか、ならば気の済むようにしろ。だがな、だれも傷つけないよう気を付けるんだぞ」

「ええ、努力します」

心から素直に翔虎は誓った。話は付いたとでも言うようにシェーネは腕時計を見た。

「もう結構良い時間だな。寝る前にオートパイロットのチェックにでも行くか」

翔虎がそれを聞いて時間を確かめる。確かに随分良い時間だ。

「いいですよ。俺が行きます。そんなに飲んでちゃ危ないですよ」
シェーネは首を振った。

「馬鹿言え、猪口一杯で潰れるお前さんよりや安全だ。といたい所だが、今はリンダが当番な筈だな。替わってやるから、さっさと行っちまえ」

翔虎は軽く手を挙げて気合いの入らない敬礼をすると部屋を出た。心もち顔が熱く、息が苦しい。本当に自分は酒に弱い。でも、酔えるというのはアルコールを楽しんでいるって事だから、洞口なんぞよりはよっぽど自分の方が酒を味わっている事になる筈だ。それにしてもシェーネにしては珍しく頭にアルコールが回っている。たしかにリンダは居るが、柳も操船室に詰めているはずだから、いい雰囲気になどなるはずがないのだ。

* * *

今日の成果は随分あった。そろそろきりにしないと、まずいな。

早乙女はヘッドホンを外して溜息をついた。ほんの悪戯心から盗聴器を仕掛けて初めての収穫らしい話だった。

盗聴器といつても精密機械に微妙に影響を与える電磁波の世話になる訳にいかないので、旧式も良いところの有線方式だ。丁度良いことに小早川の部屋の内、人の出入りの烈しいほうは壁一枚を隔てた隣にある。小早川の不在を狙って通気ダクトに沿って先にマイクを付けたケーブルを這わせただけの単純な物だが、新人の聴覚にも使われる高性能の集音機を使ったのは正解だった。ちよつとした出費だったが、値段に見合うだけの性能は併せ持っていた。

小早川の私室とはいえ、全員が気兼ねなく出入りしている場所なので罪悪感も殆どなかった。だが最初に躊躇いが有ったことも事実だ。彼らの輪に入れない素直でない自分がもどかしかった。それでも初めの内はばれたらどうしようとか緊張していた物だが、どんなことにも馴れるのが人の常で、最近では音楽でも聴くような気軽さでスイッチを入れる様になっていたのである。それに殆どがたわいもない雑談で、翔虎と洞口の酒談義とか、シェーネと柳の音楽論

争など、聞いてしまったところで申し訳ないと思うほどの話は確かに今日までの所無かった。

それが、今日は怒濤の展開だ。シェーネがサティのけだるいとも取れる音楽をかけながら一人で飲んでいるのを窺っていても詰まらないので、さつさと寝ようかと決めたかけていた。その時に、思いもかけずシェーネと翔虎が小早川の話始めたのだ。それは盗聴装置を仕掛けたとき期待していたはずのその話題だった。早乙女はつい聞き込んでしまいすっかり寝そびれた。小早川という人間の正体が、意識的に己を殊更に謎めかしているだけの普通の男が、本当に何かを背負って、何ものかから逃げている敗北者なのか、当然早乙女にはまだ分からない。だが、今日知った事実は紛れもなく彼の肖像を構成するジグソーの一片には違いない。早乙女は短い睡眠しか取れない時の起きる苦勞を考え、眠るのを諦めた。小型のコンピュータを机からだし、何やら遊びはじめるのだった。

第七章 糸口

第一のプロテクトはごく簡単なものだ。一応個人の情報を保護するという名目できちんと暗号化されていてキープログラムがなければ開かないように出来ている。だが、これを破るのは原理さえ知っていれば特にプロでなくとも簡単なことだ。パスをサーチするスバイプログラムを走らせれば良い。その証拠に彼の個人情報の手を依頼してきた旧知の悪友は次の第二プロテクトまで突破していると言っていた。

第一プロテクトの後で表示される事柄は名前、戸籍整理番号、住民票整理番号、性別、生年月日、学歴、職歴、犯罪歴といったごく普通の物だ。特記する必要がある程の発明や発見などをなし得た人物、政府関連職業従事者、前科所持者などは第二プロテクトで保護される。いわゆるプライバシーの尊重って奴だ。だが、世の中には例外つてものがあって、VIPと称されるごく一部の人間は戸籍や住民票の中身は恐ろしく複雑に暗号化されている。

第三プロテクトと呼ばれ、全パターン検索にスーパーコンピュータで一億年かかると言われる暗号化がされているのは、心当たる所では政治家や首席外務官などの高級官僚。軍関連上層部だのや、主要企業の役員クラスといったところか。連中には余程悪いことをしているという自覚があるのか、自分の身を守るために個人情報を守守する必要を感じているらしい。この第三プロテクトを解除させるプログラムを走らせるには、それを設定した機関の現在の責任者のキープログラムが必要になる。

（こりや、たしかに異常だな）

ジュン・ラテオスは砂糖もミルクも自分好みに調整されて出てくる、自分専用のドリンクメーカーから大きめのマグカップにたっぷりとコーヒーを注いだ。この人物は政府の要職についているわけで

もないし、過去に公的な実権を握ったこともない筈だ。確かに、超エリートとしてそう言う立場に付ける才能と可能性はあったに違いないが、自ら捨てて失踪し、一時は死人と思われていた人物だ。だから、第三プロテクトが掛かっているのは異常事態といえるだろう。専門大学時代、よく一緒に過ごした早乙女信吾は、卒業後一流企業といわれる会社に入り、別にそのまま平穩に年を重ねて行くばかりになっていたはずだった。それが、三年ほど前に現状にキレたのか、その会社を辞めてしまった。そして恒星間航海の宇宙貨物船に通信士として乗り組んでいると、簡易宇宙服姿で浮かんでいるとおぼしき写真が印刷された葉書で知らせてきた。あの時は本当に驚いた。ジユンの知っている早乙女信吾は平凡を絵に描いたというか、特に現状に不満が有ったところでそれを押さえ込んでしまうタイプだった。

信吾は、いかに嚴重な保護が掛かっているデータバンクに侵入できるソフトを作れるかを競争していたような自分たちと違い、ごく真面目で面白味に欠ける男だと思われていた。実際に交友範囲はそれ程広がった感じではない。あいつにいわゆる平凡な日常を蹴って何かに挑戦するような情熱があるとは思わなかった。まあ、挑戦ではなく逃避だった可能性もあるけれど。

ジユンと信吾の共通点は唯一、食い物の趣味に尽きた。自然派食品、天然物フリークという。そりゃ、工場で管理栽培される食品は、衛生で安全かもしれない。だが、味が違うのだ。ルナ自治区なんぞでは、地球の地面産の野菜や地面育ちの肉は、贅沢品で学生がそう簡単に手の出せるお値段ではない。でも有り金はたいてでも月に一回は専門店に行つて、豪勢にやるのが楽しみだった。信吾との交流は美味しい記憶で彩られていて、信吾の内面が自分に判っているわけではないけれど、友人であることに異論はない。

そのジユンにとっては仕事の内容などどうでもいい事だった。天然物が気軽に買えて、上手くすれば自分で地植えの野菜を栽培でき

る地球に住むのが、ジュンの幼い頃からの憧れだった。現在ジュンは念願になって、地球にある国際連合機関事務局の情報管理室に勤務している。一方で、その立場を悪用して裏で個人情報を利用して小金を稼ぐというアルバイトをしていた。国連に参加している全ての国のデータバンクに容易にアクセスでき、そういったバイトをしてきた先輩達が売ってくれる上級キープログラムを利用すれば、国が管理している情報で有れば簡単に入手できる。この手の違法は彼の職場では伝統的な商習慣と化していて、先輩が「売ってくれる」と持ちかけてきた情報を買わないと、その他の仕事がやりにくくなってしまう事もある。清廉潔白とは対極の日常で、高潔な意志の持ち主でもなければ、どうせ買われるのだし元手くらい回収して当然だからと安易に転売にはしる。勿論共倒れは誰もしたくないので、流し先にだけは気をつかっていた。

国家気密うんぬん言うわりに、詰めがあまりのがうちの国の欠陥の一つだ。普通は国家気密に対する保護は、民間のマネートレード絡みのネットサービスの最大手が普通に引いているものより甘い。今どき、場所を特定するような即時コールバックシステムも搭載していない、登録者の生体認識もしてこないのだからチョロいものだ。

ジュンも当然、先輩に金を貢ぐだけで見返りのない出費を我慢するのは趣味に合わなかったから、この副業に手を延ばすのにさしたる躊躇はなかった。第一国が管理している個人情報なんて微々たるものだ。現住所や学歴、職歴なんぞを秘密にする必要はないと思うし、秘密にするような奴にろくなのは居ないというのが持論だった。金まで払って誰かの過去の表面を知りたいという人間の気もしいないが、それなりに生活を潤してくれるバイトを止める気もさらさら無い。

そんなバイトをしているのを公言した事実はないのだが、何故か早乙女信吾が専門大学卒業以来全く付き合いの無かったにもかかわらず、個人情報入手しやすい職場にいるというだけで接触を持つ

てきたのだった。予想外であり、早乙女がその気になりさえすれば情報収集能力は抜群だったのだと改めて思い出させられた事でもあった。

彼の話の聞いている内に俄然興味が湧いてきた。ジ・アースの総合大学を首席で卒業し、それなりの成功を収めてもいた。そんな男が戦争のどさくさに紛れて失踪し、今信吾の乗る船の一乗務員におさまっている。信吾でなくとも、何故彼がそうしたのかは興味の尽きないところだ。そしてちょっと好奇心が暴走して彼の過去の足取りを調べてみようとしたとき、第三プロテクトなんぞに邪魔されたら、興味は嫌が上にも増すって寸法だ。

（こいつはちょっと慎重にならないとやばいかな）

ジューンは自分ではお洒落だと信じている長い前髪をちょっと指先で払った。上級キープログラムを設定した機関さえ判れば、別に気合いを入れなくても二、三日かけてゆっくり手持ちのキープログラムを利用して進化する保護プログラムの隙をついてやればいい。人間の作るものは人間に破れない訳がないのだ。だが、今回はどのキープログラムがビンゴかを見極めるのが一仕事だ。単なる一般人でここまで個人情報保護されているケースはこの商売を始めて五年になるがお目に掛かったことがない。万一国家機密に係わるような理由で保護されているなら、それこそ洒落では済まされない。ジューンはゆっくりと時間をかけてコーヒーを飲みながら、キープログラムリストが入っているマイクロメモリを睨んでいた。第三プロテクトが掛かっているデータにアクセスする場合、三回続けて同じ回線で、違うキープログラムを走らさしてしまうと漸く重い腰をあげて逆探知が掛かるので、そこは慎重にしなければならない。

（旨い飯を奢らせるぐらいで、刑務所行きじゃ割に合わんからな）

公衆回線でトライする事に決め、ジューンは出掛けることにした。幸い今日は素晴らしく天気の良い日で、面倒くさがりを自認する彼でも出掛けるのが苦痛にはならない。

公衆コミュニケーションボックスやポイントを渡り歩きながら、見当を付けた幾つかのキープログラムを試したが、全く当たりが来ない。何時もならプロテクトをかけた人や機関を見当をつけるのは容易だ。しかし情報が少なすぎる。犯罪履歴を管理する司法局の暗号解除プログラムや、実は工作員かなにかと想定してジ・アース管理局がらみのそれも試した。果ては国家機関のプロジェクトに水面下で参加していたと想定して、彼の国籍のある極東アジア国行政関係まで試してみたが全くかすらない。

（そろそろ、ネタが尽きてきたぞ）

いくらなんでも一力所で二回のトライを限界にする今のやり方のアクセスで、膨大ではないが少なくもないキープログラムリストを全件試すのは非現実的だ。それに調べたい動機が早乙女信吾の単なる好奇心では危険を冒す苦勞に対する見返りが少なすぎる。プロテクト破りに機械より人間様が優れているのは、対象になる人物の環境を分析して、どの辺の機関もしくは権力者が、その人物の情報が外部に漏れるのを好まないと考えているのか分析できることに尽きる。これがなかったら、検索速度でも実効速度でも絶対にコンピューターに敵うわけがないのだ。

今回、仕事の難易度を上げているのは、一にも二にも小早川徹二という男についてジューンが知らなさすぎるという事に尽きる。ごく一般情報で入手できる経歴に謎の空白期間もないし、実は特務警察員だったりしてと、突拍子もない想定もしたが、あっさりスカつた。

もしプロテクトをかけたのが、単なる小早川の個人的な趣味で、彼自身が個人データ管理プログラムに侵入して彼のキープログラムを設定しているなんていうのが、オチだったらそれこそ解析にスパコンで一億年だ。ばかばかしい。キープログラムリストの検索項目を抽出してあるノートをめくりながら、公園のベンチで缶コーヒーをすする。矢張り自分の家のマシンで造る方が美味しいとしみじみ思う。軍。本当に何気なく、その文字が目飛び込んできた。

（一般人に一番縁のない所じゃん）

いい加減に嫌になっていたジューンは後一カ所で試したら帰ろうと決心した。足がつかないように現金でアクセスしているので、プリペイドカードの残高も尽きてきていた。

（絶対に高級自然農産物、自然畜産物だけしか出さない店でのフルコースだ）

そう嘯いて、目に付いた公園の出口付近にあるボックスに向かった。

極東アジア軍の長官パスを試そうなんて思ったのは、貴重な休日を棒に振った腹いせだった。幾らスリルがあっても軍とヤクザは相手にするべきでない。それが、ジューンの信条だった。これは一生使うことの無いと思っていた分だ。ビンゴしてしまったら、ちょっとしたスリルで済まないが、絶対に当たらない自信がある。

（えーと、極東アジア国軍、総理府長官。ほら、外れ）

ジューンはその直ぐ下の国防総省長官のキープログラムを走らせた。
（げ、まずい）

その瞬間、ジューンは体中から力が抜けそうになった。

（なんで、こんなもんが通るんだよ、個人情報だぞ）

烈しく心の中で文句を叫んだが、時既に遅くものキープログラム解除中を知らせるインジケーターが動き出している。軍のスパイウェアバスターのプログラム更新頻度は笑い話のネタみたいに鮮度が命。暫く弄っていないジューンのプログラムでは何処かで当然ストンプがかかるはずだが、それを待たずにプログラムを終了した。入ろうとした場所が悪すぎる。これで目出度くジューン・ラテオスはばれた暁には実刑三十年が確定してしまったことになる。とにかくこの場所から離れなくてはと思い、パソコンをできる限りの速度で鞆に押し込むと、ジューンはボックスを飛び出した。外は相変わらずのいい天気だ。なんとなく当たりを見回して、別に変わった様子がないのを確かめ、ジューンは足早に公園の外に停めてある車に向かった。

* * *

リンダと交代したばかりの早乙女信吾は寝る前にお茶でも飲もうと居間に立ち寄った。そこではウォード・リヤドが高等部の教科書を広げていたが、別に勉強しているわけでも無さそうだった。

「ウォード、珍しいね。徹さんの部屋でやらないのか」

なんとなく声をかける。この大柄な気の良い少年が小早川の人生に影響を与えているのは間違いない。子供という存在は彼らが意識するしないに係わらず回りの大人に何らかの影響を与えている。かくいう早乙女は子供が嫌いな方で、曙丸に配属されて一番気に入らなかったのが、何を隠そうこのウォードだ。子供は敏感なもので、彼は特別ウォードを嫌っている態度に出した覚えはないのだが、あまり早乙女には近寄ってこない。

「うん、なんか僕修理屋を怒らせたみたいなんだ」

「なにかした覚えでも有るのか」

「全然。でもさ、不機嫌な修理屋は怖いからね、理由も聞けやしない」

早乙女は不思議だった。小早川の不機嫌はあの日一日だけだ。

「もう徹さん普通じゃないの」

ウォードは思いつきり頭を振った。

「とんでもない、あの人は怒っていても泣いていても、につこり笑ってるんだ。でも雰囲気わかるよ。凄く不機嫌。余計なこと聞くなってこの辺に書いてあるもん」

ウォードが自分の頭の上で手を回したのが可笑しかった。

「ウォードは徹さんのそういう事分かるんだ」

早乙女が言うとウォードは心なしに元気になったように身を乗り出してきた。

「修理屋とは付き合い長いからね。あの人の笑顔に騙されて何度痛い目にあつたか。修理屋は手が早いんだよ。流石に最近はあるまりぶたれないけど」

早乙女は可笑しくなった。この体格の子供じゃ小早川も持て余すつてものだ。

「あの人はああ見えても怪力なんだ。早乙女さん、知ってる？」

「怪力つて、そんな風には見えないよ。私と同じで力の方は空つきしの方じゃ無いのか」

ウオードは思いつきり首を左右に振って見せた。

「とんでもない、あの人に押さえつけられたら体なんか動かないよ。それで尻なんかぶつたたかれた日には一日まともには座れないんだ。父さんと違って修理屋は子供は体に教えることも必要って人だから油断できないんだよ」

早乙女は吹き出した。シェーネと小早川の外見からはまるで逆のイメージしか汲み取れない。

「シェーネは殴らないのか」

「うん、殴られた覚えはないな。でも説教は長いから、どっちかを選べって言われても悩むけどね」

ウオードのしゃべり方はそれでも二人への愛情が溢れている。鬱屈していても育ててくれた者への絶対の信頼は揺るがない年頃だ。自分もこのころはあの両親に逆らうことなど思いつかなかった。そして、勉強だけして言われたとおりに一流といわれる会社に入って、何かが違うと思ったのはそれからだ。

ウオードが中学を卒業できたことが分かってからの小早川は、おっぴらにウオードを曙丸から下ろして、シェーネからも少し離れて普通の学校に通わせるべきだと口にするようになった。だが、一見乱暴に見えるこの意見は多分きつと間違っではない。何時も他人の決めたレールの上を歩くことしかしていないと、自分の足で走れることを忘れてしまう。何かをやり残したことに気付いても、普通はやり直せる場所にいない。あの盗み聞きした小早川も船を降り

るという話はあれから全く出てこない。小早川に本当に船を降りる気なのかどうかを問いただきたい気もする。だが、小早川が船を降りたいと言ったことを知っているのは翔虎とシェーネだけの筈なのだからそうする訳にもいかない。

「ところで、この航海が終わったらサンガに住むのかい」

ウオードは首を振った。

「僕は降りない。ここは僕の家なんだ。修理屋が何考えてるのか知らないけど、僕は父さんが定年になって船降りるまではここに居るんだ。でも、なんで修理屋急に冷たくなっちゃったのかな」

ウオードには寂しさを隠すほどの大人臭さはまだ縁がないようだ。早乙女は自然微笑んだ。感情を素直に表に現せるというのは羨ましいことだ。

「子別れって知ってるかい。地球に生きている野生の動物を観察したドキュメンタリービデオなんかを見ると分かるけど、凄いなだよ。今まで自分の身を削って大事に育てた子供が一人前になったのを知ると、それこそ牙を剥いて襲いかかって自分の縄張りから追い出さるんだ。野生の環境じゃ、大人の個体が幾つと同じ場所で食べていくことは出来ないこともあるし、大人のオスは我が子であっても縄張りを争うライバルなんだ。子供は親に突き放されて、一人の力で生き抜くことを決めて初めて大人になるんだ」

「人間には縄張りはないよ」

早乙女は頷いた。

「そうだね。例えば話って奴さ。でも、僕なんかは親が甘やかすのを止めてくれないで、結局自分がやりたいことをしてないのに気付かなかった。君くらいの時に親が自分のしたいことをしろって突き放してくれたら、全く違った人生を悔いなく生きていけたような気がする」

「じゃ、後悔でもしてるの」

これだから、子供は嫌いなのだ。甘い顔をするとうすぐつけ上がって無神経な質問をする。

「さあな、少なくとも満足はしてないな」

早乙女の気持ちが変わったことにまるで気がつく様子もなくウォードは呟いた。

「じゃ、修理屋もそうなのかな。まだ、僕の事好きでいてくれるのかな」

早乙女は怒り続ける気になれずに、溜息をついた。

「僕には小早川さんの気持ちは分からないが、離れて暮らした方が良いくかついていた方が良いというのと、好き嫌いは別問題だと思うよ。恋人とか奥さん、幼い子なんかはくつついている方が正解と思うが、それ以外ならお互いに自分の道を歩きながら認め合っていくのも道だと思う。今小早川さんが、君は学校に通った方が良いくというのと、好き嫌いは関係ないし、君に一番必要だと思うことを口に出していつてくれる人に愛情が無いわけ無い。そうは思わないくい」

ウォードは頷いた。そして顔を上げると明るく笑った。

「有り難う早乙女さん。なんか元気が出てきた。修理屋の部屋行ってみるよ。ごめんなさい、僕早乙女さんのこと誤解してた。なんか人のこと突き放して居る人かと思ってたけど、優しいんですね」

面と向かって言われると照れくさい。実際に自分はウォードを嫌っているのだから、ウォードの直感の方が正しいのだ。

「僕は子供は苦手なんだ」

正直に言ったが、ウォードは笑って取り合わなかった。

ウォードがにあわただしく勉強道具をまとめて、駆けるように部屋を出ていった後、少してシェーネが入ってきた。

「早乙女君、悪いが途中から話を聞かせて貰っていた。済まないな。小早川がウォードに船を降りて学校に通った方が良いというのが、好き嫌いとは別次元の話だと私が何度説明しても分からせることが出来なかった。私が言うことでは、あの子は信じてくれない」

早乙女は頭を振った。

「信じていないのではなく、自分を傷つけまいと優しい嘘を言っているのだと思ってしまうのじゃないか。ウオードは誰よりシェーネさんと小早川さんを信頼してますよ。他人の僕の目にも明らかなくらいね」

シェーネは溜息をついた。自分もどうやらウオードと同じようにこの男を見誤っていたようだ。取っつきにくくて暗い男だと思っていた。リンダと交代した非番の時にも殆ど自室にこもっていて、酒も煙草もやらない、無駄話もしない、取りつく島のない男。これは洞口や柳も感じていたらしく酒の愚痴の席で、何度も妙な奴ですよ、ね、という話になった。ただ翔虎だけが、夢のために未知の業界に突っ込む様な熱い男が、嫌な奴な訳無いと庇っていた。人間関係はつくづく相対的な物で、寛容な翔虎には早乙女も信頼を寄せているらしく、エアロックで無重力体験したいとか、そんな無邪気な頼みを翔虎にだけはしているようだった。

「早乙女君も普段からもつと居間とか小早川の部屋とかに来て、いろいろと話をしてくれればいいのに」

急にそんなことを言ったシェーネに、後ろめたいところのある早乙女は又しても暗く顔を伏せがちになってしまう。

「僕は睡眠時間を沢山取りたい方なんですよ」

この件だけですっかり早乙女に好意的になってしまったシェーネは、疑うことなく額面通りに受け取った。

「なんだ、ただの寝ぶとだったのか。今度早乙女君が部屋で何してるのか聞く奴が居たら、寝てるんだって説明しとくよ」

シェーネのいかにも船乗りといった感じの単純さ。ねじくれた人間関係に疲れ切って、人と接することにくつろげなくなっていた早乙女は面食らっていた。もしかして、この人達には普通に喋ってもそれを曲解したり誰かに尾ひれを付けて話されて痛い目にあったりしないのだろうか。だとしたら、自分が進んで距離を保とうとしていたのは過剰防衛なのか。早乙女は話の輪に加われないからと人の集まる小早川の部屋を窺っている事に対する罪悪感が急激に湧き出

た。

「寝るのも良いが、たまには一杯つきあえや。早乙女君もまるで飲めないって事もないだろう。こんど小早川の部屋に行くときに誘うから起きろよ」

シエーネに言われ、早乙女は何となく勢いで頷いた。

驚いたことに、シエーネは早速、船内時間で夜と言われる二十一時過ぎに早乙女の部屋を訪れた。彼が十五時当番を終えた二十一時から、居間で小早川の用意してくれた食事を取り、その後部屋に戻ったが、すぐに寝る気になれなかった。かといって盗聴器のスイッチを入れる気もせずにベッドに寝そべっていた時に、起こすな表示を出していたにもかかわらず、呼び出しベルが鳴ったのだ。怪訝な面もちでビジフォンをおこすとこれ見よがしに酒瓶を掲げたシエーネが居た。

「やっぱり寝てるんだな」

寝乱れたベッドが写っているのだろう。しまった、映像はオフにすれば良かった。だが、早乙女の部屋をわざわざ訪ねる人は居なかったのだ、今まで気にすることもなかったのだ。実のところこれについても、早乙女には誤解があった。皆は彼を敬遠して部屋に訪ねないのではない。個室に籠もっているというのは船員の習慣で言えば、一人にして置いてくれという意志表示に他ならないのだ。

「ちょっとだけでも来いや」

全く、この人達との付き合いは良く分からない。先ず飲まなければ話が進まないのだろうか。だが、なんとなく浮き浮きしてくる物を感じて早乙女は頷いた。

「はい、お邪魔します」

着替えるのも面倒だったので、寝間着にただ上着を羽織っただけ

で扉を開けると、シエーネは派手に笑いこけた。そんなに妙だろうか。

「観光船の客じゃあるまいし、寝間着を着て寝る奴がいるか」

「はあ？寝間着を着るのが可笑しいんですか」

シエーネはますますおかしがった。

「何のための個室だ。普通寝るときは下着だけか何も着ないかな。緊急で出るとき、服着るだけで済むだろう。つまり寝間着脱ぐ時間を節約できる」

早乙女は全くの初耳だった。だが、素直に認めるのも癪だ。

「寝るときの服装まで決まってる物だとは知りませんでした。でも、だったら服着たまま寝た方が、早く支度できませんか？」

シエーネは反応の乏しい男より、こうやって反論してくるタイプの方が好きなので、豪快に笑ってどやしつけた。

「馬鹿言え、ジャケットなんぞ着てリラックス出来るもんか。早乙女君も一度ジャケットで寝てみると良い。ぴつたりと張り付く感じが気持ち悪いぞ」

「僕は寝間着を着て寝た方がリラックスできますよ。緊急事態にはこの格好で飛び出します」

シエーネは頷いた。

「早乙女君は船外活動は出来ないから、ジャケットを着て無くても良いって言うのも道理だな。だが、あまり冴えた格好じゃないぞ」

曙丸の乗員は一応制服のスペースジャケットを支給されている。

といっても、肩と胸に白丸に青縞の入った霧島のロゴマークを追加しただけの普及品で、色やデザインなどはそれぞれがカタログから好みで選んだものだ。体の線が露骨に出る上、通気性の全くないそれは空調ユニット無しで着るにはかなり不快なもので、業務上必要な操船部の三人以外は特に好んで着るわけでない。軽くて丈夫で伸縮自在、しかも断熱効果が異常に高い事を評価しているらしい小早川は、ジャケット地で旧弊なデザインのゆったりした作業着を特注して、肩に霧島ロゴを入れて済ませているし、リンダや洞口は全く

の私服に霧島のバッヂを付けているだけだ。それも寄港中だけで、航海中は忘れていいのか、それさえも付けていないことが多い。たしかに霧島のロゴは愛用するには若干難のある代物だ。

シェーネと早乙女が小早川の部屋に行くと、柳が件のスペースジャケットの立ち襟から始まる特殊ジッパーを、胸元まで下ろしただらしない格好で、ソファに胡座をかいていた。

「げ、早乙女。なんだお前つてば、寝間着なんて愛用してるの」

早乙女が来たことで少なからず驚いているらしいが、開口一番に寝間着を非難するところを見ると余程珍しいことらしい。

「まあ、陸上がりだからな。柳だつて専大の入寮の時持つていったんじゃないのか」

「ははは、そーいやすうかも。でも珍しいね。どういった風の吹き回しだい」

柳も屈託のない口調で言った。普段仲良く集まっている連中の間に乱入した場合、冷ややかに一瞥をくられるのが常だった以前の職場と全く違う。

「済みません、お邪魔でしたか」

柳は笑つて否定した。

「俺も徹さんとこに邪魔してる口だ。歓迎歓迎。変に部屋に引きこもつてられるよか余程良いね。妙な気を回さなくて済むよ」

シェーネが混ぜっ返した。

「お前さんが気を回すような親切な玉か。野次馬根性に長けてるだけだろうが。今日な、早乙女君と話す機会があつて、彼が引きこもつて何をしているのか判明したぞ」

「ほう、航海長やりますね。して、結果は」

柳がすっかり酔っぱらっているのかふざけた言い回しをする。早乙女は名前を良く知らないアイドル歌手が、スポーツドリンクの宣伝で唱っている曲が流れている。

「寝てるんだ。早乙女君はたっぷり寝ないとエンジンが掛からないタイプなんだそうだ」

柳はふふんと鼻で笑った。

「お子さまだねえ。それで寝間着の愛用者なのね。で、酒はいけるの」

グラスをちよつと持ち上げて、早乙女に聞いてくる。早乙女は控えめに頷いた。

「少しなら」

「少し、つてどの位かな」

立ち上がった棚から大きめのグラスを二つとつて机に戻ってきた柳が、生のままのウイスキーを片方になみなみと注ぐ。そしてもう一つにはほんのちよつと注いで、ミネラル水をたっぷり付け足す。

「さて、どっちの少しいいですか」

シエーネが呆れたように柳に言った。

「えらく景気がいいが、それ洞さんの愛蔵品じゃないか」

「当たり前。でもさ何か整理してしまいたい書類があるとかで、徹さん連れてつちやっただですよ。で、好きにやってて良いぞ、だそうですね」

「あの二人、こんな時間に仕事か」

シエーネが言つと、柳が大きく頭を縦に振つて同意した。

「操船や通信と違って、事務屋が働く時間じゃないですよね」

「又そう言つ。洞さんは一人であの量の書類をこなしてるんだぞ。」

一度徹さんの代わりに手伝ってくるか？操船部なら翔虎と二人で何とかするぞ」

「勘弁して下さいよ。俺は紙を見るとアレルギー起こすタイプなんです」

早乙女がクスリと笑い声を漏らした。柳がちよつと照れたように頭をかいた。

「でも小早川さん、凄い仕事量じゃないですか。今までの仕事以外に本社の仕事もなさってるんでしょう」

早乙女の問いかけに、シエーネが頷いた。

「ああ、私達も心配はしてるんだが、聞く耳持つ奴じゃないし、

ミスもないんで強くも言えんし」

柳が二人の会話に、ごく自然に加わってくる。

「そう言えば徹さん妙なことを言っていましたよ。自分は肉体的ゆとりが来ると精神的に不健康になるから、忙しい方が医療保健総合学的に見て理に適ってるとかなんとか」

「また奴の訳の分からんお題目か。ま、その総合学とやらでうちの船は飲酒喫煙制限無しだから、まあ、有り難くないわけでもないか」
早乙女がシェーネに聞いた。

「それ、気になってたんですよ。前働いてた会社じゃ、喫煙習慣のある者は自己管理出来ていないからそもそも入社できないとか、少なくともオフィスじゃ禁煙でしたし、アルコールも殆ど害の方面ばかりが強調されて、自分は飲みますなんて言えない雰囲気だったんですよ。アストロノーツなんて健康第一っぽいじゃないですか。なんで野放し状態、失礼、解禁状態なんですか」

柳が軽く口笛を吹いた。

「野放し、は良かったね。結構言うじゃない。早乙女君」

そう前置きしてから続けていった。

「いやね、俺も良く分かってはいないんだけど、医学生物学的に細分化してみればアルコールもニコチンも有毒物なのは間違いないそうなんだ。だけど、人間には自然治癒力も解毒能力もあって、精神が健全に安定していればその能力がフルに発揮できるから細かいことは気にしなくて良いんだそうだ。むしろ、アルコールが止められないとか、体には良くないんだとか思わずに、思いつきり味わって楽しむ方が健全なんだとさ。でも、細胞分裂が活発な子供には有毒面が強いから、ウオードの前では煙草をあまり吸うな、とか、子供を産む可能性のある女性は遺伝毒物を遠ざける方が理に適ってるから、煙草を毛嫌いするリンダはただしとか言ってたな。あと俺にも子供を欲しくなったら半年以上遺伝毒物を遠ざけろって言ったよ」

「変わった考え方ですね。それって、一般的なんですか」

「そんなの俺が知る訳無いだろう。ただ、徹さんは医療保険総合学概論てのを修めてるらしいから全くの法螺でも無いと思うよ」

匙を投げたように言い捨てた柳に、今度はシェーネが割り込んできた。

「そうそう、柳も早乙女君も知るまいが、前に曙丸に乗り組んでいた船医、白川って言う嫌味な奴だったんだが、摂生は全ての健康の基本っていう奴だね。小早川がその総合医学とやらを武器に徹底的に論破してな、面白かったぞ。バイオ（生物的）、ソシオ（社会的）、サイコ（心理的）、エシカル（倫理的）、ビヘイビア（行動的）に分けたとたん医学ですら只の分析学に墮落してしまうとか、在るがまさに人間全体を捉えるのが医療でなくてうんたらかんたらって」

「よく覚えてますね」

「後で小早川にレクチャー受けたんだ。喫煙の害を説く連中と鉢合わせしちゃったときの用心にと思ってな。ま、俺の頭じゃ理解の程度はしれてるが、要は自分の価値観を信じて、良いと信じることで心地良いことと思うことを味わっていれば、健康に長生きできるって寸法らしい」

良いと信じることを味わう、その言葉が早乙女の胸に痛かった。自分は良いと信じていないことをしているし、今の生活を心地良いと思っていない。何時も自分の選択が間違っていたのではないかという強迫観念と、誰も信じられないという思いが胸にあって苦しいのだ。

「小早川さんは、それをご自分で実践なさってるんでしょか」

呟くように早乙女が言うと、シェーネが大きく息を吐いた。

「全くそれだよな。ところで早乙女君はどっちの口だい」

同意の意味を示してから、シェーネは話題を変えるように柳の用意したグラスを指した。早乙女が薄い方を手にとると、柳が本当に少しだなと決め付け、その後酒の適量の話になった。少しの酒量で酔っぱらう翔虎と底なし沼の洞口とどちらが充分酒を楽しんでいるかという、既に何度も繰り返されている他愛もない話題だ。いつも

のように口数の多い柳に適当に相槌を打ちながらシエーネは小早川のことを考えていた。

小早川徹二。最初は全く気に入らない青年だった。翔虎のような男好きする爽やかさとは違う、女好きする男らしさとも言ったらいいだろうか。今のけったいな奴に馴れているこの連中には想像も付かないだろうが、若い頃の小早川は非の打ち所がない位に、都会的に洗練されていた。服装はラフでもなく大仰でもない嫌味の無いもの。小柄な体に似合わない圧倒的な存在感。サンガに作業ロボットの精神分析という妙な仕事で来ていた、イリアナ・マルティニという魅力的な女性の助手と紹介された彼は、知的で歯切れのいい言葉を使い、一挙手一投足に見事なくらい無駄がなかった。若くもなかったが、油が抜けきるほどに老けてもいなかったシエーネには、いかにも女にもてそうな生活感が希薄な優男を、一目見て嫌いになった。

たまたま、サンガに帰港していた曙丸の作業ロボットも分析させて欲しいという依頼を受けた先の船長霧島晃が、曙丸側の立会人に自分を指定したのだ。そのとき、二人が出来ていると思ったシエーネは、詰まらない仕事を押し付けられたと不満たらたらだった。

イリアナは絵に描いたような線の細い女だった。しかしその実なよやかでも強風で折れることのない柳のような強さを持っている人と分かった。もともとそう言った感じの女を好むシエーネは極上の笑顔で屈託無く話しかけられる度、巡り合わせの悪さを呪ったものだった。そのイリアナの意外なほどの助手使いの荒さに、いくらいい好かない奴でも同じ男として良い気がしなかったシエーネが抗議すると彼女は、

「あの子ね、暇にさせると直ぐ死にたがるから、放っておけないのよ」

と、まるで母親が子供のことを話すような口調で言ったのだった。イリアナが小早川を男と思っていなかったのを知ったのはあの時だった気がする。

今にして思えば、自分はイリアナに一目惚れしたせいで、彼女の恋人だろう小早川に嫉妬したから、目にする度にあんなにも虫酸が走ったのだろう。イリアナが小早川に惚れていないのを知って安心したもの、彼女に惚れているだろう男の方に好感を抱く理由はなかった。第一、生活の苦労も知らないだろう若者が、何を死にたいなどと甘ったるいことをほざいているのだと、呆れながら軽蔑した。運命などというものを信じざるを得ないほど自分は彼女に当然のようには惹かれ、イリアナも容姿といったらお世辞にも上物とは言えない自分に何故か好意を抱いてくれているようだった。

あのイリアナとの短い日々は何だったのだろう。今でも時折シェーネは考える。ほんの少し知り合っただけで、回りが驚くほどにお互いしか見えなくなつて、勢いで入籍してしまった時は、船長の霧島の親父さんや洞口達を驚かせたものだ。だが、何故かイリアナも自分もそれが当然の事だと受け止めていた。

入籍しちまつたなら祝つてあげなきゃなるまい、と霧島の親父さん達が曙丸でパーティーを開いてくれたときに、あのセレンシー葛城を初めて見たのだ。イリアナと全く対照的で男性的な彼女が、イリアナを祝うためにサンガに駆けつけてくるほどの親友であるというのはなかなか信じ難いことだった。だが、それより驚いたのは、イリアナなら兎も角、葛城と並べてみればまるで子供にしか見えないう小早川が、その女に惚れきっているらしいことだった。イリアナが自分と結婚してしまったことにまるで頓着していない様子だったのが心底不可解だったが、葛城という女性の存在を知ると何のことはない、イリアナと小早川が紛れもなく仕事でのみ付き合っているのだと納得できた。

だが、それなら何故、小早川はイリアナの家に住み込んでいるの

だろうというのが、次の疑問だった。それを問いただしたときに聞いたのが例の、セイと小早川はお互いを不幸にするために愛し合っているという話だった。

あの時、セイの側が自分の居所だと主張するように寄り添っていた小早川と、それを殊更喜ぶ風でもないが、ただ泰然自若として受け入れているかに見える葛城を見ては、イリアナが言うことを素直に納得できなかった。世の中にはどうみてもアンバランスな恋人同士が居るものだ。自分とイリアナだって美女と野獣も良いところの組み合わせだ。だが、ごく自然にお互いを自分の半身と認めたくない出会いだった。でんと構える葛城に、じゃれつくような小早川といった組み合わせも、目の前で見ればそれなりに似合っていた。

曙丸はいつものように最低でも一トリップが三ヶ月はかかる航海に出て、イリアナは新人との小競り合いが本格的に戦争になつてきた地球に帰っていった。メールでだけ消息をやり取りする中で、彼女に対する理解が深まっていくにつけ、彼女と小早川が生活を共にしているのが耐え難くなつていった。サンガに帰港する度、時間の許す限りイリアナはサンガに来てくれたが、相変わらず必ず小早川を伴っていた。イリアナに説明を求めると、新人擁護運動をしていると、政府や廃絶主義者から狙われることが多いので小早川が心配して単独行動させてくれないと笑って説明してくれた。

それも確かだろうと無理矢理に納得していたが、自分などから見たら華奢といつて差し支えない小早川にボディガードが務まるとは思えなかった。そして、イリアナがウオードを身籠もつたと聞いたときシェーネに一抹の疑いも無かつたと言えば嘘になる。男の子が産まれたときは直通の亜空間通信波でイリアナが連絡してきたが、そのときも映像の片隅にいた小早川に嫉妬があつた。だから、戦争が激化したとき、今まで小判鮫のようにイリアナに張り付いていた小早川が、よりによって人類に敵対する方の武力活動をするためにイリアナの元を去り、挙げ句の果てわずか一月足らずでそれさえも

途中で放棄してジ・アースに舞い戻ってきたと聞いたとき、今までの鬱積もあつて小早川を心底軽蔑した。唯一の救いだったのは彼がイリアナの元には戻らなかったと聞いたことくらいだ。あの時イリアナは何と言っていたっけ。

可哀想に、あの子は何時まで苦しまなければならぬのかしら。もう、私ではあの子の力になってあげられない。私は自分の無力が情け無いわ。

そう、イリアナはシェーネにしてみれば理解を超える小早川の暴走を、全て許しているどころか、小早川の方が苦しんでいると言っていたのだ。けれど、彼を嫌悪する自分にはその言葉が素直に響かなかった。そんな、小早川を氣遣うイリアナの言葉に自分のいらだちが御しきれなくなったシェーネは、早々に話を切り上げて不機嫌なまま通話を切った。彼女が永遠に帰らぬ人になったのは、その後だった。自分はイリアナの最後に、優しい笑顔を残してやれなかった。

あの日、小早川がイリアナの死の知らせと幼いワードをしつかりと胸に抱きしめてシェーネを訪ねてきたとき、シェーネの鬱屈はたがが外れたように怒りとなって一気に噴出した。小早川を殴り倒し、罵った。彼が脳天気な髪を染めて巻き毛になっていたのも気に障った。今までのもやもやと蟠っていたものが堰を切って流れ出していた。霧島の親父さんと洞口が止めてくれなければ、彼を殴殺していたかもしれない。自分の過去を振り返って、今更ながらにあれ程怒りに身を委せたことはないと思う。あの時の小早川はシェーネの怒りを当然のことと受け止めていると示すような無抵抗で、殴られることに身を委ねていた。そして、ワードを見守るようと言うのが、イリアナの遺言だから果たさせて欲しいとそれだけを繰り返した。彼の図々しさには呆れるしかなかった。しかし、霧島の親父さんは何時まで続くか見物だし、シェーネに子供の世話は何が重いだらうから彼を使ってみたらいい、と言ったのだ。子供を育てた

事がないのは小早川とて一緒の筈だが、それでも全く関わってこなかった自分よりはマシに違いない。シェーネは仕方なく彼の乗船に同意したのだった。

全ての疑いを洗い流す為とでもいうように、育つに付けウォードはイリアナと、何よりシェーネに似てきた。そして、小早川の真摯な態度、言葉遣いとかそう言うのではなく、行動に現れる誠実さに気付かざるを得なくなったとき、初めてイリアナの全ての言葉が額面通りに受け取れた。恵まれて輝く外見の裏で、何故か死にたがっていたらしい青年は、只、純粹に彼女を心から尊敬していたに過ぎなかったのだ。イリアナと小早川が怪しいなどというのは、自分の過剰な独占欲が作り出した幻想だったのだ。ウォードにイリアナのことを話すときの小早川は穏やかで優しい。彼らの間に有ったのが烈しい恋情なら、あの様には語れまい。

事実、彼が愛した葛城に関しては、名前を聞いただけであれ程に乱れたではないか。葛城と小早川が何時、そして何故別れたのか今では知る術もないが、あの様子を見れば未練を引きずっていることだけは明白だ。ウォードがその葛城より小早川にとって大事だったとはとても思えない。

自分の無力が情け無いと、イリアナは言っていなかったか。そして、小早川はイリアナにウォードを見守るように頼まれたと言ったではないか。

小早川君てね、誰が必要としてあげなければ生きていけないの。

最近シェーネはイリアナが生前小早川について語っていたことを良く思い出す。そして、イリアナは絶対的に保護者が必要とする乳児のウォードに小早川を必要とさせることで、彼をこの世に繋ぎ止めたのではないかとまで思い至るようになっていた。そして、小早川が船を降りたいと翔虎に言っただけでなく、どうやらウォードからも離れるつもりで居るらしいことを聞いて、小早川が良からぬ事

を考えているのではないかと、不安になってきている。あの日の尋常でない小早川の不機嫌は、一体何を意味するのだろうか。

不安定な青年期によくある只の自殺願望なら、いまさら心配するまでもないのだが、最近の小早川には妙に隔たりを感じてしまうときがある。ウオードが不安になるのも無理からぬところだ。年月をかけることで漸く信頼関係を築けたのに、小早川はそれを断ち切ろうとしているように思えてならない。だから、翔虎が葛城に会ってみると言ったとき、正直未だ道は残されているのかもしれないと、ずがるような気持ちで考えたのだ。

ウオードの成長は全ての澱を押し流して、シェーネに純粋な安らぎをもたらしてくれた。そして縁が薄かったイリアナとの日々が無駄でなかったと教えるかのようにあるウオードとの触れ合いが、小早川に対する不審を全て溶かしさつたことを今では認めざるを得ない。シェーネはもう小早川を憎めない。

だからといって今更彼の過去に踏み込む勇気もないのだ。翔虎が若い故の無鉄砲さで本当の小早川に会いに行くと言ったとき、洞口の固い心を易々と開かせた翔虎になら出来るのではないかと思った。興味が全くないと言えば嘘になるが、シェーネは小早川の過去を知りたいと思えない。あのイリアナが受け止めきれなかった程重い過去なら、知らないままで今の彼を信じたいと思う。そう、いまの修理屋小早川が信頼できる船員仲間として側にいる。それだけでいい。過去は過去に封印してしまっただけで何がいけないのだろう。彼の笑顔に隠れたものが苦しみでしかないなら、事実を白日の下に曝すことだけが解決方法で無い気もするのだ。

「どっちになると思う」

柳に突然聞かれてシェーネはぎっくりした。まるで今考えていたことに決着を付けるよう促されたような気がした。シェーネが呆然としていると柳が笑った。

「そんなに真剣に考えなくてもいいじゃない」

なにか自分の考えが読まれているようなとまどいを覚えたが、正直に白状した。

「ご免、聞いてなかった」

「あ、酷い。航海長つてば、可愛いヤナちゃんの話聞いてなかったのね」

呆れたことにすっかり柳は出来上がっているようだ。早乙女も微かに頬を赤らめていて結構飲んでいるらしい。

「可愛いヤナちゃんなんてここにいるか」

シェーネの軽口に、柳は異常に受けて大声で笑った。

「はいはい、可愛くないヤナちゃんです。どっちつていうのは、新人が総務部と機関部のどっちの方に配属になるのかなって話ですよ。一応操船甲板部と、通信部は二名以上居るでしょ。そうすると、機関部か総務部になるじゃない。やっぱり優先順位で行くと機関部かなって思わないでもないけど、いくら船長がお気楽でも新人に命預ける気には成れないですよ」

シェーネはその話に気軽に乗る気にはなれなかった。小早川は船を降りたいと翔虎に言ったのだ。機関部に増員してはいいつを止めやすくするだけだが、実際機関員一名ではいざというときの事を考えると心許なさすぎる。それに小早川は一応新人に関してプロなのだ。彼に教育を任せるのは至極当然に思える。小早川も翔虎も、一番付き合いの長い洞口さえも自分のことを新人廃絶論者だと思っている。実際、新人を人と思ったことはない。だが、本当のところはイリアナを殺した新人類を許しては、自分の彼女への思いが嘘だったような気がして、意識的に憎悪を掻き立てて嫌っていた節がある。本当のところ新人という者を身近に知らないのだ。シェーネにしてみれば、他に気になることがある今、新人の問題は煩わしいと思うだけだ。配属された新人を人として見られるかどうかはむしろその者次第といえる。イリアナは彼らに魂を見ていたのではなかったか。だとしたら彼らを理解しようと努力してみることこそが供養になるのではないか、そんな気すらしている。人の心は変わるものだ

な、シェーネはつくづく思った。

「私はどうせ来るなら、小早川にしっかり仕込んで貰った方が有り難いと思うが」

短く言い捨てるような口調になってしまふのは演技の延長だ。シェーネの反応に柳は大袈裟に肩をすくめて見せ、早乙女に目配せしてみせた。早乙女はと言う表情を作るべきか悩んでいるような顔をしていた。

第八章 真実のかげら

ゆつくりと長い廊下を歩くと、ひんやりした空気が体を引き締めた。久しぶりに踏み入むと学校と言うところはこんなに不思議な所だったろうかと思う。それとも単に、現在の最高学府の中にいると思っているから、自分の受け止め方が違ってくるだけなのだろうか。霧島翔虎は歩きながら、この建物のどこかに、若い日の小早川がまだそこにいるかのような奇妙な感覚に囚われていた。この廊下を彼も歩いただろうか。この窓たちの何れかから、地球の大气が自然に作り上げた青空を仰ぎ見たことが、あったのだろうか。

この前のトリップは割と短く、往復三ヶ月程で済んだ。バージシヤトルを繋げているのを見たときは随分長い日程を覚悟したのだが、実は近場の植民惑星で老朽化したバージシヤトルを世代交代させる事になったらしく、あれがメインの荷物だったのだ。殆ど空荷状態で、動植物などの気を使う物もなかった。実際約半分の貨物が既にシヤトルに積み付けされた状態で運ばれたし、バージシヤトルを下ろした港のステベ（組織荷役作業員のグループ）のフォアマン（荷役総指揮者）が、ウォッチマン（作業小組の長）とこんな楽な仕事なら何時でも歓迎と笑っていたくらいだ。積載量検査に来たサベヤ（鑑定人）ですら『これで良く商売になりますね』などと、からかい交じりに軽口をたたいた。

取り留めないほどの品目を扱い、温度管理だの病虫害対策だのに気をつかわなければならぬ曙丸にしては久々に楽な仕事だった。生き物を扱うときは本当に大変で、真面目にドライバルクキャリアなんぞで単一鉱物を満載にした船が羨ましかったりする位だ。勝手なもので、過ぎたるは及ばざる、あまりに積み荷に気をつかわないのも長い航宙退屈にすぎるので、今回のような積み荷は、例の新人の件や小早川のことなど、翔虎を悩ませるものがなければ、うんざ

りしていたに違いない。が、今回は仕事量が少ないのが有り難かった。

次の航海はなんでも霧島の持ち船の内七隻がかり出される大仕事だそう。極東アジア国の軍が荷主で、軍事技術実験基地の建設プロジェクトの運び屋を請け負えたらしい。太陽系の一番外側の想定惑星軌道上の建設予定地までを、何度も往復することになる。他社と船団を組むような仕事は気を使うこと甚だしいので、実のところあまり好きではない。だが、これも新人積極雇用策を実行しつつある霧島を評価し、特別に回ってきた仕事なのだろうから、ありがたく受け止めるのが妥当な線だろう。霧島でそのプロジェクトに参加する船の内、スケジュールの都合上一番間が空くことになった曙丸は、定期の簡易検査ではなくこの機会を利用して徹底的に船体チェックをさせておこうと特別ドックに入れることになった。つまり滅多に起こることがない長期休暇という奴が降って湧いた来たわけだ。

物事が動き始めると、全てが裏目に出て先々でそれを阻止するような事柄が起こってくる時と、逆に全てがその事に対して都合良く運び始めるときと有るような気がする。最近の曙丸にある微妙な不協和音を減らす一助になればと、地球にセレンシ葛城を訪ねるつもりだと翔虎がシェーネに言ったとき、それを実現させるにはかなり時間を待たなければならぬだろうというのが、正直なところだった。けれど、曙丸は時間を持て余してドック入りし、船長の翔虎は暇になってしまったのだ。解放されなかったのは機関部の責任者である小早川と、全てに付き物な書類をまとめる洞口位なものだ。

シェーネは他社と共同で船団を組むので有れば、ウォードを船から降ろすちょうどいい機会かもしれないと言っていた。今頃ウォードと高等部をどうするのか、じっくり話し合っている事だろう。彼らもこの休暇を某かの計らいだと思っっているに違いない。

地球に久しぶりで下りた翔虎はとりあえず家に寄った。当然ゆくりしていくのだろうと決め付けた母には悪いと思っただが、なにより早く葛城に会って見たかった。何か緊急事態が起きて呼び出され、サンガに上がらなければなくなる可能性が全くないわけでは無い。長期休暇とはいえ何かあればいつでも乗船できる場所にいるべきなのは当然だ。というのは表面上の理由。

会ったこともない、小早川と別れて十年以上も経ってしまったという女性と会うことには、矢張り躊躇いがあつて、翔虎は気が萎えてしまわない内に自分を引き下がない場所にまで持っていてしまいたかった。翔虎は何の事前連絡もしないまま、いきなりジ・アースに移動をかけてから、この特殊な雰囲気につきり飲まれてしまい、正直気後れしていた。こんなところで、指導者的立場でいる人と会うことへの敷居はかなり高かった。

そのとき授業の科目の切れ目を告げる旧式な鐘の音が響きわたり、息を潜めたようだった建物がいきなり生き返った。どっと溢れてくる学生達。彼らの中に新人も混じっているのだろうが全く区別が付かない。皆それぞれ思い思いの方向に流れていく。

翔虎は案内板を参考に事務局を探していたのだが、何処で間違えたのか校舎の中に迷い込んでしまったらしい。霧島のオフィスにあるような案内球が欲しいところだ。通りがかった学生を呼び止めて事務局の場所を聞くと、隣の建物だと右手で指さした。ということは、建物の数をかぞえ間違っていたのか。

事務局の受付は旧式な対面型で、自分と同年輩に見える、如何にも事務局員です風に大人しい服装をした女性が、暇そうに座っていた。

「済みません、アポイントは取っていないのですが、セレンシィ葛城先生にお会いできますでしょうか。私は霧島と言いますが先生と

面識はありませんので、小早川の友人と言っていただけでは分かる筈なんです」

ただ、こういったファジイなお願い事を聞いて貰う時には、人間のお姉さんに限ると翔虎は思った。単純明快な目的地の場合は総合端末に目的地を入力するだけでいいけれど、知らない相手に取り次いでもらいたい場合に、取り次ぎが機械だと途方にくれることになる。受付嬢はにつこり笑うと手元の端末を操作した。

「お取り次ぎしたいのですが、葛城教官は今日はお休みしていますね」

「え、どうしよう。……あの、連絡先を教えてくださいただくのは、無理ですよ。常識的に考えて」

遠慮がちに翔虎が言つと、勿論当然と言った風情で彼女はぴしゃりと断った。

「プライバシーの侵害に当たる可能性のあることはお受けできません。面識が無いって仰ってましたわね、来週には出ていらつしやるはずですから、出直して下さい」

翔虎は駄目で元々と食い下がってみた。

「私は仕事の合間を縫って星外から地球に来て居るんです。来週末ではとても滞在できません。是非、何とかお会いできませんか」

翔虎の真剣な態度は女性には受けるらしい。彼女は仕方なさそうに軽く頷いて、恩着せがましい口調で言った。

「規則ではいけないんですが、特別に聞いてあげましょう。あなたが受付にいるときで良かったわね、私は彼女と知り合いなのよ」

彼女が端末から直接電話をかけているのが分かった。後ろの事務机に居る連中に聞かれないのか小声になったので、何を話しているのかは良く聞き取れなかったが、随分親しげな口調で喋っていたので、彼女の言うとおりのいい人に当たったのだろと察せられた。葛城に繋がる運の良さは、今日休んでいると言うことで一端切れたかに見えたが、どうやら未だ続いているらしい。受付嬢は電話を切ると何やらメモを書いて翔虎に渡した。

「これ、葛城教官の携帯の番号よ。お教えしても構わないって仰ってたわ」

翔虎は礼を言うのもそこそこに足早に立ち去ると、中庭に出て早速その番号を呼び出した。

呼び出し音が聞こえてすぐに、電話がつながる。

「葛城です」

と、聞こえてきた短く歯切れの良いしゃべり方の声は、写真を見て想像していたのよりは少し高めだった。

「私は霧島といいます。初めまして」

電話の向こうで短い沈黙があった。

「小早川のご友人だそうですね。彼、いえ、あの人は元気ですか」
自分のことを何ものと問う前に、彼女が小早川の近況を聞いたことで、翔虎は彼女が何時も小早川のことを心に掛けているのではないかといった、そんな樂觀で占められた。少し肩の力が抜けた気がして、話すのが楽になった。

「小早川はうちの船の乗組員です。一応機関長としてですが、それだけでなく色々とよくやってくれています」

そこまで澁みなく言っただけで、翔虎はどうやって話を切り出して、どんな風に聞くことで答えにたどり着けるかを全く考えていなかったことに気付き、愕然とした。シーネに誰も傷つけないよう努力すると請け合った癖に、いったい自分は移動中に何を考えていたんだろ。翔虎は己の迂闊さに呆れ、うつかり黙り込んでしまった。

「それで、小早川から何か伝言ですか」

逆に、電話の向こうの女性の方が話を促してくれた。

「いえ、そうではなくて」

否定しかけた翔虎の耳に、微かな溜息が聞こえた。

「そうですね。何か期待するなんて可笑しいですよ。あの人が今

更私を許すはずがないのに」

何かが違う。翔虎は混乱しそうになるのをねじ伏せて、言葉を紡ぎだした。

「待って下さい。私は小早川方があなたに合わせる顔がないって言うのを聞いていました。彼はあなたに許されないといっているんですよ。それなのに、あなたの方も小早川があなたを許すはずがないというのは、おかしくないですか」

今度は電話の向こうで、短い沈黙があった。

それから、ぽつつりと、けれど決めつけるような言葉が続いた。

「それは私に会いたくないということでしょう。合わせる顔が無いと彼は思っただけじゃない。あの人はいつもそう。優しいから、傷つけたくないから、そんな理由で思っただけじゃないことを口にするの。変わってませんか……」

翔虎はつい声を大きくした。

「葛城さん、小早川は確かにいろんなことを立て板に水でしゃべるところがありますけど、嘘が多い人間じゃありません。それは、お分かりなのではありませんか？ それに、あなたは私のような得体の知れない人間が小早川を知っていると云っただけで、こうやってお話してくださっている。もし、あなたがまだ小早川を少しでも気にかけてくださっているなら、直接お会いできませんか。不躰なお願ひとは判っていますけど、電話で話していても……」

今度はかなり長く感じられる静けさがあった。翔虎が堪らず重ねて頼み込もうと思ったそのとき、ゆっくりと葛城が言った。

「ええ、そうですね。私も何故霧島さんが訪ねていらっしやっただのかお聞きしたいです。住居情報を転送いたしますね」

「あ、有り難うございます」

翔虎は思わず深々と頭を下げてしまった。渡り廊下を歩いていた学生がそれを見て含み笑いをもらすのとうっかり目があって翔虎は照れくさかった。住居番号が転送されてきたのを確認すると挨拶も

そこそこに通話を切り、翔虎は足早に駐車場に向かった。

ジ・アースの郊外に広がる住居地区は、それぞれに庭や塀がある独立性の高い建て方になっていた。まっすぐに引かれた幹線道路沿いには大きく街路樹が茂り、その両脇に広い歩道が続いている。ナビシステムに住番を打ち込んで運転を自動制御にすると、翔虎はその町並み感慨を持って見渡した。曙丸の修理屋になる前。若く、将来を嘱望された青年、ドクター小早川が暮らしていたのはこの町なのだ。もし葛城がそこに住み続けているのだとしたら、これから訪ねる家は小早川の思い出が静かに息づいている場所なのかもしれない。それとも既に葛城は普段の生活の中で小早川を思い出すことはないのだろうか。

初夏の風の漂う、本当に気持ちの良い日だった。青く澄んで晴れ渡った空にうつすらと白い雲が浮かび、街路樹の目が覚めるような青葉の重なりから光がちらちらと遊んでいる。気の早い蝉が鳴き始めているが煩いほどでもない。そこ此処に、あの写真の若い小早川が白衣を着て歩いているような錯覚。ドクターというと白衣しか連想できないのは我ながら発想が貧弱で笑えるが……。そして、この町には決して知り合えることのないシェーネの愛した人、イリアナの人生も刻まれている。

車が減速しているので目的地が近づいて来たのが分かった。

路肩によって止まった車の窓から立派な家が見えた。その門に付けられた表札に『葛城』とあるのを確認してから、翔虎は車外に出た。コロニーのコンパートメントタイプの住居が学生時代のねぐらだった翔虎が思い描いていた家とは余りに違うので、正直気押されていた。本当は敷地の中に停めさせて貰った方が良いのだが、とりあえず許しを得てからにしよう。

予想よりはるかに大きい家だった。採光用の窓が沢山見て取れる家の南側に、随分本格的な温室が見える。初夏の風を入れるために、温室の窓は開け放たれていた。あの写真に写っていた温室なのだろうか。

ジ・アースに研究者として招かれる、又は指導職に付ける、というのはこういった生活が保障されているということだ。サンガなどコロニーとは比べ物にならない。翔虎の実家とて、これを羨む必要のない広大な敷地を有しているが、あれは霧島という企業が成功して維持しているモノだ。父や母、兄姉、誰一人自分の力で勝ち取った者は居ない。自分も含めて、単に霧島の家生まれたから、そう言った生活が出来たに過ぎないと知っている。だが、此処は違う。

事実、これ以外の地区はジ・アースといえどもこじんまりした家や、マンション形式の集合住宅が目立っていた。

ふと見ると、家の前庭でウォード位の少女が、先に蓮口がついたホースで植え込みに咲く花に水やりをしていた。女の子は黒髪を肩の辺りでまっすぐ切りそろえていて、白いＴシャツにジーンズ姿。サンダルを突っかけている。どう見てもこの家の子だ。

「こんにちは。葛城先生のお宅ですか」

丁寧な声をかけると、彼女は翔虎の方を見てあどけなく微笑んだ。「そうです。母とお約束でしょうか」

翔虎は殴られたほどの衝撃を受けた。シェーネが言ったとおり矢張り彼女にとって十年も前に終わったことだったのだ。でも、何かが妙ではないだろうか。

「ええ、先ほどお電話しました。霧島といいます」

「少しお待ち下さい。母を呼んで参ります」

女の子は会釈をするとホースを辿って水道の蛇口の所に小走りに行き、捻って水を止めると、そのまま玄関に入っていた。大人びたしゃべり方は、おませというより騷の良さと感じられる種類の

ものだった。色とりどりの花達が競うように咲いている。翔虎が花の種類は分からないながらも綺麗だと思って見ていると、上から元気な声が降ってきた。

「小父さん、母さんの男？」

ぎよつとして、上を見上げると背の高い街路樹のしっかり張った枝にまたがって、先ほどの女の子と同じくらいの年頃の男の子が足をぶらぶらさせていた。

「君も葛城先生のお子さんかい」

小父さんという呼びかけに少なからず気分を害しながらも、一応丁寧に聞いてみた。

「そうだよ。さっきの間の抜けてるのが姉さん。っていつでも、双子だから年は同じだけどね」

翔虎は呆れたように言った。

「間が抜けてるは無いだろう。そこ、危なくないのかい」

「大丈夫。母さんはちゃんと体を使えって主義なんだ。なれてるから平気」

そういうと器用に枝を伝って幹に辿り着くと、するすると猿のような身軽さで降りてきた。木くずを軽く手ではたくと翔虎を見上げて生意気そうに背を反らせてみせた。

「本当だ、馴れてそうだね。君名前はなんて言うの。私は霧島っていうんだ」

「小父さんたかが子供に馬鹿丁寧だね。気に入ったよ。僕は真昼。まっぴるまそのままの字で真昼って読むんだ。さっきのあれが真夜。これも真夜中の真夜さ。単純で良いでしょ。で、小父さん母さんのこれ？」

親指を立ててみせる仕草は生意気この上ないが、不思議と人なつっこさの感じられる雰囲気を持っていて全然気に障らなかった。なぜかとても親しみのもてる印象があった。

「子供がそういう下品なサインを使うものではないよ。私はお母さんとは今日が初対面だよ。残念でした」

すると少年は露骨に力を落としたように見えた。

「なんだ。違うのか」

「違うって」

少年は元気を取り直したように翔虎をまっすぐに見て、笑顔を見せてくれた。

「変な口聞いてごめんなさい。父さんかと思っただ」

翔虎ははっと思い当たることがあつて、慌てて聞いた。

「君お父さん知らないの？」

少年は微かに頷いた。

「うん。母さんと父さんは結婚しなかったんだって。死んだと母さんは言つてたけど、でも、生きてるらしいんだ。よくわかんないよ、大人ってさ。母さんより随分年下だつて話聞いたこと有るから、てつきり父さんが訪ねてきてくれたのかと思つちやつたんだ。でさ、父さんだつたらちよつと虐めてやるつもりだつたんだ」

翔虎は思わず真昼と名乗った少年の肩をつかんで顔をまじまじと見つめてみた。あの一度見ただけの写真の小早川に似てはいないだろう。年の頃もそうだ。もし葛城が小早川と別れてから新しい男を見つけて家庭を持ったのだとしたら、ちよつと年がいきすぎているのか。まさか、小早川の……。そのとき、玄関が開いて女が出てきた。豊かな黒髪をただ長く背に垂らして、肌の露出の少ない黒ずくめの服を身に纏っている。だが、その黒が信じがたいほど華やかに見えた。

綺麗だ。それが翔虎の第一印象だった。あの写真のごつい女性が年を重ねて、気むずかしげな中年女性が出てくるのを想像していたのは見事に裏切られた。彼女は写真の時と殆ど変わっては見えなかった。むしろ生きた柔らかい表情が魅力的で、あの写真より若く見える。今の彼女ならあの小早川と一緒にいてもまるで違和感など無いだろう。翔虎は一瞬みとれていた。が、葛城が会釈をしたのに気付き、慌てて挨拶を返した。

「突然、申し訳有りません。先ほどお電話した霧島翔虎です」

「葛城です。初めまして」

電話を通さないその声は、一層柔らかい。

「真昼、そんなところにいて。お客様にちゃんとご挨拶出来たの」

彼女が聞くと、真昼は思わせぶりに翔虎に目配せしてから、

「大丈夫、ちゃんとしたよ。ね、小父さん」

といって、勢い良く駆け出した。母親の脇をわざとすり抜けるように走って、家の中に消える。

「あ、真昼、待ってよ」

あわただしく女の子が後を追う。葛城は仕方ないといった風な母親の笑顔で、子供達が消えた扉の方を見やっていた。それから気を取り直したように翔虎を見ると、手で家を示して彼を促した。

「どうぞ、片づいていせんが」

玄関に入って先ず目に付いたのが大きな観葉植物だった。例によつて翔虎は名前が分からないがよく見かける物であることは間違いない。玄関ホールの天井がガラス張りになっていて、陽が明るく射し込み広々として見える。広めの木調の廊下が奥に続いていた。ホールには玄関とは別のドアがあり、そこを通っていけばあの温室に抜けられる造りになっているようだった。

「お庭も素敵ですが、これも立派ですね。葛城さんのご趣味ですか」
翔虎が植木を誉めると、葛城は意外なことを言った。

「ええ。ここまで大きな植物の世話は本当は苦手なんです。このドラセナを小早川が私にプレゼントしてくれたとき、この子は十五センチ位のミニ観葉だったんですよ。それが随分大きくなってしまつて。持て余しているのですが、処分もできなくて」

そう言えば小早川が居間で育成灯を持ち込んでまで育てている奴に、何となく似ている。この家は和風の使い方をしていて、玄関先で靴を脱いで上がるようになっていた。翔虎は失礼にならないように気を使いながらも、雰囲気興味深く眺めた。採光に大胆に気を配った明るい室内に、古い重厚な印象の木調家具。そして印象的に

配置された緑の植物の鉢植え。上の方からどたばたと子供が走り回る音がする。絵に描いたような穏やかさだった。

「私の友人が、園芸家で、二、三週に一回は手入れに来てくれるので、それで何とかこんなに大きい鉢植えとか温室が見られるように維持できてますの。それがなければ、とつくに壊しているかもしれないね」

葛城は騒がしい二階を見上げて、すこし苦笑した。

「本当に騒がしくて……。霧島さんはコーヒー好きかしら」

その聞き方が翔虎には好ましく感じられた。

「ええ、好きです」

「嬉しいわ、私コーヒーだけは美味しく入れる自信有るんですよ」
通された部屋は矢張り明るくさっぱりと広かった。全体的に低めの調度でまとめられているせいか開放感があり、綺麗に掃除されていて気持ちのいい部屋だった。ダイニングと兼用らしく、食卓とは別にフラットなカウンターがあってキッチンまでよく見える。そのキッチンは丁寧に使い込まれて整っていた。水屋と一番離れた場所の庭に面した所は太い糸を粗く織ったラグが敷いてあり、部屋の隅には幾つかのクッションが散らばっている。葛城に促されて翔虎は食卓にある椅子の方に腰掛けた。

キッチンに立った葛城が豆を挽きはじめていたので、翔虎は少なからず驚いた。今時普通の家庭でドリンクメーカーに頼らない飲み物をだしてもらえとは思ってもみなかった。加熱台にポットが乗っているところを見ると、随分本格的な入れ方をするらしい。興味深く翔虎が葛城の手元を見ているのに気付き、葛城は少し笑みを漏らした。

「珍しいですか」

「ええ、ドリンクメーカーは入れていないんですか」

葛城は首を僅かに振って否定して見せた。

「忙しいときは機械に頼っちゃいますね。でも、落ち着きたいとき

はこうすると良いんですよ。豆を挽く時の香りを楽しむにはこれが一番ですね」

ミルのハンドルを回す音と、沸騰してきたお湯がポットの中で遊ぶ音。いい天気之恩恵を隅々まで行き渡らせた部屋の余りの優しさに、翔虎はしばし溺れそうになった。リンダが地球に家庭を持つても、きつとこんな演出は出来ないだろう。育ちが違うというのだろうか。いや違う、小早川はリンダと同じスラム地区のストリートチルドレンから始めた人だといっていたではないか。

「失礼な質問かもしれませんが、もしかして真昼君達の父親って」
言いかけた翔虎を遮るように、葛城はあっさりと言葉で翔虎の疑いを肯定した。

「ええ、似てますでしょ。特に真夜は」

矢張りという思いと何故という感情が駆け抜けた。小早川は全く知らないのだ。今も決して忘れることのない人、変わらぬ愛しさと哀しみの交じった思いを向ける人との間に子供がいることを。ウオードが小早川の生への楔なら、それ以上の絆に成れたはずの紛れもない自分の子を慈しむ機会を、何故彼女は小早川に与えなかったのだろう。沸々と静かに怒りが湧き出て、翔虎は拳を強く握った。声を荒げない様になんとか自制しながら、言葉を紡ぎだした。

「何故、小早川に知らせなかったんですか。父親なら自分の子を抱きしめる権利が有るはずじゃないですか。別れた男で貴女とは他人かもしれない、でもお子さんにとっては別でしょう」

どうしても剣呑な声色になることは止められなかった。葛城はコーヒーを入れる手を休めずポットのお湯を注ぎだした。ドリッパーから一層鮮やかな香りが沸き立った。

「なぜ、そうできたと……思われますか？ 私は小早川が生きていることさえ最近まで知らなかったのに……」

葛城の一言に翔虎は絶句した。小早川が生きていることさえ……知らなかった？ 小早川は死亡したことに、そうだ、そういえばな

っていた。彼の生存が公になって騒がれたのは昨日や今日のことではないが、二、三年前でしかない。翔虎にとって小早川が死んでいた期間は無。だから、すっかりそんな重要なことを認識していなかった。翔虎は自分の迂闊さ^{うかつ}に舌打ちする思いだった。

「すみません。失念していました。……でも、そうであつても、いえ、そうであつたなら尚更、生きていることをお知りになった時点で、そうすることは出来たはずだと、思うのは間違いですか？」

翔虎の言葉は強い調子を維持出来ずに萎んだものになっていた。

「そうですね。出来たはずです。でも、怖かった。今も怖いです。あの子達を小早川が受け入れることが出来るのかどうか。今更、時間は戻りません。十年は、取り返すことの出来ない長い年月ですから……」

そう葛城は静かに言った。怖いってあの小早川が？

「小早川は自分の存在自体を呪つてましたから、彼の血を受け継いだものを決して許さないのではないかと、それも恐ろしかった。でも、それ以前の問題として、永久に彼を失つたと思つて彼を悼みながら暮らしてきた者として、彼が生きているということ自体がショックでした。ショックというのも変ですね。なんといったらいいのかしら、とても負担でした」

「小早川が、生きていたということが、喜びではなく負担だったと、そこまで仰るんですか。葛城さん」

思わず口を挟んだ翔虎に、葛城は切り返した。

「死んでいたなら、私を少なくとも一度は愛してくれていただろうと信じられる。そう信じて、あの人の残してくれた命を守つて育ててきたのに、あんな酷い状態で別れたまま、私の所に帰つてこなかった。生きていたくせに。あれだけ、私たちを泣かせたくせに。彼が死んだと思つてそこそそ平和に年月を重ねていたのに、地獄でした。あの人が生きていて、そして私から彼の意志で去つていったのだと、はつきり思い知らされた形になつた後の、暫くは」

葛城は自嘲するように笑い声を漏らした。だが、翔虎の方は、小早川が生きていることが負担だったといった彼女の気持ちかはつきりと受け取れて、再び沸いた怒りが一瞬で失せてしまった。死んでいるから会えないのと、生きてるのに会いに来ないのとじゃ、そりゃ、違うよな。確かに。徹さん、あんたが悪いよ。

今更どの面さげて、あの人の前に立てるっていうのよ。

そうだ。糞、結局悪いのは修理屋だよなあ。こんないい女から逃げやがって。

ふと葛城の顔を見た翔虎の目前で、笑顔でいた葛城の両目から、見る間に涙が湧きすうっと流れ落ちていった。彼女はポットを置いて口元に両手を持っていくと、目を閉じた。

「ごめんなさい、初対面の方の前で。でも、私、本当にあの人のこと誰かと話したかったんですね。ご免なさい、涙が止まらないわ」

翔虎は駆け寄って慰めに背をさすってやりたい衝動に駆られたが、よく彼女のことを知らないのだと言い聞かせて思いとどまり、座ったままだった。暫くの間、葛城は感情を鎮める努力をしていた。少しでも顔を上げて翔虎を見ようとしながら、葛城は何度も漏れそうになる嗚咽をこらえて飲み込んだ。

「小早川が私を殺したかったのは分かります。何度殺しても飽き足らないくらい憎くて当然なんです。私の所に戻っては来ないというって、彼を責める権利は無い、その位分かっているんです。でも、恨めしかったです。悔しかったです。十年近くもたって、それでも私を許してくれないほどに、あの人は私を見限っているのかと思い知らされた気がして……」

翔虎は頭を振った。小早川は貴方を愛しています。絶対に。見限ってなど居ない。何故なら、あいつのポケットには貴方の写真が大事に大事に、いつも入っているんです。殺したいほどに憎んでなどいません。絶対に。

「小早川が貴方を殺したいと思っているなんて、絶対にありませんよ」

そういつた翔虎を見て葛城は続けた。

「私は彼に殺されてあげる約束をしていました。私の願いを叶えてもらうことと引き換えに命を上げる約束を。だから、あの人は恐ろしい私の願いを聞き入れて、私の替わりに非道な事をしてくれました。あの人の人生を全て狂わせたのは私が居たから。謝っても謝り切れないのです。私は。でも、実際にあの人に銃を向けられたときに、私には死ぬという覚悟がついていなかった。小早川が私に向けた銃口は、やたらと大きく目の前に迫って見えました。死ぬのが恐ろしかった。私を殺しても良いと言うのがたった一つの条件だったのに」

整理などされていないとりとめのない話し方が、そんな突拍子も無い事態が真実あったことだと確信させる香りを添えていた。それは修羅場というのに相応しい光景だったに違いない。小早川がこの人に頼まれてした非道なこととは何なんだ。この葛城が自分の命と引き換えを条件にしてまで小早川に頼んだこととは。未遂といえども殺し合いたくなるほどの理由は、何なのだ。疑問ばかりが飛び交って、答えは翔虎には何としても想像できなかった。

「私が逃げようとしたことで、あの時、小早川は今までみたことも無いほど怒りました。怖かった。たまたまイリアナが訪ねてきてくれなかったら、私は約束通りに殺されていたと思います。約束通りの形では無かったでしょうけれど。きっと。霧島さんイリアナ・マルティニ、と又間違えたわ、リヤドの事はご存じでいらっしやって？」

翔虎は頷いた。

「ええ、といつても私の船の航海長シェーネの亡くなった奥様で、小早川の恩師で、貴女の親友だったという事をシェーネから聞いただけです」

その通りという様に、葛城は頷いた。

「あのとき、イリアナは庭を回ったあの窓から飛び込んできて……銃を私に向けていた小早川に抱きついたわ。悔しいけれど彼女は小早川にとって、特別でした。イリアナを見たあの人は、銃をおとして、私をモノみたいに見てました。私は自分の為に彼を地獄に追い込んで、たった一つの餌にあげると約束した命まで出し惜しみをしてしまった。あの人はあの時に私を見限ったんです。彼は……あの窓から出て行って……それっきり」

話の区切りに葛城が溜息をつく。翔虎も知らずに止めていた息を、ようやく吐き出した。

「イリアナは暫く会わずに頭を冷ましていなさいとだけ言ったわ。私もお互いが冷静になるのを待つ方が良さと思いました。時間をほんの少しおいたら、もう一度話せると思った。でも、イリアナの研究施設のあったビルが爆破された、あの事件はご存知でしょう？」

事件をニュースで知ってから、跡形もなく崩れ落ちて瓦礫の山となっていた建物の近くに飛んでいったけれど、私はあの人たちに繋がるものは何も手に入られなかった。イリアナも小早川もウオードも消えてしまった。見つからなかった。あの時建物の中で遺体が確認できた人の割合ご存知ですか？ 半数にも満たなかったんです。私も、私の、つまり小早川の友人でもあった人たちも、自分の周辺から消えてしまった知り合いが一人でも建物に居なかった様に祈りながら、探しました。連絡を待ちました。絶望してはいけないうと、言い聞かせながら不安に押しつぶされそうになりながら。分かりますか。それがどんな状況だったか」

葛城は翔虎を見つめた。

「私も私の友人たちも、それから街の人々も、でも、日を追うごとに、どれだけ信じて待とうとしても、連絡が取れない人はあそこで亡くなったのだと、あの瓦礫の塊に押しつぶされて、死んでしまったのだと納得するしかなかったんです。遺体を抱きしめて別れを惜しむことをすら許されない唐突さで、失われてしまったのだと納得

するしか……。私は、小早川をそれまでも、何度も失いかけてました。私たちは決して息の合った恋人同士ではありませんでした。でも、彼とイリアナの死を認めざるを得ないほどに日数が経ったとき、私は街で彼を探すのを諦め、今度は毎日、あの建物のあった場所に通いました。少しは形の残った遺体が運び出されるたびに、小早川で有って欲しい、イリアナであって欲しい、ウオードであって欲しいと祈りながら、毎日。指の一本でもいい、髪の毛一筋でもいい、ずっと祈ってたんですよ。私はただ大切だった人たちを抱きしめてあげたかった。遺体にすがり付いて泣ける人たちが妬ましくて羨ましくて。搜索が打ち切られたとき、私たち、愛した人たちの残骸すら手に入れられなかった組は、泣くことすら出来ないほど疲れていました」

翔虎は絶句した。ジ・アースの研究施設が爆破され、瓦礫の山の前で泣き叫ぶ人や、写真をもって知人を探し回る人たちの映像を、ニュースで見たのはなんとなく覚えている。酷いなあと感じたことも覚えていた。だが、今の今までそれは思い浮かぶことも無い、小早川と結びつくことの無い映像だった。

葛城は続けた。

「私のお腹にあの子達がいるのが分かるまで、私は自分がどうやってこれから生きていったらいいのか、生きていけるのか想像もつかずに絶望していました。あの子達を授かっていたことは救いでした。小早川とは永遠に隔てられてしまったけれど、あの人の子供とやり直せる。男の子と女の子の双子だったことも、彼とイリアナの命が、私に帰ってきてくれたのだとすら、思えました。友人たちも、泣きながら悲しみの中の喜びとして、私の状態を支えて守ってくれました。私の命も、あの子達の命も、徹二とイリアナを愛した人たちが本当に親身になって守ってくれて、今に繋がって在るものなんです」

なぜだ。馬鹿野郎。修理屋よお、お前なんでよりによってそんな状況で逃げたんだ。

翔虎は叫びだしたいのをこらえて、落ち着けと自分に言い聞かせていた。残された人たちはどんなに辛かったろう。

翔虎は力なく言い訳した。

「……小早川が、先だていきなり船を降りたいと言いだしたんです。私は単純にその理由を知りたかった。彼がウオードの為に此処での全てを捨てて曙丸に来たことは前から知っていました。でも、何故他人の子のために其処までするのか、分かりませんでした。それが、ウオードがもう奴を必要としなくなったから船を降りたいとか言い出して……。私が今更、何故降りなければならぬかを問いつめても何も話してくれません。おまけに私は何も知らないのだとまで決め付けられました。私は仕事を同じくする者への信頼以上に小早川と友人だと思っていたので、正直なところショックだったんです。私は、彼が私たちから去っていきこうとしている本当の理由を知りたいだけなんです。それが分からなくては、引き留める手段も見つからないんです……」

翔虎は何とか話さなければならぬと必死に努力して、尚も言葉を注いだ。

「シェーネから色々話を聞いていて、彼がずっと以前に死にたがってたって事も、初めて知りました。晴天の霹靂っていうのはあのことですね。私の前で、小早川はいつも屈託無い楽家でした。物事の良い方をみて生き方を選んでいくタイプに見えてました。その男が死を望んでいた事実さえ気付かない自分の唐変木ぶりに呆れ返って。……でも、ならば一層奴を勝手にいつ死んでもいい、不幸になるのが当たり前の人間にさせておくものかと思ってたんです」

壁に向かって愛を訴える以上の手応えの無さを感じながら、それでも翔虎は頑張っ続けてた。

「死にたいと思うほどの理由を本当に知っている唯一の人が貴女ではないんですか。突然押し掛けて、どうして別れたのかなんてこと

を尋ねてしまう失礼は、重々承知しています。でも、それでも私はあなたに聞くしか思いつかなかった。どうして、小早川は人生に絶望していたんですか。奇怪おかしいじゃないですか。奴は全てに恵まれているのに。才能も仕事での評価も全て一流で、貴女という恋人とイリアナ先生という信頼できる人の為に力を尽くして働ける立場にいて、何故、そこまで絶望する必要があったんですか。いったい貴方が奴に冒させた罪とはなんですか。何故、そんな状況であなたを放って失踪することを選んだりしたんですか……」

翔虎の言葉を遮って、セイは首を僅かに振った。

「それは私の口からは絶対に言えません」

その言葉に翔虎は万事休すと覚悟した。この人の心は動かないのだ。だが、葛城は深呼吸をして息を整えると、まぶしいほどの微笑みを翔虎にむけた。

「でも良かった、小早川は居場所を見つけられたんですね。私は生きていたあの人を、もう一度諦めるという事をしなければなりませんでした。その後は、彼に居場所があったのかどうか気がかりでした。それだけがずっと心配で……。私は子供達に救われました。生きていることの喜びを、有り難さをあの子達から教えて貰いました。幸せを思う度に、小早川が最後に私に見せた表情が思い出されて居たたまれませんでした。今のあの人が幸せならもうこれ以上の望みはありません。霧島さん、あの人は私が存在した所為で、辛い生き方をしなければならなかったのです。全ての過ちは私に有ります。それと彼には過去なんか必要ないです。そんなものを、もって帰らないで……。あげてください」

「奴は忘れる気なんか無いですよ。人はどんな傷でも忘れていくものですよ。何時までも苦しんでいるって事は、忘れないように何時も思い出しているんですよ。私は貴女と小早川は一度会った方が良いと思う。だって、そうでしょう。奴も貴女も羨ましいくらいにお互いを思っているのに、済んでしまった過ちにとらわれて遠くか

ら思っているだけじゃ、悲しすぎます。生きてる内はその気になればどんな失敗もやり直せるんですよ」

自分でもうすっぱらい言葉だと思った。どんな失敗もやり直せるという言葉は、酷い失敗をやり直し得た経験に基づかなければ、絵に描いた餅より頼りない。耳についている祖父の言葉を今の自分がなぞっても、そんなものに力なぞ有る筈もない。

翔虎は一気に言ったものの、やはり葛城は静かに首を振って言葉を突き放した。

「それは取り返しが付かないほどの過ちを犯したことが無い人の言うことです。私は小早川に出会わない方が良かったんです。それがそもそもの間違いなのだから」

ここで言いくるめられてはいけない。翔虎は葛城を遮った。

「どんな出会いも無駄じゃないです。真昼君達はその出会いが実ったから、貴女に確かな幸せをもたらしたんじゃないんですか。それを間違いだなんて思うのは間違ってる。あなた達に足りなかったのは、繋がっていたいのにうつかり放れてしまった手を、もう一度延ばそうと努力しなかったことじゃないですか」

葛城は翔虎の言葉に何か感じるところがあるのかうつむいてしまったが、それでもかぶりを振った。

「いいえ、あの人のそれは人には重荷に過ぎます。だから霧島さん、真昼と真夜のことは、あの人に絶対に教えないで。お願いします。もう二度と彼を苦しめないで下さい。お願いします」

小早川は間違いなく子供という存在を愛している。それは何もウオードという一人の少年にだけ向けられたものでないということはわかる。小早川は子供そのものの存在をこよなく愛している。そんな男がどうして我が子を負担に思う？ 翔虎には理解できない。

仕方なく翔虎は子供というものから話題を変えた。

「駄目ですよ。それじゃ、何も前に進まない。重荷を捨てられない

なら、それを背負って行くしか出来ないなら、自分が重荷を負っていることから目を逸らしちゃいけない。人生経験の浅い若造の戯言と言われるかもしれませんが、私はそう思います。重い荷物を背負っていることに目をつぶって、普通のペースで歩こうとするからしんどいんです。重い物を持っているのだから早く歩けなくて当然と構えて、のんびり休み休み歩けば、結構長く歩けるもんですよ。違いますか」

葛城は力無く、深く頂垂れてしまっていた。そして、長いことそのまま凍り付いたように動かなかった。翔虎が椅子から立ち上がって彼女の側に行こうと思ったときに、葛城はゆっくりと顔を上げた。「わかります。霧島さんの仰ることは多分正しいんです。でも、私にはそうする勇氣はないわ。ごめんなさい。私はあなたに、子供たちのことを知らせないでとお願いするしかないです。……私ったらすっかり温くしてしまっただわ。もう一度入れ直しますね」

妙にのろのろした手つきで彼女はデカンターに溜まったコーヒーを流しに捨てると、もう一度ポットに水を足して、過熱台の上に乗せた。湯が沸くまで翔虎は明るい光り溢れるリビングを何度も見渡した。何が正しいのか判断するには、自分は余りにも何も知らなすぎる。

翔虎は文句無く美味しいコーヒーを、ゆっくりと時間をかけて飲み干した。もはや自分が何を話しても無駄と思い、翔虎は言葉をなくしていた。コーヒーが美味しいことが、逆に辛かった。

葛城の家を辞した翔虎は、手近な公園の駐車場に車を止めると深く溜息をついて座席をリクライニングさせた。葛城は本当に綺麗な人だった。所謂美人という綺麗さではない。造作をみて誰もが好ましいと思うわけではないだろう。小早川と映っていたあの写真に自分が好奇心しか覚えなかったように。けれど、どんな境遇にあっても前向きに生きてきたあとで纏っただろう穏やかさは、静かに輝い

ていた。

あの後、黙り込んだのは自分だけでなかった。葛城ももはや何も話してくれようとはしなかった。もう一度暖めたカップにコーヒを注いで、翔虎が飲み終わるのを黙ってみていた。その眼は翔虎という存在から、小早川を探しているように感じられた。彼女は小早川への思いを捨ててはいない。それだけは確信できた。問題は小早川が何故残された人のことを思いやることもなく、失踪したのか、そこにある。

翔虎は深く迷っていた。葛城が自分に頼んだことは全てを翔虎の胸の中に納めてしまうことだ。だが、翔虎には小早川も葛城も、お互いを誰よりも必要として求めているようにしか見えない。あのずっと昔の写真を大事に肌身に付けている小早川と、小早川が居場所を見つけられたかどうかだけが、心配だったといった女。誰がどう見ても、ごく自然に寄り添っていることが似合うと思う。彼女は小早川の子供を産んで育てている。それは女でない自分には十分に理解できることではないが、小早川を彼女が愛している明らかな証明のように映る。過去に凶器を振り回して殺し合いの一手前という修羅場を演じた理由は、結局霧の中で霞んでいるが、只の価値観の違いや、生々しい浮気とかでもない、もっと深刻な何かであると感じる。

シェーネは彼らを評して、「お互いを不幸にし合ってる関係には見えなかった」といつていた。並べてみたことはないが、翔虎にも寄り添う二人は自然に見えるだろう。奴がセイと別れてウオードを育てる方を選んだのは本当に不思議だ。

自分には二人が今もう一度出会うことに問題は全くないと思う。あの二人のすれ違いを矯正するのはそれしかないと思える。一方で、葛城が小早川が自分の存在自体を呪っていて、彼の血を受け継ぐものを決して許さないのではないか、と言っていたのが重く心

にのしかかってくる。シェーネも、男なんてものは腹のでかいところか、生まれた瞬間を知らない子は、手で育っていくのを見なければ、きつと自分の子だなんて思えなかったろうといていた。小早川の場合は将にそれだ。いる可能性すら疑っていない息子と娘。あの利発そうな真昼君と可愛い真夜ちゃんを受け止めることが小早川に幸せをもたらすものなのか、さらなる重荷をかけることになるのか、見当も付かない。

でも、自分だったらどうだろう。リンダと喧嘩別れして、彼女に愛想がほとほと尽きていたとして、別れた後彼女が自分の子を産んでいたとしたら、会いたいだろうか。そして、別れたあとも思いを断ち切れないほど愛し続けるしかなかったとしたら、彼女と自分の子の存在を知ったら会いたいだろうか。

会いたいを決まっている。

翔虎は思った。生きている限りやり直せない失敗はない。幼い頃から霧島の爺さんに聞かされ、耳に染み込んでいる言葉が翔虎を励ましていた。

罪は罰を享受することによって償われる。やり直せるんだよ。どんな取り返しの付かないと思われる罪にも、償いは許されるんだよ。本人にその意志がある限り。

霧島の爺さんの言うことが本当なら、罰を享受することで償いができるというのが本当なら、小早川と葛城の罪はすでに償われていて、これからやり直せるということにはならないだろうか。彼らが言うところの罪とやらが何かは分からなかったが、悔恨と共に十年を生きたなら、贖罪の期間としては十分な長さになるのではないだろうか。

翔虎は電話を取った。すこし躊躇ったが、思い切りの良いことで

は自分に自信がある。次の仕事に入ったら、それこそ曙丸は暫くフル稼働体制になり小早川も当然もつと忙しくなる。今度の仕事は、一航海の契約であるトリップチャーターではない。プロジェクト完了までの全ての条件がフィクスチャーノートに纏まってしまっている。と言うことは、サンガに寄港して荷下ろしをした後で、荷待ちすることなくすぐに次の荷受け作業が始まると言うことである。時間は今しかない。翔虎は小早川の携帯を呼び出した。地球とサンガでは衛星を使った普通通信が可能で、特別にオペレーターを通さなくても電話が出来る。最初の呼び出し音が鳴り始めたとき、ほんの一瞬だけ後悔に似た感情が通り過ぎた。

「はい、小早川」

何も警戒していない（当たり前前の話だが）小早川の声が一層脳天気に感じられて、翔虎は絶句しそうになった。これで良かったのだろうか。

「もしもし、小早川ですが……。変ね、翔虎ちゃんの電話よね」

「うん、俺。分かった？」

電話の向こうで、小早川が笑いだした。

「何だ、やっぱり翔虎ちゃんじゃない。なに無言電話の真似してるのよ。どうしたの、地球でママのおっぱい飲んでんじゃなかったの」

翔虎は持てるだけの勇気を掻き集め、振り絞った。

「今、ジ・アースに来てるんだ」

「……何て言ったの」

「ジ・アース。葛城さんに会ったんだ」

電話の向こうからは何の反応もなかった。怒っているのかもしれないが、映像装置の無い携帯を使っているの、何とも判断できなかった。

「そう、彼女、元気だった？」

徹二のあっさりした答えに、翔虎は戸惑った。

「怒ってないのか」

「何言つてんの。激怒しちゃってるわよ。あんたがそう言う押しつけがましいことを平気でする人だって知ってるから、逆上するだけ無駄だと思ってるだけ。何を彼女に聞いてきたか知らないけど、私達はもう終わったの。余計なこと言わなかったでしようね」

翔虎は、この程度の嫌味で済めばお安い物だと思った。言葉遣いは剣呑だが、予想したよりましな反応だ。

「当然沢山言ってきたよ。でも、彼女は徹さんが生きていたくせに帰ってこないことには怒っていたけれど、それでも心配していた。お前さんがどうしているのかずっと心配だったって言ってた」

「ふん、女なんて口先は優しいものね。セイは私のことなんか綺麗に忘れていたはずよ。何で、思い出させるような事したの。あの人はね、昔のことなんか忘れて幸せにならなきゃいけないの」

翔虎は突つ慥貪な小早川の言い方の中に、葛城が言っていたのと将に同じ事を彼が言っているのに気付いた。

「お前さん達つくづく馬鹿だな。彼女も同じ事いつてたよ。お前も過去の事を全て忘れた方が幸せに成れるはずだから、自分のことを思い出させないであげてくれて言ってた。お前さ、本当は葛城さんに会いたいんだろう」

小早川が、呆れたように渴いた笑い声をたてた。

「勝手に人の心を測らないで。あの人はもう私の居ない人生を楽しんでいるでしょうし、私もそうだわ。彼女のいない生活にも慣れたし、今更顔を見るなんてご免よ」

「馬鹿野郎」

思わず翔虎は叫んだ。

「お前は良いよ。人生を勝手に投げ出して自暴自棄になってりゃいいんだ。だがなウオードを手塩にかけたお前なら分かるはずだ。女がたった一人で仕事をしながら子供を育てるのは遊び半分で出来るようなことじゃない」

「子供って？……何言ってるの」

しまった、これは切り札だった。翔虎が後悔するより早くうつか

り口をついて出てしまった言葉に、小早川が切り込んできた。こうなったら、変な誤解をさせるより、事実だけを明確に伝えた方がよい。

「お前さんの子供だよ。彼女はお前さんが死んだと思った絶望の中でも、ちゃんと生んで育ててくれてたんだ。徹さんが残した命を守ってね。良いかちゃんと聞けよ。いいか、あの人は失踪ではなく死亡した筈の徹さんの子供を、大事に生んで育ててくれたんだ。徹さんを愛していたからだろ」

「嘘でしょ。嘘だわ……。勘弁して。私の子供なんかが存在している訳無い。万が一、そうだったとして……。あの人が私の子だと分かっている子供を産むわけがないわ。私の子だけはあの人は産むはずが無い。絶対に」

僅かに震えるような響きが翔虎に突き刺さった。

「徹さん、彼女はね、子供のことも、俺が彼女にあつたこともお前に言うなって、頭を下げて俺に頼んだ。自分との事は徹さんにとつて忌まわしい過去に過ぎないし、子供の存在は傷つけるだけだから絶対に言うなってな。それでもつて、お前は過去のことは全て忘れて幸せになるべきだって言っていたよ。だがな、俺はそんなの変だと思う。お前は彼女の写真を手放せないほどにあの人を忘れていないし、彼女はそれこそ全身であんたを愛している。なのに、すれ違つたままなんて哀しすぎる。俺には見過ごせない。徹さん、あんた最低のやり方で彼女を裏切つた。彼女から逃げるとしても、彼女を棄てるとしても、徹さんが逃げたタイミングで逃げるべきではなかったと思う。何故逃げたのかはかは、もう聞かないよ。聞いたところでどうせ答えてなんかくれないだろ。だけどそんな徹さんを結局彼女は許して、心配して、気遣っていた。いい女だよ。絶対に」

翔虎の方が泣きそうに震えた声になっていた。

「たのむ……。頼むから翔虎、少し黙つててくれないか」

電話の向こうで小早川が叫ぶように言った。その話し方に翔虎は初めて小早川徹二の素顔を見た気がした。造っていない本当の言葉、素直に黙り込んで翔虎は何時までも彼に付き合う気になっていた。長い、長い沈黙があった。やがて小早川がぼつとりと言った。

「私の子……」

「年の頃から言っても、顔を見ても間違いないと思うよ。特に女の子はお前にそっくりだ」

「はあ、翔虎。これ以上混乱させないでよ。なんで、特に女の子なんて言うの。私の子は女の子なの？」

「双子だよ。男の子と女の子のね。お前さん達、平気でずれまくってる癖に変に要領はいいんだな。一度で姉弟まで造ってるんだからな」

小早川は今度こそ絶句した。驚きの声すら出てこないようだ。

「彼女の心に甘えて、知らなかったことにして、今以上の重荷を背負ってくのなら、好きにしたらいい。だが、アンフェアじゃないか。たしかに知らなかっただろうさ。だが、父親としての義務も権利も有るはずだ。知った以上、何かしらの行動をとるべきじゃないか。子供は両親を欲しいと思うもんだ。それがどんな出来損ないでもいい切れない思慕って奴がな。想像するしかない父親の姿を曝してあげるのも愛情だと思うぞ。真昼君な、男の子の方だが、訪ねていった俺を父親と勘違いして突っかかってきたんだ。誤解って分かると素直に謝ってくれたがな。もし訪ねてきてくれたら簡単には許してあげないって心に決めてるみたいだが、そう思いつて事は会ってみたって何時も思ってることじゃないか。女の子、真夜ちゃんとはあまり話せなかったが、男の子の真昼君が会いたがってるんだから推して知るべきだな」

「だから、すこし黙っててくれって言ってるだろう。一度にそんなこと言われて、はいそうですかって納得しろと言つのか」

小早川は殆ど悲鳴をあげている体になった。

「でも、納得してるんだろ。話し方が男になってるぞ」

又しても向こうが黙り込んでしまったので、ちよつと軽口が過ぎたかと翔虎は後悔した。

「ええ、そうね。私は納得してる。ウオードを育て命の重さを教えてもらつていなければ、私は今からでもその子達を殺しに行つてたかも知れないわ」

子供を殺しに？ その言葉に翔虎は戸惑った。愛情がもつれて恋人を殺したいというのと、自分の子供を殺すのというのは、次元がかなり違う気がする。

「大丈夫、心配しないで。頭の中で竜巻が回つてゐただけで、逆上だけはしてないから。考え込んで変な方向に考えが偏らない内に私彼女に会うわ。前に二度とあの人にこの面を曝さないつて誓つただけで、そうも言つてられないわね」

小早川の口調は、もう、いつもの調子だった。受話器の向こうでカチツというライターの音が響いた。煙草を吸い出したのなら、大丈夫だ。

安心すると、気が抜けそうになった。絶対に会わないと言つたろうと思つていたし、もしそうなら引きずつてでも行かせるつもりだった。

「徹さん、すぐ来るのか」

「そうするわ。ちよつと仕事はさぼらせて貰うわよ、船長。どのみち来週から船の方はドックの連中に任せて人事の方の仕事に行く予定でいたのよね。松姫さんへの言い訳、宜しく頼めるかしら」

「そりゃ、構わんが。なんか、拍子抜けするな。もうちよつと抵抗すると思つただけで」

「そうね、私も思うわよ。何時だつてあの人に会つのは辛いわ。それでもね、翔虎ちゃんが言つてた、私がセイに会いたいんだろつてあれ。多分それが正解なんだわ」

翔虎にはその言葉だけで、自分の取つた行動が救いようのない過

ちでは無かったのだと思った。

「一人で行けるか」

陳腐だと思いながらも、そんな言葉が口をついて出た。

「大丈夫よ、翔虎ちゃん。今度サンガで会うときに一発殴らせてくれれば充分よ」

お安いご用だ。

「ああ、その位は覚悟しとくよ。がんばれよ」

「頑張るって、何をよ」

翔虎は態とらしく鼻で笑うと一方的に通話を切った。そしてそのまま目を閉じた。何となく心地の良い眠りが彼を捕まえにきて、大人しくそれに従った。

* * *

降って湧いた休暇を利用して地球を訪れていたのは、霧島翔虎だけではなかった。早乙女信吾も又友人のジュン・ラテオスに呼び出されて久しぶりに地球を訪れていた。

ジュンの家は独身者用の集合住宅だが、場所に余裕のある地球だけあってサンガの早乙女の部屋より数段広々としていた。リビングから見える、日当たりの良いベランダで鉢植えのトマトが元気に生育していた。あの緑が赤になる頃に来たかった、と早乙女は一瞬考えた。

「きたな、この悪魔」

来訪者が早乙女と知ったジュンは彼を招き入れると、開口一番にそう言った。早乙女は些か呆れたように、友人の顔を見た。

「おい、ジュン。いきなり悪魔呼ばわりとはご挨拶だな」

「ふん、人を犯罪者にしといて何を言う、だ」

早乙女は思わず吹き出した。

「ジュン、ハッキングは立派な犯罪だよ。商売人がなにぶってるんだよ」

「俺はスケールの問題を言ってるんだよ。ばれても罰金で済むか、豚箱のお世話になるか、こりやエライ違いだぞ」

早乙女は、ジュンがふざけているのではないらしいと気づき、笑いを途中で納めて手近にあったソファに腰をかけた。

「大袈裟だな。僕が頼んだのは職場の同僚というより先輩だな、そののあら探しのための個人情報だ。別に国家機密でもないし軍事情報でもないぞ」

「軍事上の理由でプロテクト掛かってたんだよ。第三プロテクトの犯人、つても妙な表現だな、第三プロテクト設置者、極東アジア国の国防総省管理局長官だったよ」

「何」

早乙女も絶句せざるを得ない。一級の情報重犯罪だ。即、実刑。執行猶予無し。

「そりゃね、俺も悪かったんだ。冗談でもあのトップシークレットパスリストを試そう何て気を起こしたのがそもその間違いだっただ。だがな、色々とパスを試して、外れて休日一日潰れて切れてたんだ。ものはずみだ。本当に当たるなんて誰が思うよ」

「じゃ、お前調べて行き着いてくれたんじゃないかって、冗談が当たっちゃったての」

事態の深刻さに、早乙女もどう反応して良いか分からない。情報工学の一応専門家として、国家機密に手を付ける恐ろしさは充分理解している。

「そうだよ、だからな、あげられたら道連れにしてやるからな。絶対だぞ」

ジュンがそう言うのを不思議そうに早乙女は見た。

「お前変に余裕だな」

思ったままを口にしてみると、ジュンがにやっと人が悪そうに笑

った。

「全部じゃなかったんだ」

「はぁ？」

間が抜けた声を出した早乙女を見て、ジュンが満足したように大声で笑って見せた。

「第三プロテクトすらがインデックスに過ぎなかったのさ。目次を見ただけじゃ内容を知ったことにはならないだろ。ちょっと見てろよ。これだけでも普通の個人情報の量じゃないぞ」

すっかりジュンは自分の仕事を自慢する子供の顔になっている。一日中起きているだろう手近のパソコンをキー操作して画面を開くと指で早乙女を呼んだ。

「面白いよ。まず、最初の戸籍履歴だ。これ見て見ろ、登録年だ」ジュンがポインタで指し示した所にある年号をみて、一瞬何を言いたいのかわからなかった早乙女は、暫くしてはっと思いついた。戸籍登録日が普通と同じに出生後2週間以内だったとしたら、小早川は二十歳前後の若造になってしまう。

「このワードが反転してるだろ」

登録理由。その単語が確かに白抜きになっている。

「で、これをクリックするとだな、じゃーん」

パスワード入力画面が開く。早乙女は呆れた。

「万事がこの調子さ。矛盾だらけなんだ。こっちの真実版履歴では彼は基礎教育を受けてないんだ。最初の第一プロテクトではちゃんと三十五年前に、ドクター小早川冴子が、遺伝子バンクから精子を買ってシングル出産したことになる。彼女は極東アジア国の軍事研究施設で働いていて、その研究の成果で優良遺伝子保有者の認定を受けている。これはお前さんも知ってるよな。学校教育に価値を見いだしていなかった小早川冴子博士は、息子を自身の手で教育したが、それでも一応統教検定は規定年齢で受けて合格していることになっている。でもな、こっちでは、通学どころか統教検定を受けた形跡すらない。いきなり十五歳の小早川徹二君が沸いて出て

いるんだ」

早乙女は画面に釘付けになっていた。それをみて、ジューンは話を進めた。

「それからこれ、その二年後十七歳でジューンの総合大学に入学しているんだが、これは別に珍しくないよな。だがな、歴代でスーパージーニアスと呼ばれた連中は殆ど英才教育を受けているから、入学年齢はみんな十二歳前後なんだ。大学のカリキュラムはスキップできないとはいえ、殆どの連中が十代で修士様。その後の四年間の研究過程が終わって論文が認められて目出度くドクターになっても、皆二十歳そこそこ、一番思考が柔軟に働く頃にいい仕事が出来るって寸法さ。それから見れば、小早川博士は鈍才だ。そう、スーパージーニアスだけを集めてみると、この人は全てが遅いんで目立つんだ。彼だけが他の超天才達が卒業する年の頃に初めて公の教育機関に出現しているんだ。もう一つ、かれは総学に入学した時点ですでに医療保健助手の資格を有している。在籍していたのは極東アジア軍付属病院の医療専門カレッジだ。でもね、その頃の彼を知ってる人は居ないんだ」

早乙女の理解がジューンの話についてきていないのを知ると、ジューンはお茶でも飲むようにとドリンクメーカーを指さした。早乙女がのろのろした動作で紅茶を入れている間もジューンは喋っていた。

「この小早川がジューン・アース総合大学でトップクラスに躍り出て、注目を集めるようになったのは二十歳前後らしいが、それより前は病弱で何度か入退院を繰り返して、そっちの方で目立っていたらしいよ」

「そんなこと何処にも書いてないだろ」

早乙女が言うのに、あっさりジューンは白状した。

「直接聞いたのさ。同じ頃大学にいた連中にね。俺は公僕だよ。仕事先には偉い人も随分いるのさ。彼も本当の入院の理由は知らないそうなんだが、専らそう言う噂だったってさ。だって一見小柄な優男にみえるくせに、体術とやらの達人で学校対抗の異種混合格闘技

大会とかつていうふざけたイベントなんかで、自分の倍は有ろうかっていう大男を平気で投げ飛ばすような奴だったらしいからな。最初は頭の造りじゃない方で目立ってたらしい。女にも相当もてたらしいぞ。ま、小早川の方は専ら年上の色気も素っ気もない女に入れ込んで、野郎どもの方では笑い者だったみたいけどな。とにかく、そんな元気な奴が持病の治療のため定期的に入院て言うのはおかしいだろ」

「ふーん、あの人、運動なんて出来るのか」

呆れたように言う早乙女に、ジューンは驚いた。

「お前知らないのか。能ある鷹はなんとやらって奴かね」

「体術の達人と、病弱で入院。そりゃ、怪しすぎるね。ガセじゃないのか」

ジューンは首を振った。

「たしかに、頑丈な体を持っている男が、持病があるとかで定期的入院しなければならんってのは誰にだって納得できないだろう。それも入院しているのが必ず長期休暇の帰省中、極東アジア国立軍部付属病院だ。で、立った噂がさ、なんと自殺未遂。何でも小早川徹二の方は、体力自慢の美味しそうなお年頃だろ。母親が切れ者の科学者で、精子を買って彼を生んだって言うのも公然の秘密だったらしいから、母親の牙子に情欲の対象にされていて、それを苦にしての自殺未遂じゃないかって」

「それこそ誹謗中傷ってやつじゃないか。十八、九じゃ十分に大人だ。母親がそうなら帰省しなきゃ良いんだし、体術の達人なら力負けて事もないだろ」

早乙女が多少むきになって反論すると、両手を前に出してジューンは押さえろと言う仕草をした。

「おいおい、本気にするなよ。これは噂だ。だがな、噂には真実も含まれている。健康で何にも問題ない男が、年に二回、一月の休暇中で足りないくらいの長さを軍の付属病院で過ごしてたって事は確かなんだ。これ以上此处で話すと推測が暴走するから、置いておく

として、今覚えていて欲しいのは、彼が入院を繰り返す度に成績で頭角を現して行っただけと言う事実だ。ジ・アースの卒業生の成績記録をハックしてみたんだが、小早川は確かに入学時はそれ程突出していないんだ。平均か中の下。只一点、総合認識力テストでのみ総学始まって以来のハイスコアをマークしている。ま、記憶力だけが優れていて、思考力は平均以下ということだな」

ジュンはすっかり謎解きに夢中になっているようだ。その興奮が伝わって、早乙女も何か胸が浮き浮きと踊っているかのような錯覚を覚えた。

「それから此だ。二十二歳の時、首席で総合大学を出て、研究過程に進んだ彼は、お前なら知ってるだろ、あの、ダニエル・マクファールン研究所に迎えられて、イリアナ・マルティニという認知哲学のスペシャリストの所に研究生として入るんだ。というか、非公公式にだが在学中から助手という扱いなものの、既にマクファールンにジョインしていたらしい。この二年後に『剣崎方式とイワナコバ方式相互利用による効率的総合行動プログラム実践法』という論文を発表している。一見マニュアル形式のハウツーものなんだが、その実、新人が人格形成されていくプロセスを緻密に解析した凄い論文だよ。これが特別評価を受けて、二十三歳でドクターになるんだ。年齢だけ見れば一般に埋没しちゃうんだが、大学に入学した年齢を考えると、これは超異例の速攻出世なんだよね。彼の知能は飛躍的に成長しているんだ。まるで二、三歳の子供の知能の成長曲線並だね。俺も読んでみたけど本当に凄いよ。難しい言葉で武装して論文のふりをした作文じゃない。逆に平易な言葉で緻密な理論を構成している」

ジュンもドリンクメーカーに行って、コーヒーを入れるとそのまま早乙女が座っているソファの向かいに腰をかけた。

「ちょっと解説しておく、新人の総合行動訓練の剣崎方式っての

は、全てを曖昧な側面を持つ言葉で把握することを理想とする。『自然』な所作とか、『場に応じた』振る舞いとか、どうしても受け取れる言葉に変換して、物事を理解することによって、予測不可能な事柄に対する適応力を鍛えるのが主眼だ。これは、どんなことも細密データ化することを良しとしない。それに対して、ロシア系女流総合行動学者イワナコバは、全ての事象を度数計算して統計を取り、顔の表情も声の大きさも、感情の方向もベクトル付けされたデータとして集積していく所からスタートする。つまり、感情が動いた場合に人間が取るだろう全ての行動を数値化し、平均値をプロトタイプとして認識しておくことで、人の感情が類型化出来るとした。この両者は長いこと相容れずに論戦を繰り返してきてるんだが、人間行動総合学者、ドクター小早川は、この異なる両者を同時に能力を最大限に発揮してでも、行すべきだと主張している。その目的を示し必要性を強調、可能性を論証するに留まらず、実例として新人が成長する過程を子供の成長と比較して、新人の思考回路が、人の思考スタイルとほぼ等質であることにまで言及している。総合学者の名に相応しいだろ。発達心理学まで押さえてるんだからな」

ジュンはパソコンに別の画面を呼び出して、それを参照にしながら話を続けた。

「調べて初めて知ったんだが、専門職としての総合行動学と、グローバルな視野を持つ人間行動総合学ってのは全くの別もんなんだ。前者は新人専門だし、その中でも行動に顕れる部分に限定された、ごく限られた分野を探求している。だが、人間行動総合学の方は、何より人間を主眼に置いている。純粹に科学的に人の機能を追及する傍らで、哲学的に、社会的に、そして宗教、心理、医学等も含めた多極面からアプローチして、人が何かを探ろうって言う、野心的で、非生産的な学問だ。人間が人間だって分かり切っていることを、主張するための奇妙な学問さ。この論文の冒頭でドクター小早川はこんな言葉を引用している」

* * *

私という存在は、そして貴方という存在は、肉体の細胞の中には存在しない。

細胞は常に入れ替わる。脳細胞などは生まれいでた瞬間より死にゆくのみである。

生体機能、それに限定してみれば、人も又、自然淘汰という研究開発過程に

よって造られた、一種の有機物質のロボットといえるだろう。

人が、思考する人格を持ったロボットを造ろうとするのは、偶然に出来たもの

を人の手によって再生しようと言う、意味のない挑戦に過ぎない。

* ダニエル・C・デネットの言葉より抜粋

1942年にオランダ生まれだ。

AIの可能性が模索されていた時代に

コンピュータ・サイエンスの哲学的応用

を示唆し

認知科学の先覚者と呼ばれた。

彼の思想は、確かに人工知能の可能性に未熟な技術レベルしか有しなかった時代のものである。そこには多くの誤謬も明らかに含まれている。同時代に同じように認知哲学を提唱したポール・M・チャーチランド（同じく1942年、アメリカ生まれ）が既に、古典的直列プロトタイプの檻から逃れられていないと、正しくして批判している事から見ても明らかだ。だがそれを踏まえてなお、デネットが意識を持つロボットを我々が造るべきでない、と言う警告を発していた事を忘れてはならない。

彼は、人々が意識を持つロボットを求めていなかったことを知っていた。そして、創造可能というだけの理由で、知的挑戦という無

謀な冒険を試み、結果、彼ら　意識を持つロボット　が造られてしまえば、彼らに人権を与えるのは道徳的義務だとまで既に語っている。

私は、新人が何かと問われれば、存在するべきでなかった魂の象徴と答えるだろう。彼らに意識がある以上、魂をも又有している。それは明白な現実である。それを認めたくない人のために、新人の意識の成長過程を、子供の心理的成長と比較しつつ、これから論証していこう。そして、彼らがイリアナ・マルティニら現代の先覚的識者が提唱するように、人道的権利を有する事を切に求めるのみでなく、それが我々の望みと乖離しているにもかかわらず、義務であることを主張していきたい。

* * *

「名文だろう。二十三才でったら、消化し切れていない知識をひけらかすために、難解さで武装して文を書くくらいが関の山だ。だが、彼の言葉は分かり易い。そして理論の組立も、資料の広範さも、膨大さも……並じゃない」

ジュン・ラテオスは溜息混じりに大きく息を吐いた。

「剣崎も、イワナコバも、新人をいかに教育すれば人を模倣できるか、の域を出ていないが、小早川は人の心を探究する傍らで、新人との共生もふくめた、人間のあり方を問いかけている。この若さで、既に哲学者の風貌をも備えている。それに……」

少し言葉を休めてから、ぽつりと口にした。

「十五歳がゼロだとしたら、八歳のドクターだ。こりゃ天才なんて騒ぎじゃないな」

早乙女は流石に大袈裟に溜息について否定して見せた。

「それはないだろ。あの人は誰がどう見たってそれなりの年行ってるよ。どんなに若く見積もったって三十以下って事はないね」

ジューンはひとさし指を立てて、早乙女の前で左右に振って見せた。「俺の発想は、全てドクター小早川の情報をプロテクトした先が、極東アジア国の軍つて所から来てるんだ。ある程度突飛になるのも仕方ないだろう。俺の発想の原点はこれだ。二つ下のフォルダにあった記述だから、これが目に留まったのも運の良さってやつかもな」ジューンは何度目かで座ったばかりのソファから飛び跳ねて立つと、パソコンの前に立つて軽く操作し、ポイントをあわせた。どうやら何処にどんな記述があるのか熟知しているらしい。

「特別付記：プロジェクト『戦士の安眠』被験体。整理番号394」
声に出して読んでから、早乙女にも見ると示すようにモニターを回した。「戦士の安眠」という妙な単語が反転文字になっている。ジューンの手からマウスを奪って選択すると矢張りパスワードを請求してきた。

「な、だんだんSFか、出来の悪いスパイ物見たいになってきただろう。ここでも真実のかけらが読みとれるんだ。彼、小早川博士はこのプロジェクトに於いて研究従事者じゃなく、被験体、それが此処でのキーワードだ。もう一つ、気にかかることが有ってな。一般情報のほう、俺はこれを勝手にオモテ履歷って呼んでいるんだが、こっちは別に何の問題もない。犯罪歴ゼロだ。でもプロテクトが掛かっている方は違う。その前年、極東アジア国の軍付属病院が新人に爆破されて研究員や病院の職員、入院患者にも沢山の死傷者を出してる。そのときに例の三文小説並のちゃん名前プロジェクトの実験設備も深刻な被害を受けた。責任者の三名とも全員が死亡した影響は大きくて、このプロジェクトはなし崩し的に中断しているんだ。その三名の中に、件の彼の母親、小早川冴子が入っている。これも覚えておいてくれ。その時期の裏記録をみると、彼は新人方の武力闘争に手を貸していて、危険思想保持者として軍のブラッ

クリストに載ってるんだよね。だが彼が係わっているのは、その病院爆破事件の前一ヶ月だけなんだ。それまでの小早川徹二は新人解放運動をしていたイリアナ・リヤド……結婚して姓が変わってるんだが……の番犬並に忠実な秘書兼助手として彼女と同棲している。まあな、新人の解放運動なんて今から見ても随分暴挙だからな、実際命が狙われる危険もあったそうさ。だが、イリアナ・リヤドはあくまでも専守防衛、っていうか、話せば判るっていう頭でつかちタイプ。その手下である彼が鷹派に鞍替えするような事件は表向き無い。ほらほら、臭ってこないかい？」

「何がさ。そう一度に捲し立てられたって考えなんか纏まらないよ」
早乙女がぼやくのに、ジュンは何度も頷いた。

「そりやそうだろうな。俺だって三ヶ月資料と首っ引きになって此処までまとめたんだ。新聞や他の機関のネットに何度アクセスしたか。こりや、一辺の豪華な食事位じゃ割に合わないぞ」

早乙女が呆れた。

「僕が頼んだのはプロテクト解除だけだ。自主的にサービス拡大されても支払う義務はないね」

「そんなこと言っていると、俺の仮説教えてやらねえぞ」

悪戯っぽく言ったジュンに、早乙女は仕方なく同意した。

「はいはい、過剰サービス有り難うございます。で、お前さんはどう結論付けた」

「一つは、小早川徹二という男が、十五歳で零歳説だ。彼の肉体が年を取っていくのは明白だから、新人ではないが、理論的には製造可能なバイオーグに完全な生体コンピュータを内蔵しているって考えだ。これなら異常な知能上昇曲線に合理的な理由が付くだろう？もう一つクローンの可能性も考えたんだが、彼の運動能力が優れているって事で諦めた。肉体年齢十五歳の健康な少年を育てるには十五年かかる。これが今の技術の限界だ。第一誰のクローンかって話になるとSF通り越してお笑いになっちゃうしな」

その仮説に早乙女が吹き出した。

「いくら何でも酷いよ」

「もう一つの仮説が、こっちの方が有力だと思うんだが、全く別の十五歳の少年に大脳開発の手術みたいなものを受けさせて、天才小早川徹二をつくったって説だ。分かってると思うが人間は大脳のほんの数パーセントしか使っていない。これをフルに利用できるようになれば人間はスーパーコンピュータ並の速度で、新人並の深い思考可能って言うのは夢物語だろうか。そんなものが定期的な入院の度に施術されていたと仮定すると、しつくりくるんだ」

「ばかな」

余りにも荒唐無稽な説だが、笑い飛ばせない妙な現実感がある。

「まあ、問題はプロジェクト名と完全にミスマッチって事だな。天才は戦士じゃないし、能力開発は安眠とは対極だろう。プロジェクト内容をハック出来れば良いんだが、こっちの方は国防総長のパスじゃ動かんから、多分亡くなった主任研究員とやらのパスだと思う。これはちよっと手が出ない。真面目に追求するならスパコン一台かって一億年待つんだね。まあ、結論付ける前に俺の想像の続きを聞いてくれ」

止める気もせずに、早乙女はジュンの話を聞く姿勢をとった。

「兎に角、この十五歳までの小早川のオモテ履歴は嘘っぱちだ。だが、極東アジア軍の秘密実験によって天才小早川徹二は造られた。何の理由があつてか知らないが軍は彼に人として一応誰からも疑われない過去を与えて、ジ・アースに送り込んだ。彼らの計画通り小早川は頭角を現した。めでたしめでたし。ところが、……小早川の方が軍の実験を憎んでいたとしたらどうなる？彼は天才だ。罪に問われることのない復讐方法くらい考えるだろう。戦争という個人の殺人罪があやふやになる状況で彼らを抹殺するべく、新人の武力闘争に荷担する振りをしてただけとしたら、辻褄は合わないか。たった一月だぜ。病院爆破直前のな。ついでに病院爆破の主犯とされているアンドロイドが違法にジ・アースに在籍していた期間は、小早

川の在学期間と完全に一致している。俺は小早川という男を知らない。だから純粹に経歴だけを洗ってこう思った。憶測を通り越して妄想の域に入っちまってるかもしれん。だが、万一事実だったら。だとしたら、これは戦争犯罪の皮を被った重犯罪だろう」

「やめてくれ、気分が悪くなる。いくら何でも徹さんはそんな不気味な奴じゃない」

ジュンは否定した。だが、ジュンは畳み掛けるように続けた。

「でも、お前さんは小早川徹二がスーパージニアスと呼ばれる立場だったのも知らなかっただろ？ 彼は嘘の吐きかたの方も天才的だな。戦争のどさくさに紛れて軍部の研究従事者を抹殺したのなら、発覚をおそれて行方をくらませたのも頷ける話じゃないか。恩師の遺児を守りたいなんてお為ごかしの理由で回りを煙に巻いて、ちゃっかり居場所を造ってしまふあたりの芸当は可成りのものだと思うぞ。下手すりゃ、そういう立場を演出するためにイリアナ・リヤドを殺しているのかもしれないじゃないか。彼女も新人の爆破行為で死んだ。新人擁護派の運動員だったのにもかかわらずだ。妙だと思わないかい。去年彼が生存しているのがばれたときには、イリアナ・リヤドとのプラトニッククラブに殉じた男って事で、世論は概ね好意的に受け取っていた。それも万が一生存が軍に発覚したときに有利に事が進むようにという、計算の内だったとしたら、あり得ない話じゃないだろう」

「信じられない」

早乙女は自分でも驚くほどの強い口調で言い切った。シェーネと翔虎の会話が耳に甦る。恨んだが今は感謝しているのだと言っていたシェーネ。自分にウードという息子を与えてくれたのは小早川だとまで言っていた。それが全部悪魔・小早川の思惑通りに踊らさされているだけなのだとしたら、酷すぎる。翔虎だって船を降りると言い出した小早川のことを心から心配していた。彼は本当の小早川に会いたいと言っていた。

あの優しい仮面の下に隠された素顔が、そんな悪魔なのだとし

たら……。余りにも翔虎が哀しい。ウォードは最近徹二が冷たくなつたと嘆いていた。それは生存が公になって曙丸に隠れている必要が亡くなった小早川が、避難先としての曙丸に見切りを付けただけなのだとしたら……。いくらなんでも非道に過ぎる。

翔虎やウォードの損得感情無しの純粋な信頼を、何だと思つているのだ。だが、そう考えると全てが至極綺麗におさまるのだ。

あいつが何故自分自身の家族を造る機会を捨てて、ウォードを見守り育てる方を選んだのか、それが分からないんだ。

全てのジグソーパズルがぴつたりと填つて、恐ろしい絵が見えた。と早乙女は確信した。裁きを受けさせてやる。自分が、彼を追いつめてやる。偽善者面した正体を暴いてやる。早乙女にはその突き上げるような熱い思いを止めることは、誰にも出来ないと思った。自分分はきつとそれを暴くために曙丸に乗り組んだのだ。悪魔め。自分には使命があつたのだ。きつと。

「お前さ、その仮説、ちよつとした読み物風に纏められるか」

「はあ、何考えてるんだ信吾」

にっこりと、早乙女は笑った。

「悪魔狩りさ、此処まで噛んだんだ、一口乗れよ」

深刻そうな表情に打って変わって、早乙女の瞳が妙に輝きだしていた。ジュン・ラテオスは肩をすくめた。

読み物風ね。はいはい。フルコース五回分権利獲得……と。

第九章 それぞれの行方

霧島翔虎が曙丸の船長事務室で、休暇中に何だかんだと溜まっていた書類を整理していると、ノックの音とほぼ同時にドアが開いた。其処に立っていた人が誰なのか、一瞬、翔虎はつかみ損ねた。それは小早川だった。パーマが残っていて髪は多少うねっているもの、さっぱりと短く刈られている。もともとめに手入れをしている訳でないで、毛先に黄色が残ってはいるが殆ど黒い。そんなことより彼の印象を大きく変えているのが、表情をかき落として険を宿した瞳と峻厳と言っているほどに締まった口許だった。こんな表情の彼は見たことがない。

「ただいま」

短く小早川が言った。一旦喋り出すと止めようのない奴らしくもない。知らない人間が立っているようだ。

「お帰り」

一応言ったが、後の言葉が続かなかった。矢張り上手く行かなかったのだろうか。想像の中の理想の相手は決して裏切らない。生身同士の感情はぶつかり易い。あんなにも思い合っていたものの、駄目だったのだろうか。

「約束通り、殴らないのか」

睨み付けられて張り詰めた静けさに翔虎は耐えかねた。なんとか頑張って冗談めかして言った翔虎に、小早川はいきなり相好をくずした。それは鮮やかな変化だった。空気さえもが一瞬で和む。

「殴って欲しいなら遠慮しないわよ。でも今度のことでは、残念ながら翔虎ちゃんに感謝しているの。私はあの人に会ってきて良かったわ。子供って矢張り可愛いし。二週間、短かったけれど信じられないほど幸福だった。あの人とあんな風に話せたのは生まれて初めてだったわね」

いつものように、さつさと煙草を取り出すと、早速火を付ける。全く、行動パターンは変わっていない。口調もあのままだ。あのきつい目つきは、どうやら殴る代わりのジョークだったらしい。翔虎は少し安心した。だが、そのあと彼が続けていった事は、葛城を訪ねていった翔虎の意図とは正反対のものだった。

「それで、決心が付いたの。私矢つ張り曙丸を降りさせてもらうわ」「結婚でもするのか」

翔虎は呆れていった。正直、それ以外に思いつかなかった。

煩そうに襟元の髪を掻き上げて、小早川は言った。

「彼女とは今回はちゃんと別れて来たわ。今度こそ本当に、二度と会わない」

「なんだって」

翔虎は思わず、机に両手を強く突きつけて荒々しく立ち上がった。「何考えてるんだよ。さっぱり分からないじゃないか。矛盾も良いところだ。お前さんは葛城さんに会って幸せだったって言ったな。

子供達とも上手く行ったんだろう。なら何故、別れたって展開になるんだ。あの人を傷つけるような身勝手は俺が許さないからな。彼女は不幸になって良いような人なんかじゃない」

小早川は翔虎の勢いに驚くと言うより呆れたようだったが、にやりと品悪く口の端をあげてから、煙を翔虎の顔に態と吹き付けた。「何聞いた風な口をきいてるのよ。半日しか知らない癖に。セイのことで翔虎ちゃんに説教されるつもりはないわ。二人でとことん話し合って決めた事よ。口出しはさせないわ」

翔虎はその言いぐさが、徹底的に気に入らなかった。自分が思いきって葛城に会いに行かなかったら、子供達のことを小早川は一生知らずに過ごしたのかもしれないのだ。十年もかけておいて、会いたいのだ、ということにすら気付かない朴念仁が何をえらそうに。「口出しさせないだ。いい気なもんだな。俺が余計な気を回さなきゃ、お前さんは自分に子供がいることも、葛城さんがお前を愛し

ていることも知らなかったんだ」

小早川は両手を肩の辺りで大袈裟に広げて見せた。

「人の話を聞いてない人ね。だから、感謝していると言ったでしょう。有り難う……本当に」

有り難うと言った時の小早川が浮かべた笑顔があまりにもさっぱりとしていたので、翔虎は体から力が一気に抜けてしまった。もういい。こいつらのことは一生分ならないに違いない。

さっきから小早川の手は、襟足にかかる髪をしきりに煩がっている。見慣れない仕草が鬱陶しかった。あの纏れた長髪は見た目にはむさくるしかったが、いつも括っている分、どうやら本人は快適だったらしい。

むつつりと黙り込んだ翔虎に、小早川は労るような口調に変えていった。

「ごめんなさい。翔虎ちゃんが私達のことを心配してくれるのは分かっていて。でも、これは私達の問題だから。私とセイは子供達を守りたいの。私が父親であることはマイナスはもたらせても、決してプラスにはならない。あの子達はとても賢い子よ。早速親ばかりしてるでしょう。それで、全てを話したわ。私から」

「全てって何の……」

翔虎がきくのを、小早川が止めた。

「ご免なさい。今は言えない。私はやっぱり弱虫なのよね。全ての過ちを貴方にぶちまけてしまったら楽になるのでしょうか、それで翔虎ちゃんの視線が変わったら……多分、私は耐えられない」

そうだった。結局自分は何も分かっていないままなのだ。事態は少し好転していると思っていたが、何となくの経過は読めても、事実ときたらさっぱりしたものだ。

結局、大騒ぎした割に、出ていくと宣言した小早川を引き留める理由も見つからなかったし、彼が自責するところの罪だの咎だのが

何なのかの見当も付かない事にも変わりないのだ。

「馬鹿なことを言うな。俺はお前を信賴している。それは変わらない、絶対に」

翔虎はから滑りの感を拭えない、断言をした。小早川は微笑んで頷いてみせたが、その答えの方は翔虎の虚言を嘲笑うかのようだった。

「人の心に絶対はないわ。残念なことだけど。と言うわけで、後任の人探してね。その人に仕事を任せて、私が罪を償いに行くときに全部話すわ。感謝の印って奴かしら、それだけは約束するわ。居なくなつた後でいくらでも嘲つて頂戴」

翔虎は何故か泣きたくなつた。小早川は平気で罪というが、その彼が罪と思つてゐることを知らなければ、慰めの言葉を探す事すら出来ないではないか。

「そんな顔しないで。私は此処が好きだつたわ。此処であなた達と暮らせた何年間かが、一生の内、多分、一番幸せだった。普通に仕事して、食べて寝て、それだけだったのにどんなときより私は安らげたわ。本当に有り難うね。私はもし許されることが出来たら……女々しいわね。ありえないわ」

翔虎は何も言えなかつた。言えなかつたが、言葉を絞り出した。「勝手に過去形にするな馬鹿野郎」

「これ、形は必要だと思つて書いてきた。ちゃんと受け取つてね」目線をあげることが出来なかつた翔虎の手元に、白い封筒が見えた。表書きには『退職願』とある。見たくなかつた。この部屋に入つてきたときの彼の顔は、険しかった。小早川は帰船の挨拶ではなく、断絶の宣告をしに来たのだ。

手元の封書に視線を落として、そのまま顔を上げることが出来ずにいた翔虎を残して、彼はさつさと退出していった。自分は矢張り何もできなかった。

目の前に靄がかかつて本当に文字が見えなくなつた。何故、彼は自分を信賴してくれないのだ。自分は彼を信じてゐるのに。

ウオードは荷造りをしていた。殆ど荷物なんぞないと思っていたが、改めて詰め始めると結構量が嵩んだ。此処で育ってきたのだ。

知らない内に持ち物は増えていた。壊れかけた模型の宇宙船や、コロニーモデル。忘れていたおもちゃが隅から発掘される度、思い出して一人笑ったり、全く覚えのないものに戸惑ったりした。ノックと共に彼は誰かが入ってきた気配に気付いた。振り向くと、そこに見慣れない小早川が立っているのが見つかった。ウオードは飛び跳ねるようにして駆け寄って行った。

「髪の毛切ったんだ」

ウオードは他にも沢山言いたいことがあった筈なのだが、小早川を見ると何も言えなくなってしまった。その代わりに、襟足が見えるくらいに切ってしまった小早川の髪のことを口に出した。

「決めたのね」

そう言った小早川に、ウオードは力強く頷いて見せた。

「父さんと随分話し合ったんだ。修理屋にも居て欲しかったけど、何か二人だけの分煮詰めて話せたと思う。父さんも退職するような事言ってたけど、一人で大丈夫だからって説得した」

不意に小早川の体が迫ってきて、ウオードは自分が幼子のように抱きしめられているのが分かった。それは随分照れくさいことでもあったが、それ以上に身内から暖められるような優しい気持ちに満たされるものであった。

「決心したのね。偉いわ。シェーネのこととも思いやってくれるなんて最高よ。子供が成長するのは早いわね。形は大きくなってまだまだ赤ん坊なのかと思ってたけど、嬉しいわ」

修理屋がこの前にこんな風に接してくれたのは何時だったつけ。何か凄く久しぶりの気がする。そして誉め言葉。これも随分懐かしい。

「前に修理屋の言ったこと僕なりに理解できたつもりなんだ。知らない人達と上手くやっていけるか分かんないけど、頑張ってみるよ」「ばかね、頑張る必要なんかないわ。そのまま貴方なら充分やっていける。でもね、世の中には全く理解に苦しむ連中もいるから、良いことばかりじゃないことも確かね。そのときは私の所為にして恨んだっていいわ。だけど、友と呼べる人に出会えれば、貴方はきっと私に感謝するわよ」

ウオードはこのもしかすると父よりも近しく思っている男が、今更のように自分にとってかけがえのない者であることが分かった。この男は自分が必要とするときに欲しい言葉をくれる。思えば何時でも彼の目配りを感じていたように思える。同じように物を壊したときでも態とで有れば問答無用で手が飛んでくるのだが、うっかりの時は黙って片付けるのを手伝ってくれた。彼がその両者を取り違えたことは未だない。

そんな些細な事柄を取ってみても、彼がウオードを間違いなく目にかけてくれている証明だ。小早川がやっていけると言ってくれば、それが素直に力をくれる。

「感謝ならいつもしてるよ。僕は何時だって修理屋が大好きだよ」
小早川は頭を振った。

「感謝をしてるのは私の方だわ。貴方が育っていくのを見られたのは幸せだったわ。貴方に命をくれたシェーネとイリアナに、私が居るのを許してくれた曙丸の皆に、そして全ての巡り合わせを下さった神に、今は感謝している」

「修理屋？」

変だった。なにかこれでは永遠に別れゆくみたいではないか。自分はサンガに住むのだし、曙丸が寄港したら何があっても飛んでくるつもりで居る。家を出るとはいつでも大人として完全に独立するわけでないのだ。休みの時に会いに来ることまで禁止するつもりでもないだろうに。

「曙丸がサンガに入ったら、僕は何時だって来るんだ。その位はい

いだろ」

「そうね、シェーネのためにもそうなさいな。でも、わたしは船を降りるの。さつき翔虎ちゃんに辞表出してきたわ」

修理屋が曙丸をおりる。そんな事は聞いていないし、想像したこともない。ウォードの記憶が遡れる限りの原風景には、曙丸と作業服姿の小早川が居た。自分が曙丸を去ることも一大事だが、その風景から小早川が消えることはもつと釈然としない。

「なんで……」

小早川はウォードの頭に手を置いて、首を振って見せた。

「それこそ子供の口出す事じゃなくてよ。私は自分の正しいと思うことをしたくなっただけ。この先わたしがすることみて、ウォードは私を許せないと思うかもしれない。でも、私は何時でも貴方のことを愛しているわ。それだけは覚えていて欲しいな」

ウォードは曙丸に居て欲しいと言いたかった。だが、自分ですら曙丸から旅立とうと決心したとき、それなりに悩み抜いたのだ。小早川が考えもなくそう決めたのではないことくらい容易に察せられた。ウォードは頷いた。

「うん、大人は複雑で鬱陶しいね。でも、永遠の別れて訳じゃないんでしょ。また会ってくれるよね」

小早川は微笑んだ。

「縁があつたらね。人は変わるわ。良くも悪くもね。それに人間なんて決して筋の通った存在じゃない。傷つくと分かっていて曲がった行動をとることもあるし、意識もせずに誰かを傷つけることもある。それでも、過ぎた時間だけは確かにどこかに息づいているわ。今になって私は幸せだった時間の全てが、自分を力付け励ましてくれることが分かる。それに支えられて生きていける。イリアナ、あなたのお母さんが私に言ってくれたことがある。存在は既に許されているのだとね。ついこの間その意味が分かったの。仕方ないわね。私は彼女が亡くなったときよりずっと年くつてるのに、やっと足下

に追いついたって感じ。私はやっと死に方を考えるんじゃない、生き方を問う方に目を向けることが出来た」

ウォードは小早川の独白に近い言葉の意味を、半分も分かっていなかった。第一、彼がずっと死を考えていたことなど初耳だった。大人が腹の底で何を考えているのか、矢張り理解しがたい。そんな思いを余所に、小早川は続けていった。

「サンガにね、友達が居るの。その人を紹介してあげるから、何かあったら頼ると良いわ。でも忙しい人だから安易に使っちゃ駄目よ」ウォードは一方的な小早川にかなり呆れたが、それもまた彼らしいと思い直し、素直に頷いて見せた。そして。

「そうだ、一つ頼みたいことがあったんだ」

と、思い出したように言い出した。

「何よ、あらたまって」

「写真、撮って良いかな。修理屋と一緒にの所の。出来れば父さんも入って貰って」

「どうするのよ、そんなもの」

ウォードは態とらしく咳払いをしてみせた。

「友達が出来たら、家族の写真くらい見せたいじゃない」

小早川はいかにも厭そうに顔を顰めた。

「私とバゲモンをホモの夫婦にでもする気？ あー、やだやだ」

そう茶化しはしたが、小早川はウォードの頼みをきいてやった。

ウォードは何時の間にも用意してきたのか、新しいカメラで曙丸の様々な場所を写していった。操船室で父だけでなく翔虎と柳も簡易宇宙服姿で居る様子とか、（これは船外活動でもなければそんないでたちでいる訳無いのだから、三人には相当不評だったが）作業口ポットを従えて機関コントロールルームにいる小早川。亜空間通信波の端末に座るリンダとその横に立つ早乙女の写真は、亜空間通信波装置のパネルのごつさが、いかにも宇宙船という感じで格好良く撮れていた。あまり宇宙船の中というイメージの絵にはならないと

文句をいいつつ、ウオードは事務屋の洞口を写し、挙げ句には全員を居間に集めて記念撮影とまで洒落込んだ。撮れたての画面を見て品評会しながら皆、表面上は不平たらたらだったが、この狭く濃密な人間関係にどっぷり浸かって育った少年ウオードが、一人で広い見知らぬ人々が蠢く大海に乗り出していくその饒に、カメラの前では精一杯の笑顔を贈ってやっていた。

それぞれが己のその頃に思いを馳せていたに違いない。ウオードの新しいカメラが切り取った瞬間の皆は、だれもが不思議と穏やかないい顔をみせていた。

* * *

サンガ商業区の霧島運輸ビル。大希とジェイは居住区にある単身者用の集合住宅に暮らしながら、同じオフィスに通っている。ジェイと違い霧島運輸が第一志望という訳では無かったのだが、就職試験の内容ですっかり気に入ってしまった大希は、既に入社許可の下りにいた某大手運輸会社を蹴って霧島を選んだ。

霧島は自分たちが自由意志を持って積極的に参加することを希望してくれている。そんな気がする。極東アジア国の新人雇用積極確保策に仕方なく従って、頭数だけ就職させようと渋々決めざるを得なかった中小企業という先入観は間違っていた。だが、霧島はOJT（仕事をしながらの職業訓練）に入る前に、自分たちがもっと総合行動を積極的に使いこなすことを求めた。それはまわりくどい物と思われたし、それ相応の教育を受けてきた自分たちを蔑ろにするものとも思えた。第一霧島にとっても費用の無駄遣いにしかならないのではないかと反抗心があった。

しかし、あの自治区出の総合行動を「詰まらない人型コミュニケーション」で断じて憚らなかった同期の連中は、徐々にだがはつきりと変わりつつある。成果は著しく顕れている。自分たちが同じオフィスに出入りすることに露骨な嫌悪の視線を突き刺していた人達のものなにも、廊下で会釈くらいしてくれる者も出てきた。

手元を持っている『船舶搭乗員候補新人用、教育特別プログラム』の小冊子は既に何回となく熟読している。内容は記憶に叩き込んでいるので今更紙を拝むこともないのだが、字面を追って読むことで理解が深くなる気がする。これの作者は学校のテキストにも使用された『記憶のメカニズム 忘却と再認識』を書いた小早川徹二博士。監修したのが自分たちの恩師でもあるセレンシイ葛城。内容は閉鎖空間の為に過度に接触せざるを得ない事で起こる、ストレスによる人間関係の諸トラブルを回避するためのノウハウが中心になっている、自分のような総合行動に自信を持っている者にも有無を言わず読ませる造りになっている。

エクササイズの設定と来たら、呆れた事に人は新人を差別し自分たちの任務の遂行を阻害しようとするのが前提になっている。今やっている訓練では、この差別する側の人間の役を順に演じる事を求められている。そして上手く相方の新人役の者をいじめる罵言が吐けないと、指導担当者が鋭い批判をよこす。新人を冒涇する言葉に理性的に反論しなければならぬ新人役は、何故か本社の社員が持ち回り制でやっている。葛城教官の監修にしては随分お粗末だと思ったものだが、始めてみて驚いた。本当に知識を総動員して人の気持ちを推測しないと、罵倒の一つも出来ないのだ。何せ、人には嫌悪もあるが新人を貶す経験など無い。戦争の経緯、新人が何故疎まれるに至ったのか、自分たちが何故優れた者でもない人などに、戦勝者で有りながら差別されるのか。調べまくって総合判断をして自分たちを非難する手段を考える。人も又そうだったのだろう。要らない存在と信じている新人を庇う理由を探さなければいけないの

だ。査定に響くとあつては誰もが真剣にならざるを得ない。

理解は、歩み寄りへの第一歩だ。人の気持ちに立つて、過去を振り返る。それは新鮮な体験だった。腕一本無くしても人は再生できない。記憶のバックアップも取れないので、生命の機能を失つてしまえば其処に終焉が待っている。一つの人としての魂は、宗教的には再生も輪廻もしようが、現実には死は永遠の喪失なのだ。だからこそ、近しい人を亡くした者の怒りは深い。彼らの立場に立ったとき、初めて自分たちを嫌う人の気持ちにふれられたような気がした。これが、葛城の言っていた「察する」訓練なのだろうか。

だが、我々の方こそ被害者ではなかったか。抑圧され生死を気軽に弄ばれる存在に我々をしたのは人ではなかったか。植民星開拓のための重労働の作業ロボットの統括に酷使させられた父も、疑似痛覚機能を持たされた上で、何度も面白半分に殺された母。二人とも確かに人造物に過ぎなかつた。事実彼らは思考回路は保持したまま、ボディを変え何度も生き返っている。そんな境遇に、耐えられないと思つたのは心が有るからではないか。彼らにも痛みはあつたのだ。作つたのならば大事にして欲しい。もしかしたら、先人達はそれだけのことが言いたかつたのではないか。人が命に尊厳を求めるように、我々が心に尊厳を求めてはいけないのか。

戦争中に大希の両親は同志として出会い、戦後新人が自分たちで新しい個体を造り出す権利を得たことにより、自治区に移住し自分を造つた。自分は人の手に依らない第一世代の個体だ。二人は厳密な意味で両親といえるのだろうか。パーツを買って組み立てただけじゃないか。ならば人が造るのと何処が違うというのだ。それでも自分というモノを育てた彼らに心があつたことだけは信じたい。

様々な疑問が湧く。そして、答えを模索する。明快だつた思考が混沌としてくる。

大希は溜息をつき、そしてついた自分に驚いた。なんとまあ自然の溜息とは。隣にいたジェイが笑った。

「溜息なんざ色っぱいね。俺も練習しようかな」

「馬鹿言え、今の奴は練習じゃ出来ないよ。お前さんも一度芯まで悩んでみるんだね」

「げ、人間くさいぞお前。ま、今の俺も人のこと言えないだろうけど。親が見たら泣くね。お前を人間なんか育てた覚えはありませんって言われたらどうしよう」

思わず、大希が声をたてて笑った。

「そういえば、お前の両親のこと聞いたこと無かったな」

ジェイがいよいよと言うように首を振った。

「残念だね、俺は両親じゃないのよ。親権保有者三人だもん。グループ作出って奴。それも全部女型。末期医療専門病院の看護婦仲間なんだ。つまり生命活動だけはある人間の残骸の面倒見つてやつよ。今時の人間、自分の親だって尻の始末までしたがないもん。そのくせ、人じゃないから扱いがぞんざいになるとか、殺したのじゃないとか、非難されることなんぞ日常の事みたいだ。でもああいうところは結局人手が足りないだろうな。こんなご時世でも、相変わらず職にはあぶれてないよ。母さん達、俺には新人医療、つまりメンテナンスの仕事を覚えさせたかったみたいんだけど、なんか閉じ込められて新人ばかりの中で暮らす気には成れなくてな。俺達って不思議だと思わないか。何でそんな思いが出て来るんだろうな。魂なんて無い筈なのに、望みは立場と関係なく沸いて出る」

その時、集音器が廊下を歩く複数の人の足音を捉えた。ジェイは話を止め、その気配に集中した。やっと乗務する船の船長に会えるのだろう。ノックが聞こえると同時に二人は立ち上がった。

二人が居た部屋は、小会議室と称する場所で、座り心地などに何の配慮もされていない椅子と事務机じみたテーブルがあるだけの部屋だった。配属先が決まったと知らされて、今日ここで辞令を受け

取ることになっている。此処に着いたときジェイが居た幸運に、大希は『嬉しい』と多分人が呼ぶだろう感情を覚えた。親しく分かり合えるものと共に働けるのなら、それは間違いなく素晴らしいことだ。

入ってきたのは、人間にしてはかなりバランスの取れた体格の百八十五センチ誤差プラスマイナス・コンマ三センチ、推定三十才前後で東洋人種らしい黒髪の男性と、就職試験の面接の時より髪が短くなっているものの、試験官の一人だった男。彼は試験官の中でも飛び抜けてビジネスマンらしくない格好をしていたので、特に印象深く覚えている。もう一人は職業訓練を始めてから知り合いになった人事部にいる杉田という男。その三人だった。

「待たせたね、紹介するよ。こちらが曙丸の霧島翔虎船長。君達なら覚えていると思うが、面接の時に一緒にいたこっちの彼が、同船の小早川徹二機関長だ」

大希は少なからず驚いた。この小柄な男があの小早川徹二？

「新人の君達でも驚くことがあるんだな。その通り、彼が君達の訓練プログラムを作成した小早川博士でもある。本職と畑違いすぎて驚くだろうけれど、君達新人に関するスペシャリストでもあるでしょう。今回は特別に応援を頼んだんだ」

小柄な男が、軽く会釈をくれる。大希は思い出したかのように礼を返した。

「初めまして。霧島です。残念ながら小早川君は次の航海を最後に離職されることが決まっていますのですが、特に今回は君達のOJTを担当してくれます。事前の職業訓練で分かっているとは思いますが、恒星間航海専用船というのは極端な閉鎖社会です。君達がトラブルの原因になって後進の道を断つことの無いよう、活躍を期待します」

霧島翔虎と紹介された男は、覚えてきた台詞を忠実になぞるような口調で淡々と喋った。隣に座った小早川博士の笑顔は、『苦笑している』といった雰囲気だ。

「自己紹介は初めてですね。小早川です。次の航海は恒星間ではありませんから、丁度良い訓練になると思います。お二人が、曙丸に適応してくれるよう祈っています」

そのとき小早川は短くこう言ったただだったが、抑えようも無く大希の興味は小早川に集中していた。

『記憶のメカニズム』でこの人が展開していたのは、正確には忘却礼賛論とでもいった奇妙なものだった。そして、自分たち新人が人と決定的に違うのは、『無為の忘却という恩恵から阻害されている』という奇妙なものだった。

人間のデータとしての記憶は間断なく記録される。意識のあるなしに係わらず新人が全てを認識するのと同レベルで行われる。その意味で基本的能力は互いに遜色ない。だが、新人は全ての情報を認識している。人間は整理して認識している（普通に利用できる）情報と、忘却の名の下に普段は全く記憶していることさえ覚えていない情報とがある。その幅広い認識と忘却の境界空間を無意識下で制御する機能を持っている事が、精神の安定を補助する。精密な記憶は、分析能力の精度を上げる。つまり正しいとされる行動を選択する場合の行動指標を的確にする能力は上がるが、同時に健全な精神を蝕む可能性をも秘めている。諸刃の剣である。……そういった論旨だったと思う。

人事部の杉田が去った後、霧島翔虎が乗船日時と、船員心得なるものを大希達に説明した。それだけで話は済んだとばかりに立ち上がりかけた霧島と小早川を大希は呼び止めた。

「待って下さい。少しお時間戴けませんか」

ジェイが、止めるよという風に袖を引く。だが、大希はその手を振り払った。

「用って、どっちにかしら」

小早川が聞く。その顔は自分に用だと分かり切っていて聞いているとしか見えなかった。

「小早川さんに訓練プログラムのことについて、ご質問させて頂きたいんです」

小早川はちよつと考える様子だったが、頷いた。

「分かりました。翔虎ちゃん、と言うわけで船に戻るの遅れていいかしら。今日は私の後任の磯貝さんが乗船なさる日よね。彼に非礼を詫びておいてくれない」

「それは構わないが、戻るのはいつ頃になる？」

小早川が大希を見て、首を傾げるようにする。

「どのくらいになるかしら。三十分もあればいい？それとももっとかしら」

何故この男がそんな言葉遣いをするのか不思議だったが、人間にも色々種類があると言うことが最近飲み込めてきた大希は、気にしないことにした。

「多分、もう少しお願いすると思います」

「ということです。そうね、遅くても標準十六時には帰船します。磯貝さんにその旨伝えて下さい」

「了解」

大希と小早川のどことなく緊張した対峙をよそに、ジェイは翔虎が軽く敬礼をして、きびきびとした動作で退出していくのを惚れ惚れと見ていた。これが初めて間近に見る宇宙船乗りなのだ。

ふと気が付くと、大希は酷く思い詰めた表情でいた。ジェイは彼が何を言うつもりなのか予測も付かなかった。

「小早川さん、貴方は本当に、新人を人間だと思っていますか」

ジェイは、啞然とした。彼は何を言い出すのだ。

第十章 急湍

次の航海では曙丸の様相が一変した。小早川の後任に本社人事が斡旋してきた男は小早川とまるで異なる経歴の持ち主で、大型の太陽系内輸送船舶機関部の機関長補佐を長年勤め上げた男だった。若い頃に機関長になれる一級宇宙船機関技術士の資格を取っていたが、世渡りの要領を心得ていなかった。引退間近な機関士を抱えた船長に取り入るとか、他の部署の長クラスに顔をつないで人望を得るとか、本社に働きかけて中型船の長の空き位置を待つとか言う小技を使わなかった為、長いこと一機関技師のままで五十歳過ぎになってしまった男だった。

その磯貝陽太郎という男は確かに船舶動力機関について熟練していた。文句を言うのは筋違いと分かつていても、早々に小早川のしていた機関長の仕事を全面的に引き継いで彼の仕事を干してしまっただのが、翔虎には何となく気に入らなかった。勿論、磯貝の方がはるかに年長であり、現場での年季も小早川とは比べ物にならないくらい有ることは確かだ。けれど前任者である小早川を立てるどころか、手足の如く使って当然と振る舞っている。この航海が終わるまで機関長が小早川ということをし、全く気にかける様子がない。

それに小早川の方もごく当然のように彼に仕事を任せ、配属されてきた新人大希とジェイの教育を進んで主な仕事にしている節がある。大希は機関員として最低限の働きが出来るように日夜訓練されていたし、ジェイの方は洞口の補佐として容赦なくしごかれていた。

曙丸の雰囲気が変わった一番大きい理由は、ウオードがサンガの居住区に寮がある高校に編入学し、船から一足先に去ったことにもよるのだろう。この短いワントリップが終わったら小早川も居なくなる。彼の抜けた穴を埋めるためには、あと他に掃除や洗濯、食事管理などといった保守管理というか雑用をしてくれる者と、医師か医療保健助手資格保有者の二人が最低必要で、その二名の人選も本

社の人事に任せている。

小早川が大希を機関員として教育しているし、新人雇用が霧島の社是と知っていても、磯貝はいざというときに新人に船の運命を任せるのは無謀だと訴え、前の船で彼の良い補佐だった男を引き抜きたいと言ってきた。いま磯貝に抜けられては曙丸は動けなくなるので、それも自分は呑むのだろう。親しい顔が消え、あつという間に知らない顔が半分になる。ウオードが降りた今、シーネが定年延長を申し入れしてくるかも不確定要素になった。

こんな事を言っでは船長失格なのだろうが、操船室で顔を合わせるメンバーが今までの親しい男達というのが唯一の救いだった。磯貝も悪気はないのだろうが、靴を脱いで上がる和式の居間をえらく嫌っていて、あの小早川の部屋、昼間にはウオードが勉強し、夜は皆でくつろいだあの場所を占領してしまった。小早川はどうせなら早い方が良くこれ又何の末練も無さげに、磯貝に自室を明け渡し、空き部屋だった所に引越してしまった。あの調度は全て小早川の自腹なのに、まるで初めから曙丸の備品であつたかのような気安さで磯貝は使っている。それも翔虎の気に障る。

小早川があのような趣味の家具を選んだのが、葛城との思い出を大切にしている故なのだろうと、彼女の家を見て知ったからこそ、余計に気が晴れない。どこかひつかかる。小早川があれに愛着を示さないと言うことは、葛城にはもう本当に拘らないということなのだろうか。

ほんの数時間会って話ただけなのに、翔虎はあの人の魅力に参っている。いつか小早川と話しているとき、女の趣味が似ているのかなと思つたが、まさにその通りだ。若かつた小早川が彼女に憧れた気持ちが無理なく分かる気がするのだ。

そういえば最近リンダも口数が少ない。彼女が気軽に話せるのは、よく考えたら自分と小早川、ウオードくらいだったのだ。リンダは小早川が船を降りるのに納得していない。そして、彼の辞表と受け取った自分にも酷く腹を立てているらしく、殆ど口をきいてくれない。

い。

そんな思いに耽っているとき、

「翔虎、居る？」

と、至極く乱暴にドアをこじ開けてリンダが飛び込んできた。彼女が自室に訪ねてくれるのは久しぶりだ。怒っていても、笑っていても彼女を見るのは嬉しい。

「リンダ。久しぶりだ。来てくれて嬉しいよ」

翔虎が満面の笑みを浮かべてベッドから跳ね起きたのに、理不尽にもリンダは癩癩をぶつけた。

「そんな悠長なこと言っている場合じゃないわ。サラが送ってくれたの。これ読んで」

プリントした紙を翔虎にたたきつけるように渡し、リンダはそれを読む暇を与えない勢いで意見を迫った。

「酷い中傷だわ。腹が立つて、腹が立つて。でもサラの話じゃ、地球じゃ鵜呑みにする奴らが騒ぎ出しているみたい。お姉さんの松姫さんが、手を回して出版社に記事撤回要求かけてるみたいなんだけど。酷いよね、これじゃ徹さんはバケモン扱いだわ」

泣きだしかねないリンダに溜め息をついて、翔虎が言った。

「さてよ、リンダ。取り敢えず目を通してくれ」

派手な見出しの段組に、踊っている文字は、一見自分たちには何も関わりのない記事に見えた。

極東アジア国軍・秘密実験の謎に迫る。

バイオグ実験の産物か、はたまた大脳開発特殊プログラムか。

病院爆破、殺人、彼は希代の悪魔なのか。

偽りの超天才の真実は、その素顔に迫る。

何だこれは。というのが正直な感想だった。低俗なタブロイド紙の中でも一級に品が悪いので有名な雑誌である事は、コピーの段組の外枠に書いてある雑誌名で分かる。こんな三流誌は良識のある大人が読むに値するような物ではない。だが……。

内容を読み進めていく内に翔虎の手が押さえようもなく震えだした。なんだ、本当に何なんだ。

「リソースも不明。投稿した作者もプライバシーの保護から内密。極東アジア国軍のトップシークレットをハッキングした重罪の是非はひとまず置いて、これだけの非道徳的な秘密実験をおかした罪を、国家規模の巨悪を指弾せずにジャーナリストを名乗れようか。ですって。ふざけないでよ。たしかにドクターKじゃ伏せ字だけど、去年生存が確認されたスーパージニアスなんて、個人名を挙げているのと同じじゃない」

怒りが極まってリンダは目に涙がうつすらと浮いている。

「許せないのは、修理屋がバゲモンの奥さんを殺した事になってるのよ。こんな馬鹿なことがあるもんですか」

忙しく記事を目で追っていた翔虎には激したリンダの甲高い声がいつになく煩く聞こえた。全く、集中し難いじゃないか。

万一、生存が発覚して軍部に追求されたとき、この美談に己を守らせるというのがこの悪魔のやり口である。彼が再び行方をくらませる前に、真実の証人として公の場で謎のプロジェクト『戦士の安眠』について語らせるのが、我々の務めではないだろうか。

翔虎はこの紙切れを捻りつぶしたい衝動を抑えてリンダにきいた。

「シエーネには見せたか」

「とんでもない。出来る訳無いわ」

「馬鹿、こういうのは早く知って置いた方が良いんだ。特に徹さんを信じるならな。これもう一部プリントしてシエーネに渡してくれ」

リンダは首を振った。

「いやよ、何で私が」

「いいから早く頼む。俺からだと言えればいい。読んだら修理屋の部屋に来いってつたえとけ」

「翔虎は」

「決まってるだろう。徹さんの所だ」

部屋に押し掛けた翔虎が突きつけた記事をゆっくりと読んでいた小早川は不気味なほどに平静にみえた。特に驚くわけでもない。それが、翔虎の怒りを急激に冷やし、代わりに疑いがじわじわと胸を満たし始めていた。

「驚いたわね。すごい、こんな三流紙によくこれだけの情報集められたわね」

その気の抜けた言い方が翔虎に冷水を浴びせた。

「たしかに、これだけの証拠から推論していくと、こうなるのも無理ないのかしら。想像力の方はかなりとんでる……かな」

「何を人ごとみたいに悠長に言ってるんだ」

翔虎が叫んだのとほぼ同時に、血相を変えたシーネが飛び込んで来て怒鳴った。

「お前がイリアナを殺したって、どういうことだ」

「いかん。完全に逆上している。矢張りリンドに持たせたのは失敗だったかもしれない。多分シーネが凄い形相で走ってくるのが見咎めたのだろう。外の廊下には早乙女と柳が居る。通信端末を不在にするなと早乙女に命じるのも忘れて、翔虎は小早川だけを見た。

小早川は首を振った。それは翔虎には救いだった。頷かれたらそれこそ俺は小早川の言通りに、彼を信じられなくなるところだった。

「先生を殺してなんかいない。真っ赤な出鱈目よ。シーネ、信じて。彼女は私に生きると言うことを教えてくれた人。あの人を殺しただなんて、……それだけは、酷い中傷だわ」

「それだけはって」

口元を抑えて、いつの間にか廊下の外に居たリンドが言うと、その語感の持つ意味に気付いたのか、目をギラ付かせていたシーネの顔が奇妙に歪んだ。

「後は、当たらずといえども遠からずよ。むしろこれだけの情報で

この結論を得られたのなら、殆ど正解といっても良いわ。私が神が造り給うたレベルの人間でないのも、新人の武力行動を隠れ蓑に、奴らの研究をぶつつぶしたのも事実。主任研究員の小早川冴子、つまり戸籍上は母にあたる人を殺した……、それだって事実だわ。その目的のために、あの人を殺したいというそれだけのために、病院を爆破した。罪も何も無い、弱い病氣の人々を巻き添えにしてしまった。馬鹿な手段を選んだばかりに、私は許されることを望むことさえ敵わない罪を犯した……。言い訳なんて出来ない……。そっちはね、そっちの罪はね……。私のよ。間違いなく」

自分の罪だと言い切って、小早川は静かに翔虎とシェーネを見つけてきた。翔虎は息をのんだ。廊下の柳と早乙女も何か異質な物を見るような目つきになっていた。小早川を噛みつくように睨んで、シェーネが拳を震わせた。

「それでいて、イリアナの事は信じろというのか」

「いうわ。先生の事だけは信じて。ほらね、翔虎ちゃんそんな目で見ないでよ。私はそれが一番怖かったのだから。人は異質な物を嫌うわ。異質な物で有れば何をしても良いと思っている。じゃあ、女の人のお腹で育っていなければ、何をされても耐えろと言うの。そうよね。人間は傲慢だもの、言うでしょうね」

「徹さん」

翔虎がはっと気付いたときには、小早川はもう回りのことなどになにも見たくないと言うように、壁の方をじつと睨んでいた。

「そんな風に呼んでくれなくても良いのよ。人間人間擬だつてばれたら、人間面してここに居られないのは分かった。おまけに人殺しの犯罪者よ。こんな風に弁解の余地もなく公にされるとまでは思っていなかったけど、事実だわ。私は何度だって罪を負っているといったでしょう」

小早川の口調は既に自分に語りかけられているようだった。

「徹さんて、何なんですか」

無神経な質問をした早乙女を今度は翔虎が睨む。早乙女は一瞬す

くみ上がったように見えた。

「そんなことが知りたいの。貴方も結構残酷ね。でも、話す必要はないわ。何だつて一緒でしょ」

「一緒に無いですよ。人間モドキってどう言うことですか」

早乙女の隣にいた柳が、唐突に彼を殴り倒したのが見えた。

「ヤナちゃん」

小早川の顔が一瞬泣きそうに歪んだ。

「バゲモン。俺、前に洞口さんと徹さんと買い出しに行ったとき、徹さんがイリアナさんのこと話すの聞いてます。いくら鬼だって、自分が殺した人をあんな風に穏やかに優しい声で語れる訳無いですよ。徹さんはイリアナさん死を誰より悼んでます。俺はそれだけは徹さんに味方できる。徹さんが何でも、俺は徹さんの言葉は信じる」
叫ぶように言った柳の言葉が響いたのか、小早川は頭を深く頂垂れて、消え入りそうに微かな声ではあるが言葉を絞り出した。

「有り難う、ヤナちゃん。私は幸せね。どんなときにも救いの言葉をさしのべてくれる人が身近にいるわ。私が自分が死人のクローンに過ぎないと知って、自分が生きている価値が無いと思ったとき、側にいて『心が有れば其処に魂があるのだと』いつてくれたのが、先生だった。先生はここに有るものが生きたいと願うのは当然の権利だと教えてくれた」

「クローン……」

聞きとがめて早乙女が呟いた。

「まさか、人間のクローンは国連が永久に禁止している一級犯罪じゃないですか。それに今の技術では実用に足る能力を持つ人間は絶対に作れないはずだ」

「詳しいな」

翔虎が咎めるように言う。小早川が早乙女の思い込みを簡単に否定した。

「民間レベルではね。私は細胞から培養されて約二年で十五歳相当まで促成培養されたりしいわ。でも、人並みには生きてるでしょ。」

そりゃ、オリジナルとそつくりの人格を造るには十五年分の経験を忠実に再現させてやらなければならない。アンドロイドのコピーと同じ。体は幾つ作れても、心だか魂だかは複製できない。技術の限界ってやつね。でもね、遺伝子は全く同じだから。つまり、臓器移植しても拒絶反応はないの。人格だの健康に動ける体だのが必要なければ細胞から若い健康な体を作るのなんて簡単なことだわ。戦士の安眠ってそういう意味よ。参戦する優秀な現場指揮官クラスの兵士の細胞をとる。だた培養槽に漬けておくだけでは運動機能が発達しないから特殊な負荷を筋肉に与えて続けることで、筋力も保持した成人の体になる。それをストックしておけば、致命傷を負ったときに取り替えられるパーツになる。便利でしょう。新人が気軽に部品を変えるように、人がそうして何が悪いって、つまり言う事よ。ま、実際にはね、動かなかったんだけどね……。体を動かさない脳味噌に体は制御できなかつたらしいわ。内臓みたいに自律神経で動くもの以外は結局使えなかった」

シェーネは吐き気がしてきた。翔虎の顔もこころなしに青ざめている。

「でも、当然生体を培養しておくのには莫大な経費が掛かるから全ての兵士の分を取っておくこともしなかつたみたいだし。一般の兵士は相変わらずの消耗品。一部の階級以上を得た人の細胞だけがストックされていつでも促成培養槽に入れられるべく待機していたわ。実際に特権階級中の特権者のものだけは培養されていたわ。ほぼ実用化まで漕ぎ付けていたってこと。戦士の安眠なんて酷いジョークよ。VIPの安息とでもするべきだったかもね」

「小早川、でも、それじゃ何でお前、オリジナルのストックパーツにしか過ぎないんだったら、培養槽から出られたんだ」

ここにきてやっと冷静さを取り戻したのか、普段は万事理詰めのシェーネが問う。そうか、たしかに部品として培養されていたのなら、彼がここに存在しているのはおかしいことになる。小早川は今度はシェーネの瞳をみつめて、なんとなく頷いてから話した。

「本当に促成培養された体が動くのか確かめるためと、そう言った物が社会に出て人の中で違和感無くやっていけるか試す為だったらしいけど……私には詳しいことは今もって分からないわ。何故、私だったのかなんて、そんなのは私が一番聞きたいわよ」

小早川は唇の端を上げて、皮肉そうな笑顔を作った。

「私は特別で死体から採取された遺伝子を使って、初めから研究材料としてのみ培養されたいのよね。だから、もともと人権がないらしいわ。その多くの私たち、いつてみれば兄弟達の中からは私が選ばれたのか迄は本当に知らないわ。ま、多分、単にアタリを引かされただけで、特別に私である必要はなかったと思うけどね。たまたまよ。どんな時も運とか星回りとか、そんなもんは偶然の積み重ねに過ぎないし」

偶然の積み重ねに過ぎないと言葉に出来るまで、どれほどの時間を小早川が苦悩しただろう。翔虎は聞いているだけで胸が痛かった。「移植実験とか、術後の運動機能テストもつけたけど、どうでもいいわ。私は半年毎にあちこちの体の中身を入れ替えられていたんだけど、そっちはね、阿漕な実験というより、移植医のスキル向上の為の研修だったみたいね。結局、手先が器用でないと理論が完璧でも人は直ぐ死んじゃうから、多臓器移植なんて死んでもいい人間で訓練してからでないと、VIP相手にすることはできなかったんじゃないかしら。この、大脳開発プログラムとやらはお茶目な邪推ね。彼らは純粹に生体医学的技術力を誇示するかのように、その後私が問題なく動けるか、大学って言う閉じられた空間になじめるか観察されていただけ。ま、彼らの言葉を借りれば放牧ってとこかな」

「そんな、酷い……」

リンダが小さいが吐き捨てるような鋭さで言い、首を振った。

「計画の最終段階ではね、この体を明け渡さなければならいことになってた。脳髓だけで培養されて学習していた兄弟にね。それに従っていたら、この小早川徹二という人格はとっくに焼却炉の中に

消えてたわね」

そこまで聞いた時、気丈なリンダが床にへたり込んだ。立っていることが限界だったのだろう。それでも、目を閉じたりせず小早川を凝視し、話を聞こうと努力していた。

「私が自己正当化するために嘘を造っていると思ってくれても良いけど、事実はこれだけ。でも、事情の方はもう少し複雑でね、私の元々の遺伝子の持ち主、つまりオリジナルはセイが心から愛していた人だったって冗談みたいなおまけが付いちやうのよね。彼女はスラム育ちなのに、特別に知能が高いことを評価されてジ・アースの専門大学に十一歳で入学した才女よ。その彼女の可能性を評価して、大事にあの人を育てた導いた人が剣崎哲治という男。彼が事故で死亡したときに小早川冴子が細胞を入手できたという事実を呪いあれ、って奴よ。全く」

小早川は芝居めかした台詞回しをしてみせたが、いかなる笑いも誘えなかったのに気付き、苦く笑った。

「剣崎、哲治って、もしかして総合行動学者の、あの剣崎方式の剣崎ですか」

早乙女が確かめるように言う。

「……そうよ。さすが早乙女君は情報工学の専門家ね。外部プロگرامが必要な演算型と、経験フロー型の新人制御じゃ畑違いでしように良くご存じだわ。その、剣崎よ」

小早川は、いまここで全てを吐露するべきか否か悩むように、しばらく黙り込み、それから顎を毅然と上げて話し出した。

「私を直接育てた小早川冴子って人は、昔ねその剣崎の恋人だったらしいの。彼女の息子として戸籍を偽造された私は、だから最初、剣崎の息子だと皆に思われた。自然な結論でしょ。彼女の憧れの、既に亡い人の息子。同じ遺伝子持ってたって、四、五年の教育くらいじゃオリジナルをコピー出来る訳じゃ無いけど、それでも容姿は少しは似るわよね。それが誤解の始まり……」

小早川は漸くその気になったのか、トレードマークの煙草を出して火を付けた。深く吸い込む。柳はセイという人が誰かは初耳だったが、それが小早川の恋人であったことは、話の筋から容易に察せられた。

「私はそうとも知らずに、あの人と出会ってしまつて、そしてなんの冗談か分からないけれど、純粹に彼女に惹かれてしまつた。そんな複雑な事情だったから、順調に物事が運んだわけではなかったけど、本当にいろいろ有ったけど、一度はあの人は私を小早川徹二という存在として受け入れてくれたのね。私が剣崎の息子に違いないという前提が生きてた時でさえ、私にも彼女にも剣崎は重荷だった。でも、私達はその段階では自分の製造過程までは知らなかったから、単純に幸せを謳歌していたと言い切るには苦しい展開だったけど、剣崎の存在に堪えられないほどではなかった。それなりに幸せだったわ」

正確に思い出そうとしているのか、目が閉じられた小早川の顔が、その時だけ幸せそうに微笑みを含んだのを翔虎は見逃さなかった。それが、却って痛々しかった。

「だけど、私も彼女も知ってしまった……。私が剣崎の息子なんかじゃなくて、遺伝子レベルでは彼本人だということをね。只のクローンですらない、訳の分からない技術で即席に人みたいに形作られただけの、そんなものだつて。成長に手間暇かけてすら居ないし普通の速度で老化していくのか、そんなことさえも予測できない。人間の範疇に入れられるものかどうかすら微妙な人工物。そんなものに心があるなんて烏滸がましすぎる。それから地獄だった。彼女は通常の人ならざる私を人などと認めることを、許しなくなつた。理性と頭で、私を蔑み、厭い、憎もうと、努力してた。でもね、私には、彼女の最愛の人である剣崎の体が有つた。彼の肉体と声と、外見と。だからあの人の理性以外の部分が私を欲しがった。私の方といえ、理性でこそ自分は存在してはいけないと言っていたけど、

度胸不足で自殺することも出来なかった。人形でもさ、死ぬのは怖かったのよ。その先にある闇は、自分から飛び込むには深すぎて。

何度も死に挑戦したけど踏み切れなかった。結局、ずるずるとセイと続いたわ。欲されれば、あの人を抱いたし、欲しかったら奪ったけど、満たされることはなかった。存在の全てを否定する言葉を投げつけられれば絶望するけど、それでも、彼女と時間を共にして得られるダイレクトな生きている感触なしに、存在することは無理だった。そんな弱さがますます許せなくてね……会ったびに荒んでいたような気がするわ。あの頃の私達は、多分地獄に住んでいたのだと思う。会えば地獄、会わなくても地獄」

翔虎は天を仰いだ。シェーネも柳も挟む言葉がない。

「そんな暮らしでも結構保ったわ。人間ってのはつくづくタフよね。会えば苦しむのは分かっているけどあの人から離れられなかった。そして、私は最低にもプロジェクトの被験体として軍の言いなりに積極的になることを選んだ。手術が失敗すれば死ぬるものね。情けないけど、剣崎哲治を辱め続けるのも剣崎に復讐してるみたいな快感があったわ」

シェーネは淡々と話す小早川が痛ましかった。イリアナとの結婚祝いの船上パーティーで寄り添っていた二人が、そんな絶望的な状況だったと、あの時の自分にどうして分かったというのだろう。あの時、小早川がそんな者だと知ったら、自分は彼をおぞましく感じただろう。だからイリアナもこのことを私に告げなかった……に、違いない。

「遠くない未来に脳と神経系統が入れ替えられて、自分が消えるだろうと知った時も、もう疲れ切っていて、逆にそれが待ち遠しいくらいだった。これで楽になれるなあ……って。だけど、そんなささやかな願いさえセイは許してくれなかった。その事を知ったセイは、これ以上剣崎をおもちゃにさせるなど、剣崎モデル全てを葬ってくれと、よりによってこの私に頼んだのよ。信じられない無神経。私

が剣崎を憎んでいたのを知っている癖に。あそこで培養されてた者たちは、私と同じ者なのに」

小早川の独白には血が滲んでいるかのような苦しげな響きがあった。

「でも、私は訊いた。願いを叶えてあげたら、私が貴方を殺してもいいか……」って。彼女を殺した後なら、死ねると思った。今度こそ自分で、自分の力で終止符を打てると」

ああ、それで話が漸く繋がって見える。

翔虎は叫びそうになった。あの葛城とこの小早川が殺し合いに至ったその理由がやっと分かったのだ。だが、余りにも残酷だ。小早川に愛しい男の命の尊厳を守るために、手を汚すように願うしかなかった葛城も、その言葉に従うしかないほどに葛城を愛した小早川の心も、それでは痛ましすぎる。ましてや見返りに求めたのが葛城の命だけだったのなら、その時、小早川は安らかな死を夢見ていたに違いあるまい。

小早川は、一瞬も立ち止まることなく話し続ける。翔虎は目眩がしそうだった。理解しようと、小早川の過去を理解しようと、努力はしたいのだが、いかなる想像力を駆使しても、彼の話す状況で彼が味わっただろう気持ちを察するのは、翔虎の経験からは推し量ることすら困難だった。

「あの人は良いといったわ。だから、私は穏やかに死を待つのを止めて、研究所施設ごと闇に葬る決心をした。人殺しを一度でもしたら、多分、流石の往生際の悪い私でも、自殺くらいはできると思ったの。その時は。そうじゃなきゃ、情けなさ過ぎるじゃない。惨めじゃない。後は、この三流誌の言うとおりよ。あの時は私は武器を持たなかったし、丁度戦争だったから人類の相方を利用して貰った。でも、別に保身からじゃないわ。本当に只武器ほしさに新人を利用しただけ。偶々ソウルの幹部と友人だったから……、コネクションもあったしね。でも、あの人、私が行ったときにまだ息のあつ

た小早川冴子の心臓を、爆死を装うために落ちていたガラス片で刺したときの感触は……忘れられない。それから私はモルグ（死体置き場）って、連中が冗談でそう呼んでいたクローン培養槽室に行って、一つ一つ丁寧に壊したわ。あそこで捕まるものならそれで良かった。クローンで言ってもね、赤ん坊や少年や、青年、みんな人と変わらなかったわ。その中の幾つかは当然私の顔をしていた。それだけじゃない、病院を爆破するって言う非道な手段を採ったことで沢山の人を巻き添えにしてしまった。罪、そんな一言で済ませる事が出来ないほど私のしたことは最低よ。いまさら誰に許して貰えるはずもない。正気の人間のやれる事じゃないわ。元々壊れてたのかもしれないけど、あの時私は完全に狂ってた……」

翔虎は勇気を振り絞って、小早川に近寄り肩越しに彼の体を抱きしめた。一瞬小早川の目が信じられないというように見開かれ、それから静かに閉じられた。そして翔虎の心臓の音が背中に感じられる心地よさに身を委せた。

「それから私はそのままショットガンを持ってセイを殺しに行ったわ。彼女は殺されてくれるって約束したのに、逃げようとしたわ。腹が立ったわ。約束が違うもの」

小早川がクツクツと喉に支えるようにわらったので、翔虎は腕に心持ち力を込めた。翔虎にはそれ以外の行動を思いつけなかった。まして、言葉など何処にも落ちていない。

「でもその時先生がいらして、私を止めた。私はセイを殺し損なったついでに、またしても死に損なった。あのときはまだ私の良心は麻痺していたのね。何事も無い日常……セイに会えない事だけが違う日常に戻ったわ。そして、あの日……あの日が来てしまった。あの日は仕事を一段落させて、先生に頼まれてウオードを保育園に迎えにいったの。ウオードを抱いてビルに戻ろうとしたら、ものすごい爆音が聞こえて……、見ると、私が行こうとしていたビルの足元がぐらぐらになっていた。先生が危ないと思って……私は携帯で

先生を呼んだわ。電話は繋がったの。逃げてくださいといったのか、大丈夫ですかといったのか、そんなことは覚えていないわ。ただ、先生は状況をまだ良く分かってらっしゃらなかった。地震なの？とかいつもの口調で聞いてらした。私は叫んだわ。早く逃げないとビルが崩れそうですって。先生は何とか避難してみるから、ウオードを守って頂戴……って仰った。そして、ビルが崩れたの。目の前でそれが一瞬だったのか、それともかなり時間がかかったのか、もうあやふやだけど、崩れていく瞬間は焼きついてる。決して忘れられない……」

そして、ゆつくりと顔を上げると、シェーネを見た。

「それから、万一の時にはシェーネに、と、言いかけた先生の声が聞こえたのだけど、そこで通話は途切れたわ。叫んでも、呼んでも、携帯から先生の声は二度と聞こえなかった。目の前はものすごい煙で息も詰まりそうなほどだったけれど、私も、私の周りに居た人たちも今までそこに聳えていたビルが瓦礫になったということを書くには理解できなかった。目の前の光景が現実だとわかり、その下には少なくとも何千という人たちが居たはずだと、まず恐ろしさに体が凍りついたわ。震えが来たのは、だれかが悲鳴をあげて泣き出してから。その悲鳴で其処は絶叫の渦になったわ。ウオードも怖がって泣き出した。先生が生きていられるはずが無いというのは、恐ろしいほどの現実だった。そのとき、私は自分が自分のことしか見ていなかったのに、気付いた。私は……、私は……、自分の尊厳とセイの為だけに、小早川冴子と研究チーム、被検体仲間を処分するという目的しか見えず、新人を利用して病院を爆破したわ。何人か入院していた患者さんが犠牲になったというのも事実として認識していたけど、私は全然分かっていなかった。自分が仕出かしたことがどんなに許しがたい、悪魔の業だったか。目の前で先生が逝ってしまった。その事実が私に突きつけた。私は許されることの敵わない罪を犯していたのだと」

「気が狂いそうだった。狂ってしまったえばいいと思った。絶叫したわ。ウォードを落とさないで居るのが精一杯。でも、私は別にそこで目立った存在じゃなかったわよ。皆、絶叫しながら天を仰いで、神に祈ったり、神をののしったりして喚いていたから。泣いたわ。喚いたわ。自分の馬鹿さ加減を呪い、自分の罪の深さを恐れた。でも、しでかしてしまったことは元には戻らない。私は、病院を爆破して罪も無い弱い人たちを殺していたし、自分のこの手が小早川冴子の胸にガラスを押し込んだのを覚えているし、何処に爆弾を仕掛けたら効果的か冷静に計算して、協力者だった新人に指示した事だって覚えている」

「でも、泣きつかれて寝入ってしまったウォードを見て、先生の最後の言葉をだけでも、ウォードを守ってシエーネに届けるまでは生きるのを許してもらおうと思った。それ位は許して欲しかった。シエーネに送り届けるまで生きていようと思ったわ。その時ね、ウォード、いきなり泣き出したの。粗相になって思って、習慣でおむつを外したんだけど、全然濡れてなかった」

唐突に話が、ウォードのおむつの事になったので、少々小早川が何を言いたいのが見失った翔虎は、少し腕の力を緩めた。

「あの子ったら、失礼にも人の顔に噴水かましたのよ」

息をつめていた柳が、ぷつと吹きだした。それぞれの思いの中で、ウォードの元気な笑顔が重なって輝いたに違いない。

「こっちは精神ずたぼろで、悲壮感みなぎってるのよ。ものすごい煙はまだ治まっていなかったし、絶叫の渦がすすり泣きの渦には変化していたけど、それでも、まだ、私たちの周りは沢山の人が絶望していた。そんな時なんで私が顔に小便ひっかけられて、服濡らしてなきゃいけないのかと思ったら、余りに理不尽さに腹が立ったわ。一発ひっばたいてやろうとのぞき込んだら、あの子、してやったりって感じの満面の笑顔で、笑い声をたてた……。すっきりして気持ちよかったんでしょうけど、なんてこと。でもね……ウォードの笑

い声は其処では天使の恩恵そのものだったわ。周りに居た人たちもクスクス笑いながら近づいてきて、泣きながらウオードを触ったりあやしたりしていた。私がこの子の母親が……って呟いたら、皆かわるがわるウオードを抱きしめたわ。優しくね。その時なの。私が強欲にももう少しこの命を抱きしめて生きていたいと、許されない罪に目をつぶってでも、この命に触れていたいと願ったのは。我侭だったと分かっている。ウオードを守ってと先生に頼まれたのだから、子供には面倒をみる人が必要だからと、言い訳して自分をごまかしてウオードにかこつけて、自分の罪を棚上げて生きていくことを、私はそこで選んでしまった。それも、罪だったわ。ウオードを本当に愛しているのなら、シェーネ、貴方にお返しして別れるべきだったと、今でも思っている。いつも、何時でも卑怯だと知っていながら、楽な方に流されていく私は、なんて情けないのかしら」

翔虎はゆっくりと目頭から熱い何ものかが落ちていくのを止めることが出来なかった。そのまま小早川の肩に顔を押し付けた。作り話ならこんなにも淀みなく、流れくるように話されはしないだろう。そして、それを今更翔虎などに打ち明けたところで、彼の地獄が去らないことを示すように、もはや涙すら流せない小早川がそこにいた。翔虎は思っていた。いま流れている涙は本当は小早川のものだ。自分なんか泣いてはいけけないのだ。逆に翔虎の手を励ますように、小早川が軽く叩いた。

シェーネも気が抜けたのか、どっかりと椅子に座り込んだ。

「泣かないで翔虎ちゃん。私貴方に本当のこと話すって前に言ったけど、正直自信がなかった。いつでも人は好きな人達の前では格好を付けたい物だし、私ときたら嘘をつくのが習慣になっている。嘘に罪悪を感じる事など無理なくらい、ずっとそうしてきた。この記事は半分が酷い中傷だけど、お陰で嘘を残さずにあなた達から去れる。今度は信じて貰えるかどうかがネックになっちゃったけど」

翔虎は首を振った。柳も嗚咽混じりに叫ぶ。

「何で、徹さんがそんな苦しみを味あわなきゃいけないんだ。徹さんだって被害者じゃないか、なんでなんだよ」

「ヤナちゃんも、翔虎ちゃんも本当に有り難う。でも、不幸だからといって人を傷つけて良い権利はないわ。人の命を殺めた罪は、矢張り私のもの。凶々しく長々と言い訳させて貰ったついでに、もう一つだけ信じて貰いたいのは、今度私は船を降りて、この件を自分で告発するつもりだったって事。今さら私の言うことに信憑性は乏しいでしょうから、また逃げるつもりだったって思われても仕方ないけど」

柳が首を大きく振った。

「俺は徹さんを信じるし、翔虎だってそうだ。徹さんは直ぐ全部を見通せる様な顔して結果を断言するけど、すべてやって見なきゃ分からないんだよ。事実を知ったら俺達が徹さんを化け物扱いするはずだったんだろう。そうならんかったぞ。第一、俺、徹さんみたいな頭の造りの奴、最初から種類の同じ人間なんて思ってたなかったしな。俺に言わせりゃ、唐傘お化けだと思ってた奴に、実はのっぺらぼうだった告白された様なもんだ。そりゃたまげたさ。でも、それがどうした」

小早川が強張った顔をほころばせて、ぎこちなく微笑む。

「ヤナちゃんには負けるわ。私は人殺しよ」

「それがどうした」

再度、胸を張って言いきった柳は、近寄ってきて小早川の頭を撫でた。

「徹さんが言うように、不幸は罪を犯す免罪符にはならないかもしれない。だけど、それでも、やっぱり、俺は徹さんの味方だ。諦めないでくれよ。生きること。年上の人の言うことは、ききわけるもんだぞ」

柳の言葉に、翔虎がうつかり笑ってしまった。そうか、単純計算すれば小早川は未だ二十歳そこそこの筈だ。それでは、自分の方が

年上なんじゃないか。

「柳、妙なこと思いつくなよ。でもそうか、お前そんなに若かったんだな」

「やだ、翔虎ちゃんもヤナちゃんもいきなり年上風吹かせて、人の子供扱いしないでよ。これでも一応十五歳までの記憶もあるのよ。偽物だけだね。十五歳に相応しい人格を造ろうと思えば、それに相応する量の体験が必要なの。私は彼らが造った夢が高速再生されるのを見ていただけなのだけれど、結構良い夢だったわよ。うつすらと両親に抱かれる感覚も覚えている。ま、偽物の思い出を大事にしても意味無いかもしれないけれど、両親に愛される感覚を基本に据えてくれたのには、感謝しないとね。ごく幼児期の快・不快が結構人格の決定には重要事項でね、それをしてくれてなかったら私はこの罪に贖罪するべきだということすら思えなかったかもしれない」

「じゃ、やつぱおじさんなのか」

柳が残念そうに言う、溜まらずに小早川さえもが笑い出してしまった。シェーネは妙にすっきりした顔をしていた。長年の蟠りに漸くきりがついたのだ。和やかな雰囲気が一瞬場を満たした。だが、早乙女がおずおずとだが口をはさんできたので、また空気が沈んでしまった。

「小早川さんは、どうなさるんですか」

柳が忌々しそうに怒鳴りつけた。

「早乙女、さつきからお前氣に入らないな。徹さんをバケモン扱いするなら目に付かないところにさつさと失せちまえ。第一、リンダと早乙女が此処にいちや通信端末お留守だろ。だれかいないと不味いんじゃないのか」

操船部が三人揃ってオートパイロット任せにしている事実を棚に置いて、柳はそう指摘した。小早川が柳を制する。

「ヤナちゃん良いのよ。誰だって気になるでしょう。私は、国の軍に出頭しても握りつぶされてお終いでしょうから、まだ撤収してない筈だから戦犯裁判委員会に出向いて其処から軍を告発しようと思

つていたわ。でも、その手間が省けたわね。今なら私が黙っていて
もどこからかお呼びが掛かると思うわ。ま、その中から待遇の良
さそうなところに決める事にするわ」

早乙女が頭を振った。

「なんで、そこまで茶化せるんですか」

「茶化してなんかいらないわよ。本当に何処でも良いのよ。私は自分
の罪に目を瞑って平然と暮らすのに嫌気がさしてた。ワードを言
い訳にして、先生を盾にして、全て忘れた振りをして逃げ続けてき
たけど、もう限界。だから裁いてくれるところがあるなら何処だ
って構わない。ま、出来ればもうちょっと長生きしたかった気もす
るけど、仮に死刑になったとしても今ならそれなりに納得できるわ。
私は十分に生きたものね」

「なんで今ならなんだよ。そこで納得しちゃうからいけないんだ。
徹さん」

柳が怒って言う。小早川はちょっと答えるのを躊躇って、それか
ら照れたように殆ど燃え尽きかけている煙草を挟んでいる手で器用
に頭をかいた。

「私、子供がいたの。なんか照れるわね」

「子供って、どういうことだ」

シェーネも驚いて聞くと、小早川は誰からも視線をそらした。だ
が、これはどう見ても照れているといった風情だ。

「翔虎ちゃんが余計なお節介してセイに会いに行つて、そのときに
彼女が私の子供育ててくれてるのが分かったの。で、仕事放り出し
て飛んでいったって訳よ。この前私いきなり半月も休暇取ったでし
よ。あの時の事よ。だから本当について最近。なんか妙な気分、自分
の子供なんて考えたこともなかったのに、ワードよりちょっと小
さいだけのが二人もよ。一度に年くった気分だわ。ま、生き物なん
て自分の遺伝子を次世代に伝えるための乗り物だって言う考え方も
あるみたいだから、その意味では子孫を残せば一応この世界に存在

証明を残せたって事よね。ま、その遺伝子自体が借り物なんで、間抜けた満足感かもしれないけど、作り物にしちや上首尾でしょ」

シェーネが呆れた。

「なんで、セイは黙ってたんだ。らしくないじゃないか。あの人はお前が此処に雲隠れしていることくらい見当付いただろうし、お前さんだって他人の子にかまかけているより、自分の子供を見たかっただろうに」

「シェーネ、彼女は私がイリアナとワードと一緒に瓦礫の下で死んでしまったと思っていたのよ。無理も無いわね。私もあの時は自分のことで手がいっぱい、彼女や他の友人たちがその状況からどんな結論を導き出すのか、余りにも当然の事を思いやる余裕すらなかった。私にとって見れば、私とワードが生きているのは身近な事実だったから、彼女たちが私達の死を受け入れるために、どんなに辛い思いをしたかなんて想像もしていなかった。ほんと酷いわね」

「徹さん」
翔虎が声をかけようとすると、小早川はその後を聞かずに続けた。
「いった。」

「それでね、セイが私がワードを支えに命をつないだのと同じように、子供たちを支えに穏やかに生きてこられたときいて、凄く不思議だった。私達是一緒にすごしていたときには、一緒に地獄を歩いていただけ、離れた後は同じような状況でささやかに平穏な日々を堪能していたの」

小早川は煙草の燃えさしを例の如くポケットにねじ込んだ。

「不思議よね。人の心は。別れる前に私達は獣並にお互いを貪っていたけれど、愛なんて物が入り込むほどの余裕はなかった。それが、離れてしまったとたん、その隙間に満ちたのは憎しみじゃなかった。子供って言う次世代の命がくれる恵みを共に頂いていた。私は人じゃないから愛なんて言葉でこの思いを語る資格はないけど、多分愛にとっても近いものを味わえたんだと思う。今時まっとうな人間様でも、そう簡単に愛する人に巡り会えるって訳じゃないから、多分運

が良かったんだわ」

ゆつくりと小早川は頭を巡らせて狭い部屋に集う者達を眺めた。につこりと微笑んだ小早川は、なにかもを吐き出して見せたことを示すかのように、まっさらに洗い晒した白布の眩しさを纏っていた。

ぼつりと早乙女が言った。

「僕は端末に戻ります。でも、いま仰ったことが事実なら、小早川さんのことを裁く資格が有る者はいない筈です。貴方は罪になど問われないでしょう」

早乙女は此処にいたたまれなくなっていた。あれを雑誌に掲載するように企んだのは、それも世論のまな板に乗りやすく、人を貶めるのにかけて一流のノウハウをもつ三流誌を敢えて指定したのは自分なのだ。データの表面だけ見て、憶測をたくましくして事実の欠片も知らなかったのに、正義の味方面して。自分が彼らの会話を盗聴していたのが発覚しても彼らに無視されるくらいで済むだろうが、この事実を知ったら少なくとも柳は自分を殺したいほどに憎み、蔑むだろう。

いかに世論が無責任に小早川の責任を追及したとしても、この事実が明らかになれば彼をこれ以上に傷つける者は無いと思い込みたい。自分はきつかけを作ったにすぎない、彼を追いつめるのは自分でない。早乙女は必死に信じる努力をした。

「私はね、戦士の安眠プロジェクトのデータを壊してるの。バックアップされたものも含めて、全てを葬ってしまうのが目的だったから。ま、そこまでする気だったから病院爆破なんて無茶を思いついたのかもしれない。だから喩えあの記事を書いたハッカーが冴子のプロテクトを外したとしても出てくる物は何もないわ。ということは、私の罪も証明出来ないけど、無実も証明できない。ついでに、私が戦争を隠れ蓑に、別にお腹を痛めてくれた訳じゃないし、遺伝子一つくれたでもないけれど、培養基になった卵細胞を提供して

くれたて育てくれた親を殺したという事実は、厳然としてある。それに、施設そのものは軍のものとはいえ、其処にいた民間の患者さんや、職員を巻き込んだのも事実だわ。年貢の納め時ってこういうときに使うと相応しい言葉ね」

早乙女は一瞬驚きの表情を浮かべてから、やがて翔虎達には理解しがたい唐突さで立ち去っていった。向かう先は持ち場である操船室の通信端末らしいが、その足取りは仕事を思い出した者の急ぎはなく、重く引きずるように見えた。

「なんだあいつ。やっぱりよくわからんな」

柳が例の如く思った通りに口にした。翔虎は同意とも取れる頷きを一つくってから床に座ったままのリンダに手を差し伸べた。リンダは少し迷ってからその手を握るとゆっくりと立ち上がり、そのまま翔虎を通り抜けて小早川に抱きついた。

「勝負する前から負けないで。大丈夫、裁判なんて弁護人次第よ。私は徹さんが帰ってくるの待ってる。道は償いを求める人に示されるって、私は教えて貰ったわ。それは……どんな罪でも、なんですって」

リンダはそれをささやくように小早川の耳元で言うと、踵を返して早乙女の後を追うように駆け出した。

走り出すリンダの後ろ姿を見送って、翔虎が小早川に再度視線を戻したとき、彼の手が胸のポケットを握りしめているのに気付いた。多分、そこにはあの写真があるのだろう。翔虎は目を閉じて葛城との会話を思い出していた。

小早川が怖かったと。子どもを受け入れることが出来るかどうか怖いと。そうだろう。小早川がそんな現実を背負って生きていたなら。小早川も言っていた。ウォードを育てていなかったら、子どもたちを殺しに行っていたかもしれないと。よく、乗り越えてくれた……のだと思う。彼らを殺すことも彼らから逃げることもなく、自分を受け継いでいく命として受け止めることには、困難でしかなか

っ
たろ
う
か
ら。

第十一章 忘却の底

リンダが操船室に入ると、早乙女信吾は端末前に座ってはいるものの、手も口も動いていなかった。烈しく点滅する呼び出し信号を無視しているのか、気付いていないのか。

「早乙女君、何してるの。さっさと受信しなさいよ」

早乙女がのろのろと鈍い動作でリンダを見返す。

「量が凄くて、何処から手を付けたらいいか」

「量が多いって」

席に近寄って手元の操作パネルをみてリンダも一瞬目眩がしそうになった。

「なにこれ、向こうのオペレーションも無茶ね。一度にこんなに繋げないわよ。ちょっと替わって」

リンダは早乙女を席から追い出して、操作盤の前に陣取ると手早く一覧にして発信人を見る。新聞社だけの雑誌社からの始まって、肩書きのない個人名、船団を組んでいる他の船からの通信、霧島からの通信もある。リンダは会社の通信室からのだけ残して、後は回線混雑のメッセージを残して強制的に排除した。そうしていても、すぐさま新しい通信が入る。全てを無視して、リンダはヘッドセットを付けると会社の回線に繋がた。予想以上に回線確保まで時間が掛かった。

「こんにちは、サラ。さっきは有り難う」

「何やってたのよリンダ、三十分は呼び出し続けたのよ。通信端末お留守にしてたんじゃないでしょうね。ペナルティ付けるよう人事に報告書あげようか」

言っていることは穏やかでは無かったが、彼女の瞳は笑みを含んでいて、単なる軽口と解る。リンダはサラの後ろに人だかりがしてるのに気付き呆れた。

「なにみんなして集まってるのよ」

「小早川さんの事よ。もうこっちじゃ知らない人は無いわよ。松姫専務直々に小早川さんに繋ぐように指示されてこんな繋がないんじゃ、あの記事を肯定してるようなものじゃない」

「あんなもん、まるめて捨てていて。うちは知らないから」

リンダは言い捨てると続けた。

「問い合わせとかで回線がパンクしそうなのよ。排除してるんだけど、回線混雑信号を送っても直ぐリトライされちゃ堪らないわ。これじゃ仕事にならないじゃない。そっちのセンターで何とかしてよ」

サラは溜息をついた。

「実はこっちもなの。例のドクターKが家の船の乗組員だって事は直ぐ見当付くじゃない。マスコミから野次馬まで千客万来よ。松姫さんが握りつぶそうとしたのが裏目に出たみたいで、マスコミって言ってもあんな低俗な奴じゃない一流どころが、正式な取材申し込みを公開メールでくれたりしてるの。世の中、余程暇なのかしら、酷い騒ぎよ」

リンダはサラを詰つても意味がないと悟り、大袈裟に肩を竦めて見せた。

「ふん、付き合ってられないわね。仕事にかかりましょうか、こちらは霧島運輸所属、曙丸です。船体識別番号確認の後、発信人と受信人を指定して下さい」

サラはもう一度溜息をついてから、気を取り直したかのようにいつものオペレータの決まり文句を口にした。

「船体番号確認しました。この通信費は発信人払いになります。発信者、霧島松姫さま。受信指定人、小早川徹二さま以上です。では発信人につなぎます」

リンダは涙がにじんできそうになるのを意地で押さえ込んでマイクに告げた。

「こちら通信部です。小早川機関長。繰り返します。小早川機関長本社の霧島松姫専務から直接通信が入っております。至急最寄りの端末までお越し下さい。通話を個人端末に転送希望な場合は連

絡をお願いします」

程なくして手元の呼び出しランプが点灯したのでリンダは出来るだけの笑顔を造った。

「そちらに転送しますか」

と、訪ねると小早川も穏やかに微笑んで答えた。

「ええ、そうして頂戴。未だ翔虎ちゃんもいるから都合良いでしょう」

造られた命、偽りの記憶、巡り合わせの不幸、彼の過去は哀しみに満ちている。彼が尋常ならざる存在であると知って尚、彼の命がおぞましく感じられてはこない。寧ろ、せつないほどに愛しく思われるのは何故なのだろう。呪われるべきは殺された方の非人道的な科学者だ。

かれらの罪に己の罪の責任を転嫁することなく、小早川は正面から対峙しようとしている。そしてそれでいて今までもそうであったように、何事もなかったように微笑んでみせる。強い、本当に強い男だ。リンダは頷いて回線を小早川の端末に繋げると、ヘッドセットを外して深く溜息をついた。

リンダには彼の告白が正直なところかなり衝撃だった。自分も我が身の出自の不幸を呪わずにいたときなど無い。だが、小早川に比べたらまだ可愛いものだ。時代がどう変わろうとも決して無くならない、貧しい人々が吹き寄せられて形成される貧民街にはそれこそ自分のような捨て子など、掃いて捨てるほど居る。

リンダは生きたまま檻裡にくるまれ、ご丁寧にゴミ袋に詰められて捨てられた。危うくゴミ回収車にプレスされて失うところだった命を、力の限りの自分の泣き声で拾ったのだという。福祉施設の責任者だった婆アは、誰がどんな風にしてあそこに来たのかをよく話題にした。風邪などひかないようにとあり合わせのおくるみに包まれて、名札の一つも貰ってそうされたなら、聞くことに若干の救い

もあつたろう。正直に真実しか口にしないのは、時として残酷だ。自分のような場合は作り話の一つでも拵えてくれればよかったのに。「嘘は神がお許しにならない」「主は全てを等しく造り給う」とかいつも仰つてましてた。ふざけるんじゃない。

お陰様でついた渾名が『生ゴミ』。同じ境遇の筈の連中からも『臭い』と敬遠され、ゴミ回収車が通る度に『お迎えが来た』どと囁し立てられて、どの人間が真っ直ぐ育つものか。リンダが施設を脱走したのは、ワードより幼い七つか八つ位の時だつたろう。食べ物を手に入れる手段は、ゴミ漁りから初まり、こそ泥、置き引き、たかり、恐喝と年齢を重ねる毎に変わつていった。そして同じ様な境遇の者達と、時に群れ、別の時には縄張り争いなどと称して戦つた。

そんな暮らしを続けるなかで、リンダは気が付くとチャイルドマフィアなどと呼ばれ、社会問題にもしばし取り上げられる浮浪児の暴力集団の中に身を置いていた。弱い者と舐められれば、途端に足下をすくわれるような集団の中で安全に暮らすには、強くあること、弱みを見せないことが全てだった。十代半ばには酒、煙草、麻薬、児童売春、全てが経験済み、と言うより日常生活だった。リンダはあのまま最下層で虫けらのように生きて、自分の体しか資本のない大人になつて性病でイカレたり、麻薬中毒で二十代の終わりを待たずに老婆の如く老け込んで野垂れ死にするのだけは真っ平だった。組織の中で自分を支配しようとする年長者を陥れ、同格の者を叩きのめし、リンダはある意味での出世を続けた。盗みに入る兵隊から、行けと指示する立場に。売春を強要させられる方から、仕切る側に。はじめの内は警察に捕まつても、お泊まりだけで釈放されて更正施設に送られるだけだった。そんな建物はすぐお暇して仲間のもとに戻る度にガキどもから尊敬され、発言力が増すという妙な時期を経て、果てにはチャイルドマフィアの幹部として顔が売れきつてしまった。もはや自力更正の余地無しと審判されて少年刑務所に送ら

れるまでそんな暮らしが続いた。

あるとき少刑送りは人生の終わりにも思えたが、振り返ってみれば正しくそれこそが自分を救ったのだ。義務教育なんぞ良い迷惑だった。が頑張つて勉強する振りをし、娑婆に出るまでと辛抱した。リンドは少刑から早く出るにはいい子で居るのが一番と悟るくらいにはしたたかだった。衣食が保証されれば、無駄に争うこともないし、少しは知られたブラックリンドにちょっかいをかけてくる馬鹿にも遭わないのが幸いして、彼女は模範囚として実績を積んだ。刑務所の規則正しい生活は、知らずに蝕まれつつあつた体を健康に戻してくれた。今にして思えば良いおまけだった。思惑がまんまと当たり、リンドはわずか一年という短さで出所した。その時にボランティアで彼女の身元引受人になつてくれたのが、既に現役を退いていた霧島運輸創設者でもある霧島豊という年寄りだった。あの時、運命は初めてリンドに微笑んだのだ。

霧島の爺様は、会社を息子の昇に渡した後、さつさと引退して地球に戻つて生活していた。宇宙に浮かぶ人工都市しか知らないリンドは生まれて初めて本当の大地というものを踏んだ。一部の幸運な者たちだけの住まう、人類発祥の楽園。空気も水も全てが重かったが、作り物でない空、作り物でない大地は、色彩が溢れる圧倒的な世界だった。

豊老人は広い庭を掘り返して草花を育て、玄人並みの農作物を造つては家族の食卓に乗せるのが楽しみで、金に恵まれたものの当然の義務として社会奉仕に参加するという当時のリンドに言わせれば、嫌つたらしい爺さんだった。

彼は説教するでもなく、教育を無理強いする出もなく只庭いじりを手伝わせた。そして彼女が聞いていようが居まいがまるで気にせず地球の昔話をした。

おごり高ぶつた人類が自然を見下して、支配しようとし、侵し、

踏みにじった。汚染された大地。放射能を始めとする様々な人工物に複合汚染され、奇形・奇病が続発する。人が打つ手は後手に回り、或いは却って汚染を著しいものにした。温暖化、酸性雨、オゾンホール。手に負えない原子力エネルギー。放射能汚染。砂漠化。食糧不足。人口爆発。経済破綻。人は死に、生まれるものの生命力は落ちていく。飲み水は毒になり、大地は恵みを拒否した。地球は一度死んだのだ、と。彼の話はとりとめもなく続く。

リンダは老人の繰り言をウンザリ聞いていた。人は生きている。そんなの当たり前だ。自然のどこが有り難いというのだ。地球に降り立った当初こそ感動したが住んでみると楽園ではありえなかった。暑いし、寒いし、埃っぽい。台風はおぞましく農作物をなぎ倒すし、雨上がりの土は強烈に臭う。二、三度経験した地震は二度とご免だった。雷は綺麗だが、酷く危険なものだと言うではないか。自然の何処が恵みなのだ。心で不平をいいながら、それでもリンダは逃げるきっかけを見いだせないでいた。逃げて、どこに行けばいいのだ。地球はコロナーなんぞとちがって、気が遠くなるほど広くて、交通手段は原始的なのだ。現金を工面して宙港まで行き着いても、どこにむかつて飛んだらいいのだ。先が見えない人生を暴力で無理に切り開いていく生活に戻ってどうするのだ。毎日に辟易していたけれど、今まで居た事のあるどこよりも、穏やかで暖かだった。

あれは。

夏の陽射しが眩しく、座っていてさえ汗が滲んでくる日だった。霧島豊老人は光り輝く胡瓜を一本もぎ取ってリンダに渡した。いつもの戯言。

人は生きている。限らない失敗と、尽きない後悔。一度人は自然を殺しかけた。自然を殺してしまうことの結末に対する恐怖が、赦しを乞うが如く、敬虔に自然を崇拜する方向に人を向かわせてくれた。その暗黒の時期に生まれ合わせた人に、飢え死にするために生

まれてきた赤ん坊にいかなる罪があつたというのかは分からない。手の施しようのない奇病を得た恋人の手を握ることしかできなかった人に、どんな業があつたというのだろうか。でも、そんな辛い期間なくして人は欲望を上手く制御する術を学べないほどに愚かだったのだ。愚かさ 無知は罪なのか。そう、罪はそれだったのだ。悔やみきれない多くの犠牲を礎に、多くの命を踏みつけて、人は今も生きている。風が瞳に入れた小さな埃が耐え難い痛みをもたらすのに、涙で流れ落ちれば過ぎたこととして忘れてしまう。人は業深い。人は何度も過ちを犯す。繰り返す。だが、それでも、何時でも生きている限り終わりじゃない。何度でもやり直せる。取り戻せないほどの代償を支払うことになったとしても、償いを求めるものに道は開かれる。さあ、これが証拠だ。食べてごらん。土で育ててももう、この胡瓜に毒はないよ。美味しいだろう。

胡瓜を嚙って、リンダは泣いた。本当に美味しかったのだ。夏の日差しに育まれた味は、濃くてすっかりしていた。宇宙産の水耕栽培のそれと何という違いなのだろう。

地球には多くの人が住むことは出来ない。地球の大地は限度無く人類を養えるほどに無限でない。他の生命を許さぬ程に蔓延つても、それは緩やかに絶滅する選択だ。他の生命が溢れて、人は初めて成り立てる。地球を離れてコロニーに住む人、新天地を開拓するために荒れ地を改造するもの。彼らの苦労は全て、人が人類として生き延びる代償なのだ。私はどんなめぐみか大地を踏みしめ、此処で老後を過ごせる幸いなる少数だ。だが、それとて私の徳じゃない。単に神が気まぐれにその立場を下さったに過ぎない。一日生きることは、一日他の命を喰らっている。年寄りの分、君の数倍業深いだろう。だが、命を許される限りは、生きる喜びを頂いていこうと、ははは、これも爺の戯言だ。

リンダは、豊老人が亡くなるまで霧島の家に住んで、生まれて始めて真剣に学んだ。一番の罪である無知を、少しでも償うために。人種が雑多に入り組むチャイルドマフィアを仕切ったときに、耳で覚えた七カ国語の読み書きを覚えて、それを特技に通訳か、通信技師の資格を得てみれば、ウチの会社で雇えると入れ知恵してくれたのも霧島の爺様だった。

人間の習性というのは、どうにも御し難いもので、矢張り人に素直に接するのは苦手だった。スラムしか知らなかったときに比べ、自分がしてきたことに対する引け目、後ろめたさを伴った後悔はつきまとう。何時も人が自分を指さしているような気がする。それを誤魔化すために、自分を必要以上に厳しく律し、正しいことを積極的に求め、人にもそれを要求した。それは、自分の恥から目をそらす拙い手段だった。

霧島での配属先が、豊爺様がかつて可愛がっていた甥っ子、霧島晃が船長を務める貨物船だったのも、多分何らかの形で霧島の爺様が手配しておいてくれたのだろう。細かいことに一切拘らない霧島の親父さんや、気むずかしいが仕事熱心な者には面倒見の良い洞口さん。淡々と仕事をこなす航海長のシェーネ。老練な機関長ゲオルグ・カトーと見習い機関士の小早川。皆、詮索好きでない、かといって冷たい訳でもなく、今までの自分が知らない種類の気持ちのいい男達だった。他に肉親が居ないのを理由に船で育っていた幼いウオードでさえ、素直で健康、羨ましいくらいに幸福な子供にみえた。それに、小早川とウオード以外の皆は中年や年寄りで、リンダ自身が自分の女を意識せずに済んだ。

最初、小早川だけは、どうにも気に入らなかった。無精つたらしい外見に、素っ頓狂な言葉遣い。煙草も酒も、リンダに言わせれば毒以外の何ものでもないのに、その位人間の解毒作用で何とでもなると嘯いて、船医の白川に喧嘩を売る。保守作業員の佐々木の仕事に気が入らないと、嫌みつたらしく仕事の合間に廊下を磨きたてる。

彼がウオードを育てる為だけに、築いてきた全てを投げたことを晃船長に聞かされるまで、リンダは小早川を毛嫌いしていた。自分が捨てたい過去は、汚れきっている。だが、小早川が捨てた過去は、栄光に満ちたものだったというのだ。何故、という思いが小早川に近づいたきっかけだった。

私が捨ててきたものが、良いものだったなんて、そりや誤解よ。卑怯にもただ逃げてきただけ。ウオードのお母さんが私を救ってくれた人でね、私はあの人がウオードを見守るように頼んで逝ったから、生き恥をさらしているだけよ。

親近感。小早川から見たウオードの母という人は、私にとって霧島の豊爺様に等しい人なのだろう。誰よりも。何となくリンダは、小早川が辛酸をなめ尽くして此処に辿り着いたのだと言うことが、分かってしまったのだ。

先入観というフィルターを覗いて小早川を見たとき、彼を表すのに相応しい言葉は「誠実さ」だった。リンダは自分と同じ臭いを持つ小早川に打ち解けた。

リンダは今にして思う。翔虎がよくばやく妙な言い方『恵まれすぎた劣等感』に等しい『不幸の奢り』に自分は囚われていたのだ。自分は酷い不幸を味わった来たのだからと、人をよく知る前から『甘ちゃん』と見下す奢り。誰だって私以上に辛酸を舐め尽くしてきた訳じゃないと、高を括る過ち。だが、今日初めて知った小早川の背負ってきたものは、不幸などという言葉で言うてはいけないと思えるほどに、重い。なぐさめという気休めの言葉すら見つからない。自分には欠片も思いつかない、小早川の地獄に光りをもたらす言葉を、イリアナという人はどうやって細ぎ出せたのだろう。何という素晴らしい女性。

そのイリアナを母に持ちながら彼女に愛される喜びを味わうこと

の無かったワード。彼がその不幸にばかり目を向けていたら、あんな風に健康的に輝いていただろうか。小早川が自分の過去を理不尽として、憤りだけを向けていたら、彼はあんな風に微笑むだろうか。違う。私は又しても過ちを犯していた。

自分は泣き声をあげて自分を救った己をもっと誇ってよかったのだ。そうして、その幸運を感謝することが出来たなら、数え切れない過ちを犯すことはなかっただろう。けれど、その過ちが霧島の爺様との出会いをくれ、此処に私を導き、全てを知りながら愛すると言ってくれる男に辿り着いた。

人生とは、何と残酷で、気まぐれで、そして不思議に暖かい。人はどんな思いもすぐに忘れる。霧島の爺様がくれた言葉も、普段は深い記憶の底に眠っている。だが、それは永遠の忘却ではない。ただ一度でも自分を照らした至福の時は、何度も甦って、何度も救ってくれる。日常の繰り返し返しのなかで、ささやかな不満が滲み出す毎日に、幸せな時間は遠くに霞んでいつてしまう。でもそれらは圧倒的な忘却の力に曝され、記憶を溜めた池の底に沈み、そこで漂っているのだが、癒しを欲するときには何時でも湧き出してくる。

爺様、霧島の爺様。貴方がくれた救いは、とつくに私を幸せにしてくれていました。ごめんなさい。私は忘れていました。また、忘れちゃってました。

日常は問答無用で全ての思いを押し流す。たとえば愛する者を失って余りの衝撃に全てを投げ出したくなっても、腹は減るし、出るものは出る。所詮人は生き物だ。リンダは点滅を繰り返す着信信号

に現実に戻され、再びあつという間にモニター画面を埋めつくしている着信一覧の画面を睨んだ。

「早乙女君、留守番していつて頼んだのに、何故来たの」

早乙女は深く頭垂れて、口の中に籠もった声で答えた。

「済みません」

「まあ、お陰で私が言葉を選んで説明しなくて済んだけど。徹さんのことを中傷するようなメールは構わないから削除してしまつてね。マスコミが取材申し入れなんかしてきても絶対に取り次がないで」

繋げるのは本社からのと、船団の他の船からの連絡だけにして」

「でも、そんな判断の権利は無いはずです。私信を処理できるのは本人だけです」

リンダは柳眉を逆立ててぴしゃりと言いきった。

「権利が有ろうが無かろうが、下らない用件で回線がふさがつたら緊急連絡も入らないでしょう。メールは一応デイスクに落としておいて。徹さんが欲しいっていつたら渡せるようにしておくけど、それだって気をつかいすぎだわ。徹さんにそんな下らないメールを押しつけるなんて真つ平御免。早乙女君には何か他の意見もありそうだけど、私は徹さんが大事よ。あの人を苦しめるような人達に、馬鹿丁寧な対応をする気はないわ」

「いつからそんなに小早川さんのことが大事になつたんですか。貴女は翔虎さんと付き合つてらっしゃるでしょ」

リンダは思わず拳で思い切り早乙女の頬を殴り飛ばした。ブラックリンダは伊達じゃないのだ。リンダのパンチの切れは鋭く、喧嘩慣れしていない早乙女など、体格に優れる男にしては情け無いほどあつけなく飛ばされて、背後にあつた椅子と絡まみながら倒れてしまった。

「いい、そんな下衆な考えをもう一回してご覧、奥歯砕いてやるからね」

早乙女は顔を殴られたのは物心ついて初めての経験だった。だが、今の彼にはその痛みが心地よかった。もっと人から責められたかつ

た。小早川を愛する曙丸の人達に、自分のしたことを懺悔したところで、誰からの赦しも得られないだろう。そう思えば、告白する勇氣など欠片も持ち合わせてない。リンダが怒ったのはその件ではなかったが、それでも彼女に罵倒されるのは気が少しは軽くなれる気がして嬉しかった。

* * *

松姫は回線が繋がるのを辛抱強く待っていた。手許に置かれた雑誌は例の記事の頁が開かれたままになっている。胸くそが悪くなるような内容だが、秘書の片岡が情報処理専門の友人に極秘に頼んで調べさせたところ、少なくともこの雑誌が基本データとして記載している小早川の二重履歴書は実在する。現実離れして滑稽な憶測も、真実味を増して感じられるというものだ。翔虎は事実を知っているのだろうか。それとも、何も知らないのだろうか。そして、小早川にこれ以外の真実はあるのだろうか。

秘書の片岡が小早川との回線が繋がったことを教えてくれたとき、松姫は軽い混乱を覚えた。松姫は初めて見たときから、小早川を気に入っていた。三十を越したら外見が中身を証明すると言言葉に従うなら、彼は大人になり損なった落伍者だ。だが、良識有る大人が決してしないだろう髪型も、その韜晦しているのか単に嗜好なのか周囲を煙に巻く気味悪い女言葉も、すべて些細なことで割り切つてしまえるほどに小早川が身に纏っている穏やかさや清しさは際立つて鮮烈なものだった。

普通の男が彼のような話し方をすればオカマにしか見えないだろう。なのに、外見からみれば小柄で線の細い、髪型や服装に惑わされなければ容姿も端麗といって良いくらいの小早川には、女々しさ

は微塵も感じられなかった。女として素直に認めれば、男として異性を惹きつけて止まない華を持っていた。

話してみても、その第一印象はますます揺るぎ無い物になった。弟妹の中でも一番骨のある翔虎が片腕と頼んで信頼しているだけの事はあると思った。だが、この記事が半分でも事実なら自分は随分良い目をしていたことになる。

「松姫さん、こんにちば。新人の教育プログラムの件で連絡頂いて以来ですわね。お変わり有りませんか」

画面が起きると、其処に映った小早川は話し方こそ以前のままだったが、あの鬱陶しい長髪をさっぱりと刈り込んで随分とすっきりした印象になっていた。

「ええ、お陰様で新人投入に伴う混乱も最小限に抑えられていると思います。ドクターのご尽力に感謝しています。ところで、早速ですけれどこの雑誌の記事読まれました？」

小早川は単刀直入に突っ込んできた松姫に頷いて見せた。

「ええ、通信室のサラが送ってくれたのを読みましたわ。内容がこれだけに、翔虎ちゃん達からも責められていたところなんですよ」「そうですか」

では、翔虎は何も知らなかったということだ。

「それで、どの程度が事実ですか」

私情を挟むまいと松姫はきっぱりと言った。考えてみれば直接小早川に聞いて納得いく説明を聞きたいと思うことが、既に松姫が冷静でないことの証明のようなものだ。心の中で松姫は自分を嗤った。画面の向こうでは、口を挟もうとする翔虎を小早川が押しとどめている様子がうかがえた。

「データは事実ですよ。松姫さんなら確認なさってらっしゃいますでしょう。考察の方ときたら半分は、ずれてますが大局では良いところを付いていると評価して良いと思います。でもどのみち、この記事は著しく霧島の企業イメージを貶めてしまうでしょうね。結果

として松姫さんの信頼を裏切ったことになったのは申し訳ありませんでした」

松姫は淡々としたこの語り口に聞き惚れた。もう少し取り乱していると思っただ、矢張り彼は肝が据わっている。小早川の落ち着きが、自分でも意識せずに緊張していた松姫をも落ち着かせた。そのことに自分で気付いて松姫は苦笑する。私もまだ蒼い。

小早川の側で彼の話に解説を加える隙を狙っている、このときばかりは子供に見えた弟のことを笑えたものでない。

「そうですね。可成りの痛手ですわね」

「姉さん、私に説明させて下さい。彼は自分を弁護する気がないからああいう言い方をするだけで、事実はかなり違います」

翔虎が口を挟むのを、取り合わずに小早川が言った。

「企業イメージの話をしているのよ。私が只の臨時雇いの機関士だけだったら良かったんだけど、新人の雇用絡みで一瞬でもボードに参加しちやつたでしょ。この場合霧島には私の素性を把握しておく責任があつたってされても仕方ないわね。自分も今の新人というものに興味があつて、自分のことを深く考えもせずに行ってしまったし。本当にご迷惑をおかけしてしまって、申し訳ありませんでした」

小早川はそこで頭を下げた。松姫は微かに首を振りそうになった。私情としてはそんなことないと言葉をかけてあげたいが、霧島を統べる者として、彼から真実を聞く前に同情することはするべきでない。

小早川は翔虎に向き直って言葉を続けていた。

「松姫さんは私が高なのかではなくて、この事態をどう打開するかを問題になさってるのだと思うわ。リンダちゃんは何も言ってこないけれど、多分野次馬根性のある人達からのメッセージで通信回線パンク寸前の筈よ。私にいつまでも構っている暇があつたら、リンダちゃんを助けに行ったら」

松姫は思わず微笑んだ。細かいことに動じず、察しがよくて一を

説明するまでもなくこちらの意向を飲み込む。小早川は本当に松姫が好ましいと思う種類の生き物だ。

「ドクター相手ですと、話が早くて良いわ。それで、考えたんです。が一つ記者会見でもやらかしませんこと。質問はその場で受けることにすればそれまでの間彼らの不躺な質問状を当然無視する事の言い訳くらいにはなるわ」

翔虎がカメラの前に割り込んで、受像器を顔で塞いだ。この弟も男では上等の部類に入るだろうが、熱血すぎて逆上しやすいのが些か鬱陶しい。

「何を考えてるんですか。姉さん。彼は役者でもなきゃ、政治家でもない。只の一般市民だ。よしんば彼が犯罪を犯しているとしても、それならそれで法の下にプライバシーを保護されるべき立場ですよ。好きこのんで晒し者になったり、自ら進んでまな板の上でさばかれる必要が有りますか。そんな暇があるなら、策士に徹して彼を守る方法でも企んで下さいよ」

松姫は叱りつけようとして、やはり止めた。こんな所が幾つになっても可愛いのだ。

「守ろうとしてるのよ。私は。憶測が暴走する以上に彼を傷つけることがあって？ 彼が法で守られたらその分、勝手な推理や面白半分の作り事がいつまでも騒がせるわ。確かに嘘偽りを言っている決めてかかる人達に、彼の真実は伝わらないかもしれない。でもね、真実を語る言葉には説得力があるわ。彼が偽らない真実を語れば半分位の人は信じるでしょう。ドクターが追及されているのは極東アジア国の軍付属病院爆破とか、小早川冴子とイリアナ・リヤド、両女史の殺害とか直線的な容疑もあるけれど、基本的に彼が人かそうでないかの疑問があつて、それで只の戦犯問題以上に騒がれているの。興味本位の無責任な人達、彼らが一番残酷なのよ。翔虎。ドクターがなにも語らずに消えたら、今度矢面に立つのはあなた達よ。その中にはウォードもいるのよ」

翔虎は反論しようとしたが、ウォードの顔がちらつては言葉が

続かなかった。真実を糺すと称する人達に、小早川について語るよう迫られるウォードの映像が浮かび、ぞっとした。

「ウォードは、あの子はどうしてます」

小早川が松姫に聞いたのは、やはり混乱しているからなのだろう。松姫がウォードがどうしているかなんて知る訳無いじゃないか。小早川がウォードの心配をするのは分かるが、松姫に問うなんてどうかしている。だが、翔虎の思惑は外れた。

「及川を覚えてらっしゃるかしら。人事の岡崎の秘書をしている女性なんだけど」

「ええ、新人の採用試験の時にはハードスケジュールでしたから、随分気を使っていたきました」

「彼女に学校に迎えに行くようにたのんだわ。今は彼女の家にいる筈よ。記事の事も事実であるかどうかは貴方に会ってから判断しなさいと言いつ添えて、そのまま見せるように言いつけておいたわ」

小早川は深く溜息をついた。翔虎が目を剥く。

「何だって、姉さんがウォードのことを」

「だって、ドクターに頼まれてたのよ。サンガにいる間だけでも、人伝で良いから、目を配っておくようにってね。ドクターの頼みじやきかないわけにいかないわ」

翔虎は呆れたように小早川をみた。

「徹さん、いつそんなに姉さんと親しくなっただ」

「何時って言われても困るけど、私、松姫さんみたいな人好みなのよ。それで自然と話していく内に彼女が信頼できる人だって分かって、それで無理なお願ひしたの」

「お世辞でも、嬉しいですわ」

翔虎は頭が痛くなりそうだった。小早川は本当にこの手の男勝りが好きなのだ。全く自分の好みをみているようだ。そしてこの頭の回りすぎる女達から好意を得ることにかけては、自分など足元にも及ばないほどに熟練している。長年の重荷をつい先ほど全てぶちまけた筈なのだから、少しは精神的に落ち込んでいてもいいと思うの

だが、一見平然としている。軟弱な外見に騙されてはいけない。

「そうですね、松姫さんの仰ることは良く分かりました。私が直接皆さんの疑問にお答えするのが、最善と言えないまでも霧島の責任問題追及の矛先をかわすのに有効な手段とお考えならそうしてください。信賴して下さった松姫さんの為だけにでも、出来る限り誠実でありたいと願ってます」

これだ。よくこんな局面で平然と、普通の男なら赤面するような殺し文句を、よりによって松姫のような女に吐くのだ。行かず後家というか、婿貰わずで中年を通り抜けそうな色気とは縁のない長姉が、気のせいかな若やいで見える。でも、負けないぞ。

「徹さん、無茶だ。証拠も無しに誠実だけで納得してくれる輩じゃないんだぞ」

小早川は分かっているというようにきつぱりと頷いた。

「でしょうね。でも悪意に敵意で報いても虚しいだけだわ。泥仕合はお洒落じゃないから、私の好みじゃないわ」

翔虎は本気で心配している自分の意見を、全く取るに足らないことと扱われるのに、無性に腹が立ってきた。

「分かった。好きにしろ。でもな、お前みたいな外見に構わない奴がお洒落を価値基準にするのは絶対に許せんぞ」

「それもそうね」

あつさりと肯定されては堪らない。翔虎は吹き出してしまい小早川もつられて笑った。その様子を松姫は頼もしく見ていた。この弟がこんな風に変わることなくこの男を信賴するのなら、あの記事は根や葉があつても、幹を取り違えているのだ。

自分は、出来る限りの力を使って、この男を助けよう。そして、今はまだ知らない彼の真実を信じよう。松姫は柄にもなくそう決心していた。

第十二章 記憶

人間というモノは、いくら分かろうと努力しても、無駄なのかもしれない。解ったと思える瞬間もあるが端から分からなくなる。大希が曙丸に乗り組んで暫く、配属先の機関部の実質責任者、磯貝は自分たちを嫌悪していた。それは予測した反応であるし、自分たちが抵抗なく現場に受け入れられる可能性が限りなく低いことも知っている。時間をかけて自分たちのようなものに馴染んでもらうしかないと覚悟していた。だが、小早川が存在を告発する、不完全な資料で、偏った見解を示す記事が雑誌に載るといふ事件を境に、自分の方がまだ理解できると思っただろうか、大希は磯貝にとって二番目に嫌いな奴に自動的に昇格したようだった。機関の正常作動確認のための、定期チェックはそれ以来、小早川に替わって大希がしている。

ペンで表に印を入れながら、（筆記具の扱いを練習して随分上達した）大希は集音機的能力を一杯まであげて、機械の作動音を聞いていた。これは、人に出来ないことをして、是が非でも此処で必要とされたいと考えた末に、はじめたことだった。実際に快調に作動している音しか聞いたことがないので、役に立つか分からないが、なにか異常があったとき計器に出る前にその徴候を捉えられたら……。新人だからこそ居て欲しいと言われてみたい。人に出来ないことだから力を貸して貰いたいと、言われてみたい。これは、欲望という感情なのだろうか。

最大限に集音機の性能を上げると、余計な音まで聞こえる。モーター音も実に様々。動力の音が途轍もない重量をもって迫ってくるのは勿論個人持ちのパソコンの動作音から、下手をすれば、誰かが居住区のトイレで用足しをする音まで拾ってしまう。今見ている装

置の音だけを拾えるようになれるまでには、相当時間がかかるだろう。

人より相当優れた聴覚と視覚で能力を最大限に生かし、自分が役立つことを証明してみせる。そう結論し、大希は黙々と情報を収集している。集音機的能力を上げっぱなしでいると、人や新人は存在自体が結構煩い。チェックを終了して可聴レベルを正常値に戻すと、ふっと楽になった。

しばしの静寂に安らぎながら、本船配属前に霧島運輸の事務所で小早川を呼び止めたときのことを、反芻していた。大希は、あの時こう切り出した。

「本当に新人を人間だと思えますか」

* * *

あの部屋は、素っ気なく明るかった。小早川は霧島船長が立ち去った後、先ほどとは違って変わってくだけた姿勢で座り込んで、煙草というものに火を付けた。噂に聞いてはいたものの、はじめてみるそれは不思議なものだった。物質燃焼時における煙は、いかなる種類であっても生物には有害であるはずだ。まあ、自分たちのような精密機械にもあまり有りがたいものではない。知的であることを誇るレベルの個人で、こういった前世代的な習慣をおおっぴらに踏襲している人は珍しい。

「で、喧嘩でも売ろうって言うの」

煙を吐き出しながら、『見定めるような』目で自分を見た。大希は単刀直入に言った。最近、度数をいちいち測定していない気がする。

「小早川博士は、本当に新人を人間だと思えますか」

呆れたという表情でジェイが自分を注視するのが分かったが、気にならなかった。

「難しい質問ね。それとも、質問じゃなく論戦を挑むつもり？」

「質問です。論戦ならこの問題は三十分では足りないでしょう」

小早川は声を立てて笑った。

「それもそうね」

「あの、時間は三十分と限られてますから、質問に質問を付加なざるのを控えて下さいませんか」

「いやよ、会話しか受けないわ。私は総合行動教官じゃないし」

小早川の言葉に、大希の反発心は湧かなかった。むしろ、会話しか受け付けないという宣言は、自分を対等の存在として見做してくれている証拠のようにも思えた。それになにより時間が惜しかった。聞きたいこと、知りたいこと、語って欲しいことが大希の中で渦巻いていた。

「では、そうして下さい。それで、どうお考えですか、ドクター」

「ああ、悪いけど其れ無しにして。博士とかドクターとか。新人が人かどうかなんて、私が知っていて、あなた達を導く事が出来るとでも思っているなら酷い誤解よ」

あの時大希は呆然としていたのだと思う。彼の造った訓練プログラムをこなしていると、認識行動はほとんど意識下に潜っていく。今の太希には、あれ程拘った剣崎方式もイワナコバ方式も、それと認識せずに実行しているのか、それとも本当に使わなくなったのか、身近なものでは既にある。歩くことを覚えた幼児が、歩くことに意識を集中しなくなるのと同じように、自分は総合行動に焦点を合わせなくなっている。

君達新人が成長するまでの間、人と無用のトラブルを避けるために設けられた手段なんだ。方法が目的になっちゃ矢張り本末転倒だろう

総合行動の葛城教官が言っていた事が、今なら実感できる。それと反比例して、整合性のある思考が難しくなっている。一つのメモリー単位で正しいと判断していることを、別のメモリー単位が、全くの誤りだと悲鳴をあげる。多重思考をマスターしたというより、異なる思考の海に溺れているかのようだ。望んでいた一つの自我を得ることが出来ず、好き勝手なことを叫ぶ複数の自我が自分の中でせめぎ合うことに、戸惑っている。これは人間の精神病である多重人格の如き病に、冒されかけているのだろうか。

助けて欲しかった。誰か絶対の真理を知るものに、明確な思考の行き先を教えて欲しかった。

大希がそのような思いを一気に捲し立てるのを、ジェイは驚いたように、言葉もなく聞いていた。難しい顔で言葉を吐き出す大希を見据え、ただ煙草を吸っていた小早川は、言葉がとぎれてすぎるような目で自分を見つめた大希に、ゆっくりと頷いた。

「あなたは、人ならば当然の道を歩きだしたんだわ」

小早川の思いがけない言葉が、大希の心に響いた。

「母なる人がくれた、かりそめの楽園から、漸く一步を踏み出した
とでも、言っておきましょうか」

小早川は、何故か嬉しそうにもみえた。

「母なる人がくれた……、かりそめの楽園？」

と、大希はゆっくりと発音した。それは、一体何の事なのだろう。

「唐突にこんな事を言っても話が見えないでしょうね」

そう前置きしてから、小早川はゆっくりと話し出した。

「全ての疑問に、答えが用意されていると思ひ込める時代、洒落て『魂の幼年期』とでも言おうかしら、その事によってもたらされる安らぎを、私はそう呼んでいるわ。世の中は、いえ、人生は……と言った方がいいかもしれないわね、人生は矛盾と混乱に満ちているわ」

彼の言葉は突然怒濤のように湧きいで、溢れ、大きな流れを作り、蕩々と大希に押し寄せてきた。大希は口を挟むことが出来なかった。

多様性、混沌、無作為。それらに対する受認と寛容。私は、それこそが人であることだと信じているわ。整理された迷いのない、従って行く先が予測可能である生き方を人は好まない。人全体がそうであるように、個の中の世界もそうであると私は思っているわ。たった一つの自我が整然と一本の道を行くのではなく、複数のまるで別の価値観を持つ自我達が、せめぎ合い、競い合い、或いは妥協し合いながら、それぞれの望む方向に、揺れ、たゆとい、予測もつかない未知なる世界に一つの塊である人を導いていく。それが、生きるという事なんだと、思っているの。

絶対の真理を求めるのも、自分というものが何処に行き着くかが心配でならなくて、答えを求める。誰かが教えてくれる『万物に共通の普遍の真理』を知って、悩むことなく生きていきたいと、切実に求める人の弱さを、只の人に過ぎない『私』は良く知っている。不変の真理を知っていると標榜する宗教が、私達にある種の安らぎを保証してくれるように、それが人を安心させるものだとか分かってる。でも、世界は不思議と矛盾、奇跡と驚異に満ちているわ。普遍の真理はもしかしたら有るかもしれないけれど、受け取る人の数、いえ、心の数。受け取る人の中にある全ての自我の数に増殖して解釈される。人が受け取った瞬間に真理は多様化し、鮮やかに変化して安らぎにも、呪いにもなるわ。万物流転、諸行無常といった言葉は、絶望を知らせるものでなく、ましてや諦めを促すものでない。それこそが無限の可能性を示唆するものに他ならないわ。

あなたは、異なる思考の海に溺れているかのように言ったわね。望んでいた一つの自我を得られずに、好き勝手なことを叫ぶ複

数の自我がせめぎ合っていると。それは、人ならば当然のあり方だと思う。繰り返すけど、自我は一つではないわ。今、私はおそらく人間行動総合学を志した学生、小早川の顔をしていると思うわ。でも、私は機関士として高度に洗練された機械を扱うのが堪らなく好きな人間であり、平凡にただ緑を愛する家庭園芸家になりたかった者でも有る。子供の成長をこよなく愛する親ばかりであり、武道家として、自分を鍛えることが至上主義と確信している単純な男だったりもするわね。同時に欲望を御せずのたうち回る愚かに卑小な存在でもある。それでも、彼らは今の私の良く知った友人であり、二度と会いたくない隣人であり、酷く隔たっていると同時に、世界を共有している。

人の暮らしは、思いこみで成り立っている。自分が統一された意識の中で、連続した生を生きていると錯覚している。眠りや、衝動性眼球運動がもたらす視覚の時間的空白、盲点がつねに示している認識の空白、それらを平気で無視して、何事もなく日々を過ごし、何の疑いもなく自分が自分という存在であることを信じている。でも、本当は知っている。自分はたった一つの価値観しか持たずに、従って分かり切った到達点に至るため、寄り道もせずに此処を通過していくだけに過ぎないものでは、決してないと。

知っているからこそ、可能性を求めて前進するのよ。だって、そうでしょう。誰かが決めたに過ぎない道筋をただ辿るために、他の命を喰らってまで生き延びたいと、本当に人は思っているのかしら。何か分からない、どう転ぶか予測もつかない、だからこそ生きるのではなくて？

でも、それは、同時にとっても不安で、恐ろしい世界だわ。良い方にだけ可能性が開かれる訳でないのだから。人は簡単に過ちを犯すし、不思議と楽な道に道徳的悪は潜んで待ちかまえている。私も

かつて楽な道を選んで、深い罪を自らに呼び込んだわ。まあ、今は私のことは置いておきましょうか。だから、絶対の真理に救われたと思う。でもね、そんなものは無いのよ。ここの所大事。絶対の真理はもしかしたらあるのかもしれないけど、そんなもの、人間の思考の枠に入れることは不可能ね。だから不安になる。不安は人を追いつめる。それは、有る意味で無限の可能性の代償と言えるのかもしれない。

でも、子供は違うわよね。可能性は大人以上に無限だけれど、不安を制御する強い意志や、正しい方向に導く道徳的価値観、そう言った知識はないし、肉体的にも、もっとも弱い者だわ。子供が生まれ落ちて数年という僅かな期間は、虚構であつても不安のない楽園を演出してあげるべきなのよ。親だつて人間だもの。不安もあるし、理想的に完全な親に成れる訳じゃない。でも、子供の健全な成長を望むなら、不安を子供に凝縮させちゃいけない。不安と悩みの少ない、快と不快のみに彩られた楽園を演出して、安心して良い場所を示してあげる、『いつでも自分を愛する人がいる』という偽りの真理をあげなければならぬ。

そういった、整つて安全な世界は、いつかは終わりを告げる。親も人間に過ぎないこと、彼らが完全であり得ないこと、間違いも当然に犯す不安定な存在と言うことに、子供は気付く。そして、今度は自分を探しに行くんだわ。自分の力でね。貴方達新人が総合行動に支配される期間は、そういった『神経を病んでいなかった、健全な大人に育てられた幸運な』人の子供が、だれでも住んでいた、『母なる人のくれた、いつもの楽園』に漂っていることに等しいと、私は思っている。

貴方達新人が総合行動が支配する、整然とした行動を悩まずに選択できる期間を必要としないと言うのなら、それは、自ら好んで

孤児や病める親を持った不運な子が味わう、孤独、不安、境遇に対する絶望を買うようなものだわ。私の考え方は極端かしらね。でも、沢山知ってしまった異なる価値観を、自分の望む方向に制御していくという行動、連続していかない、一つでさえない自我を、個人という塊の中で統合できたとき、貴方達は尊厳を持った人になるのだと思う。

もう一つ、今のあなたには説明しても仕方のない概念があるわ。それは人が生存するために細胞レベルでとっている行動で、決して洗練された素晴らしいものじゃない。人はそれによって苦しむし、他でもない同族である人を傷つけるわ。でも、それがあからこんなのにも長い時を有り続けることができた。ま、言ってみれば土嚢で作った最終防衛ラインってやつよね。核兵器や細菌兵器に役立つ訳無いのに、隠れている人間の精神安定にはとても有効。でも、それは新人の貴方達が今は持っていない機能だし、この先も好んで持つとは思えない。人間だって基本的にそれから逃れたいと思ってるしね。これは人間の問題。

小早川の言葉は、一気に押し寄せ、包み込み、掻き回し、そして静かに流れを収めた。そして、ゆっくりと頷いた。

「大希、貴方の訴えに微塵の嘘もないのなら、抑圧もない、何ら精神的不健康な状態を味あわされることない、貴方達世代の新人が、健やかな初期教育を受けることで、実際に人としての自我に目覚めることが出来る。人の子と全く同じように成長できる。その事の証明よ。素晴らしいわ」

大希は反論した。

「でも、小早川さんは、ご自身の論文の中で、我々は存在するべきでなかったと断じてらっしゃいます。我々の人権、人はそれを望んでいないと。貴方の我々に対する理解は、偽りですか。人と同じよ

うに成長できる心が、我々に有るんですか。腹に収まったシリコンの塊の何処に、全て取り替えが効く『かけがえのない』ものではない作り物の体の何処に、魂が宿るのですか」

小早川は、ごく穏やかに、深く微笑んだ。慈愛に満ち……という表現が、自然に思い浮かぶような、そんな表情だった。自分が知っているいかなる種類のプロトタイプの表情でも、計れなかった。そして、それが、卒業前に葛城教官と『下らないおしゃべり』をしていたとき、私達が魂　ソウルを手に入れていないと断じた葛城がした、自分には形容できなかった種類の表情に、とても似ていることに気付いた。

「人の細胞も、常に入れ替わっているし、脳細胞はひたすらに死にゆくだけよ。心が何処にいるのなんて、人にも分かっていない。専門家を称する人は口々に自説を披露するけれど、これが絶対の真実だと確信させてくれるものを、無知な私は知らない。ただ、脳細胞に座って、胡座をかいていることは確かでしょうね」

そして、ゆっくりと自分に向かって言葉を投げた。

「確かに、人は貴方達を造ったわ。そのために、数知れない試行錯誤と、膨大な資金、時間を費やして。でも、その時に、ちよつと立ち止まって、作りたいから造る、作れそうだからやってみる、その無意味さを問いたさべきだったと思うわ。人が欲しかったのは、ロボットよ。便利な機械。人に代わって黙って危険な仕事に向かい、単調な仕事に鬱憤を溜めることのない、壊れたところでそれに傷つかない、そんな高度技術の塊は切実に求めていたでしょう。けれど、彼らが心を持ってその境遇に憤慨したり、神経症に陥って人に危険をもたらすことなぞ、望んでいなかった。人が隣人として暮らしたかったのは、多分ね、高度に洗練されたロボットであって、貴方達じゃないわ」

小早川の断言は、大希の欲しかった言葉の対極にあった。隣人と

して一緒に生きていこう、という、優しい言葉ではなかった。もし、涙を流すことが出来たなら、きっと大希は大声を上げて泣いていただろう。

「人は、性懲りもなく過ちを繰り返す。過去に於いて、結局制御できなかった原子力エネルギーを実用化しようと努力していた人は、危険に気付きながらそれを無視した。そして、それだけじゃない色々な要因が絡まって、地球を壊しかけた。でも、開発に携わっていた人はいうでしょう、人の英知があれば制御出来たはずだ。あれを危険なものにしたのは、無知な利用者だったと。でも、歴史は語るわ。あれは存在してはならないものだったと。貴方達は、現代の原子力エネルギーにも等しいわ。恐ろしく有効で、強力、そして……とても危険」

大希は、これ以上聞きたくなかった。何を勝手なことを言うのだ。造ったのは誰でもない。その人だ。今更存在してはならないと、簡単に言ってくれる。

「もう沢山です。有り難うございました。私はそんな事を貴方から聞くとは思っていませんでした。職場を霧島に選んだのは、私の呪いになりました。作っておいて、要らないからと存在を否定する。私達は、居るだけです。何処が危険なんですか。私達は隣人として一緒にやっていこうと言って欲しいだけなのに」

人ならば、泣くのだろう。自分は涙を流す振りをする機能はあるが、感情と直結してはいない。そんな模擬行動をとることすら潔しと思えないほどに、人がいやだった。自分が人のレプリカであることは呪いだ。自分には何もできない。この無責任な人に、存在を否定されて、それだけだ。口惜しさ、その言葉が指し示す本当の感情を味わった、言語理解が又一つ深まった、それだけだ。

大希の激しい言葉にも、小早川は微笑みを崩さなかった。
「危険じゃない？　じゃあ、あの戦争は何だったの。貴方達は人を

殺したわ。取り替えの効かない人格を、簡単に消した。意識レベルで人は存在したがるし、無意識レベルでは生存したがる。その人というものに貴方達は危険であると、思い知らせたのは、貴方達よ。核爆弾の恐ろしさを、人工放射能の真の恐ろしさを知った人間が、人は核を望んでいないと叫ばずにいられなくなったように、人が直視していなかった危険を、目の前に突きつけて見せたのは、誰でもない、貴方達自身だわ。戦後世代に戦争をやらかした前時代の責任をとれと、無茶を言う気はないけど、戦争……あれは、戦争なんて対等な国家間がするようなレベルのものではなかったけれど、それでもね、戦争はあったのよ。貴方たちは人に自分たちが危険なものだと宣言した。そして人はそれを忘れてない。機械なんかにはね、感情なんて邪魔なのよ。そりゃ、感情があるものは扱いにくくても可愛いわ。ロボットが表情を作り、パターン制御で人間性を感じさせる行動とってくれる、その可愛さで、満足すべきだったのよ」

口調の優しさと裏腹に、彼の言葉は残酷で容赦がなかった。

「では、貴方は私に消えると言うつもりなんですか。大破局の時に人が永遠に核エネルギーと袂を分かったように、人の前から消え失せると……、そう言うのですか」

小早川は、ゆっくりと首を振った。

「私の本、ちゃんと最後まで読んだんでしょ。私の結論は、こうだったはずよ。人が自分たちの尊厳を、意識を持つ魂に見いだし、高度な知能、理解力、学習能力を持つことを最高の力として、誇らかに主張する以上、同じ意識を持ってしまった新人の存在を否定することは許されない。確かに、私達は望んでいなかった。だが、それを理由に彼らを迫害する権利も又有していない。……ふふふ、古い話だから、言い回しは違ってるかもしれないけど、大体は合ってるはずね。私は今もその意見を撤回していないわよ。勿論ね、有ってしまった魂に対しての話。大希、ジェイ……貴方たちに言うべきでないと思うけれど、敢えて問われたから応えるわ。在ってしまった

た魂には尊敬を忘れずにいなければならないけれど、あるべきでない存在ということに変わりはない。ここに貴方たちのような新人がいる事は、貴方たちの所為ではないし、勿論、無くなれとは言えない。人であれ、新人であれ、心の存在を疑えないものを否定する権利は何者にもないわ。自分にも魂があると信じるならね。そして自分のそれを大切に思うならば、他者のそれに対しても同じように対するべきだと思う。その事に全く疑いを持っていないわ。でも、それでも、不幸な事だと思う。貴方たちに忘却の恩恵のない無限の時間があることがね。そして、それでも寄り添う魂を求めて新たに自分たちと同じ不幸な魂を作り出している現状はね」

そう言つと、彼は五本目の煙草を取り出して、頭を掻いたのだつた。

「三十分、会話しましょうなんて言いながら、一方的に演説ぶつちやつて悪かつたわ。でも、私が答えを持っていないことと、貴方が人として生きることを望んでいるのなら、貴方の成長過程は私の説をとるなら正しい、つて事くらいは、説明できたかな」

そして、こう呟いた。

「立ち止まる勇氣、出来るという理由だけでしない決断力。物事が進んでいるときに何故それに気付かないのかしらね。私も、立ち止まる勇氣と、望まないことをしない意志力があつたら、もっと早く生きることのすばらしさを知っていたかもしれないのね。そうやって何時も失敗してから後悔するんだわ。ふふ、てめえの頭の蠅も追えないでつて、典型」

その時の私には、小早川のこの部分の独白の意味を知る事は出来なかつた。

それから、一層の思索の深みに引きずられるかのように、言葉を綴つた。だが、それは、自分に話しかけられたものでない、そんな気さえした。

貴方達が『自分は人間より優れている』と思いたくなる理由の一つである記憶の精密さは、私に言わせれば幻想よ。私達……人は、意識レベルでは全ての言葉を記憶することは出来ない。信じられないでしょうけれど、人間に話し言葉は記憶できないのよ。誰かが喋る。それは、聴き手の過去の経験というフィルターを通過して、その時点で話し手の意図するイメージとは明らかに異なってしまう。そして、受け取った言葉の大部分は忘れられ、要点だけが記憶される。デネットが言うように、人が『思い出す』と言うのは、大部分を忘れ去ってしまった後に『鮮やかに残った、本質的なもの』を、今の立場で再解釈しているだけというのが、確かなのだと思う。思い出してるんじゃない、記憶を創造しているの。思い出になった途端、全ては何らかの価値を有しているのよ。レコーダーが忠実に再現するような、精度と引き替えにね。まあね、無意識レベルでは違う概念も入れなきゃいけないんだけど。

でも、貴方達は違う。私の饒舌なおしゃべりを、一言一句間違えず、その気になれば間や、呼吸回数まで含めて、再現できる。喋った本人の意識が明確な時にさえ、人間にはそれが不可能なのに……よ。でも、余分な情報が多すぎるわ。生きるのに必要なのは、絶対の真理ではなく、自分だけの真実。でも、貴方達は、経験を積んで自分の価値観を構築して、それから過去の現象を分析して、大切と思われる情報を編集してはじめて、貴方だけの価値有る思い出を勝ち取れるんでしょうね。そして、その個性の本質的な部分でさえ、その気になれば『なかったこと』に消去してしまえる。貴方達の『忘れる』は、永遠の喪失だわ。

無意識の底に沈んで、煌めきを放つ時を待っている、経験の中にちりばめられた、一人の人にとってだけ意味のある『記憶』すら、確かなものでない。それが、精密な記憶って言えるかしら。そう、

ある『時』を単純に再現する能力が、それ程までに素晴らしいのなら、一番優れた機械はビデオレコーダーよ。貴方達は、それを知るべきだわ。

人の精神は常に忘却に助けられている。それは、決して呪いではないわ。時間が忘却を促して、全ての、あらゆる感情を追い出す。それが時を経て思い出すという形で再現されるとき、全てが穏やかに静まっている。激情で狂った時間を、静謐な安らぎを維持したままに思い返すことすら出来るのよ。これは、救いだわ。忘却のもたらず豊かな恩寵とさえ断じて良いでしょうね。貴方達の精密な記憶に、これは可能？ 私には分からない。

私は不安でならないわ。人の勝手に『処分』されることを、失ってしまった貴方達に与えられた、膨大な時間がね。理論的に貴方達は劣化したパーツを変えながら、永遠に生きられるわ。でも、それが『恵み』とは、思えない。人の魂は永遠に憧れるけれど、心はそれに耐えられるようには出来ていない。突然に、或いはゆっくり老いた末に、人は死ぬわ。覚悟しようが、悪あがきしようが、関係なく死は人を彼岸に導くわ。人は死を恐怖する。無条件で自我は『存在したがる』のだもの、仕方ないわね。でも恐怖に彩られた死は魂にとって必要なのだと思う。無限に耐えられるほど人は強くないでも、貴方達が自我の欲するところに従って、人から見たら永遠に近い時間を生きて、その末に、どんな世界を見て、どんなことを考えるのか……。私の想像など及びもつかないわ。その時、造物主を想像するしかない私達と違って、貴方達には人間の顔が見えるのよ。貴方達がその時も人の社会にある倫理に、何らかの敬意を払ってはくれるのかしら。

* * *

小早川の言葉は、根底から大希を揺るがした。優れたと信じていた部分を否定され、自分が存在することすら人にとって『望み』ではないと言われた。だが、それでも自分は、存在したがるだろうし、実際それは望んで良いことなのだと……断言してくれた。それでいて、自分たちの行き先にひろがる闇を思い知らせ、人との共存に疑問符を加えた。大希は小早川から、希望と絶望を一度に受け取った。あれは、深い思索を行動プライオリティーの下層に置くジエイすらも、考えずにいられない状況に追いつめたようだった。あれから自分たちはこの事について意見を交わしてはいない。自分たちは戦争という名のテロ行為によって、法定処分年限を撤廃させる事に成功した。それは勝ち取ったものだった筈だ。なのに、自分たちの持つこの思いが『魂』だったのなら、無限は恩恵ではなく、耐えるべき苦痛でしかないのだろうか。今、存在し始めたばかりの自分には、無限が負担とはとも思えない。けれどいつしか終りを望むのだろうか。自ら選んで終わらせる終焉　自殺しか行く末に無いのだろうか。怖い。

大希が悩みつつ日常業務をこなしている間、機関制御室では磯貝が、この航海前までは小早川が付けていた日誌を読んでいた。なにが重大なトラブルが発生したとき、責任回避のためにデータを改竄されるのを防ぐために、日誌は昔ながらにノートに記すことが義務付けられている。大きめで右上がりの力強い文字で丁寧に埋められたノートの内容に、すっかり舌を巻く。簡潔で過不足無い状況説明。日常の定型業務を他人に任せて、そろそろ五年分ほど遡ってきた。曙丸がどんな船か良く分かる。前任者に話を聞くより、余程確実に自分の船が分かる。機関部の人間とは自分が面倒を見る事になる船の状態は、一刻も早く把握してしまわなければ気が済まない人種だ。

それぞれやり方はあるだろうが、機員は船の履歴を知るところを重視するタイプだった。

同じ機関士として、小早川は自分のしたいことが分かったのだろう。彼は船長や他の者が快く思っていないのを無視して、早々に船を譲ってくれた。それは感謝している。それに、日誌を読めば彼の能力は十分に分かる。

小早川の派手な経歴は、機関士仲間でも有名だった。彼を所詮は外道と言う者も居たが、仕事ぶりを知った上で、彼を軽視する者を機員は知らない。前に乗り組んでいた船の時も世話になった、サンガでキリシマのドッグエンジンチームを率いるゲーリック・ガイバーなども、彼のうわさ話が出たときは必ず「あれはいい腕だ」と常々言っていた。だが、機員は正直なところ「陸上がりのヒヨっ子にしては」という事だと思っていた。ゲーリックは純粹に尊敬できる数少ない技師の一人だ。

それが、小早川の日誌を見ると、但し書きなど必要のないのだと分かった。そう言えば、小早川が一級を取るのを待って引退したゲオルグ・カトーも「俺が仕込んだんだ。間違いない」と胸を張っていた。

今の機員には全てが誇張でないのが良く分かる。船の善し悪しは機関の状態の如何にかかわっている。曙丸は脂の乗った壮年の船だ。老朽船と呼ぶ程古くはないが、手入れが悪ければポンコツになってもおかしくないほどには充分働いてきた。船齢十九才。だがこれ程丁寧に可愛がられていたのなら、あと十年いや、十五年は楽勝で新造船に引けを取らないだろう。そして、その時を過ぎても尚数十年の時を使用に耐えるだろう。良い船を、いい状態で貰ったと言って過言でない。

小早川を見直しかけた時になって、あの暴露事件がおこった。船長は、あの記事の言っていることは全て出鱈目だから信じるなど言い、小早川は弁解すらしなかった。

だが、よしんば船長が言うことが真実で、小早川が軍の犠牲者だったとしても、自分は彼を許すことは決してできないだろう。磯貝は唇を噛みしめた。こうみえても自分は十分にあの男を思いやっているのだ。自分の幼かった娘が、生まれつき難病に苦しんで、病院の外の空気を知ることの無かった娘が、小早川の為に死んだのだという事実を、今更突きつけて傷口をえぐるより、単に人間じゃない小早川を憎んであげる方がずっとましだろう。

新人を憎んでいた。ずっと、何より。市民病院での万策が尽きて、最新の技術をもつ、極東アジア国軍の付属病院に転院した娘は、そこで新人の攻撃を受け、生命維持装置への電気の供給が切れたことで窒息死した。機械の補助がなければ呼吸の出来ない奇病だった。筋ジストロフィー、筋無力症などといった類似する症状の出る病気を片端から疑い、色々と調べて尚、原因が分からなかった。それでも娘は確かに生きていた。成長して携帯式の呼吸補助機を使えるようになれば、きっと地球の上空の下と一緒に散歩できるのだと、信じていた。娘を失ったことで絆が切れたのか、結局妻とも別れた。あの事件は磯貝から家族を奪ったのだ。

妻が去っていったのは、娘の死だけが原因でないことは分かっている。原因が分からないままで、直る見込みのない娘の看病。病院通いを続けていると、娘のような難病を抱えて生まれた幼い命は、はかなく、あっけなく、消えていく。溜まるストレス。仕事でとはいえ居ないに等しい夫。大恋愛で結ばれたのですらなかった。船乗りで運命の恋人に出会い損ねた自分に、親戚が見つけたきてくれた連れ合い。元々か弱い絆だったのだ。娘の死は辛うじて繋がっていたそれを断ち切った。全てが終わった。

新人を一生許すことはないと思っていた。それで気持ちに決着をつけていた。それが今になってあの子を殺したのは別のものだというのだ。それも、すぐ側にいるのあの男だと。手の届くところで、のうのうと生きている。その男の絶えない笑顔が、燦る怒りを煽り

立てる。殺してやりたい。何度思ったことだろう。だが、十年の年月を新人を激しく憎み続けて生きる事すら不可能だった。憎しみは疲れるものだから、手早く忘れる事で日々を過ごしてきた。既にあの子を失ったばかりの身が引き裂かれるような苦しみは、悲しいかな薄らいでしまっている。

そして、そんな自分を許せないと思う。娘のための復讐に情熱を持ってない自分が情け無い。

父さんは、どうしたらいい。

亡き娘に何度問いかけたことだろう。

右上がりの字を書く人って、誠実なんですって。私達きつと上手く行くわ。

別れた妻が、結婚前のデートの時に言っていた言葉。小早川の字も伸びやかなそれだ。彼がつけた日誌に目を落とし、磯貝は思う。真犯人など知りたくなかった。

長年の憧れだった機関長職。やっと自分の船と呼んでいい曙丸に出会えたのだ。だが、そこには彼女を可愛がってきた男の気配が染みついている。いったいこれは何の皮肉なんだろう。彼女を 曙丸を何の蟠りもなく愛したかった。

磯貝は黙々と、もう一頁日誌を遡った。

第十三章 光在る場所

サンガは山河から来ているそうだ。故郷を追われて宇宙に打ち上げられた人々の、生きる自然と隔絶された空間が山河とはウィットにしては皮肉が利きすぎているが、古の大地に暮らした人々が暮らしの中で意識するとも無しに愛した山河のように、此处に暮らす人々の安らぎたり得る場所を造るのだという創造者達の意気込みが感じられる良い名前だ。

小早川は目の前に迫ってくる宇宙コロニーの姿を目にしつかりと焼き付けておこうと外部カメラの映像が映すモニターを見つめた。この九年で何度も見た光景。点で有る塊が大きくなるに付け複雑に入り組んだオブジェのように見え、やがて画面一杯に広がって栈橋だけしか目に入らなくなる。サンガは光りに溢れている。おそらくこの光景を曙丸から見ることはもう二度と無いだろう。

あの記事を読んで元々人造物に抜き差しならぬ差別意識を抱いていたらしい機貝機関士は小早川が機関部を弄ることすらも禁止した。得体の知れぬモノより新人とネタが割れている大希の方がまだ安心できるということらしい。母港に着栈するまでの数時間、貨物船の乗組員に暇な者は誰も居ない。小早川は事務部の洞口の文字通り山のような書類を片付けるのを手伝っていたが、ともすれば手も止まりがちだった。

「小早川、大丈夫か」

洞口は小早川の過去について暴露された記事のコピーを見せられ、小早川の言葉でなく翔虎からあれに真実が含まれているが、それが全てでないと聞いたただけだ。だから、いろいろ疑問も残ってはいるが、殆ど十年に達しようとする付き合いの長さで彼の人となりを知っている、自分までもが細かいことまで追及して彼を追いつめる気にはならなかった。第一、シェーネが許していると言うことは、

イリアナを殺した云々の件は、全くの憶測に過ぎなかつた。

機関長の磯貝は小早川の事を知らないのだから、あの記事を読んだら彼を気味悪がって当然だろう。翔虎は磯貝が小早川を機関部から閉め出したことを腹に据えかねているようだが、洞口は僅かな間でも小早川と共にいる時間が増え、ついでに書類が信じがたい速度で片付いていくのだから感謝しても良いくらいだと嘯いていた。

「ごめんなさいね、これで曙丸から見るサンガも見納めかと思うと、ついで」

洞口は寂しそうな小早川を初めて見るなと思った。彼は自分には剽軽にふざけるし、調子に乗ってきわどい冗談も飛ばし、何時もにこやかな幸せしか知らない者のように振る舞ってきた。事実も含まれてしていると聞いて、あの記事を何度読み返してみてもその様な怪しい経歴の持ち主とは思えないし、かといって、翔虎のいうような重荷を負って生き抜いてきた猛者にも見えない。だが、機関部を閉め出されて事務部に居着くようになってから、やるせないと言っている表情をしているのを何度か目にした。仕事の合間にお茶を飲んで一息ついたり、ジェイに貨物と書類の流れを説明したりしていると、きは絶対に笑顔を崩さないのを見ると、今までも小早川が一人で仕事をしているときはこんなにも哀しい顔をしていたのだろうか、などと思ってしまう。洞口は今更ながら小早川の素顔を見たことが無かつたのではないかと感じていた。

「最後じゃないさ。翔虎もいつただろう。お前さんは此処に帰ってくるんだ」

それには答えず、小早川は話題を変えて言った。

「洞口さんにはお世話になったわ。本当に乗り組んだ当初は使いものにならなかつたでしょうね。鍛えて貰って感謝してます」

「なに、お前さんほど物覚えの良い奴なら、鍛えがいもあったさ」

小早川は例のおどけた表情を造って道化がかってお辞儀をした。

「もうすぐ、ここから去るなんて信じられないわ。曙丸に来てから

此処が家だったのに」

「お前さんは成長したよ。なんにもしらない陸の坊やが、良い船乗りになった」

小早川は心から嬉しそうに笑った。

「洞口さんがそう言ってくれる日が来るとは思わなかったわ」

そして、洞口に頷いて、大きく溜息をつくと再び書類に目を落として仕事を再開した。

まぶしいほどの光に満ちている。いつもサンガのD-9埠頭がモニターに出ると思うのだ。エネルギー効率の問題から操船室や事務室と言った作業場以外は薄暗い照明しか持たない曙丸から見るとサンガは光が洪水なつて氾濫している様に見える。

曙丸の巨体が乗り手の感覚で分かるほどに減速し、ゆっくりと棧橋に横付けされロボットアームが伸ばされる。曙丸の人工重力発生装置が作動をゆっくりと止める。船は一瞬の無重力に遊ばれる。このときに人間の身の処し方に気を配るだけでなく、ちゃんと書類を固定しておかないと、あとでえらい目に遭う。程なくして曙丸は船室の想定上部がサンガの中央に向く形で固定される。ふわつとからだが浮きそうになる程度の低重力が甦ると、曙丸がサンガに係留されたということだ。不定期航海が中心の曙丸は普段はサンガに寄り添って移動しながら、埠頭の空き待ちをすることが多い。だが、スケジュールの読める今回のような航海の場合、すんなりと着桟出来た。

いつものように、光り溢れるサンガを見ながら、しばしの時を過ごしたかった。そう思って、小早川は苦笑した。年貢を納めたと良いながら、何と自分は未練がましい。いつものように埠頭の中をつつす風に、カメラの視点が切り替わる。

埠頭に沢山の人が屯しているのが不思議だ。此处は何時も人氣が少なく静かな場所なのに。

「大変だな着く早々。あれマスコミみたいだぞ」

洞口の言うとおり、いかにも堅気の連中ではない。プロの持つ大型のカメラやこれ見よがしにマイクを持ったレポーターとおぼしき者。

「コンサートツアー終了後か不倫発覚後の芸能人になった気分よ」

モニター越しに見物しながら煙草をくわえる。

「検疫終了後四十八時間、船外に出られないの知らないんじゃないの。ご苦労様ねー」

「まるで他人事だな」

事務室に入ってきた柳が呆れたように言う。

「徹さんが絶望せずに生きてるか見て来いって翔虎に言われたんだが、無用な心配だったみたいだな」

小早川が煙草を持った手を軽く挙げて柳に挨拶した。

「ありがとね。でも最近翔虎ちゃんの表現切れてない」

「ぶった切った本人が言う台詞じゃないね」

柳がずけずけと言ったので、小早川も苦笑せざるを得なかった。

「ヤナちゃんまで嫌味ね」

「徹さんが人並みはずれてタフなのが、今更分かって嬉しいんですよ。磯貝のおっさんの事でも目くじら立ててるのは翔虎と俺だけ。

リンダもかな。新人連中は今ひとつ何考えてるのか見当付かないし、この先うちの船が大丈夫か心配ですよ」

「大丈夫よ。翔虎ちゃんがいるから。洞口さんもシェーネも、あの坊やの脳天気には敵わなかったのよ。磯貝のおっさんだって時間の問題よ」

洞口は昔のことを引き合いに出されて、微笑んだ。そういや、翔虎を自分がいじめているのに気付かなかったのは、結局翔虎だけだった。いや、もしかしたら気付いてたのかもしれないな。あの、坊やは。

柳は不服そうに言い募った。

「そつつすかね。おっさんは自分の手下を乗り組ませる気なんですよ」

「手下は良かったわね」

小早川が笑うと、柳は顔中の筋肉を総動員して不愉快を表現した。「徹さん、もう関係ないと思ってるんじゃないの」

「まあまあ、突っかからないで。もうすぐ最後なんだから私だつてこれでも一応感傷に浸ってるのよ。仕事は手に着かないし、気もそぞろ」

「またそうやって、ふざける」

どうしても声が刺々しくなるのを制するかのように洞口がぼつりと言った。

「本当だよ、柳。小早川の机、見て見る。普段なら機関部の片手間にやっててもとくに片付いてるさ」

入港手続き用の書類が山になっている小早川の机に置かれた、未処理書類の箱にまだ幾つか書類が残されている。

「いつもいつも同じフォームに決まり文句をタイプするだけの下らない習慣と思つてたけど、最後だと思うとなかなか名残惜しくてね。本当は一番親しんだ動力の方も点検くらいしてあげたいんだけど、ま、贅沢言つてもきり無いから」

柳は自分のいらいらの背中にいるのが紛れもない寂しさだという自分の気持ちを改めて認識して、哀しくなった。本当は、明るく振る舞つて戦いに赴くに等しい小早川を励ましたいのに、気丈すぎる彼が笑っているのが辛くて当たつてしまう。これでは子供だ。

「あれ」

小早川が棧橋の人混みの中に有るはずのない顔を見つけて凍り付いた。何故此处にあの人が居るんだ。小早川には柳と洞口の会話が遠くで聞こえるかのように既に何も聞いていなかった。暫く経つて洞口は小早川が自分たちの会話に加わっていないだけでなく、まるで聞いていないのに気付いた。彼の目はモニターに注がれたまま釘付けになっている。隣の柳をつついて、小早川の状態に気付かせて

からモニターを指さす。柳は洞口の言いたいことを察して映し出される人混みに何かを探そうとしたが、まるで見当も付かなかった。翔虎にも聞いてみると柳は洞口に仕草で伝えたと、隣接する操船室に走った。

翔虎は柳の話を聞いて、改めて見る気もしなかった棧橋の人混みを見た。暫くはこれと言って変わったものを見付けることは出来なかった。変わっていると言えばこの風景全部がそうなのだ。だが目を凝らして探している内に、一つだけ知っている顔をみつけた。カメラの一番遠くの方に辛うじて半分だけ映っている豆粒のような大きさだが、それは紛れもなくあの人だ。小早川が子供を守るために別れてきたと言った、あの人。翔虎はリンダに言った。

「リンダ、検疫所のファイルを呼んでくれ。どうせうちに来るのは彼の班だろう」

「え、何故」

「いいから早く。事務所を出ちまわない内に捕まえてくれ」

リンダが渋々と電話を取る。入港すればハイパーではなく直接通話ができるのだから、自分ですればいいのに個人番号をアドレス帳から拾うのが面倒臭いのだろう。全く勝手な男だ。

「翔虎、ファイルよ。彼も貴方と話したかったところだった」

携帯電話を受け取って、翔虎は挨拶もそこそこに頼み事に入った。「来るときに野次馬連中の塊の後ろの方に居る女性を連れてきてくれないか。礼はちゃんとするよ。事務所の窓から見えるか、黒くてまっすぐな長髪の、黒つずくめの服のひとだ。三十代に見えるちよつと強面の印象的な美人だからすぐ分かると思うが。そうそう、ベンチに陣取ってて今足組み替えた。OK？」

シェーネがカメラを操作して騒がしく屯している連中の後ろの方を拡大する。

「あれ、もしかしてセイじゃないか。驚いたな、彼女全然年くって無い」

柳がシェーネが指で示した先の女性を見る。

「セイって、たしか徹さんの子供産んでたって人ですよ。へえ、遠くて良く分かんないけど、なんか綺麗な人みたいですね」

シェーネが頷いた。

「若い頃はそうでもなかったんだが」

「でも何で此処に。徹さんは別れたって言ってましたよね」

「徹さんが別れたつもりで居ただけかもしれないだろうが。向こうには向こうの言い分もあるだろうからな」

柳の耳には翔虎がフィルと話している声が入ってきた。

「そうそう、兎に角連れてきてくれ。説明はちゃんとするから。葛城さんという人だ。彼女は小早川の身内の人なんだ。野次馬じゃない」

身内の人、紛れもなくそうなのだ。あの人が徹さんが愛した人なのだ。柳が幾分の好奇心を伴って見ていると、フィルの所属する検査班の三人が彼女に声をかけているのが分かった。そして、彼女を伴ってこちらに向かってくる。フィルが彼女となにやら話しているように見える。何かわくわくするような、心臓が踊る感じがし、柳は落ち着こうと努力した。そうだ、シェーネがメインカメラを操作したのだから、この様子は事務室の小早川も見分けているはずだ。

ちよつとした野次馬根性で、あつちの様子も見てこようと廊下に飛び出した柳は、事務室から出てきた小早川にはち合わせてしまった。彼の顔は恐ろしく強張っていて、柳は声をかけそびれた。

「フィルに妙なことを頼んだのはどうせ翔虎ね」

小早川は逆上すると、妙に迫力があるな。と、柳はうつかり頷いてしまった。

「全く、何奴も此奴も、ひとをおちよくりがって」

これは本気で切れているらしい。柳は取り敢えず傍観を決め込んで、昇降口の方に向かう小早川を追いかけることにした。翔虎とり

ンダも柳の後を追ってきたが、小早川はそれを無視することに決めたようだ。

小早川の操作でエアロックの外側のハッチが開き、検疫班の三人とあの人が入る。彼女はスタンドカラーに長袖、膝までをタイトにカバーした黒一色の服だったが、それでもむさい男の中で際立つて華やかだった。構造上外のを閉めないところらとエアロックを隔てる扉は開かない。ゆっくりと外扉が閉まりるとウエイトランプが消え、内扉がこれ又おっとりとした速度で開いた。

「皆さんお揃いで、お迎えとは珍しいな」

フィルが言うと、翔虎が小早川の前に出た。

「無理を言って済まなかった、フィル」

「いや、それは別に構わないさ。あの連中がきてから、埠頭がゴミだらけで、全く気にいらん。で、霧島の婆さんが記者会見するなんてほざいてたが、正気かい？ 徹さんをあいつらの前に、はいどうぞって差し出す気になつたもんだ。帰ってきたら、お前さんをとっつかまえて、一言言つてやらにや、気がすまねえって思ってたんだぜ。ええ、あんな記事一つで、お宅ら何考えてんだ。ゲーリックおっさんも、翔虎に一発かましとけつて言つてたぞ」

翔虎ははやるフィルを手で制した。フィルも翔虎の視線が自分を通り抜けて、あの女性に行っているのに気付き、取り敢えず言葉を切った。

「先日は失礼しました。葛城さんに又お目にかかれるとは思いませんでした」

セイが微笑みながら、翔虎に優雅な動きで会釈をする。

「こちらこそ、霧島さんにはすっかりご心配かけてしまつて。今日も気を使つていただいて恐縮です」

翔虎はお辞儀の代わりに軽く敬礼した。直立不動のままでも無然としていたのは小早川だ。

「何しに来た」

漸く口を開いた小早川の刺々しい言葉に、事情を知らないファイル達が目を点にしている。連中はこんな口の聞き方をする小早川を想像したこともないはずだ。何度も言うが小早川の声はとびきり低いのだ。こうやって凄まじくと背骨がきしむような気さえする。だが、女の方は全く怯んでいないようだった。

「文句を言う前に挨拶ぐらいできんのか」

小早川に対して彼女は見事なくらいに豹変した。それですこし頭が冷えたのか、小早川はむっとりとした表情のままではあったが、何時も通りの言葉使いに戻っていった。

「はい、申し訳ありませんでした。で、今更何の御用ですか」

「おい、それは酷いだろ」

翔虎が言いかけたとき、セイが動いた。小早川の前につかつかど進み出ると啞然としている面々を気にしていないかのように手を伸ばし、小早川の作業服の襟をつかむとぐつと引いた。体勢を崩して前のめりになった小早川の頭を捉えるが早い、かなり強引に口づけをした。その鮮やかな手際に、リンダはうつかりじつくりと見入ってしまう。柳なんぞは口をあぐりと開けてだらしない表情になっていた。小早川は最初抵抗している様だったが、諦めたのか腕を女の背中にまわしてしっかりと抱きしめた。人目も憚らず小早川は女の唇を十分に味わってからゆつくりと顔を離し、それから呆れたように言った。

「相変わらず、強引ねえ。敵わないわ。今、オレが強いでしょ」

「そう？　言葉に詰まったら実力行使。これしかないでしょ」

これが、彼らのコミュニケーションの方法なのだろうか。翔虎は些かならず呆れた。

「はいはい、理由も聞かずに逆上してごめんなさい。で、何の用で来たの」

完全に言葉遣いが逆だ。セイの声は高めで澄んでいるので、その違和感たるや完全にバリトンの小早川のオカマ言葉に匹敵する。フイルが大胆にも話しかける。

「あの、状況がよくわからんのだが、その、葛城さんは徹さんの」
最後まで言えずにもごもと口の中に言葉を飲み込んだフィルに、
小早川が紹介するように葛城の肩を抱いて見せた。

「変な所見せちゃってごめんなさい。これは私のパートナーのセレ
ンシイ」

「パートナー？」

「準配偶者」

そう紹介されると、まるで別人の趣でからセイはにっこりとフィ
ル達に微笑んだ。

「いつも小早川がお世話になってます」

柳は思った。先ほどの翔虎への微笑みといい、彼女は小早川に対
するときだけまるで別人だ。どちらが本性か知らないが、これが好
みなのだとしたら、小早川も相当歪んでいる。

小早川が紹介は済んだとばかりに、荒っぽく彼女を肩を掴み、再
び自分の方に向かせて問いつめるように続けた。

「それで、話をはぐらかさないでね、セイ。何故来たの」

セイは頭を振った。

「ここであなたを見捨てたら、一生後悔すると思ったから……。も
う、棺桶と悔恨をかみしめながら生きるのは厭。あの子達も、私が
そうすることを許してくれたから、来た。それだけ」

小早川はいつの間にか手を緩やかに彼女に回して、優しい抱擁に
変えていた。

「あなたの思いやりを踏みにじりたくはなかったし、冷静に損得勘
定したら愚かなこととも分かっている。でも、今度は自分に正直で
いたかった」

小早川は仕方なさそうに微笑むと、改めて軽く彼女に接吻した。
翔虎は堪らないほどの嬉しさがこみあげてくるのを、喜んで噛みし
めた。想像通り今の二人は、ごく自然に寄り添っているのが似合う。
前に見せて貰ったあの写真の時よりずっと。

「これは驚いた。得体の知れないバケモンと承知で付き合う女が居るとは思わなかったな」

毒のある言葉と共に磯貝が其処にいた。翔虎やフィルが何か言おうとする前に、彼女はあろう事かにつこりと満面に微笑みをたたえて頷いた。

「趣味の悪さには自信がありますのよ」

「セイ、それじゃフォローになってないわ」

小早川の抗議に彼女はこころと笑った。

「事実じゃないか。少しは冷静に自分を見てみるんだな」

それから磯貝に向かって胸を張ってみせた。

「女にとって男なんて生き物は、所詮理解の外のバケモンですわ。

おなじバケモンなら見栄えと体で選んでも悪くないでしょう」

翔虎は一瞬目眩がした。この人は確かにリンダより間違いなく年季が入っている。

「セイ、それじゃマジに体だけの男みたいじゃない」

「私にはそれだけで充分よ。実際そうなんだし」

磯貝も呆れて毒舌が出ないようだ。その時、また新手が通りかかって、素っ頓狂に裏返った声をあげた。

「か、葛城教官ー？」

声の主は機関室から出ていった磯貝を探しに来た新人大希だった。傍らに何処で落ち合ったのか、備品の残量チェックに保管庫に行っていたジエイもいた。

「五度超過。ちよつと驚き過ぎだ」

この反応。大希にはなにかすごく懐かしく感じられた。

「違いますよ。本当に驚いたんですってば」

と言った大希の言葉をジエイが保証した。

「本当ですよ。俺なんか最近こいつの感情レベルについてけませんもの」

「へえ、実際に人にふれると、学習効果絶大ね。ジエイも随分『自然』じゃない」

一瞬、ジェイは小早川の言ったかりそめの樂園という言葉を出していた。こうやって葛城に「良い」とか「拙い」とかを保証して貰うことは、絶対の安心だったのだ。自分はこの人に初期教育をして貰って、多分、確かに幸運だったのだ。

「教官に誉められたん、大希と違って初めてかもしれないですよ」

葛城は微笑んだ。

「嘘をつくな、嘘を。私が何回「誉めて」何回「貶した」か位、まだ消去してないだろう。大希なら怪しいもんだがな」

読まれてるわ……。そんな風に受け取れる顔つきで大希と顔を見合わせているジェイに柳は驚いていた。彼らの表情が見える気がしたのは、初めてかもしれない。

大希が、葛城に聞く。

「でも、一体どうして此処にいらっしゃるんですか」

葛城は背の高い大希を見上げるようにして、傍らの小早川を親指でさし示した。

「小早川から聞いてない？これ、私のなの」

「これって、その言い方……セイ、あんまりだわ」

翔虎は頭が痛くなりそうだった。小早川がこれ以上口を挟むと余計に事態が混乱しそうだ。その証拠に磯貝がますます苦虫をかみ砕いて味わっているような顔になっている。磯貝はどうやら葛城のよな女も大嫌いらしい。翔虎だってあの柔らかい話し方の穏やかな彼女の方が断然良い。あれが単に猫を被っているだけだったとしても。

「あら、リヤドさん。それに洞口さんも……。懐かしいわ。ご無沙汰しております」

更に雰囲気を混乱させるかのように、シェーネと洞口が廊下を歩いてくるのが見えた。ハッチ前が千客万来だ。只でさえ狭いところなのに。

「お久しぶりです。お元気そうですね」

と、シェーネ。洞口もにつこりとしている。

「いやあ、何時までもお若いですね。こっちは皺も白髪も増えているのに、えらい違いだ」

クスクスと葛城が笑う。

「私もすっかり老けましたわ。証拠に、若いって言って下さるのが何より嬉しいですよ」

この爺婆は、状況が分かってないのか。翔虎は叫びたくなった。

小早川が翔虎の肩をポンと叩いて、意味ありげに頷いてみせる。その目が（私の気持ちも分かるでしょ）と言っている。大希が小早川の方に近寄っていった。

「小早川さんと葛城教官がお知り合いだったなんて、本当に驚きましたよ」

「でしょうね。だから、本船入船後四十八時間は船外に出られないって言う初歩的な事も知らないのよ。まったく翔虎ちゃんが気付かなかったらどうする気だったのかしらね。丸二日ボケツとしてるつもりだったの」

かなり嫌味じみた大きめの声で小早川が答えたのに、葛城は驚いたようだった。

「えっ、そうなの。私も随分間抜けね。ちゃんと調べればよかった」シェーネ達と話している勢いで、柔らかな言葉遣いになっている。「電話の一本も寄せば済むでしょう」

「直接通話は回線混雑で繋がらなかった。メールも出した。無視したのはそっちじゃない」

小早川は、ちょっと吃驚してたようだった。

「メールなんて、知らないわ」

「知らない？」
拍子抜けしたようなセイに、小早川の力も抜けた。小早川はすまなさそうに、語調を変えて言った。

「多分凄いメールだったから、埋もれちゃったんだわ。マスコミなら兎も角、聞いたこともない人からも山ほど来てて、真剣に発信人

なんてチェックしなかったのよ。それで怒ってた？」

葛城は首を振った。

「今度だけは、傍に居て支えてあげたかった。あなたの性格は知ってる。無視するなら、ここで捕まえるしかないし、だったら二日だって三日だって粘るわよ。そっちもこつちのことは承知でしょ」

柳が翔虎の袖を引いて、ボソツと呟いた。

「これは、日本語で言うところの、『会いたかったわ、貴方が厭なら私が行きます。いくらでも待てるわ。待つのは馴れてますもの』っていう、メロドラマの決め台詞と解釈して宜しいんでしょうか」

翔虎は、苦笑しつつ同意した。

「柳、お前さんの場を平気で混ぜっ返す様な、天然ボケと断じるには些か芸術的に過ぎる表現には、かなり誤謬も多いが、小早川家の場合はそれで正解みたいだな」

珍しく心もち赤面して絶句している小早川を見れば、間違いなく彼にとつては殺し文句だったらしいと見当が付く。いつもの様に柳と翔虎の漫才に、気の利いた合いの手を入れることすら思いつかないようだ。

唐突にきびすを返して、通路をさっさと歩き出しかけて、それから忘れ物をしたとでも言うように戻ってくると、葛城の腕をとってそそくさと歩き出す。

「検査の採血するから、いつものように全員居間に集合しててね。フィル、悪いけど検査始めといて」

自分たちへの誰に向かつてでもなく言い捨てると、セイを連行しながら廊下を歩き去っていく。

「セイは私の部屋で待ってて。案内するわ」

そんな声が聞こえて、いきなり、柳が堰を切ったように笑い出した。

「可笑しい。修理屋が照れてるよ。こりゃ、滅多にない見物でしたねえ」

操船室にいても、別にすることがあるわけじゃない。柳は、椅子に逆に腰掛けて、背もたれに抱きついた。

「あー、ヤナちゃん、寂しい」

隣で、航海日誌を広げていたシェーネが吹き出す。柳は無然としたようにシェーネを見る。

「年寄りには、油が落ちてて良いですよええ。僕ちゃんなんか、若いから煩惱の虜よ」

シェーネの肩が、可笑しくて堪らないと言うように震えた。検疫班のフィルが血液や尿を採取して、簡単な健康診査をして帰るやいなや、小早川は部屋にしけ込んでしまった。狭い部屋で、あの葛城と何をしてるかなんて、想像するのも馬鹿らしい。連中に刺激されたのか、翔虎とリンダまで何となく盛り上がっている。あの二人は、今時の若者にしちゃ珍しく清いお付き合い。リンダの堅物の所為で、だっただけなのだが、一線を越えるのも時間の問題らしい。

「ねえ、新人なんて追いだしちまって、若い女の子沢山入れましょうよ。この際、美人で優しくなきゃなんて、贅沢言いません」

まんざら冗談ばかりでも無さそうに言う。

「手近なところで済ませようなんぞ、無精なんだよ。柳って狼が居るから、若い子は配属させないように、人事の岡崎さん当たりに釘刺しとくか」

「そんな殺生な。今の生活の何処に、出会いがあるって言うの。船長がリンダで良いってのも、わかりますよ。若い船乗りなんて、絶対に飢えてるもん」

「おいおい、リンダがお前さんの趣味じゃないのは分かるが、翔虎はリンダでいいんじゃないかって、あれが良いんだよ」

ふっと、柳が笑った。

「知ってますよお」

シェーネも相好を崩した。

「知ってましたか」

モニターは相変わらず、D-9埠頭とはとても思えない光景を写している。なにか、作り事めいていて、柳には現実感が乏しい。小早川が、松姫の段取りした記者会見とやらで、あの全てを話すのだろうか。それとも、やはり、話せないのだろうか。どう考えても、小早川の現状は逼迫している。

そのときに彼が真実を話せたところで、彼らは満足するだろうか。罪を償えと、病院という神聖な場所を爆破した罪を償えと……そう迫るのではないだろうか。病院爆破。やはり、その響きはおぞましい罪のにおいがする。

あの人、四十を越えてるとは俄に信じがたい、あの人を抱きしめることで、小早川がしばしの安らぎに浸れるというなら、構わないから好きにやってくれと、思わないでもないのだが、翔虎とリンダまで便乗してくつつく事はないじゃないか。と愚痴りたくもなってくる。

物見高い人は、罪を犯したことで、彼を断罪することを当然の権利と思うのだろうか。小早川はそう予測したからこそ、自らを裁きに行こうとしたときに、彼を愛する者達から決別しようとしたウォード、あの人、そして、柳の知らない小早川の子供達から。誰かが、何も知らない、小早川の笑顔の一つも知らない何ものかが、あの記事造って、……そりゃあ、事実も含まれていたらうさ。だが、憶測の域を出ない、勝手な小早川を捏造して、人前に引きずり出したのだ。

水臭いことに、小早川は自分たちからも、静かに消えようとしていたのに、（そうになったらそれで、又腹も立つが）有無を言わさずさらし者にして、食いちらかす気なのだ。厭な商売だねえ。

その時、モニターを見ていた柳の目に、五、六台の装甲カート……小さい極東アジア国軍旗を翻したそれが、群がる取材陣を断固として排斥して、曙丸の昇降口手前で止まるのが見えた。装甲カートはまるで曙丸の出入り口を封鎖するような形になっていた。わらわらとわき出た、銃を携帯している軍服姿の男達が、まるで強盗が立てこもっている建物に対峙しているともいうように、整列する。柳がシェーネの注意をモニターに向ける。シェーネもその様子を見て、愕然としているようだ。

悠然と一番最後に、巨大で一際頑健そうなのと、対照的にひよろつと背の高い軍人がカートから出てくると、彼らはかつちりした軍隊式の敬礼姿勢をとった。自分たちが見ていることを百も承知しているといった様子だ。彼らに押し切られた形の塊から、フラッシュの光りが溢れる。ますます現実感が薄くなる。冗談みたいだ。ひよろつとした方が、携帯を取り出した。そして、その直後、通信端末に電話の呼び出し音が、けたたましく鳴り響いた。

柳とシェーネの会話に加わることなく、ただ黙って座っていた早乙女が、どことなくぎこちない動作で、操作パネルに手を伸ばし、通話を受けた。

「霧島運輸所属、曙丸です。ご用件をどうぞ」

当然だが直通の電話なら、雑多な手続きは要らない。早乙女は黙りこくって話を聞いていた。柳がじれて、スピーカーをONにするよう言いかけたとき、早乙女が振り返ってすがのような目で柳に助けを求めた。

「極東アジア国所属、宇宙軍三佐の榊原という人からです。戦犯裁判委員会の発行した、小早川さんの身柄拘束命令書を持っているそうです。船長に小早川さんの引き渡しを求めるから、ハッチを開けるように要求してます、どうしましょう」

柳は、力一杯拳を握りしめていた。そしておもむろに椅子から降

りると、床に拳を叩きつけた。操船コントロールパネルを殴りつけずに、怒りのはけ口を床に求めたのは、柳の精一杯の理性だった。柳が怒鳴り声をあげた。

「どうしようだって、翔虎に聞いてこい。俺が知るか！」

シェーネがいつもと同じ足どりで通信端末に歩み寄り、早乙女のヘッドセットを取り上げた。

「曙丸の航海長です。船長に取り次ぎますので、暫くお待ち下さい」ヘッドセットを頭に乘せずに、マイクに一方的に話しかけたところを見ると、シェーネも相当頭に来ていて、向こうの声を聞きたくなかないのだろう。

こんな、こんなのって、無いんじゃないか。柳は叫びたかった。

第十四章 溜息

リンダは、翔虎の腕に抱かれていた。自分から求めることは怖かった。彼女の知っているセックスは、苦痛以外の何ものでもない。僅かな金で売り渡した代償とでも言うように、恐怖と苦痛と恥辱のみ残す……それしか、知らない。金さえも、チャイルドマフィアの仕切屋に巻き上げられる。あの時の光景が頭をよぎっただけで、吐き気がしてくる。だから前に翔虎が彼女を求めたとき、リンダは殆ど恐慌状態に陥って烈しく拒否するしかなかった。

何故と悲しそうに問う男に、リンダは全てをぶちまけた。嫌われるならそれで良かった。打ち明け話と言ったしんみりした状況ではなかった。これでもか、これでもか、と言うように自分のしてきた事を、己の罪と穢れを、話し尽くさずにはいらなかった。

あの時、小早川をただ抱きしめて受け入れたように、自分の時も翔虎はリンダをかき抱くだけで、それを受け止めてくれた。

君の気持ちの整理がつくまで、待つよ。

それ以来、遠慮がちな抱擁と、柔らかな接吻以上のことを求めようとしなかった。

待つよ、そう言いながら、翔虎が驚異的な自制心を発揮したことをリンダは知っている。密着した体の向こうの男が、猛っているのを感じていた。子供が抱かれる心地よさを際限なく求めるように、翔虎にすぎりながら、彼の男として当然の欲求を見下してさえたのかもしれない。彼が自分を愛しているのなら、本当に大切に思うなら、そんな欲望は抑えられて当然と、そんな虫の良い考えもあった。

あの時、小早川の唇を強引に奪った葛城は、鮮やかだった。情け無くもがいていた小早川が、途中から逆に彼女を抱きすくめて深い

くちづけに変えたときの、あの人の表情は女の自分でさえ、ぞくつと来るくらい艶めかしかった。愛する男に抱かれる喜びを知り尽くしている、女の顔というものを、リンダは初めてみた。そして、勝手この上ないことに、嫉妬した。

あの女は小早川の優しい抱擁に当然のように包まれて、小早川をまるで子供のようにあしらいながら、それでいて、だれよりも幸せにしているのだ。

上気してはにかむ小早川。慌てて、失敗しかける小早川。そんな男は知らない。知らないが、彼はリンダの知っているどんな小早川より生身の人間の可愛さがあつた。今の彼の状況を思えば、そして、あの人達の過去を知れば、なぜ、そんな風に抱き合えるのか理解できない。でも、小早川は微笑んでいた。そして、あの人は、綺麗だった。

小早川がさつさとあの人の所に行つてから、どことなく呆気にとられたと言つた感じで、残された面々は暫く所在なさにしていた。だが、磯貝がむつつりと部屋に戻つていったのを合図に、それぞれが部屋や持ち場に散つていった。リンダも翔虎と何となく連れ立って部屋に向かった。リンダの個室の前で、いつものように軽い接吻だけで去ろうとする翔虎の腕を引き留めたとき、翔虎は不思議そうに自分を見た。この脳天気を自称する男は、肝心なところで女の気持ちに鈍すぎる。折角、人がその気になつてるのに、かなり間拔けた反応だった。

「お茶でも飲んでいかない？」

出た言葉が、色気と無縁のいつものものだったのは、我ながら情け無いが、こつちの気持ちを全然察していない翔虎に腹も立つ。

「いいけど、その、今日はマズい」

リンダは、危うく切れかけた。そんな、女じゃあるまいし、何処の男に駄目な日があるって言うの。とリンダが言おうとしたときに、

翔虎は彼女から視線を逸らして白状した。

「あんなとこ、みせつけられて、ちょっと逆上してるんだ」

リンドは可笑しくなった。あの人達の色気にあてられたのは、自分だけじゃなかったのだ。視線を逸らした翔虎を、自分に向かせる
と、彼女はささやいた。

「私も……」

自分を驚きと、溢れてくる喜びの表情で見つめる翔虎。視線の先
で、部屋に戻ろうと廊下を歩いてきた柳が、反転して立ち去ってい
くのが見えた。何か、嬉しいような可笑しいような、照れくさいよ
うな……浮き立つ気分だった。

翔虎は、性急ではなかった。ゆっくりと確かめるように、考えよ
うによつては些か年寄り臭く、リンドを焦らした。自分の事は打ち
明けたが、そう言えば翔虎のことは問いただしていなかったつけ。
リンドは今更ながらに後悔した。

此奴、馴れてる……。

自分に過去があるように、翔虎にも二十八年分の経験があるのだ。
すっかり忘れていたが、そういえば宇宙航海専門大学のアストロノ
ーツ候補生は、無条件にもてるのだ。しかも霧島というオマケまで
付いている。

今度、絶対に聞き出してやる。

翔虎を感じながら、一方でリンドはそんな色気とはほど遠いこと
を考えていた。実際に翔虎が迫ってきたら、前のように恐慌状態に
填ってしまう心配もしていたのだが、上手く焦らされることで、う
っかりその気に火が点いてしまった。

鬱陶しいくらい時間をかけて、漸く翔虎がリンドの素肌を拝も
うとしたとき、携帯の呼び出し音が鳴った。

一瞬、リンドは逆上しかけた。翔虎が携帯なんか持ってるのがい
けない。

翔虎も愕然とした。やっと此処まで漕ぎ着けたのに、何てこった。

しつこい呼び出し音を聞きながら、暫く止まるのを待っていたが、どうやら相手は自分が出るまで止める気はないようだ。翔虎はあからさまに慥然としているリンダにもう一度唇を重ねてから、渋々電話に出た。

「はい、霧島。誰が何の用だ」

相手が誰だか知らないが、下らない用件だったら只じゃおかんぞ。翔虎はそう思った。

「翔虎か、取り込み中悪いな」

シェーネの声だった。馬鹿野郎、取り込み中だって分かっているなら電話なんかするな。

「今な、ハツチ前に極東アジア軍の軍人さん達が揃ってお出ました。戦犯裁判委員会の発行した、徹さんの身柄拘束書を持ってるそうだ。船長に徹さんの引き渡しを要求するんだそうです」

「何だって！」

翔虎は一瞬で熱が冷めてしまった。確かに、小早川の状況は最悪だ。だが、葛城が来て、小早川とあんな風で、すっかり自分も現実を取り逃していたが、事態は何も改善されていないのだ。松姫のお膳立てした記者会見とやらが一番身近に迫った問題で、それまではたった四十八時間に満たないが、静かな時間を過ごせるはずだった。甘かった。軍が、彼らがやっていたことが悪事なら、小早川がそんな場に出るのを許すはずがなかったのだ。

姉さんも俺も、所詮は善人だ。小早川の罪にすっかり騙されて、本当の親玉を忘れてたなんて、随分間拔けた。

「翔虎、何があったの」

彼の顔色が激変したのを見て取って、リンダが問いかける。

「お客さんだよ。徹さんを欲しがってるな」

「直ぐ行く」

翔虎は、電話に怒鳴った。

操船室の中央モニターには、彼らの隙間を何ものも通れないことを示威するように軍人達が立っている。中央の巨漢と、彼の副官とおぼしきのつぼ。あれが指揮官だろう。のつぼが携帯電話を耳にあてている。いきなり大声で怒鳴りつけて肝の一つも冷やしてやりたいう誘惑があつたが、翔虎はパネルを操作してスピーカーを入れると、マイクを取って静かに言った。

「船長の霧島です。本船入港後四十八時間は外部との接触を禁止されています。ご用件は承りますが、今暫くお待ち願いたい」

僅かに嘲るような笑いが聞こえた。

「接触禁止ですか。その割に、貴船には外部の人が入ったみたいですね。検疫班の人だなんて言い訳は無用ですよ。彼らが三人でチームという知識くらい有りますのでね。帰りはどうやらご同行じゃなかったようですし。それで我々も待つのを止めた次第でしてね」
嫌味な口調にカツとなりたいのを押さえ込んで、翔虎は頷いた。

「あれは、我々の手落ちです四十八時間。お待ち下さい」

向こうで、もう一度やけに明るい、気に障る笑い声がした。

「既に、四十五時間をきっていますねえ。我々が単純計算も出来ないと思われるのは心外ですねえ」

翔虎は拳を通信操作パネルに叩きつけようとして、あやうく思いとどまった。

「曙丸入港時間、十七時四十二分。これはサンガのオペレーションセンターに確認済みである。従って、明後日十七時四十二分きっかりに引き渡しを実行されたい。これを以って我々の誠意は十分に分かっていることでしょう。それまでここでお付き合いますがお気遣いは無用に願いたい」

翔虎は通話をぶったぎって、通話のとぎれたマイクに向かって怒鳴りつけた。

「てめえらに誰が気なんか使つか！」

モニターの前で、のっぽが白々しく電話にキスして手を振るのが分かった。こつちが見ているのを百も承知で、何て奴だ。軍人の態度とはとても思えない。

翔虎はマイクをモニターに投げつけかけたが、それも何とか思いとどまり、モニターの電源を切った。あいつらが四十五時間、たちんぼしてるなら、好きにしる。

柳は落ち着かせようと翔虎の肩に手を置いた。不思議と他人の逆上は自分を鎮める効果がある。さっきは自分が操船パネルに物理衝撃を加えかけたが、翔虎がしているのを見ると、全くの馬鹿にみえるから不思議だ。

「徹さんに……」

聞きかけた柳に、シェーネがかぶりを振って見せた。翔虎も同意を示して頷いた。知らせて、どうする。何が出来るのだ。何もどうもできないなら、僅かな時間でも憂いから少し遠ざけておいてあげたい。自分とリンダはこの先があるが、あの人達にはもう無いのかもしれない。そう思っ、翔虎は苦笑った。自分たちにとって未来は無いのかもしれない。だれでも生を受けた瞬間から、いつ訪れるか分からない死がともに有るのだと、爺さんは言っていたじゃないか。でも、出来るなら少しでも先に、見えない所に居て欲しい。誰でも今日の明日を疑わない。ずっと続くと思っている。少なくとも老いと目に見える病に冒されたものだけが、死を身近に感じている。あれは何処にでも潜んでいるけれど、いつもそれを意識することとは無理だ。

ノックが聞こえたとき、翔虎が戻ってきたのだと思った。リンドは急いでドアに駆け寄って、モニターも見ずに開けた。だが、其処に立っていたのは……。

「徹さん、どうしたの」

リンドは驚いた。

「ご免、リンドちゃん、翔虎ちゃん一緒？」

何だ、翔虎に用か。そう思って、リンドは首を振った。

「ふふ、良かった。又何言われるか分かんないしね。サイズが関係ないような服貸して貰えない？」

リンドは咄嗟に素っ頓狂な声をあげてしまった。

「女装趣味であるの。変態」

小早川は呆れたように一瞬天を仰いで、それから言いにくそうに続けた。

「ちよつとエキサイトしちゃって、セイの服お釈迦にしちゃったのよ、助けると思って、お願い」

すこし考えて込んで漸く状況が分かり、リンドは赤面した。

「あ、あのね。知ってる？……夫婦間でもレイプは犯罪よ」

「はい、充分承知してます。反省もしてます」

あつさりいう小早川を信用できないという目で睨んで、それから、仕方ないといった風に頷いて、リンドは小早川を部屋に招き入れた。そう言えば、この部屋に小早川が入るのは初めてかもしれない。

リンドは備え付けのクローゼットを開けて、自分の在庫を検討する。あの人は太ってはいない様だったけど、背はそんなに無かったよね。

「で、そういうのがいつものスタイルって訳じゃないんでしょ」

リンドが問いつめるように言うのに、小早川は苦笑した。

「さあ、どうだったかしら」

その応えに呆れながら、彼女は自分でも割と気に入っている綿二ツトのワンピースを選び出した。黒が似合う人だから、海老茶もい

けるに違いない。

「ねえ、お礼もらう代わりに一つ聞いて良いかな」

「何、応えられることなら良いんだけど」

おずおずと彼女は切り出した。

「……その、翔虎が付き合ってた人って、知ってる？」

小早川は、思わず破顔した。

「何人かはね。大丈夫、リンダちゃんが一番いい女だから」

リンダはちよつと肩を竦めて、それから溜息をついた。

「そうか。矢つ張りね。ま、人のこと責められるような立場じゃないから仕方ないけど、はつきり言われると、ちよつとショックかも」

小早川が手を伸ばしてリンダの肩を叩いた。

「翔虎ちゃんいい男よね。体も大したもんだし、服のセンスも悪くない。おまけに霧島の御曹司で、バリバリのアストロノーツ。外宇宙が仕事場なんて、元気で留守が理想のお約束もあるし、釣り書きとしちや上物でしょう。でも、彼の本当の価値がそんな所じゃないの、リンダちゃんは知ってるわよね。あれでも翔虎ちゃん結構女に泣かされてきてるのよ。ま、女の方は捨てられたと恨んでるかもしれないけどね。翔虎ちゃんもね、打算の上に笑顔を塗り込めた女の媚びに騙され続けるくらい、頭の造りがお粗末だったら良かったんだけどねえ」

小早川はリンダの手からたたまれた服を受け取ると、軽く頭を下げた。

「多分、翔虎ちゃんの包み紙以外を分かってあげられたのは、リンダちゃんが初めてだと思うわよ。そうじゃなきゃ、あの堅物が簡単に女を乗り物と勘違いする訳無いでしょ」

小粋にウィンクした小早川の表情に、リンダは微笑みをこぼした。
「人の気持ちは色々変わるけど、リンダちゃんが翔虎ちゃんの入れ物だけ欲しがるように成っちゃって、彼を失望させる方だけにだけは変わらないであげて欲しいわ」

リンダは頭を傾けてから、小さく何度も頷いた。

「なんか、ほつとしちゃった。徹さんに聞いて良かった。翔虎が馬鹿正直に知ってる女の数だけ教えて何かくれたりしたら、それこそ血を見たわよ」

「ははは、やりかねないわねえ」

大きく笑った小早川は、リンダの部屋から出ていこうと踵をめぐらせかけた。

リンダが何かまだ聞きたそうにしているのに気付き、中途半端な体勢で彼女を見返した。質問を促すような視線に甘えてリンダは口を開いた。

「徹さんって、何でそう人を言いくるめるのが上手いのかしら」

「あらら、それって誉めてくれてるの。まあね、もとの仕事がアレだから、つい自分の私見で、えらそうに講釈垂れちゃう癖があるのかもね」

「もとの仕事か。徹さんて基本的に頭が良いの？ それとも勉強した？」

小早川は顎に手を添えて、ちょっと考える振りをした。

「そうね、勉強もしたわねえ。でもま、それが頭に入ったんだから、基も良いのかも」

「いうわね。でも、そうか、……やっぱり勉強したのね」

「一時期は鬼のようにやったわよ。セイの愛した剣崎よりいい男に成りたいって不純な動機だったけど。でもね、途中でそんな事はどうでも良くなったわ。知ることの面白さの方に魅せられちゃった。

何千年も前から、もしかしたら何万年も前に自分たちを人と認識してから、技術は進んで、生活は便利になったけど、人が考えることはそんなに進歩してないって思ったわ。喜びたい、楽しみたい、幸せになりたい。でも、上手く行かなくて不満で、恨みがましく、愚かに失敗を繰り返す。そんな者達を救うべく紬出された人を深く頷かせる言葉は、それが何千年前の人のものでも、心に響くわ。不思議よ」

小早川はクスリと笑った。

「私は無責任な悪人だから、理性は宗教の教える救いなど、絵に描いた餅と断じる一方で、実際の所、宗教に救われてるのよね。私の葬式はひとつ、南無阿弥陀仏　で頼むわ」

またこれだ。リンダは荒々しく言い捨てた。

「葬式の話なんて、冗談でも止してよね。大体徹さんの何処が仏教徒よ」

ふと一瞬、小早川は目を閉じて、それから小難しい言葉を立て板に水と並べた。

「人を殺すも他力、殺さぬも他力、自力も他力、煩惱、妄念、愛欲、名利、精神、肉体、修行も精進も無意味。仏魔一如。……一人にても殺すべき業縁なきによりて、害さざるなり。わが心のよくて殺さぬにあらず。また、害せじとおもふとも百人・千人を殺すこともあるべしと仰せ候ひしかば。……なんちゃって。あはは、大乘仏教も悪くないわよ」

リンダは怒るべきか、一緒に笑うべきか判断に苦しんだ。全くこの男は本気と冗談の境目が曖昧で困る。小難しい引用を武器に、人を煙に巻く。

「まったく、相変わらずねえ」

取り敢えず、許してあげることにした。だが、溜息が漏れるのは止められなかった。小早川がいう葬式はきわどい冗談にしても、彼が裁判で無実を勝ち取るのは困難だろう。終身刑までは免れたとして、何年を彼が贖罪に当てなければならぬのだろうか。人の将来ほどあてにならないものはない。人の死が身近だったリンダには、十年二十年単位の未来を、当然自分に与えられている時間だと無邪気に信じられない。

（二度と逢えないかもしれないんだ……）

そう、言葉にして考えたとき、リンダは堪らなく小早川が愛しく

なった。二度と逢えないと思い定めたときに、愛が満ちる……小早川の言葉が、その瞬間に何となく分かった気がした。この男は十分に苦しんできた。それなのにこの先の余生を、おそらく長きわたつて、償いに費やすことを当然と潔く覚悟している。

「キスして良い？」

今度は唐突なリンダの言葉に、小早川が一寸面食らっているようだった。

「良いじゃない、ケチケチしなくても。第一減るもんじゃないですよ。服のお礼に一つ頼むわ」

「翔虎ちゃんの女の話だけじゃ足りないの？お礼の二重取りなんて強張りね」

だが、小早川はふつと溜息混じりに笑った。

「まあ、良いわ。翔虎ちゃんと比べてどうのこうのなんて評価は勘弁してよね。其処、座って」

小早川が手近にあつたベッドを指さした。

「すわるの？」

「自分よりマッチョな女にされるのが好きな訳無いでしょうが」

驚いた。小早川が体格のことでコンプレックスを抱いていたとはこみあげてくる笑いを抑えながら、リンダはとりあえず腰掛けてみた。が、笑いの衝動は収まらない。

「あのね、冗談なのは分かってるけど、其処まで馬鹿にするもんじやなくてよ」

ふつと屈んできた小早川の深くはないが、しつとりと絡みつくような接吻が、リンダの笑いごと包み込んだ。微かに煙草のにおいがした。

ほんの一筋だけ、涙の粒が頬を伝った。

「やあね、女ってほんとによく分かんないわ」

リンダの涙を気障にキスで拭って、小早川も今日何度目かの溜息をついた。

ノックもせずにドアを開けた翔虎は、その光景に一瞬我が目を疑った。何で此処に小早川が、というのもそうだが、リンダと？ だが、取り敢えず聞いてみよう。

「失礼ですが、お前さん達……何してるの」

その声に小早川が姿勢を正した。

「あら、翔虎ちゃん。ごめんね。ちょっと代金の支払いしてたの」
「代金……って、何の」

自然、言葉遣いが剣呑になる。

「ははは、聞かないで。んじゃ、ご馳走様でした」

小早川は、手を合わせてリンダを拝むと、リンダの服を翔虎の視線から上手く隠すようにして遁走した。

二人は呆れて小早川を見送るしかなかった。故に翔虎は

「糞、逃げたか。じゃ、リンダ、君が説明してくれるかな」

と、恋人に詰め寄った。翔虎への言い訳より先に、リンダはこの期に及んで服を隠す小早川の姑息さに、うっかり笑ってしまった。どうせばれるのに。

「君達ね、その態度はないんじゃない。徹さんもリンダに手出ししないって言ってた癖に油断も隙もない」

「なにそれ、ちょっと気に入らないわよ。その科白」

責めて良い立場の筈が、微妙に変わってきたので、翔虎は仕方なく追究するのを諦めた。だが、リンダの方が近づいてきて、翔虎の肩に額を押し付けた。

「徹さんとお別れかもしれないって思ったら、なんか、堪らなくって。うっかりキスしたくなっちゃったの。それだけよ。それより、徹さんから聞いちゃったわよ。随分女性のご経験、豊かだそうで」
「げ、あの恩知らず」

口走ってしまった。だが、もしリンダが鎌をかけてきただけなのだとしたら、しっかり肯定してしまったことになる。そう気付いて、翔虎は天を仰いだ。墓穴を掘るってのはこの事だ。おそろおそろ、様子を窺う。

「……怒ってますか」

「そうね、軽いキスくらいで目くじら立てる気なら、怒っちゃおうかな」

そう冗談めかして言ったリンダの本心を、翔虎はしばらく計れなかった。だが、ふとリンダが泣いているのに気付き、あまりに意表をつく展開に驚いた。

「……徹さんと、……二度と、……あえない……かもしれないなんて、信じられない」

切れ切れにそれだけ言うと、リンダは翔虎にしがみついて慟哭した。受け止めて、翔虎も愕然とした。軍に拘束されるということは、小早川はこのままサンガを離れて、極東アジア本国へ送致されることになるだろう。そして戦犯裁判委員会がどんな裁きを彼に下すのだろう。自分の仕事を併せて考えれば、この先、小早川に簡単に会えるとは確かに思えない。

リンダを抱きしめながら、翔虎は必死に思い込もうとしていた。

最後じゃない。又、会える。

洞口は事務室で忙しく書類を捌いていた。隣に陣取ったジェイがものすごい速度でタイプライターを打っている。複写書類を作るためにこの業界で生き残っているレトロな機械だが、あっさりと使いこなしている。なめらかに動く指先だけでなく、存在そのものが見事に生きている。この人工皮膚の下には、機械が入っていて、彼をこんな風に制御しているのだと、知っていてさえ信じ難い。

「ジェイ、後どの位かかりそうだ」

ジェイはふと手を止め、少し考える様子をみせた。こんなたわいもない仕草が、ますます洞口を混乱させる。まるで、人だ。

「そうですね、こいつらはあと十五分もあれば、いけると思います」
そしてこの答え方だ。もっと機械的に断言するものだと思ってい

た。ジェイ自身はもしかしたら後何分何秒後に作業終了と分かっているのかもしれないが、決してそんな機械臭い反応はしない。飲み込みはやたらと良いが、こっちがすっかり間違っただけで説明しようものなら、その通りに間違ってくれること以外、人間の新人りと大差ない。何せ、小早川の後釜だ。この位物覚えが良くて丁度良いのかもしれない。

小早川が使っていた机の未処理の書類入れに、何枚か紙がまだ残っている。これもジェイにやらせてしまおうか、と、洞口が考えているところに、小早川が戻ってきた。

「小早川……。お前さん、どうして」

事務室に入るやいなや、煙草に火が入るのはいつもの如くだ。

「ああ、幾つかやり残してたじゃない。これは、ま、ジェイにでも頼むとして、磯貝さんと業務引継確認書にサインしとかないとね。引継って入っても実質何にもしてないけど、形は必要でしょ」

話しながら、キャビネットの中から白紙を取り出して、パソコンの中に入っている定型フォームを呼び出し、印刷を開始する。その早業に洞口は少し呆れた。引継書のフォームなんて滅多に使わないものを、よく探してもせずに見つけるものだ。

「ジェイ、タイプしまわないでね。こっちのも頼むわ」

小早川が書類入れごとジェイに投げる。全く、低重力とはいえ荒っぽいやり方だ。

「小早川さん、その、葛城教官とは、えっと」

洞口は苦笑した。全く此奴は人間くさい。確かに今の小早川は、一時でも長くあの人と居たいはずだ。そんな気持ちも察せる奴となら上手くやっていけるかもしれない。

「その教官ってのどうにかならない。もう教官なんて必要ないですよ」

その小早川の言葉に、ジェイは頷いた。

「そうします。でも、小早川さん、葛城さんと……。あの」

小早川が苦笑した。駆け出しの新人の知識レベルでは、人間の男女の事など性的レベルでしか計れていないだろうし、それを重点的に情報収集したのでなければ、実状など皆目見当が付かないはずだ。基本的に人間の性の話題は、避ける方が無難と教えられてきているはずだ。戦争以前、セクソイドなどと蔑称された、人間の愛玩用の新人なら兎も角、彼らが種の保存本能である生殖行動と理論上縁のない存在であることは確かでもある。好んで口にすることもないだろう。

但し、これも今の段階での話だ。人間から見たら永久に近い時間を生きられるにも係わらず、自治区では大希やジェイのような子供達を望んだのだ。個人として血肉を分けて子孫を残すことは、状況的にナンセンスだが、種として繁栄したいという欲望が彼らにそうさせたのなら、それは今彼らの意識になくても、そのうちに芽生えてくるのかもしれない。同じ種類のものに対する、無条件の同族意識が、即物的な接触を快感と感じる日が決してこないなどと、誰に言えるだろう。

「あのね、私は体力的には平均並の生き物なの。丸二日それだけなんて、冗談もほどほどにしてって事。それ、の説明しろなんて、まさか言わないでしょうね」

洞口が吹き出した。

「一発抜いたら、仕事を思い出したんだって、お前さんらしいよ」

「やあね、その言い方。思春期の若造向けにとつといてよ。抜く前も覚えてました」

洞口は腹を抱えんばかりにして笑った。

「そう、ぬけぬけと言うなよ」

「誤魔化したって無駄でしょうが。ジェイ、その鳩豆顔、どうにかしてよ」

見ると、たしかにジェイがどんな反応をして良いのか分からないと言った顔つきでいる。またしても洞口は笑いがこみあげてきた。

洞口のばか笑いにつられて、小早川も肩で笑いはじめた。ジェイ

は、しばらく二人の様子に怪訝そうな顔でいたが、訳もなく一緒に笑いたくなった。そして、ごく自然にそうした。

相変わらず、この男は穏やかに微笑んでいる。磯貝はそれだけで背中がざわついてくるのを感じた。この一見罪業などと無縁に思える男が、あの子を殺したのだ。直接手は下していないだろう。それに、戦争で爆弾を投下した者が、それによって死亡したいかなる顔も知らないように、此の男もおそらく娘のことなど知りはないのだ。現実を突きつけてやったら、この笑顔はどうなるのだろう。

見てやりたい。

人を馬鹿にしているかのような口調で、罵倒した自分の言葉をかわした、あの女と、この船の中で……。ふざけやがって。

磯貝は、だが、こらえた。この男は近い内に裁かれる。公の目の前で、全ての罪を明らかにして、おそらく極刑に近い裁断が下されるに違いない。あのまま、生命維持装置を外すことなく、十年生き延びたあの子を、留守がちな自分が愛し続けて居ただろうか。妻は、それでも幸せだったろうか。正直そんな疑いを消すこともできない。それを全てこの男の所為にして、自分が有る意味で楽になるのも、許せそうになかった。だから、黙る。

「磯貝さんにお教えする事など、何もありませんでしたが、一応形だけは必要ですので、持ってきました。業務引継完了と言うことで、宜しいでしょうか。もし、何か有るようでしたら、お伺いしますが」この男の微笑みは気に障る。何を考えているか、全く分からない。

しかし、強い男だ。それだけは認めざるを得まい。犯した罪から一度は逃げたかもしれないが、二度は逃げない。自分ならかりその微笑みも作れないだろう。そして、自分がどうして、こう冷たいのかを問いただすことさえしない。もし、この男が、自分の冷淡さ

を一言でも責めたら、その時こそ、あの子を殺したという事実を突きつけてやろうと、心に決めていた。だが、その機会は無さそうだ。「特には……」

最低限の言葉で済ませて、磯貝は引継書の後任者の欄にサインをした。事務机の前に座った小早川が、そのままで会釈をして、今度は前任者のところに名前を書く。

良い船だ。有り難う。

一言口に出せば、この男はきつと喜ぶはずだ。いい仕事をする機会士なら、船を誉められるのが、誰にとっても最上の讃辞と想っている。事実、曙丸は素晴らしいし、あの記事が出るまで、最後には心からのこの言葉を渡すつもりだった。

だが、磯貝は黙っていた。少しの間、小早川は磯貝の言葉を待つようにしていたが、そのまま何の反応も得られないのを知ると、只深く頭を下げた。

無言で、前任者が機関制御室を立ち去っていく後ろ姿を見送った。ドアが閉まって今一度一人になったとき、不覚にも磯貝の目頭が熱くなった。俯いて、指先で涙なんぞというものがこぼれないように押さえつけた。事実を何も知らないはずのあの男が黙って頭を下げたとき、娘の死を謝罪してくれたかのような錯覚が、磯貝を襲ったのだ。そして、それで、何故か充分だった。

操船室は当然誰も居ないはずだった。サンガについてしまえば彼らにすることは何もない。けれど今日は、シェーネと柳が居た。

「まだいらっしゃったんですか」

ウォードが写真を取りまくって、此処を後にしたように、自分も

もう一度心に焼き付けておきたかった。だから来たと感傷的に打ち明ける事もないだろう。シェーネには丁寧にそう言っ、柳の方には軽く手を挙げて挨拶を済ませた。

「ああ、お前さんは、葛城さんとのんびりしているや。何、食事なんかどうせ暖めるだけだ。自分たちで何とかするぞ」

小早川が笑った。

「私は食事のことなんか忘れてたのに」

「そうか、そりゃ済まなかったな。ま、どっちにしろ気になっただろっ」

「それもそうね」

小早川は、ふと、グレーに死んでいるメインモニターに自分の灰色の顔が映っているのに気付いた。

（ 剣崎 ）

一瞬そう思っ、……首を振った。やっぱり髪を切ったのは早まったわね。鏡にお化けを見ることはもう無いと思っただのに……。モノクロの自分は矢っ張り知らない男の顔をしている。この期に及んで縁起でもないもの見ちゃったわ。

「ねえ、何でメイン切っであるの。マスコミくらい映しとしても別に構わないわよ」

剣崎の顔を見てショックを受けた自分を誤魔化すために、小早川がそう言ったとき、柳の顔が凍り付いた。

「そうはいつでも、気持ちのいいもんじゃあるまい」

シェーネが取り繕うように言っただに、柳が慌てて同意するかのように頷く。小早川は、なんとなく気に入らなかつた。自分はモニターに妙なものが映る方がよっぽど気分が悪いのだ。それに、お調子者の柳が黙っているのがそもそもおかしい。

「メインが死んでる方が気持ち悪いわよ」

柳とシェーネが静止する暇もなく、小早川の手はモニターのスイッチを入れていた。

柳にしてみれば、小早川が黙ってモニターを睨んでいる時間は永遠に感じられるほど長かった。あのシーエネが、流石に辛そうに顔を背けたのが分かった。

「……ふん、こういう事ね」

最初にハッチを取り囲んだ人数の半分くらいが、今尚、出口を抑えて立っていた。残りの連中とあのデカとノツポの男達は、おそらく装甲カートの中で控えているのだろう。マスコミも相変わらず、最初より遠巻きになってはいるが、こちらを狙っていた。

柳は小早川がどんなに失望するかを心配したので、そのあっさりとした言い口に少し拍子抜けした。

「記者会見お流れかあ。また、嘘ついちゃったわね」

そう言っ、大きく溜息をついた小早川の背を見て、柳は思った。彼はとつくに絶望していたのだ。だから、いまさら何が来ようと乱れることはもう無いのだ。

「翔虎ちゃんが、検疫拘束時間だけ、猶予を勝ち取ってくれたなら、ま、そうさせて貰いましょうか。でも、ウォードと話す時間もこれじゃきつと、とれないわね」

だが、振り返った小早川の顔を見て、柳は自分の早合点に気付いた。己の過去を吐き出したときでさえ縁の無かった涙が、男の頬に滂沱としてあつた。

短くなつたところで纏れているのに変わらない前髪を掻き上げながら天を仰ぎ、それから目を一度堅く閉じて流れる涙を堰き止め、小早川は嘆息した。

「……あの子にだけは、……もう一度会いたかったわね」

そう言っ、口許に何とか笑みを湛え、何か言いたげに口を開きかけたが、首を僅かに振っただけで絶句した。そうして、低重力のためばかりでなくおぼつかない足取りで、部屋を出ていった小早川にかける言葉は柳には見つからなかった。そして多分シーエネにも。

酒が飲みたいな……。と、翔虎は思った。リンダをなだめて休ませてから、自室に戻る前に操船室に寄り、柳から外の事を小早川が気付いてしまったと聞かされた。その時、あの男が、泣いたのだという。

せめて後一日分だけでも、いや、もう数時間でも、静かな時をあげたかった。自分は全く無力だ。彼は信頼できる仕事仲間として、共にいて気持ちの良い友人として良く知った筈の男だった。それが何年も側にあったのに、何一つ知らないでいたことを突きつけられ、自分の不甲斐なさに腹立ちさえ覚える。

小早川はあの時、自分が彼のことをまるで知らないのだと言った。そして彼も自分のことを同じくらい知らない。そう、何も知らなかった。自分などは知らせるほどの過去も経験もない。自分は彼の信頼に足る何ものを一つも持ち得なかった……。それが悔しい。そして今も、何もできないのだ。あの驚異的な精神力を持った男が、耐えかねて落涙した時に、自分は何をしていた。これでは信頼などされるはずもない。

「俺、何も出来ませんでした。悔しいっすよ」
全く、卑怯だ。柳に先に泣かれては、悔し涙も出せないじゃないか。

「あんときの船長みたく、せめて抱きつくぐらいすりゃよかった」
どうせ、自分は抱きつくくらいしか出来ませんよ。

そう、自嘲気味に思った。

「馬鹿言え、男が泣くときは、女の胸の方が良いに決まってるだろ」
「そうっすよね、丁度女の胸があつてよかったです」

泣き泣き言うかもしれないが、柳の言い回しはやはり妙だ。こういう場合、いくらなんでも丁度はないだろう。だが、そうなのだ。あの人が居てくれるから、自分はこんな風にいられるのだ。あの人

がいなかったら、安らぎになりもしない慰めの言葉を探して、足掻いていただろう。そして、却って傷を深く抉りかねなかった。

習慣で時計を見ようとして、翔虎は止めた。残り時間を数えるなんぞご免だ。自分がただ一つ持っている武器は愚かさだ。どんな状況でも、きつと大丈夫だと無条件で信じて、そう振る舞うことそれしかできない。

こんな時にあの人が居てくれた。ウオードが居ないから、彼はあの人と十分に大人の時間を過ごせる。軍が拘束してくれるから、残酷な野次馬の前で彼をさらし者にしなくて済む。拘束命令書を発行したのは戦犯裁判委員会だから、彼は正当な裁判を受けられる。ならば……きつと帰ってくる。愚かでしょう。限りなく愚かになろう。冷静な現状判断なんて糞喰らえ。何時だって自分はそうしてきた。

人が望むことなどないのに、味あわされる苦悩。深い絶望。罪の量に少しも見合わぬ悲惨。自分は何故か恵まれ、全てを持ちすぎている。自分などが彼らの気持ちをしりでも分かつなど烏滸がましく思うのは止めよう。小賢しく言葉を選ぶなんて、身の程知らずだ。自分は只、待てばいい。彼がいつか微笑んで帰ってくるのを。

第十五章 流星

時計が十七時をさそうとしている。翔虎は伝統的なアナログ時計が好みだが、正確な時間を記入する時に便利なこともあってデジタル表示も併用した大きめの腕時計を愛用している。それに何度も視線が行った。その度に、後悔じみたいららが募る。目を引き剥がしても長針と短針の位置が焼き付いている。

操船室のドアが開く度、翔虎の視線は其処に行く。シェーネだったり柳だったり。その度に何故か失望する。もうあいつは俺に話す事なんてひとつも無いというのだろうか。自分が不甲斐ないのは知っているが、こう無視されると腹も立つ。一時間を切ってるんだぞ。する事もないのに此処にいる自分が馬鹿に思えてくる。

翔虎は思い切って椅子から立った。もう我慢も限界だ。小早川が俺の顔より葛城の胸を選ぶのはそりゃあ人情だろうが、ここまで見事に無視されるとは思っていなかった。こうなったら部屋に押し掛けてやる。翔虎はシェーネの目を気にして、何気なさを装って廊下に出たが、ドアが閉まった途端、居住区に向かって走り出した。

この航海で小早川が使っている部屋は、元々は保守管理作業員が使っていたらしい一番端の部屋で、ウォードが自室に当てていたところだ。扉が見えると矢張り足が動きを鈍くし、目の前にのろのろと辿り着いたときは、すっかりどうして良いか分からなくなっていた。入って、邪魔して、どうするのだ。自分は結局彼の人生の部外者なのだ。だが、ミニディスプレイに何の表示もされていないのを見て、思い切ってノックしてみた。少し、間が空いて、もう一度ノックしようと手を挙げた目の前で扉が開いた。

其処にいたのは、小早川ではなく葛城だった。

「あの、徹さんは……」

何となく口ごもるように言うと、彼女は少し体を斜めにして、奥

を見るように示した。

「ごめんなさい。霧島さん。私も小早川に挨拶に行かせたかったんですが、ああなっちゃったら、なかなか難しくて」

其処は惨状だった。といっても予想した方向のものではきっちり無かったが。本やノートで溢れている。どこにこれだけのものを仕舞って有ったのだろう。只でさえ狭い部屋に足の踏み場もない。そして、空気清浄機的能力を完全に上回っている煙。机に置かれたパソコンに向かって、何やら打ち込んでいる。机の上も沢山の紙切れが散らばっている。

「ああなっちゃうって、どういうことなんですか」

「小早川は論文の構想が纏まると、いつもこれなんですよ。このパターンから足を洗っているのかと思ったら、そう変わるもんじゃないんですね」

「論文の構想って、今頃何やってんですか」

翔虎が呆れ返ってすつとぼけた裏声をあげる。だが、あれは全く気付いていないようだ。

「彼の本質の部分が、あれなんでしょね。何か考えが形に成りそうになると、言葉にせずにはいられない……。読む人があってもなくても、纏めずにはいられない。陳腐な言い方かもしれませんが、あの人は本性が紛れもない哲学者なんでしょうね。十年分の彼の仕事……。凄い量ですわ。内容は読み始めたばかりで何とも評価しがたいですけど」

「十年分の仕事ですって」

翔虎が呆れる。こんな惨状の小早川の部屋なんて知らない。でもまてよ、あのベッドしかない自室、あそこに早々いつも寝に行っていた小早川がこういったことをしてたか、してないかなんて、自分を知る訳無い。あの私室が妙に何も無いのはこういったときの為だったんだろうか。

「いくら私達みたいに、あれこれ考えを捻り回すのが仕事だっていても、発表する機会の先ず無い論文をこれだけ書きませんよ。私、

どうやら小早川のこと見損なつてたみたいだわ。うつかり惚れ直しちゃいました」

うつむ……。長くなるだろう別れを前に女を放っておいて、発表の場もない論文を書き散らすのの何処が格好良いんだろうか。

「セイ、悪い。その辺にアナリティカル・マインドって書いてあるバインダー有るはずだから、取つて。あと、ダイアナティックス絡みのピックアップしてよ」

「待てよ、私にそんなこと分かる訳無いだろうが。ダイアナんとかつて何」

「幾ら天才でも、役立たずって言われ続けると、本当に使えなくなるって話よ。えーとね、キーワードはエングラムとか、ソマティック……面倒臭いわねえ。ベッドの下から三番目の箱に『思考の原理』って本があるからそれで良いわ」

「人にものを頼むのにその態度はないだろ」

「お願いしまーす」

葛城は上手く紙を避けながら移動して、ベッドの下からキャスタ―付きの箱を引きずり出すと分厚い一冊の本を選びだし、小早川の方に向かって投げた。

「行つたよ」

「ありがと」

椅子を回転させて振り向いくと、空中を泳ぐ本を上手く受け止める。そして目次をちらつと参照して、ぺらぺらと本を捲る。沢山の文献を比較するには矢張りパソコンのデータは使いにくいと言ふことなのだろうか。小早川は本から視線を外さずに葛城に時間を問う。どうやら全く自分の侵入に気付いていないようだ。

「あと、どのくらい残つてる？」

小早川が聞く。

「とつくにリミットまで一時間切つてる」

「やつぱり纏まらないか。ま、なんとか形だけでもつくらないとね」
葛城が呆れ顔で翔虎に目配せをくれた。彼女は行きと同じように

上手く障害を避けつつ、ドアまで移動してきた。

翔虎は取り敢えず聞いてみた。

「彼は何の論文書いてるんですか」

葛城は首を振った。

「ウオードに手紙だそうです。私にはとてもそうは思えないんですけど」

溜息をついた葛城の服が、リンダの良く着ているワンピースと同じなのに翔虎は気付いた。彼女は確か黒い服だったよな……。だしぬけに翔虎は分かった。リンダに代金の支払いつてこれが。全くあの男は何をやっているんだ。

「イリアナの言っていたことが漸く分かったから、それを理解するための案内地図を作って渡したいのだそうよ。自分のように迷わなくても辿り着けるように、ですって。読む読まないはウオードの自由だけど、イリアナとの約束を自分は果たしておかないとトイレの後に尻をふかない気分になりそうだから……だそうよ」

「トイレの後に尻……ですか」

妙齡とは言い難いが、葛城のような美しい人に言つて欲しくない科白だ。

「セーイ。下らない事翔虎ちゃんに告げ口してないの。ご免ね、翔虎ちゃん。この際大人は後回しにさせてね。子供にはキチツと筋つけときたいから」

筋を付けるの用法が違う気もするが、落ち込んで女に溺れているよりずっと奴らしい。翔虎は苦笑した。やっぱり彼の剛胆さには敵わない。

だが、これを片付けるのは誰がやるというのだ。

「翔虎ちゃん、そのまま聞いて。ながらで悪いんだけど」

不意に小早川がそう言った。

「私、謝つときたかったの。前に、翔虎ちゃんに酷い事言つたわ」

「えっ、何だっけ」

「確か、翔虎ちゃんは私のこと知らないんだから、余計なお節介するなって……あれよ」

そう言いながら、小早川の手はよどむことなくタイピングしている。何度か紙や本を踏みながら小早川が座っている近くに移動する。スタンダード・バンクに記録されていそうで記録されていないものが実は二つある。感情的苦痛と、肉体的苦痛。それである。ではこれは何処に記録されるかというと、此处でリアクティブ・マインドの説明にはいるが……

これの何処が、ウオードへの手紙なんだか。

「でね、私も翔虎ちゃんのこと知らないから、関係ないって断言したと思うんだけど、あれ、大嘘。ご免なさい」

翔虎は呆れた。大嘘だと、この野郎。

「知らないってのは、事実よ。認知論でも私は絶対方式を信じないから、どんな事象も皆それぞれ勝手に解釈しているに過ぎないってその事を訂正する気はないわ。でもね、一番肝心の所を言わなかった。大事なのは正しく認識するかしないかではないわ」

翔虎は大袈裟に溜息をついてみせた。

「徹さんが学者バージョンになってるのは分かったが、一つ分かり易く頼む」

手を止めて、傍らの翔虎を見上げて、小早川は微笑んだ。

「ご免。他人の絶対感情は、誰にも計れないわ。だから、知る訳無い。他人の感情は認知出来ない。それはどんなに親しい人との間でも変わらないこと。私はセイのことも本当の意味では知らないし、一生付き合って知ろうと努力しても、無駄なの。必要なのはそれじゃない。自分の心が受け止めたその人の人格を、自分がどう思うか。大事なのはそれだけよ。私は翔虎ちゃんの気合いの入っている楽天家ぶりが好きだし、鼻持ちならない馬鹿蔵になっておかしくない環境に育ちながら、懐の広い翔虎ちゃんが好きだわ。あなたが私に

ついてどう思おうが、それは極端な話し関係ない。私があなたと居た時間を幸せと感じたかどうか……私にとって大事なのはそれだよ。楽しかったわ。翔虎ちゃんみたいなタイプは他に知らない」

翔虎は完全に面食らった。自分はそれでは全くの役立たずじゃなかったのか。

「願わくば、あなたにとつても、私と共有した時間が幸せなベクトルを持ったものであってくれたのなら、最高ね」

言い回しは、今やっている作業に引きずられて回りくどいが、それは詰まるところ自分と居て幸せだったって、そう言うことだろうか。そして、自分が小早川と居て幸福な時間を過ごせたなら、それで良いのだと……？

小早川はまたタイプ作業に戻った。翔虎は仕事の邪魔しないように、そつと移動し、ベッドの上に腰掛けた葛城の傍らに座った。小早川はあれで良いとして、この人はこれで良いのだろうか。

視線があつて、葛城には翔虎のいわんとする所が分かったのだから。苦笑混じりに頷いた。

外の連中は一分の遅滞も許さないらしい。翔虎の携帯が呼び出されたのは四十二分きっかりだった。

「オーバー。作業中止」

葛城という人も今ひとつ良く分からない。ただの友人であつたりンダですら涙を抑えられないと言つのに、この人は……。

「どう？進捗状況は」

「全然、やっぱあたし頭悪いわ。翔虎ちゃん悪い、お待ちかねのお客人に直ぐ行くって言つていて」

翔虎が携帯を通话にして、そのまま出渋っていると、小早川は促すように頷いた。葛城が事務口調で言う。

「何すればいい？」

「この辺のは全部ウオードに渡して。愛してるって添えてね。あの辺のはセイあなたにね。煮るなり焼くなり好きにしていけど、貴方の専門の方を補完していく資料に使える筈よ。愛してるわ」

「オツケ。で、荷物の類は」

「そうね、大きいのは曙丸に寄付。邪魔なら処分するでしょう。本とかメモとか捨てても良いし、家に置いて於いてくれても良いわ」
「持ってたやるよ。なんで素直に頼めないの」

「お願いします。捨てないで」

もうしらん。小早川はどうしてこう、この女相手だと子供並に素直なんだろう。廊下に出てから、改めて携帯を顔に近づける。ふとあの二人の会話がとぎれた。思いがけず穏やかなものが満たされてきて、翔虎は含み笑いを湛えながら漸く口を開いた。

「霧島です」

「翔虎、なにのんびりしてるのよ。あいつら踏み込んできかねないわよ」

リンダの怒鳴り声が聞こえて、翔虎は首を振った。

「繋いでくれ」

意外なことに、あの指揮官の二人だけが開いたハッチから入ってきた。兵隊は外に待たせておく辺り、小憎らしいくらい自信に満ちている。目の前に立つデカイ方は、華奢でない翔虎が見てさえ山のようにそそり立っている。大男は二メートルを越すシェーネで馴れているはずなのに、威圧感たっぷりだ。もう一人のあのカメラ越しに投げキッスをするという巫山戯た真似をしてくれた方は、背はもう一人と大差ないのだが幅が余りないので、印象は矢張りのつぼだ。

「小早川は何処だ。みあたらん様だが」

でかい方が初めて口をきいた。

「居ませんね。時間にルーズなのはちょっと気に入りませんね」

丁寧な言葉遣いをしているのだが、嫌味に聞こえる大技だ。人を不愉快にさせるコツを良く知っている。

「貨物船で外見に大きい割に、せせこましくできてるんですね」

につこりと翔虎に世間話をしてくる。翔虎はまたぞろ気分がささくれ立ってきた。そうでなくても狭い場所だが、規格外の体格の二人が居るから狭さが助長されているだけだ。

「貨物船は船倉部以外は、大体こんなもんですよ」

翔虎は航海長のシェーネを伴ってきていた。シェーネが大人の貫禄でのつぽの失礼千万な感想をかわしている。

のつぽが少し笑った。

「チビちゃんには丁度だったかもね」

いったい誰のことだろう。この三人の中では確かに自分は小柄だろうが、チビと言われたことは未だかつて無い。

呆れて、悔しいことにやや見上げる体勢で男達を翔虎は睨め付けた。

「お待たせして済みません」

そう言いながら、葛城と暢氣に腕を組んで現れた小早川は、二人の軍人を見るやいなや、彼女を庇うように後ろに下がらせた。顔つきが一瞬で変わっている。……これは一度も見たことのない顔だ。

大男がいきなり動いた。堰き止められていた水が、ゆっくりと流れ出すような滑らかさだった。そして全身をバネにした鋭い拳が繰り出される。

かっとした翔虎が出ようとしたが、のつぽが翔虎を阻んで腕を出した。シェーネは咄嗟に反応できないようだった。ただ呆然としている。

小早川が殴り倒されると思った。あの重量級のパンチを喰らっては、一溜まりもあるまい。けれど、予想に反して、一瞬後大男が宙に舞っていた。確かに此処は低重力だが、あのでかい男に比べれば華奢と言って過言でない小早川が何をどうしたというのだ。大男の

方は小早川が投げをうった円弧の天上に近い部分で体を入れ替え、足から柔らかく降り立った。まるで特撮映画を見ているようだ。

のつぽが拳を作ってもう一方の掌に打ち付けた。

「よっしゃ、チビちゃん錆びてないな」

何時の間に取り出したのか、次の瞬間には両手に短い棍棒が握られている。

「錆びてます。錆び付いてます。完全になまってるから勘弁して下さいよ」

空を切り裂く鋭い音と共に振り回される棒をかわしながら、小早川が泣き言を言う。

「現役の俺を投げといて、何を言う。堂本、良いから二、三発当てろ」

「承知」

先ほどの鋭い動きをまるで感じさせない穏やかさで、でかい方は腕組みをして傍観を決め込んだようだ。翔虎は自分の出る幕でないのが良く分かった。なんだ、知り合いなのか。それにしても此奴らの動きは体の大きさに似ず、鋭く鍛え抜かれている。

「榊原さん、あなたと違って、人間は堂本さんの打撃まともに喰らったら、普通は死ぬんですよ」

必死で避けながら、小早川が訴えている。

（しかも相当に親しそうだ）

翔虎は拍子抜けしてしまった。あの軍人とはとても思えない投げキスも、そう言うことか。

「本当だ、チビちゃん息切らせてるわ。随分鈍ってるね」

唐突に打撃を止めたのつぽに、小早川は壁にもたれ掛かりながら、へたりこむ。

「隙有り、一本」

完全に床に座り込んだ小早川の頭に、のつぽが軽く棒を打ち付けた。

「助かったあ。それにしても、何ですか二人して」

「それはこっちの言いたいことだ。なんだ、あのすつとぼけた記事は。で、よりによって記者会見だと。ふざけやがって。上の方が良からぬ事企んでそうだから、迎えに来てやったんだ。感謝して貰わなきゃ、割に合わないところ、二日も待たせやがって」

小早川が苦笑した。

「ちゃんと名乗って下さいよ。お二人だって知ってたら私だってあんなに大騒ぎしなかったのに」

のっぽ……堂本と小早川が呼んだ方が肩をすくめた。

でかい方はたたみかけた。

「俺はちゃんと名乗ったぞ。榊原だつてな」

小早川が頭を掻く。

「済みません。ちゃんと聞かなくて。でも、なぐり込みかけないで二日も待って下さるなんて、お二人も随分人間練れましたね」

のっぽが笑った。

「葛城が入ってく所見たんじゃ、邪魔もできないだろうが。あの人も相当お化けだね。全然年くって無いじゃない」

葛城が声を立てて笑った。

「相変わらずね、脳味噌筋肉ども。あんた達が並んでる所、生きてる内にもう一度拝めるとは思わなかったわ。長生きはするものね」

翔虎は何か羨ましくなった。自分がずっと見たかった友人達と普通に過ごす小早川だ。自分がそう言った形で知り合えなかった彼だ。のっぽの堂本がおばさん扱いするほど、彼らから見た葛城が年長という感じでも無さそうだが、若い頃の葛城がそう呼ばれておかしくない雰囲気を持っていたと言うことなのだろう。

「でも、葛城って実のところ随分いい女だったんだなあ。昔は小早川の気が知れなかったが、いまなら俺でもぐつと来るぞ。完璧いい女だったかみさんが、只のおばさんになってるのと全く逆じゃねえか」

榊原の感慨に、葛城は負けていない。

「好き放題言ってくれるわね。榊原夫人にいいつけるわよ」

「そりゃ、やばい」

この連中はすっかり和やかだ。自分はこの話の中に加われない。翔虎は寂しいと感じてしまう自分が少し情け無かった。

「相変わらず口悪いね。このおばさん」

「だけど、チビちゃんに庇われるくらいだから、老化も相当してるのかな」

そうふざけた堂本に葛城は言った。

「私はもう体動かないから……」

驚いたような口調で榊原が言った。

「体動かない葛城なんて、あるのか？」

堂本も同様だったように、問いつめるように小早川を見る。小早川が肯定するように頷いた。

「お怪我でもなさったんですか。葛城コーチ」

コーチ？ また新たな葛城の呼称に、翔虎は驚いた。二人の並外れて体格の良い軍人が、心なしか心配そうに表情を曇らせて、小柄な葛城を見ている。葛城は寂しそうに微笑んただけだった。

「でも、真面目な話、チビちゃんやばい立場だね。本当はこの仕事べつの奴のだったんだけど、ちよっと臭くってな。内輪じゃ汚れ仕事専門な奴って知られたのが指名されてなあ。今回は只の移送だって言われても、なかなか。で、ちよいとね替わって貰った訳だ」

堂本の説明を明確にするように、でかい榊原が言った。

「ま、コーチ、俺達が責任持つて戦裁委に届けるから、安心してください。絶対にうやむやな場所で殺させたりしないから」

軍のお偉いさんは、小早川が軍の過去を告発する前に葬ろうとしているって事か。翔虎は、何度自分の甘さを認識させられるのだろうと、苦く思った。

葛城は何度か軽く頷いた。

「……ありがとう。……心強いわ」

そして、深々と頭を下げた。それを見た巨漢達はたまげたようだった。

「チビちゃん、やるねえ。葛城によく此処まで惚れさせたもんだね」
少し茶化した口調ではあるが、葛城の肩を抱いた小早川を見守る堂本の顔は、暖かく微笑んでいた。

榊原が翔虎とシェーネに短いがきりつと決まった敬礼をした。

「引き渡し、確かに。小早川、……いいか」

「一寸待つて」

名残尽きないと言うように、小早川はもう一度女に唇を重ねて、彼女の細い背中が軋んで見えるほどに抱きしめた。そして、彼女の耳元に何かをささやいていた。翔虎は葛城が泣くのではないかと思った。だが、小早川が言ったことが何か妙なことだったに違いない。彼女は小早川を突き飛ばすと、膝蹴りをかます振りをした。だが、顔は笑っている。

「榊原、そのお調子者、構わないからあとでゆっくり締めてやって」
「いったいあいつは何を言ったんだか。」

「了解」

小早川は、声を立てて爽やかに笑い、ふざけて翔虎に敬礼をした。
「出るところに出る機会があれば派手に演説ぶってみせるから、楽しみにしてて。シェーネ、ウォードと洞口さんに有り難うって伝えておいて。それからリンダちゃんや早乙女君に……いいや、切り無いか」

「居間に寄ってこなかったのか。皆居ると思うぞ」

シェーネが言うと、小早川は首を振った。

「私、物心ついてから人前で泣いたことないのよね。湿っぽいのは性に合わないんで、昨日みたいのは二度とご免だわ……、じゃあ、またね」

くそ。また、用意して置いた科白を盗られた。翔虎は仕方なく微笑んだ。

「ああ、またな」

シエーネは軽く小早川に握手を求めただけで何も言わなかった。通路に戻ってエアロック部分の内扉を閉めた。エアロック監視モニターを通して、堂本が小早川の肩を抱くようにして歩き出したのが分かった。シエーネが外扉を開ける操作をする。カメラ設置位置を知り尽くした小早川が、そこに向かって軽く手を振った。笑顔だった。いつも、何度も見慣れた、あの。そして、モニターから消えた。

* * *

異常な振動が続いていた。

制御できないだつて。

此処まで、あくどい手段取るとはなあ。シャトル一台分一体幾らかかると思ってるんだ。勿体ないって言葉、知らないんじゃない。俺は税金の無駄遣いには断固抗議するからね。

暢気な堂本の口調は、こんな場面でも変わらない。

完全に、入力受け付けません。大気圏突入時に何か衝撃でもあったんでしょうか。

戦闘仕様のシャトルが、どっか一本線がぶった切れた位でいられるわけあるか。お偉いさんは、シャトル一台棺桶にくれるってことだ。こいつは豪勢だね。

民間船と違って大人数が忙しく立ち働く広々とした操船室に小早川が足を踏み入れた。それが誰にも制止されなかったこと事態が、ただならぬ状況を示していた。榊原が座っている、映画監督が撮影の時に使うような、可動式の指令席も動かないようだ。

上の連中が、あいつをチビちゃんと一緒に、ついでで殺しとく

って算段してるとまでは読めませんでしたねえ。豪勢にシャトル事故にするつもりたあ、恐れ入ったわ。

アレがご指名じゃ、小早川を移動のどさくさに片付けるってのが良いところだと思っただがなあ。いやいや、お互いに善人で困りますね。

大体、この流星号なんて名前がいけないよな。彼女もお気楽に名は体を表すして欲しくないもんだ。

激しい横揺れが、呆然と立つ小早川を突き飛ばし、彼は壁に叩きつけられた。椅子に捕まることで持ちこたえた榊原が小早川に気付いた。

「小早川、来てたか。ご覧の通りだ……」

「どうしたんですか」

榊原の代わりに堂本が答える。

「お手上げた。滑空ラインに体勢が乗らない内に、完全ロックしちまった。全ての入力作業を受け付けられないんだ。いまの角度で進入しても、滑空ラインに乗せられない。墜落コース間違いなし」

「私の……為にですか」

小早川の顔が憤怒で歪んだ。

「一個小隊と佐階級の指揮官、シャトル一台。そりゃ、一人殺すための代金にしちゃ非常識だ。それだけ、お前に事故で死んで欲しい奴がいるんだろうよ」

冷静に言う堂本に、小早川は怒鳴った。

「何故ですか。私一人を殺せばいいじゃないですか。何故、自分の兵士を巻き添えになど出来るんですか」

堂本が肩を竦めた。

「悪人の理論なんて知るもんか。善人に聞くな」

空中で止まった指令席から榊原が解説した。

「チビちゃん……お前さん、上の連中に恨まれてんだよ。培養しとったお手軽パーツを台無しにした犯人だからなあ」

小早川は唇を噛みしめた。この人達を巻き添えにするのか。最後まで人に迷惑を掛けて、好きな人達の災いになって。　　沢山だ。もう、勘弁してくれ。

「そんな顔するな。まだ諦めちゃおらんから。……斉藤、堂本。物理衝撃で軌道はかえられんか。ま、最後まで足掻かなきゃ佐階級はつてられねえよ」

「計算する時間無いですよ。計算機全部いかれてますから」

「自分のドタマでやりやがれ。林。通信は生きてるか」

「お亡くなりになってます」

「仕方ないな。避難カプセル使えるか確認してくれ」

榊原が何か言う度に、状況が差し迫っていることを思い知らされる。堪らない。この十年以上を隔てて再会した先輩達の死神になって、何故ならなきゃいけない。

「カプセルもだめですね。矢張り全部壊されているようです」

「念入りなことで、仕方ないなあ。斉藤、計算は出来たか」

「まだです」

小早川は、なにをどうしたらいいのか、まったく道に迷ってしまっていた。

「済みません。私何かに係わったために」

指令席から榊原が飛び降りてきた。

「なあに、こっちの好きで勝手にしたことだ。小早川に謝って貰うつもりはないよ。それより葛城に任せろって大見得切ったからな。大人しく諦めちゃマズイだろ」

堂本の方も、励ますように小早川の肩を叩いた。

「チビちゃんも『またね』って大風呂敷広げてきたんだから、そう簡単に投げないで、何か出来ること無いかって、頭使うんだな。軌道計算できる？　一応スーパーなんだろ。その頭」

「やったことないです。忘れたんですか、私は人間行動専攻ですよ」堂本が激しく笑った。

「そっぴやそうだったな」

小早川は心を決めて微笑んだ。

「機関部どっちですか。なにか作業が必要になったとき、手伝えそうなのそっただけですから、そこで待機してます」

堂本が親指を立てて、ウィンクした。

「通路出て、船尾に向かつて真っ直ぐ。中央に非常階段があるからそれで降りて。電気系不安定だからエレベータは使えないからね」

「わかりました。じゃ、行きます。又、後で」

堂本が紙を広げて必死に筆算をしている。新人の一人でも居りや随分違うのにとぶつくさ言っている。小早川には誰のものか分からない声が叫んだ。

「三佐！ 入力系だけでなく、出力回線も死にました。モニターオルダウン。現在位置特定できません」

「最低！」

堂本の裏声が聞こえる。小早川は言われたとおりに廊下を走りだした。省エネなど概念に無いはずの軍船の廊下は、光りが十分に満ちている。機関部に行こう。そこなら何か出来ることがあるかもしれない。またね、そういったなら、最後まで諦めまい。

非常階段の上に辿り着いたとき、照明が落ちた。突然の暗闇に小早川は閉じこめられた。初めての場所で、方向感覚が全くない。……まずいわね。

今一度、激しい横揺れが襲いかかってきて、彼は足を取られた。上下、前後の感覚が一瞬で掻き回され、背中を酷く打って咳き込んだことで、自分が階段を落ちたのだと言うことが分かった。不案内な船の……勝手の分からない場所で、自分が何処に行こうとしているのかも分からない。ただ圧倒的な暗闇に押しつぶされそうだ。明かり取りを兼ねて一服付けようか、そう思ったが、不快なしびれを感じただけで、手が動かなかった。どうやら落ちたときに、深刻なダメージを被ったらしい。

アンスリウム。

？

アジアンタム。アスパラガス。

？

フリーシア・スプレンドゥス。チランジア・ウスネオイデス。

アローカシア・アマゾニカ……クロロフィツム。カラジウム。カラテア。

??

ストロマンテ。クロトン・バリエガタム・アケボノ。

何で、頭の中に観葉の名前が溢れるんだろう。こんな時に園芸家の自我なんか出て欲しくないわね。糞の役にも立ちやしない。

フィカス・ベンジャミナ……ヌダ F・レツィサ ガジュマル。コリウス。

コルデイリネ。サンセベリア。シェフレラ。シッサス。シペラス。

ああ、昔持ってた初心者の為の観葉ガイド。ご丁寧ね。アイウエオ順か。温室の中にあつた奴の名前が出て来るんだ。ふふふ、私の一番帰りたかった場所か……。普通はこういった時って役に立つ記憶を探して、人生が……。何だっけ。そう、走馬燈のように、だわ。巡るんじゃないっけ。こら、意識、温室から離れる。

シンゴニウム。シルキー、ホワイトバタフライ、エメラルド・ジエム

スパティフィラム……セレクトアセア、ディフェンバキア、ノリナ。

ドラセナ……ワーネツキー、サンデリアーナ、ゴッドセフィアー

ナ……

コンシンネ……マッサンゲアナ……

温室から出なきゃ。何処に出よう。そりゃ、庭だねえ。

あの赤はカルミアだ。ハイドランジア。ベゴニア。ユリ。ペチュニア。

インパチェンス。フクシア。

……なんだ。今度はアイウエオ順じゃなくて、植えてある順ね。

サルビア。クレマチス。ギボウシ、シュウカイドウ……
ブルンバーゴ、デユランタ・バイオレット、ハナスベリヒユ……

そうかぁ。帰りがかったんだな。ずっと……。

初夏の庭は……色が溢れている。

初夏の庭は……光りが似合う。

初夏の庭には、……が、いたつけ。

終章 日常風景

自慢の黒髪をかき乱して、葛城真夜は論文集を天井に向かって投げつけた。勢いを増して跳ね返ってきたそれは、避けきれなかった彼女の頭を直撃した。唸り声をあげてから、それをもう一度掴んで丸めると、今度は何も無い壁に向かって放り投げた。随分苛ついているようだ。そんな彼女を見ていたルームメイトの奈々子ウツミは驚いて目を見開いた。

「真夜、どうしたの」

「どうもこうもないわよ。何で、一年坊主にこんな資料が集められるのよ」

「どれどれ」

奈々子は落ちていた小冊子を拾って開いてみた。何度も読んだのだろう、その頁が自然に開いた。

「なになに、『記憶のメカニズムを考察する』 記憶のメカニズムってたしか、真夜の研究テーマの小早川某とかの本だっけ」

「そうよ。小早川研究は私のライフワークだからね。一年坊主に負けるなんて冗談じゃないわ」

奈々子が大袈裟に肩を竦めて見せた。

「ライフワークって、あんた。私らまだ若いのよ。んな今から幾らでも興味なんて移るわよ。固定観念は良くないわよ。大体、論文に負けるも勝つもないでしょうが」

「論旨の展開じゃないわよ。資料集めの段階で負けるなんて我慢できないわ」

奈々子は呆れた。

「あんた普段は感情があるかどうかも分かんないボケなのに、どうして小早川のことになるとそう情熱的になっちゃうんだかね。彼は異端だよ。死後に出てきた著書の真贋問題だって大きいし。早乙女とかっておっさんが、小早川の名前を使えば売れるからって捏造し

たんじゃないの。あんなの研究したところで、修士号の取得の足しには成らないと思うけど」

「奈々子には分からないわよ」

そう、誰にも分からない。タブーを犯して死者から作られた生命。法定親族殺人者。病院爆破主犯という非道な犯罪者。その上二週間だけ直接見たことのあるあの男は、あくまで母の恋人だった。だが、彼の思索は広く、深く、その著書の中に縦横無尽にはしらせる引用は、膨大多岐。そして、混沌としているようで繊細に整理されている。彼が何ものか知リたがった世間は、既にあの男のことなど覚えていないが、自分は忘れられない。この血肉が、あの男の形見なのだから。もしかしたら、老化の訪れが異様に早いかもしれないという、時限爆弾がかけられているかもしれないような、頼りない身体でも、ここに確かにあるこの存在が、彼が實際いた事実の証明なのだから。

ウオード・リヤドか。何者だろう。

「ね、このウオード・リヤドって、奈々子知ってる？」

「ええ？これ、あのリヤドなの。そういや人間行動総合学部って聞いたことあったわね」

あのって何だろう。全く、私はそういった世間話に疎くて困るわ。あのって、どういう意味よ」

「格好いいのよ。ウチの体術部のエース。身長百九十七センチ。十八才。九月七日生まれ。乙女座。血液O型。甘いマスクですこぶるつきの美形。プラチナブロンドに空の藍色の瞳。そりやもう、耽美派には堪りませんわ。第一体術部ってたら真昼サマもいらっしやるじゃない。自分の片割れが部長やつてる所のエースも知らないなんて、そりや、世情に疎いにも程があるわ」

「真昼にサマなんて付けなくたって良いわよ。気持ち悪い」

奈々子が仕方ないと言った感じで頭を振った。

「真昼サマ、もてるのよ」

「今時、あそこまで珍しく寸詰まった男がもてる訳無いでしょ。で

も、十八才つてつたら、年上か。それで一年なんて、そもそも頭良か無いって事よね。ますます腹立ってきた」

真夜はいらりと枕をベッドに数回叩きつけた。ルームメートの奈々子は、物静かで麗しいと彼女に憧れている男どもを何人も知っている。彼らがこれを見たら、どんな反応を示すだろう。心の中でひとり理由知り気に笑った。

* * *

体を十分に動かすと、無条件で気持ちが爽快になる。ウォードはタオルを首に掛け、流れ落ちる汗を拭った。そろそろ夏が近づいてくる。あの人が逝った八月は、此处では夏だ。又、海に行こう。彼はそう思っで大きく深呼吸した。

東洋系武術を総括して体術という。それぞれ専科があつて、ウォードは合気と太極拳の流れを汲む、投げ技を中心とした素手で行う物を好んでいる。体術の大会はクラス分けなど無いから、棒や縄などの手具を使う方が有利の筈だが、実際にそうならないところが面白い。

「部長、珍しいですね。お姉さん来てますよ」

「真夜が来る訳やないだろ。あいつは自分が運動音痴なのを棚に上げて、完全に馬鹿にしてるからな。お前寝ぼけてんじやないか」

アリ・ハマス・レッドと部長の葛城真昼が組み打ちをしながら、話している。体育館の扉は、広く開け放されていて、通り過ぎる風が心地よい。外を見るとグループビーの見慣れた顔に交じって、たしかに部長の双子の姉、葛城真夜の姿があつた。

「ありやま、ホントだ。珍しいね。雨でも降るかな」

そう言いながら、小柄な真昼がウォードの脇を通り抜けていった。

この人は自分にあの人を思い出させる。明るくて誰にでも分け隔て無く、公正。動くことが苦にならない質らしく、部長といってもマネージャーより雑用をテキパキこなす。小柄な癖に、鋭い技の切れ味をもち、体格の弱点を技であっさり補って、荒っぽい部員達から信頼と畏怖を勝ち取っている。最初は年下と聞いて驚いたものだ。まあ、自分が身の程知らずにも此処に来たいと思ったのが、高等部に入ってからだ。スタート自体が只でさえ遅れているのに、入試に滑ったこともあって、同学年の連中と来たらまるで子供。話し相手にならない。部活を通して、葛城やレッドのような同年輩の者達とつきあえるのはとても嬉しい。

「ウォード、姉貴がお前さんに用だって」

意外な真昼の言葉に、そこ此処からどよめきが起きる。ウォードは焦った。そりゃ、葛城真夜ってたら、有名人だ。課題論文は全て特A評価で、学部内報に掲載される常連。論戦をやらせたら、無敵の弁舌の持ち主だが、普段は無口で淑やかな美女。分かっているのか居ないのか、言い寄る男を袖にする名人。紛れもなく、人間行動総合学部きつての花形役者だ。部長の真昼が部活だけでなく、生態系総合学部でも目立って居るのと良い勝負だ。

「げー、真夜サマの好みはリヤドかよ。絶望的」

そう呟く男もいれば、

「葛城なんて振っちゃえー」

と、黄色く騒ぎ立てるブルーピーの連中もいる。いきなり注目を浴びて面食らったが、ウォードは真昼と真夜の所に向かった。

「初めまして、ですよ。あの、何か」

この葛城姉弟は揃って小柄なので、ウォードは見下ろすしかない。「ご迷惑は分かっているのですけれど、ちょっと、お時間戴けないかしら」

真昼は頭が痛かった。真夜は母さんにそっくりで、ネコを被らせたら超一流だ。これに騙されて、可愛い後輩のウォードが泣かされ

ては堪らない。

「ウオード、気を付けろよ。真夜は凶悪だから」

ウオードの方は、それを姉に近づく男への、一般の意味での警告だろうと受け取って、苦笑した。凡才の自分と、スーパージニアス争いの一番手の葛城真夜とでは絵にならないこと甚だしい。だが、ウオードは真夜に頷いた。

「……いいですよ」

ふふふ。どんな下らない用件だったとしても、彼女と数時間一緒に過ごせれば、悪友共から羨ましがられることだけは間違いない。真昼が、知らないぞ、とでも言うようにウオードの背中をどやしつけた。

葛城真夜は近くで見ると、赤の他人の筈なのに、矢張り何となくあの人に似ている。真昼といい、全く、自分は本当に歪んだマザ（ファザ？）コンだ。好ましいと思う人種が全部あの人（の面影）と重なるとしたら、相当重症だ。今まで、そんなことは無かった筈なのに、ジ・アースなんぞに來た所為だろうか。それとも季節の悪戯だろうか。

道ですれ違う者達が、真夜と連れだって歩く自分に、あからさまな興味を向けて行くのが、可笑しい。真夜は注目されるのは馴れきっているようで、気にする風でもなく話し出した。

「今月の学内報、拝見したわ。正直シヨックだった。私、小早川研究がテーマなの。なのに、全く知らない資料がふんだんに引用されてて、……癪だったわ」

ウオードは驚いた。この人が学部内報に小早川絡みの論文を書いたことはない。

「知りませんでした。葛城さんが自分と同じテーマで研究なさってるなんて。でも、何故投稿マニアなのにそのテーマで学内報に載せてこないのですか。それとも異端である彼を研究していると公にすることはリスクだと考えてらっしゃるのですか」

「そういう考え方もあるわね。でも、それというより私自身の問題で、冷静に論旨を展開できないのが大きな理由かな。彼の言っていることと、彼の存在のあり方の矛盾とは混同していないつもりでは居るんだけど」

ウオードは何となく嬉しくなった。確かにあの人の過去を調べたことがある者なら、その特異性だけで胡散臭さを感じ、彼の仕事の方まで色眼鏡で見えてしまう。あの人の仕事の価値は、彼の存在の是非とは別に論じられるべきだという意見に、誰も賛成してくれないあの人の経歴を知りながら、仕事の方を研究テーマに選んでくれるなんて、……葛城真夜って人は悪くない。

「僕の資料で良ければ、全部コピーしていいですよ。多分、普通の経路じゃ入手できないの山ほど有りますから」

「どういう意味？」

「さあ」

意味ありげにウオードは笑った。あの人が自分にとってどんな存在だったか、それを誰かと話すことなど、決して有りはしないだろう。彼は存在として人に一瞬の衝撃を与えたまま、罪人として記録されることも、罪を許されることもなく永遠の旅に出してしまった。

小早川が何を考えたのか、ウオードの幼いころに亡くなった母の仕事を、自分にも知る権利が有るといって、一見正しいような無茶な理由で、膨大な彼の研究ノートの種類を整理もされないまま自分に送りつけていた事を知ったとき、彼は既に永遠に会えない人になっていた。

ただ信頼して愛していた自分の育ての親が、何を考えていたのか知りたかった。彼の書いたものは当時の自分には、読みこなせるような種類のものではなかった。今思えば随分平易に書いてくれているのだが。彼が生きていたら、自分はその箱の中身を知りたいとは思わなかっただろう。捨てるに捨てられない邪魔な荷物としてクローゼットの奥に押し込んでいたはずだ。だが、彼を失うには幼すぎた自分は、彼と繋がっていたくて箱を開けてしまった。後悔するつ

もりはないが、アストロノーツを目指していた自分が、こんな大学に在籍して、しかも彼の後継者として立つ野望を持って学んでいるのは時折たまらなく奇妙な気分させられる。

あのとときと違い、自分には情報収集力も分析力もそれなりにある。自分にとって掛け替えのない人であつたのに、それが本当に事故であつたとしても哀しみは尽きなかつただろうに。けれど、彼は間違はなく理不尽に踏みにじられて抹殺されたのだ。少なくともウォードはそう確信している。忘れられるものではない。彼を。だが、その哀しみは緩やかに忘却の境界に沈み行きつつある。彼が著作の中で高らかに礼賛している忘却は、自分にも穏やかに訪れている。今、自分がどんなに誇りを持って彼を語っても、この学界でそれを自然に受け止めてくれる人は居ないだろう。

「出所は、保証します」

本人から 直接ではないにせよ 貰つたのだ。間違いない。
「保証つて、なんか怪しいわね。まあ、中身を見せて貰つてから、その辺は追究しましょうか」

ちよつとふざけた口調で自分を見上げた真夜に、ウォードは声を立てて笑つた。噂なんて当てにならない。彼女は言われているほどユーモアの欠片もない堅物では無さそうだ。

「よかつたらこのまま、僕の部屋に來ますか。整理はしてますから、資料お見せできますけど。ああ、心配しなくて良いですよ。部長のお姉さんに悪さするほど、向こう見ずじゃないですから」

「あら、リヤドさんと真昼じゃ、どうみても貴方の方が強そうだけど。友達から体術部のエースだつて噂聞きました。お強いんでしょ」
「とんでもない、部長には敵いませんよ」

真夜は少しだけ考えて、それから頷いた。さつとごく自然にウォードの腕をとると悪戯っぽく微笑んだ。

「では、小早川のお宝目指して出航。面舵？ 取舵？」

ついでに、船舶用語ときた。いいね。

(完)

終章 日常風景（後書き）

次作『檻に棲む小人たち』は、これを遡ること十年前の話になります。

小早川の自我の目覚めと、青春の日々を綴ります。

本作より更に長いのですが、お付き合いいただけますと嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4758a/>

忘却～その境界と恩恵

2010年12月3日10時10分発行